漆黒、恐怖、電子、特別編

ゼクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒、恐怖、電子、特別編

【Ｎコード】
Ｎ２９０４Ｙ

【作者名】
ゼクス

【あらすじ】
此処は《漆黒の竜人》、《始まりに舞い降りし恐怖の根源》、《電子の獣と少女達》の作品の特別編の場です。
三つ作品の特別編は全て此方に載せます。
（第二の特別編の前編と最新話を投稿しました）

前編

それは一人のマッドがとあるデジモンのデータを手に入れた時から始まった。
そのデジモンのデータは正に前人未踏、誰もが辿り着く事が不可能だった場所へと誘う事が出来る最高のデータだった。
今回の話は、そのマッドが完成させてしまった恐るべき道具に寄って災難に塗れた世界の話である。

暗い部屋の中、僅かな明かりしかない部屋で青い髪に赤い瞳を持った白衣を着た女性ーフリートーが、何かの作業に没頭し続けていた。
そして作業が終わると共に、突如として狂気の笑い声を研究室内部に響き渡らせる。

「フフフフフフフッ！ハハハハハハハハハハッ！！遂に！遂に完成しました！あのデジモン！パラレルモンのデータを手に入れてから、苦節八年と三ヶ月と五日の日にちを掛けた上に！他の研究を疎かにしてまで、このアルハザードの技術を総動員して完成させた傑作！」

フリートははそう言いながら作り上げた銃の様な物を掲げ、その銃の名を高らかに叫ぶ。

「『平行世界に行っていらっしゃいガン』！！我ながら素晴らしい出来栄えと名前です！！！」

フリートは銃を抱えながら自身の作品の出来栄えとネーミングを褒め称えるが、もしこの場に他の者が居ればこう言うだろう。
『ネーニングセンス無さ過ぎ』だと言うほどに、フリートにネーミングセンスは無かった。
そんな事を知らずに、フリートは右手に持った銃を掲げ、自身に撃とうとするが、突如として撃つのを止め、絶望に染まった顔をする。

「・・・・・・しまった。私は此処から出る事が出来ない。平行世界に行く事が出来ないんだった！！」

そうフリートは自分の居る場所である、アルハザードから出る事が出来ない存在。
例えフリートの言葉どおり平行世界に行く事が出来る道具だったとしても、フリートは外の世界に行く事自体が出来ない存在だったのだ。

「クッ！我が身が呪わしい存在ですね！誰も行った事が無い平行世界に行く事が出来る道具を作ったと言うのに！この体は行く事が出来ないとは！全く持って悔しいです！」

そう言いながらフリートは自分の体に付いて悪態を述べ続け、二十分ほど悪態を付き続けている。
だが、突如として何かを思いついたのか、悪そうな笑みを浮かべて部屋を出て行った。

そして研究室を出たフリートが司令室に辿り着くと、その部屋の中に居たブラック、リンディ、ルイン、ティアナ、クダモン、クイント、なのは、ガブモン、ヴィヴィオ、ギルモンの全員に内心で悪そうな笑みを浮かべながら声を掛ける。

「皆さん、素晴らしい物が出来たんですけど？」

「・・・・そう言えば、今日は食材を買いに行く日だったわね」

「そう言えばそうだったわね。リンディ、行きましょう」

リンディとクイントは関わりたくないと思い、指令室から急ぎ脱出しようとした。

その行動も仕方ないだろう。リンディとクイントはフリートのマッドな部分に寄ってダークタワーデジモンにされてしまったのだから。今回も碌でもない事だろうと思ったのだ。実際に碌でもないので二人の行動は正しい。

しかし、フリートは逃がさないと言う様にリンディとクイントの襟首に向かって手を伸ばす。

ーーーガシッ！

「そう逃げないで下さいよ。今回は本当に良い事なんですから、日頃頑張っている皆さんに休暇を与えようと思ったんですよ」

『休暇！？』

フリートの告げた事実にブラック、ヴィヴィオ、ギルモンを除いた全員が疑問の声を上げ、フリートを見つめると、フリートは持っていた銃の力に付いて説明し始めた。

そして数分後にフリートの説明を聞き終えたリンディは頭を抑えながら、クイント達と話し合いを始める。

「まさか、本当に平行世界に行ける道具を作ってしまうとは」

「呆れてものも言えないわね」

「パラレルモンのデータを手に入れた時から怪しい行動をし始めていましたけど」

「こう言う事だったんですね」

リンディ、クイント、なのは、ティアナはそれぞれ困った表情を浮かべて言葉を交し合うが、その間にブラックが詳しい事をフリートに質問していた。

「ほう、つまり行ける世界はこの世界に良く似た世界だけと言う事か？」

「そうですよ。流石に完全に違う平行世界には行けませんが、例えばブラックが居なかった世界や、ブラックの前世の記憶どおりの世界に行く事は可能です」

「・・・・・良いだろう。平行世界には興味が在る。貴様の言うとおり平行世界に行ってやろう」

「ブラック様が行くのならば私もです！」

「ヴィヴィオも行く！！」

「ギルモンも！！」

ブラックの言葉に追随する様にルイン、ヴィヴィオ、ギルモンは自分達もと言うように手を上げ、リンディは頭を更に痛ませる。

「何を言っているんですか！？私達が此処を離れたらどうなると思っているんですか！？」

リンディがそう叫ぶのも当然だろう。休暇が何時までなのかは分からないが、リンディ達が今居る世界から離れてしまえば、デジモン達やルーチェモン達が好き勝手に暴れる可能性が高い。

その事が在るからこそ、リンディはブラック達ー平行世界に行こうとしている者達ーを止める様に意見を述べる。なのは、クイント、ティアナもリンディの意見に同意なのか深く頷く。

だが、怪しげな笑みを浮かべながらフリートがリンディ達ー平行世界に行かないと言っている者達ーに近づく。

「大丈夫ですよ。あちらの世界で何日居ても、此方の世界では一日程度の事です。そういう風に作りましたからね」

（（（（（何気に時間操作も行っている！！））））

フリートの告げた事実にリンディ達は驚愕に満ちた叫びを内心で上げながら、フリートを信じられないと言うように見つめた。

平行世界。時間操作。どちらも魔法では実現不可能とされているものなのに、フリートはそれを平然と成し遂げた。

このまま行けばアルハザードでも、オファニモン達でも不可能だった死者蘇生の領域にまで踏み込んでしまいそうだとリンディ達は内心で恐怖するが、ブラック達は構わずに平行世界に行く準備を始めていた。

「ヴィヴィオちゃんは久しぶりのお外ですから、今まで着る暇がなかったお洋服を沢山着ましょうね」

「うん！ルインお姉ちゃん！」

「・・・・休暇か。そう言えば訓練や捜査などでゆっくりする暇が無かったなガブモン」

「そうだね。たまには良いかもしれないねクダモン」

「ギルモンも楽しみ！グラニも行って良いのかな？」

平行世界に行く事を決めていた者達はそれぞれ準備をし始め、ガブモンやクダモンまでも行く事に乗り気だと分かったなのはとティアナは頭を手で押さえながらリンディに声を掛ける。

「・・・・リンディさん。もう止めるのは無理ですよ」

「寧ろ止めたら、私達が白い目で見られそうな気がします」

「・・・・・止めるのは無理ね」

目の前の光景にリンディも、もう反論する気も起きないのか、呆れたように呟きながら自身も平行世界に行く準備をし始めた。

その様子を見たなのは、ティアナ、クイントも顔を見合わせると、リンディと同じようにそれぞれ準備を始め、一時間後にはフリートを除いた全員が平行世界へと旅立って行った。

平行世界。

その世界ではブラックが現れず、正規の歴史どおりに事は動き、当然ながら機動六課も歴史どおりに生まれていた。

そしてその世界の機動六課一部隊長室では聖王教会から送られてきた機密文章を険しい顔をしながら見つめているはやてが存在していた。

「・・・・今更追加の詩文やて？公開意見陳述会も間近に迫ったこの時期に？」

聖王教会から送られて来た聖王教会に居る在る人物のレアスキル“預言者の著書”に寄って書かれていた詩文を眺めながら、その内容にはやては頭を抱えていた。

“預言者の著書”それは未来を詩文の形で予言し、近い将来に起きる出来事を知る事が出来るレアスキルなのだが、発動条件が厳しい上に、その文章の難解さから扱い難しいレアスキルなのだ。

しかも本来ならば年に一度しか使えないレアスキルなのだが、今回は偶然にも条件が再び舞い降りて来たので、聖王教会は最初に書かれていた予言を寄り具体的に明らかにしようとしたのだが、逆に疑問が増える状況に成ってしまった。

新たな予言が出現してしまったのだ。

「『天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る。

不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる。

絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん。

王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん。

世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達と共に、深き闇を打ち砕く。

されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の胸に宿る真の思いのままに、動く者達なり』」

手に持つ詩文の内容を読み上げ、はやては内容を少しでも解読しようとするが、その意味さえも分からず頭を更に抱える。

「あかん・・・・文章の意味さえも分からんわ・・・・それにしても、まるでヒーローが駆けつけて、全部解決してくれるみたいな内容やけど。法の味方や無いって、如何言う事や？」

文章の最後の一文に書かれた文字を見ながら、はやては疑問の声を上げた。

法の味方ではない。つまり法を管理局だとすれば、管理局の味方ではないと言う意味になる。

しかし、はやてが知る限り、今回の事件には他の犯罪組織が関わっている様子は無いし、犯罪組織が好き好んで人々を護るとは、はやてには思えなかった。

「・・・・ハア～、全く分からんわ。まあ、解読に付いては聖王教会とクロノ君に任せて、私らは目の前に迫った公開意見陳述会に付いて考えようか」

そうはやては呟くと、持っていた詩文の書かれた紙を机の上に置き、目の前に迫った公開意見陳述会の警護に付いて考えるのだった。

一方、平行世界へと渡ったブラック達はミッドチルダに程近い世界でバカンスを楽しんでいた。

「キャハハハハハッ！ギルちゃん！冷たいよ！！」

「ヴィヴィオだって！」

泊まっているリゾートホテルの内部に在るプールではヴィヴィオとギルモンが嬉しそうに遊び続けていた。

その様子をプールサイドからなのはとカブモン、ティアナとクダモンは苦笑を浮かべながら見つめていた。

「ヴィヴィオやギルモンは楽しそうだね」

「そうだね。このホテルは使い魔も自由にして良いって言う場所だから、ヴィヴィオ達も嬉しいんだよ」

「それにしても、良くこんなホテルをリンディさん知ってしましたよね？」

「元々リンディは以前から休暇を取れる場所を探していたらしい。平行世界とは言え、場所は変わらんから、このホテルに滞在する事にしたのだろう」

ティアナの疑問にクダモンが答え、ティアナ達は納得したように頷くと、プールサイドに置かれている椅子に座る。

そのまま持って来た機器に映るミッドチルダの状況に付いて話し合いを始める。

「ミッドは大変ですね。スカリエッティの玩具のガジェットの大軍に公開意見陳述会場が襲われ、阿鼻叫喚の絵図だったらしいですよ」

「そうみたいだね。だけど、責任は管理局の方にあるよ。相手の力

を過小評価し過ぎたのが原因。最悪の状況を常に想像して動かないといけないのにね」

「しかもハッキングした情報に寄れば、ガジェットの対策に動いていたのは一部隊だけ。それも状況に寄ってマトモに動けなかったようだ」

「この世界のなのは達がいる部隊だよね」

全員がハッキングして手に入れた情報を見ながら溜め息を付き、映像に映されている逃げ惑う管理局員の様子に更に溜め息を吐きながら顔を見合わせる。

「・・・・どう見ても逃げてるよね？」

「逃げていますね」

「逃げているな」

「うん、逃げているよ」

なのはの質問に対して、ティアナ達はそれぞれ答え、映像に映し出されているガジェットから逃げ惑う局員に対して険しげに顔を歪める。

「・・・・ＡＭＦに対する対策が全然されていないね。この世界の私が居る部隊は何をやっているんだろう？」

「恐らくだが、地上本部にガジェットに関する正確に情報が伝わっていない可能性が高い。私の推測だが、本局は機動六課にこそ、こ

の事件を解決して欲しいのだろう」

「縄張り争いね」

クダモンの言葉に対してティアナは自身の推察を述べ、なのはとガブモンは嫌な事実に顔を歪める。

本局と地上本部。同じ管理局では在るが、その実は互いにぶつかり合っている状態なのだ。

本局は地上で育った優秀な局員を引き抜いて行き、その為に地上の戦力は減って行く。その事が在る為に地上と本局の中は最悪としか言えない状況。

本局の上層部達はこの事件を地上本部ではなく本局の局員に解決させたいのだろう。この事件を地上本部に解決されれば地上の発言力は増し、本局としては色々と地上に無理を言えなくなる事態に成る。

だが、この予言を回避したのが本局の局員ならば、本局の発言力は更に増し、逆に地上の発言力は一気に低下し、地上を本局の意にままに出来る可能性が在る。

「・・・・管理局って何なんだろうね？私達の世界でもそうだけど、この世界でも人々の平和よりも自分達の権力が大事みたいだね」

「管理局が在るから平和ではなく、平和の為に管理局は生まれた。多分、その事を多くの局員が忘れているんでしょうね」

「そのとおりかも知れないわね」

ティアナの言葉に対して背後から同意の言葉が響き、なのは達がティアナの後ろを見てみると、水着姿のリンディ、ルイン、クイントに、黒いロングコートを着た人間体のブラックが立っていた。

「ブラック。この様な場所では、その様な服は脱ぐべきだぞ」

「俺には関係ない」

クダモンの言葉に対して、ブラックは全く気にせずに答え、ブラックを除いた全員が溜め息を吐く。

どこまでも唯我独尊のブラックからすれば、周りの状況など関係ないのだ。

そのブラックにヴィヴィオとギルモンが、無邪気に近づいて来る。

「パパッ！！遊ぼう！！」

「・・・後でだ」

「ブウ～！！」

ブラックの言葉に対してヴィヴィオは不機嫌そうにするが、ブラックは構わずにティアナに顔を向ける。

「ティアナ。それで現在のミッドはどうなっているんだ？」

「ちょっと待って」

ティアナはそうブラックに告げると、映像を映していた機械を操作し始め、管理局の通信を調べ始めると、丁度この世界のスカリエッティが演説を行っている所だった。

その演説内容を聞きながら、ブラックはつまらなそうに腕を組み、リンディ達はスカリエッティに演説の内容に気分が悪くなるが、この世界の事に関わる気は無かった。

この世界はリンディ達の世界ではない。例え向かった先の世界でどれだけ巨大な事件が起きようと、その世界の事はその世界の者達に任せる。これが平行世界に渡る前にリンディ達が決めた方針だった。その事が在る為にリンディ達は何が在っても動くつもりは無かった。

そう無かったのだ。しかし、スカリエッティの後に映し出された映像に、リンディ達の心の内で怒りの炎を燃え上がった。

『うわあーん！！いたいよおー！　こわいよー！！ママー！！ママー！！』

スカリエッティの後に映し出された映像。古代ベルカ最強の兵器《聖王のゆりかご》とヴィヴィオの真実を叫んでいるスカリエッティ。

そして玉座のようなものに括られ苦痛と恐怖に泣き叫ぶこの世界のヴィヴィオの姿。

此処で一つ説明をしよう。リンディ達に取ってヴィヴィオはとても大切な存在だ。

リンディ、ルイン、クイントにとっては娘の様な存在。なのは、ティアナにしても妹の様に可愛がり、ガブモンやクダモンにとって親友、ギルモンに取っては唯一無二の大切な自身のパートナー、そしてブラックにとっては何時もは否定の声を出しているが、内心ではとても大切に思っている存在。

それは、例え平行世界で在っても関係ない。ブラック達には三大天使の世界でのヴィヴィオの悲しみに満ちた叫びを聞いた時に決めた事が在る。

“如何なる存在であろうと、ヴィヴィオを傷つけ泣かせた存在は抹消する”

言葉にはしていないが、全員がその思いを心の奥底に宿している。
では、目の前の映像を見たブラック達の思いは一つしか存在しないだろう
その場に居る全員が無言で動き始め、それぞれ服を着るとホテルの外へと出て行き、何処かへと転移して行くのだった。

“天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る”

ミッド上空に浮かぶアースラ内部での会議室では、先ほどのスカリエッティの演説とヴィヴィオの姿に怒りに燃える機動六課の面々が存在していた。

「皆、わかっとると思うけど、スカリエッティは必ず捕まえるで！」

「うん！分かっているよ！」

はやての宣言に対して、この世界のなのはは険しい顔をしながら答え、他の面々も同様に頷く。
それぞれスカリエッティの目的を潰すために出撃準備を始めた瞬間に、緊急通信がはやての下に届く。

ーーーピピピッ！！

「ん？・・・・・どないしたんやグリフィス君？」

自身の前のモニターに映った青年ーグリフィス・ロウランにはやては質問すると、モニターに映ったグリフィスが焦りに満ちた声で叫ぶ。

『部隊長！！大変です！！クラナガンに接近しているガジェットの大軍の前に、巨大な謎の生物が全部で三体出現！！圧倒的な力でガジェットを全て塵一つ残さずに消滅させています！！！』

『ッ！！！』

グリフィスの報告にはやて達は驚愕しながら顔を見合わせると、グリフィスが自身が見ていた映像をはやて達のところに映すように機械を操作する。

送られて来た映像に、会議室にいた全員がその映像に目を向けてみると、其処には。

『コキョートスブレス！！！！！』

『ビフロスト！！！』

『ロイヤルセーバーー！！！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

クラナガンの街に接近するガジェットの大軍をチリも残さず破壊し続ける、蒼い機械の狼ーメタルガルルモンX。

全身を赤き鎧で覆った六本足の獣の様な騎士ースレイプモン。

背中に赤いマントを棚引かせた白き鎧に全身を覆い包み、右手に巨大な槍ー聖槍『グラム』を、左手に聖盾『イージス』を兼ね備えたデジモンーデュークモンの姿が在った。

デュークモン、世代／究極体、属性／ワクチン種、ウィルス種、種族／聖騎士型、必殺技／ファイナル・エリシオン、ロイヤルセーバー“四大竜”の一体に数えられる邪竜『メギドラモン』より誕生した聖騎士型デジモン。ロイヤルナイツの所属しており、９９．９％の高純度“クロンデジゾイド”を精製して造られた聖鎧を纏い、右手は聖槍『グラム』、左手は聖盾『イージス』になっている。騎士道を重んじ、主君に対しては忠義の士である。また、世界をも揺るがす混沌の存在へと変貌する危険性を併せ持ち、鎧には危険の象徴『デジタルハザード』のマークが刻まれている。必殺技は、聖盾『イージス』から強烈な光を放ち、相手を浄化する『ファイナル・エリシオン』に、右手の聖槍『グラム』から、強烈な突きを相手に繰り出す『ロイヤルセーバー』だ。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

「この程度か？この程度の者達が、例え異世界で在ってもヴィヴィオを傷付けたのか！！」

クラナガンに迫っていた全てのガジェットを破壊し終えたデュークモンは、目の前に存在しているガジェットの残骸を怒りに満ちた瞳で睨んでいた。

デュークモンに取ってヴィヴィオとは自身の絶対の主君で在ると共に、世界よりも大切だと断言出来る唯一無二のパートナー。そのパートナーが平行世界でとは言え、人生を操られ、苦しめられた。

デュークモンに取っては許し難い事実。

「赦さんぞ。如何なる理由が奴らに在ろうとも、私は絶対に奴らを

赦さん」

そうデュークモンは呟くと、ガジェットの残骸を踏みしめながら上空に浮かぶ聖王のゆりかごを睨みつける。

その様子を背後で見ていたスレイプモンとメタルガルルモンXが、デュークモンに声を掛ける。

「デュークモンよ。その思いは我らも同じだ」

「僕達だって絶対に連中を赦さない」

「スレイプモン、メタルガルルモンXよ。私はこの世界のヴィヴィオを救いに行く。後は任せたぞ。来い！！我らが翼！！グラニよ！！」

スレイプモンとメタルガルルモンXの言葉に答えながら、デュークモンが右手のグラムを空に向けて掲げた瞬間。

ーーーグニャリ、シュウウン！！

デュークモンの上空の空間が歪み、その空間の歪みの中から赤い鎧に全身を包み込んだ鳥の形をした物体－ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：グラニが姿を現した。

グラニ、世代／不明、属性／不明、種族／不明、必殺技／ドラゴンドライバー、ユゴス

デュークモンを専用の騎乗機。その正体は人間が作り出した人工デジタル生体兵器『ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：グラニ』デュークモンと融合する事で、デュークモンの真の力を解放する事が出来るデュークモンとヴィヴィオの最強の愛馬。必殺技は、デュークモンを背に乗

せながら『グラム』で繰り出す『ドラゴンドライバー』に、対象のデジモンを消去するプログラム球体を放つ『ユゴス』だ。

「ムン！！・・・・・頼むぞ！グラニ！！」

（グラニちゃん！！お願い！！この世界の私の所に連れて行って！！）

ーーーピィィィィィーー！！！

デュークモンとデュークモンと融合しているヴィヴィオの叫びに答える様に、グラニは鳴き声の様なものを上げると共にデュークモンをその背に乗せて、上空に浮かぶゆりかごへと音速を超えるスピードで向かい始めた。

その様子を見ていたスレイプモンとメタルガルルモンXは顔を見合わせ、自分達の行動について話し合う。

「私はクラナガンに居る逃げ延びていない人々を護る為に動こう」

「分かった。なら僕は、地上本部を目指している戦闘機人達を相手にするよ。ブラックさん達はもうあの場所に着いているだろうしね」

「今頃は戦闘が始まっているだろうな。では行くか？」

「そうだね」

スレイプモンの言葉に対してメタルガルルモンXは答えると、スレイプモンはクラナガンの街に向かって、メタルガルルモンXは地上本部に向かって飛び立つのだった。

スカリエッティの研究所内部に在る一室では、突如として現れたデュークモン、スレイプモン、メタルガルルモンXの存在に慌てているスカリエッティ、ウーノ、トーレ、セッテ、セインの姿が存在していた。

「何なのだ！？あの生物達は！？数百機以上いたガジェットが全て消滅しただと！？」

「分からないわ！だけど！一体はゆりかごに！もう一体は地上本部に向かった妹達の下に向かっている！！これは不味いですドクター！！」

トーレの叫びに対してウーノはコンソールを弄りながら叫び、スカリエッティに向かって叫ぶと、スカリエッティは深刻さに満ちた顔をしながら頷き、ウーノに顔を向ける。

「ウーノ。すぐにゆりかご内部に居るクアットロとディエチに連絡を取り、ゆりかごの防衛を強化したまえ！あの生物を絶対にゆりかご内部に入れてはいけない！」

「了解です！！」

スカリエッティの命令に対してウーノは即座に頷き、ゆりかご内部に居るクアットロに連絡を取り始めた。

その様子を黙って見ていたセインは何気なく研究所内部を映しているモニターに目を向け、驚愕に目を見開く。

「ドクター！！！ウーノ姉！トーレ姉！！セッテ！！」

「如何したセイン？」

セインの叫びに対してトーレは険しい声を出しながら質問すると、セインは自身が見ていたモニターを指差し、全員が疑問の表情を浮かべてモニターを目を向けた瞬間に全員の表情が驚愕に染まった。

何故ならばモニターにはアジトを護っていた筈の無数のガジェットの残骸に、アジトに侵入しようとしたと思われる緑髪の男ーヴェロッサ・アコーズと聖王教会のシスターーシャッハ・ヌエラを踏みつけている金色の髪に、漆黒の体を機械的な鎧で覆い、背中に二つのバーニアを兼ね備えた漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンXの姿が映し出されていたのだ。

『見ているな？貴様らもすぐにこうなる。お前達は一人残らず、再起不能だ』

そう告げるブラックウォーグレイモンXの静かな声に、今まで一度も恐怖を感じた事が無い筈のスカリエッティが恐怖を覚え、ウーノ、トーレ、セッテ、セインも恐怖に体を震わせるのだった。

中編

アースラ内部に在る会議室にいる機動六課隊長陣及びＦＷメンバーは、目の前のモニターに映された光景を信じられないと言う気持ちしか持てなかった。

目の前のモニターに映されている光景。ＡＡランクの魔導師さえも苦戦するガジェット、しかも大軍との三体の巨大な生物達ーデュークモン、スレイプモン、メタルガルルモンＸの戦い。いや、一方的な戦いは戦いとは呼べないだろう。

映されている光景はデュークモン達に寄る圧倒的なガジェットの蹂躙劇。

グラニの背に乗ったデュークモンは上空に浮かぶゆりかごの周りを飛び回りながら、グラムに寄る一閃を放ち続け、それに寄って十数体のガジェットが一度に砕け散って行く。

市街地の上空に浮かんでいるスレイプモンは両手に握った二挺の巨大な銃型デバイスと思われる武装で、人々に襲い掛かっているガジェットを撃ち砕いて行き、廃棄都市に居るメタルガルルモンＸは全身に装備した重火器に寄る一斉射撃で大量のガジェットを氷づけにしている。

それは正に圧倒的と言う言葉すら生温いと呼べるほどに繰り返されて行く蹂躙劇。

その様子を見た機動六課の面々は誰もが恐怖に体を震わせた。

映像でこれなのだ。デュークモン達と戦っているスカリエッティ達の恐怖は計り知れないだろう。

「・・・・何だよこいつ等・・・・・・こんなの・・・・化け物じゃねえかよ！！！」

「落ち着けヴィータ！！」

恐怖に耐え切れず叫んだヴィータに向かって、シグナムは落ち着かせる様にヴィータの肩に手を置くが、シグナムの手も恐怖に震えていた。

目の前に映しだされた光景は、長い時を生きたヴォルケンリッターで在るシグナムとヴィータでさえも見た事が無い、圧倒的と言う言葉でさえも生温いほどの力を持った存在に寄る蹂躙劇。しかもそれが同時に三体も出現したのだから恐怖に震えるのも当然だろう。

誰もが言葉も出ずにモニターに映し出されたデュークモン達による一方的なガジェットの蹂躙劇を見つめる中、はやては公開意見陳述会の前に渡された新たなる予言の詩文について思い出していた。

“天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る。

不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる。

絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん。

王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん。

世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達と共に、深き闇を打ち砕く”

（あの予言はこの事やったんか！？だとした後三体！！深き闇を従えた黒き竜人に、その身の因子を宿した二つの異形！！冗談や無いで！！こんな凄まじい力を持った存在が他にも居るやなんて！！）

予言に書かれていたデュークモン達以外の存在達を思わせる内容を思い出したはやては更に恐怖を感じて体を震わせた。

既に目の前に映し出されたデュークモン達でも規格外だと言うの

に、それ以外にも絶大な力を持った存在が存在している事に恐怖を感じずには居られない。
その間にも映像は続き、ゆりかごの周りにいた全てのガジェットを消滅させ終えたデュークモンは自身の体を三メートル位の大きさに変化させると、乗っていたグラニから飛び降り、事前に見つけていた突入口からゆりかご内部へと入って行った。
それを見たなのはは慌てて椅子から立ち上がり、はやてに向かって叫ぶ。

「はやてちゃん！！のんびり見ている場合じゃないよ！！あの生物達の目的が何かは分からないけど！？このままじゃヴィヴィオが危ない！！」

「ッ！！そうや！！機動六課全員！！すぐに出撃や！！」

『了解！！』

はやての叫びに対して全員が頷き、なのは、ヴィータ、はやてはゆりかごへと、スバル、ティアナ、エリオ、キャロは地上本部に向かっている戦闘機人達の下に、フェイトはスカリエッティのアジトへと、そして最後にシグナムとユニゾンデバイスで在るリインフォース・ツヴァイは中央本部へと向かい出した。
だが、この時にはやては重大な事を忘れていた。予言の最後の行に書かれていた一文。
“されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の胸に宿る真の思いのままに、動く者達なり”
そうデュークモン達は決して管理局の味方ではない。
彼らは自分達の胸に秘めた信念の下に戦う者達。その信念を阻む

のならば、それがどの様な存在であろうと彼らは排除する。
そしてそれを最も阻む可能性が高いものの存在に、はやては全く気が付いていなかった。

ゆりかご内部へと潜入したデュークモンは迷わずに玉座の在る部屋の場所へと進みながら、自身に群がって来る大量のガジェット三型を全て一撃の下に粉砕していた。

「邪魔だ！！」

ーーードゴオオン！！

デュークモンが右手のグラムを一閃する度に群がるガジェット三型は次々と粉砕され、デュークモンの歩みは止まる事は一瞬たりともなかった。

「この程度で私の歩みは止まらんぞ！！」

ーーードスッ！！

デュークモンは叫ぶと共に自身の後方の空間にグラムを突き出し、ステルス性能を持った多脚生物のような姿をして鋭い鎌を持った機械ーガジェット？型を破壊し、デュークモンは背中のマントを翻しながら更に奥へと歩みを進める。

その様子をゆりかごの最深部から見ていたナンバーズ４ークアットロは、恐怖に震えながらモニターに映し出されているデュークモンの姿を見つめた。

「・・・・何なんですの？この生物は？・・・・・・？型のステルス機能さえも見破るなんて・・・・それに・・・・・・何故ゆりかご内部の防衛システムが・・・・この生物には反応しないんですの？」

ゆりかごにはガジェット以外にも幾つかの防衛システムが存在し、それはもちろんナンバーズやヴィヴィオ以外には必ず発動する仕組みに成っている。だが、デュークモンに対しては全く反応しなかった。

その理由はデュークモンと融合している異世界のヴィヴィオに在る。デュークモンはヴィヴィオを融合した事に寄って、ヴィヴィオのレアスキル『聖王の鎧』さえも自身のものにしている。そうデュークモンもまたゆりかごの真の主で在る『聖王』なのだ。

当然ながら、主を攻撃する船は存在しない。ゆりかごの防衛システムは、玉座に居るヴィヴィオも、玉座へと歩んでいるデュークモンも主と認識しているのだ。

その事を知らないクアットロは更にデュークモンに恐怖を覚えるが、自身には最強の手駒で在る聖王の存在が在る事を思い出して余裕の笑みを浮かべる。

「クス、そのまま先に進みなさい。その先にはディエチちゃんが居る上に、ベルカ最強の王も存在している。貴方がどれほど強くても聖王には敵わないわ。せいぜい束の間の愉悦に浸りなさい」

クアットロはそう呟くと玉座の前の扉に居るディエチに連絡を取るが、彼女は知らない。

例えベルカ最強の聖王でも、デュークモンに勝つ事は不可能な事を。そしてその行動が最もデュークモンの逆鱗に触れる行動で在る事を、クアットロは全く分かっていなかった。

地上本部の手前に在る廃棄都市の内部をナンバーズ、ノーヴェ、ウェンディ、オットー、ディード、そしてナンバーズ達に捕らえられ、洗脳されたギンガが走っていた。

「それにしても、一体何ッスかね？さっきのウーノ姉の通信に在った。蒼い機械の巨大な狼に気をつけろって？」

「さぁな。とにかくあたし等は、地上本部を目指して、機動六課の連中を叩くだけだ！！」

ライディングボードの上に乗りながら質問したウェンディの言葉に、ノーヴェは素っ気無く答えると、他の者達と一緒に遠く離れた地上本部を目指す。

だが、突如としてナンバーズ達の目の前に一人の女性が降り立つ。

ーーーートン！

『ッ！！』

軽い音を立てながら着地した女性の姿にノーヴェ達は慌てて足を止め、自分達の目の前に立つ女性の顔を見つめる。

何故ならばノーヴェ達の前に着地した女性は、自分達の仲間に成ったギンガと瓜二つと言っていいほどに良く似た女性ークイント・ナカジマだったのだ。

「・・・・・随分と異世界とは言え、人の娘をそんな人形みたいな姿にしてくれたわね？」

「テメエッ！！何者だ！？」

クイントに向かってノーヴェは険しい表情を浮かべながら質問するが、クイントは答えずに指を三本、ノーヴェ達に向かって立てる。

「私がこの世界のスカリエッティに対して赦せない事が三つ在るわ。一つは異世界とは言え、私の娘を人形の様にした事」

そう言いながらクイントは立っていた三本の内の指を折り曲げ、ギンガを見つめる。

「二つ目は同じ様に異世界だけど、私の親友の娘を利用した事」

常人では見る事さえも不可能な遠くに在るビルの屋上の上に立っている紫色の髪を持った黒いドレスを着た少女ールーテシアを見つめながら、クイントが更に指を折り曲げる。

すると、無表情だったギンガが突如としてクイントに向かって飛び出し、高速回転するドリル状の左腕をクイントに向かって突き出す。

ーーードゴオン！！

「ヘッ、無駄話なんかしてるからだよ。おい！行くぞ！！」

ギンガの一撃がクイントに決まったのを見たノーヴェは他のメンバーに向かって叫び、地上本部へと急ごうとするが、再びクイントの声が響く。

「三つめよ」

『ッ！！』

聞こえて来たクイントの声に全員がクイントとギンガの方を見てみると、ギンガの左腕のドリルの高速回転を右手で押さえているクイントが存在していた。

『なっ！？』

ドリルの回転をまるで箸でも掴む様な感じを出して受け止めているクイントの姿を見たノーヴェ達は、信じられないというようにクイントを見つめた。

高速回転するドリルなど、素手で掴めば確実に肉は抉り跳び、手など完全に無くなる筈だと言うのに、クイントの手は無くならない所か、高速回転するドリルの動きを完全に止めているのだから、驚愕するのは当然だろう。

だが、クイントはそんな事には全く構わず、ギンガに笑みを浮かべながら言葉を言う。

「ヴィヴィオを泣かせて苦しめた。これが三つ目の理由よ。さて、ギンガ？」

「ッ！！！」

クイントの笑みと静かな声に、感情をなくされた筈のギンガが何故か恐怖を感じたように震えるが、クイントは構わずにギンガに優しげな表情を向ける。

「母親が話をしている時にドリルをぶつけるなんて、お母さんは悲しいわ。少し反省しなさい！！」

ーーードゴオオン！！

『なっ！？』

クイントは叫ぶと共にギンガの頭に向かって拳骨を打ち下ろし、ギンガは顔面から地面に激突した。

それを見たノーヴェ達はクイントの一切の容赦ない行動に声を上げるが、クイントは構わずに地面に突っ伏しているギンガの頭を掴み上げ、再び優しげな笑みをギンガに向ける。

「ギンガ？目は覚めた？それともまだ、目覚めないのかしら？」

「ヒィッ！！止めて！！お母さん！！！」

『なっ！？』

感情在る、しかも恐怖に染まったギンガの叫びに、ノーヴェ達は驚愕に満ちた声を上げて、震えているギンガと、そのギンガの髪の毛を掴んでいるクイントを見つめる。

ギンガに行われたのはスカリエッティに寄る再調整。その実は完全なる人格の書き換え。

当然ながらちょっとやそっとの事では解ける代物では無い。

しかし、クイントは力技では在るが、簡単に解いてしまったのだから、驚愕するのは当然だろう。だ、クイントにすれば簡単な事だった。

クイントはバイオダークタワーデジモン。その為にクイントは機械や何やらを触れば、其処からあらゆるデータをハッキングする事が出来る。

当然ながら、その中には戦闘機人で在るギンガ達も入っている。もちろん出来るのは操作されたり、人格を無理やり書き換えられた

りと、幾つかの条件が重なった相手だけなのだが、今回のギンガは完全にそれに嵌っていたので、クイントは拳骨を落とすと共にギンガの洗脳を解いたのだ。

「ギンガ。お母さんは悲しいわ。例え異世界でも親子の絆は変わらないと思っていたのに・・・・お母さんに向かって高速回転をしているドリルを突き出すなんて・・・・本当に悲しいわ」

「・・・・本当にお母さんなの？」

「私は確かにクイント・ナカジマよ。この世界では無いけどね」

「この世界？」

クイントの呟いた言葉にギンガは疑問の声を上げるが、クイントは答えずにノーヴェ達にギンガに向けた優しげな笑みを向けながら声を掛ける。

「さてと、そろそろ終わりね」

「何言っているんッスか？」

「そうだぜ」

「例え、タイプゼロファーストの洗脳が解けたとしても」

「まだ、こっちが有利だよ」

クイントの言葉に対して、ウェンディ、ノーヴェ、ディード、オットーはそれぞれ自身の固有武装やＩＳを発動させる構えをクイン

トに向かってとる。
しかし、それを見てもクイントは優しげな笑みを向けながら上空を指差し、ノーヴェ達がその行動に疑問を覚えながら、クイントが指差した方を見て見ると、其処には。

「レイジングハート。セラフィービット展開」

ーーーガコン！！

背中に十枚の金色の翼を背負い、右手に金色の槍の形をしたデバイスーレイジングハート・セラフィーを握り締めたメタルガルルモンXが、自身の周りに六つの金色のビットを浮かばせながら上空に浮かんでいた。

『ッ！！』

メタルガルルモンXの姿を見たノーヴェ達は目を見開き、慌てててその場から逃げようとする。
しかし、メタルガルルモンXは逃さないと言うように膨大なエネルギーをレイジングハートと六つのビットに集中させる。

「全力！！」

（全開！！）

「（セブンズ・スターライトブレイカーーーーー！！！！！）」

『ウワァァァァァーーーーーー！！！！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

メタルガルルモンXとその身と融合しているなのはが叫ぶと共に、レイジングハートの先端と六つのビットの全てから巨大としか言えないほど桜色の砲撃ーセブンズ・スターライトブレイカーが放たれ、ノーヴェ達は悲鳴と共に飲み込まれた。同時にノーヴェ達が立っていた場所に巨大な爆発が起きる。

因みに放たれた砲撃は全て非殺傷設定。死ぬ事は無いが、恐らく永遠に治らないトラウマとしてノーヴェ達の心に深く刻まれただろう。在る意味、死ぬ事よりも酷い。この世界のノーヴェ達は今後桜色を見る度に、この砲撃の事を思い出し続けるのだから。

「う〜ん・・・・フリートが究極体に成ってもデバイスでの攻撃なら非殺傷設定を使える様にしたって言っていたけど。此処まで来ると、非殺傷設定が正しいのか悩むわね。これだけの一撃を受けて死なないんだから、在る意味拷問よりも酷いわ」

爆発が収まった場所で倒れ伏しているボロボロのノーヴェ達の姿を興味深そうに見つめながらクイントがそう呟くと、先ほどの桜色の砲撃を見て恐怖に震えているギンガに声を掛ける。

「ギンガ。貴女もこう成りたくなかったら、もっと精進した方が良いわよ」

「ハイッ！！！」

クイントの言葉にギンガは直立不動で答えながら頷くと、クイントは笑みを浮かべて自身の前に降り立ったメタルガルルモンXの肩に飛び乗り、ギンガに顔を向ける。

「其処の子達はギンガに任せるわ。私はやらないと行けない事が在

るからね」

「エッ？・・・アッ！ちょっとお母さん！！！」

ギンガは疑問の声を上げるが、クイントは構わずにメタルガルルモンXと共に空へと飛び立ち、ギンガの前から遠く離れて行くのだった。

この後、救援に来たスバルとティアナがギンガから全ての事情を聞き、クイントとメタルガルルモンXの使用したデバイスと砲撃魔法に驚愕しながらも、爆沈地で気絶しているノーヴェ達を拘束したのだった。

“不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる”

「フェェェェェン！！フエェェェェェン！！」

「大丈夫よ！絶対に逃げられるから！！」

クラナガン市街地にも多数のガジェットが出現し、未だに逃げ切れていなかった人々が、ガジェットの攻撃や倒壊するビルの瓦礫などに寄って傷ついていた。

本来ならば管理局が人々を護る筈だが、数日前の地上本部襲撃やAMFを搭載した大量のガジェットの前に局員は成す術もなく蹂躙されていき、魔法など使えない一般人は襲い掛かって来るガジェットに逃げ惑うのが精一杯だった。

ーーーギュィィィン！！

『ヒィッ！！』

目の前に現れた大量のガジェット？型の姿に、逃げ切れなかった人々は恐怖の声を上げ、子供抱えた親などは我が子を強く抱き締め、自身が盾に成ると言う様にガジェットに背を向け、男性などは力が無くともガジェットから妻子を護ろうとガジェットに駆け出す。

だが、ガジェットは関係ないと言う様に無慈悲にエネルギーを集め始め、人々に向かってレーザーが一放たれなかった。

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！！！

ーーーードドドドドドドドドドドドン！！！！

『ッ！！！』

突如として上空から放たれたオレンジ色の弾丸に人々の行く手を阻んでいた全てのガジェットは撃ち抜かれ、全機が爆発を起こして消滅をしてしまった。

それを見た人々が突然の事態に困惑していると、人々の前に巨大な体を持ち、赤い鎧を身に纏った六本足の獣ースレイプモンが降り立ち、人々に自身の右手を差し出す。

「早く乗るのだ。安全な場所まで私が送ろう」

「・・・・アッ！ああ、分かった」

スレイプモンの姿に誰もが信用していいのかとその巨体を見つめ

たが、スレイプモンの背に乗る多くの人々の姿に気が付いた者達は、スレイプモンが差し出した右手の乗り込む。
スレイプモンは人々を右手を使って自身の背に移すと、空へと駆け上がり、人々を安全な場所まで運び続ける。

“絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん”

ゆりかごの中で大量のガジェット?型と戦い続けていたデュークモンは遂に目的の場所で在る玉座が在る部屋へと近づいていた。

「ムン!!」

ーーードゴオオオオオオン!!

グラムの一閃に寄って通路を埋め尽くしていたガジェットは消滅するが、デュークモンは構わずに歩みを続け、ゆりかごの中を見回していた。

「・・・・・・寂しいものだ。このゆりかごとて私と同じ様に主君を護る物だと言うのに、今は利用される物・・・・哀れな」

(・・・・そうだね。ゆりかごも可哀想だよ。本当は・・・・誰かを護る為の物なのにね)

「そうだ。だからこそ、私はこの世界のヴィヴィオを救った後にゆ

りかごを眠らす。もう利用される事が無い様にな」

自身の内にいるヴィヴィオの言葉に答えながらデュークモンは更に先を進み、内心で別の事を考える。

（そしてもう一人、この世界の高町なのはよ！！私は貴様と戦うぞ！！貴様がこの世界のヴィヴィオの母に相応しいのかを、見極める為に！！）

デュークモンはこの世界のなのはの情報を見た時から決めていたのだ。

この世界のなのはがヴィヴィオの母親に相応しいのか如何かを、戦う事で見極めると。

本来ならばそのつもりは最初は無かった。この世界のヴィヴィオはデュークモンが主君と定めたヴィヴィオではない。だからこそ、関わる気は無かったのだが、あの泣き叫ぶヴィヴィオの姿を見た時、デュークモンの心は変わった。何が何でもこの世界の高町なのはを見極めると。

なのはは知っていた筈なのだ。ヴィヴィオがスカリエッティに狙われている可能性が在る事に。

だが、その可能性を忘れ、ヴィヴィオがいた機動六課隊舎を無防備同然の状態にしていた。

その状況だけでもデュークモンがこの世界のなのはに不信感を抱くには十分だった。

デュークモンはこう思ったのだ。

“この世界の高町なのはは、母親と慕っているヴィヴィオの事を何とも思っていないのでは無いのか”

勿論そうとは限らないが、この世界の高町なのはは時空管理局員。

自身の世界の管理局の悪行を知り過ぎているデュークモンに取っては、この世界のヴィヴィオを生み出した真の闇の存在を知っている。
自分の世界ではその前にブラックに寄って救われ、リンディ達に大切に育てられたが、この世界では実験動物の様に闇に潜む者達に扱われていた筈だ。だからこそ、尚更デュークモンはこの世界のヴィヴィオには幸せに成って欲しい。

(闇の方はブラック達が破壊するだろう。成らば私は高町なのはを試す!!その為の準備は既に終えているからな。早く来るのだぞ、高町なのはよ)

そうデュークモンは内心で呟くと、歩みを進め玉座の在る場所に近づくが、突如として前方から強力なエネルギー弾が飛んで来る。

「ムン!!」

ーーーバシュン!!

自身に向かって高速で飛んで来たエネルギー弾を、デュークモンはグラムに寄る一閃で霧散させながらエネルギー弾を放った人物を探す。
そして100メートル先の通路で巨大な砲門ーイノメースカノンを構えたディエチを発見する。

「其処を退くのならば、九割殺しが八割殺しに変わるが、如何する?」

「・・・・2・・・・・1」

「残念だ」

イノメースカノンにエネルギーをチャージしながらカウントを取り始めたディエチの姿に、デュークモンは構えも取らずに立ち続け、エネルギーをチャージし終えたディエチが収束砲を発射する。

「0」

ーーードグオオオオオオオオオン！！

カウントを終えると共にイノメースカノンから、Sランクに匹敵する砲撃が放たれ、デュークモンに向かって直進する。

しかし、自身にSランククラスの砲撃が迫って来ていてもデュークモンは構わずに無防備なまま歩みを進め、砲撃がその身に直撃する。

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

デュークモンに砲撃が直撃すると共に通路に巨大な爆発が起き、通路は煙に埋め尽くされた。

それを見たディエチは安堵の息を吐き、イノメースカノンを床に降ろした。

この行動は在る意味仕方ないだろう。ディエチの砲撃はこの世界でエース・オブ・エースと呼ばれている高町なのはの砲撃に匹敵する威力を持った強力無比の砲撃。その様な砲撃を防御も行わず直撃したら、幾らエース・オブ・エースと呼ばれる高町なのはでも落ちる。

因みにデュークモンの世界のなのはは落ちない。フリートのマッドな改造に寄って改良されたレイジングハートの生み出すバリアジャケットは、通常のバリアジャケットよりも遥かに強度が高いので

ディエチの砲撃を同時に二発受けても、余りダメージは受けないのだ。
話は戻すが、ディエチの砲撃は強力無比で在る為に、大抵の敵は落ちる。
だが、デュークモンには。
「今のが貴様の最強の一撃なのか？」
「ッ！！！」
煙の中から響いて来た声にディエチは驚愕に目を見開き、吹き上がる煙の中を見つめてみると、煙の中から鎧に傷一つ存在しないデュークモンが姿を現す。
そのままデュークモンは、驚愕で動きが止まってしまっているディエチに向かって聖なるエネルギーが集まったグラムを突き出す。
「セーバーショット！！！」
「そんな！！ば…」
ードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！
全ての言葉を言い終わる前に、ディエチはセーバーショットに飲み込まれ、背後に存在していた壁を幾つも突き破りながらその姿は、デュークモンの視界から消え去った。
（・・・・・殺しちゃったの？）
「案ずるな。死んではいない。だが、この世界の技術では数年は再起不能だろう。フリートならば一ヶ月で治癒出来るだろうがな」

（そうなんだ）

デュークモンの言葉にヴィヴィオは安堵の息を吐いた。
如何に異世界の自分自身を傷付けたとは言え、やはりヴィヴィオには相手を傷付ける事や殺す事には躊躇いが在る。戦いの場に出ればその事を忘れて戦うが、それでもヴィヴィオは相手を傷付ける事には消極的なのだ。
その事が分かっているデュークモンは、宣言どおりディエチを九割殺しで済ませたのだ。

「さて、先を急ぐか！！」

ーーービュン！！

デュークモンは叫ぶと共に、その身を空中に浮かばせ、音速を超えるスピードで玉座へと急ぎ向かうのだった。

廃棄都市区間の一つのビルの屋上に立っていたルーテシアとその使役魔ー虫人間のガリューは、自分達の目の前に浮かんでいるメタルガルルモンXに険しい視線を向けていた。
遠目で見ていたがノーヴェ達を一瞬の内に戦闘不能に追い込んだのは、先ず間違いなく自身の目の前にいるメタルガルルモンXだと分かっているのだ。
だが、メタルガルルモンXの肩に乗っていたクイントはその様子に構わず、ルーテシアの目の前に飛び降りる。

ーーートン

「こんにちは」

「・・・・・誰？」

「私はクイント・ナカジマ。貴女のお母さんの親友よ。ガリューは知っているわよね？」

「ガリュー、本当？」

クイントの言葉にルーテシアは疑問を覚えてガリューに質問すると、ガリューは無言で頷く。

「私が此処には来たのは貴女を止める為よ。もう貴女は戦わなくて良いわ。メガーヌは私達が助けるから」

「・・・・・幾らお母さんの親友でも信用出来ない」

ルーテシアには行き成り現れたクイントの言葉が信用出来なかった。

確かに目の前にいるクイントは異世界でもルーテシアの母親で在るメガーヌの親友だ。

しかし、行き成り現れてメガーヌを救うと言われても信用する者は誰も居ないだろう。

その事はクイントも分かっているのか苦笑を浮かべながら、自身の右手の先にモニターを映し出し、ルーテシアに良く見えるように掲げ、ルーテシアがその映像を見て見ると、スカリエッティのアジトの映像が映し出された。それと共に映ったリンディがクイントに報告する。

『クイント。こっちは言われたとおり、メガーヌさんを救い出したわ。それと通信機を使ってフリートさんに簡易スキャンして貰ったら、レリックなんて必要も無く目覚めるそうよ。スカリエッティの言った事は真っ赤な嘘だって断言したわ』

『ッ！！！』

リンディが告げたメガーヌの真実に、ルーテシアとガリューは驚愕で動きが止まってしまう。

スカリエッティの話では自身の母親であるメガーヌはレリックナンバー１１が無ければ目覚めないという話だった。それなのにリンディの話が事実だとすれば、自身が今まで行って来た行動は全て無意味だと言う事に他ならない。

その事実に気が付いたルーテシアは自身がこれまで行って来た行動を全て思い出し、体を恐怖に震わせ泣きそうな顔を浮かべるが、クイントは優しくルーテシアを抱き締め、頭を優しく撫で始める。

「・・・・辛かったわよね。メガーヌと話がしたいだけだったのに、それさえも叶わず、その小さな体で戦い続けていたのね。私には貴女の辛さは分からないけど、絶対にメガーヌに会わせて上げるわ。そうしたら思う存分甘えなさい。知っている？メガーヌは任務の時でもずっと貴女の事を気にしていたのよ。貴女の事を本当に大切に思っている優しいお母さんなんだからね」

「・・・・・・ヒック、ヒック、フェェェェェェェェン！！フェェェェェェェェン！！」

ルーテシアはクイントの胸の中で大声で泣き始めた。

今までの辛さ、悲しさを表すように大声で泣き続け、クイントはその様子に優しげな笑みを浮かべたままルーテシアの頭を撫で続け、

メタルガルルモンXも優しげな瞳でルーテシアを見つめ続けるのだった。
因みに、この様な状態に成りながらもクアットロが干渉しないのは、ゆりかご内部で暴れ続けているデュークモンの対処に追われている上に、フリート特製のジャミングがルーテシアとクイントの周りに張り巡らされてるので、状況を全く知る事が出来ないのだ。

スカリエッティのアジトではスカリエッティの逮捕に向かったフェイトが漸くアジトの入り口に辿り着いていた。
だが、その足はアジト内部に侵入する前に止まり、入り口の前に存在している無数のガジェットの残骸を困惑したように見つめていた。

「・・・・・・何なのこれは？アコーズ査察官とシスターシャッハは何処に？」

入り口の前で合流する筈だった二人の姿が無い事にフェイトは心配しながら辺りを見回すが、二人の姿は発見出来ず、もしや中に居るのかと思い、フェイトは急ぎアジトの中へと入って行った。
そして少しすると山の様に積み上がっていたガジェットの残骸の中からボロボロに成った女性一聖王教会のシスター、シャッハ・ヌエラが這い出てきて、フェイトが入っていた入り口に向かって力無く右手を伸ばす。

「・・・・・・フェ・・・イト・・・・執務・・・官・・・・行っては・・・・いけません・・・・その先には・・・・・闇が・・・・・黒い・・・・・竜人の・・・・・姿を・・・・し・・・・・」

ーーーパタン

全ての言葉が言い終える前に、フェイトが向かった入り口の方に伸ばしていたシャッハの右手は地に落ち、気絶してしまった。

後編　上

スカリエッティのアジトの中に一人で入って行ったフェイトは、奥へと進み続けていたが、その表情は疑問と困惑に満ち溢れていた。

（如何言う事なの？スカリエッティのアジトの筈なのに、ＡＭＦが全く展開されていない。それにこの夥しい数のガジェットの残骸は一体誰が？）

通路を埋め尽くすほど破壊されたガジェットの残骸。

敵地で在りながら、全くＡＭＦが展開されていない事にフェイトは疑問を覚えるが、考えても答えは分からず先に進む。

すると、戦闘機人の生体が入った生体ポットが在る部屋へと到着し、険しい視線を生体ポットに向けて睨み付ける。

「赦せない。こんな命を弄び、ただの実験材料として扱う研究なんて絶対に赦せない！！」

自身の知る情報とスカリエッティの行っている研究が一致した事に、フェイトは怒りに満ちた声を上げ、スカリエッティの逮捕へと向かおうとするが、突如として声が響く。

「管理局員の貴女が言える事ではないわよ、フェイトさん」

「ッ！！」

聞こえて来た聞き覚えの在り過ぎる声に、フェイトは慌てて声の聞こえて来た通路の先に目を向けてみると、その人物を見つける。

その人物は翡翠の髪に、翡翠の瞳を持った二十歳ぐらいの綺麗な

黒いドレスを着た女性。
フェイトに取っては二人目の母親で在り、現在は本局に居る筈の女性ーリンディが通路の奥に立っていた。
「リンディ義母さん！？如何して此処にいるの！本局に居る筈じゃ！？」
目の前に現れたリンディに向かってフェイトは声を上げながら質問した。
本来ならば本局に居る筈の人物が目の前に、しかも事件の首謀者であるスカリエッティのアジト内部に居るのだから驚愕するのも当然だろう。
しかし、リンディはフェイトの驚愕には構わず、自身の横に在る生体ポットの中に居る素体を悲しげな視線で見つめる。
「・・・・酷いわよね。勝手に生み出されて、道具の様に扱われる。命を命と思っていない者が出来る行動だわ」
「・・・・・うん。だから、この先に居るスカリエッティを逮捕する。それで事件は解決する」
「・・・・・・失望したわ」
「ッ！！！」
リンディの宣言にフェイトは目を限界にまで見開きながらリンディを見つめた。
失望した。確かにリンディはそうフェイトに向かって告げたのだ。そんな言葉を、しかも自分を理解している筈のリンディから言われるとは思っても見なかったのだろう。

しかし、リンディからすればフェイトに失望するには十分だった。フェイトはこう言ったのだ。

“スカリエッティを捕まえれば事件は解決する”

それは事件の本質を全く見ていない事と同意義なのだ。

「スカリエッティを捕まえれば、更なる違法研究に寄る犠牲者が生まれるわね」

「・・・・それってどういう事なの？スカリエッティを捕まえたら、更なる犠牲者が生まれるって、義母さん一体如何言う事なの？」

「一つ言い忘れていたわ。私はリンディ・ハラオウンではないわよ」

「ッ！！」

リンディの告げた事実にフェイトはすぐさま自身のデバイス－ザンバーフォームに変えたバルディッシュをリンディに向けて構える。

「・・・・リンディ義母さんの人造魔導師なのね？」

「それも外れ。私はリンディ・ハラオウンの成れの果て、リンディよ」

「如何言う事なの？成れの果てって？一体？」

フェイトは疑問に満ち溢れた声でリンディに質問するが、リンディは答えずにフェイトに失望したと言う視線を向け続ける。

「話は戻すけど。貴女が知るスカリエッティの情報を統合すればこうでしょう。“非合法な人体実験などを行なっている科学者”そうでしょう？」

リンディがそうフェイトに質問すると、フェイトは構えを解かずに無言で頷く。

それを見たリンディは更に失望したと言うように溜め息を吐きながら、フェイトを見つめる。

「この世界のクロノは何を教えたのかしらね？上辺だけの情報しか見ないなんて、執務官失格も良い所よ。スカリエッティが一個人でこれほどの規模の設備の準備や事件を行えると思っているの？」

「ッ！！」

フェイトは慌てて辺りの無数の生体ポットを見つめた。

リンディの言うとおりこれほどの大規模な設備の準備を一個人で行える筈は無いし、アレほど巨大な聖王のゆりかごも隠せる筈も無い。これほどの大規模な事を行えるとしたら、世界レベル規模の、そう管理局クラスの力も持った組織の協力が必要。

「地上本部！！スカリエッティを支援していたのは地上本部のレジアス・ゲイズ中将！！」

フェイトは自身の知る情報から、スカリエッティを支援したのは地上本部の重鎮で在るレジアス・ゲイズがスカリエッティを支援したと判断した。

それは確かに正しい。レジアスは確かにスカリエッティに依頼して、戦闘機人の技術を手に入れようとしていた。だが、違う。

レジアスは依頼者で在って、スカリエッティの背後に居るもので

はない。スカリエッティの背後に居る者はレジアスさえも手駒にした存在。そう。

「“時空管理局最高評議会、及びそれに付き従う上層部一派”それこそが、スカリエッティの背後に居る黒幕よ。フェイトさん」

「なっ！？」

予想以上の黒幕達の正体にフェイトは声を上げながら、リンディの姿を呆然と見つめた。

リンディの言葉が真実だとすれば、時空管理局そのものが違法研究を推進している事に他ならない。

「そう、管理局は自身が否定している違法研究を裏では平然と行っている。場所としては最高の環境よね。自分達が何かしなくても、勝手に違法研究の資料は集まる上に法が犯罪を犯す筈は無いと、多くの人々や一般局員は思っている。本当に違法研究を行うのには最高の環境だと思わない？」

そうリンディはフェイトに告げると、何処からとも無く紙の様な束を取り出し、フェイトの前にばら撒く様に投げ付ける。その床にばら撒かれた資料をフェイトは恐る恐る紙を拾い、内容に目を向けて見る。

其処に書かれていたのは、フェイトが摘発した筈の違法研究所に在った内容とそれをスカリエッティに伝えた管理局員の名前。管理局が違法研究を推進している事を示すのに充分な証拠の数々だった。

「そ、そんな・・・・・嘘だ・・・・こんなの」

「現実よ。全ては管理局から始まった。そして幾ら違法研究を行っ

ても管理局は裁かれないわ」

「ッ！！」

リンディの言葉にフェイトは体を震わせながらリンディの顔を見つめるが、リンディからすれば当然の事だった。

何故ならば、管理局は法を適用し、法を執行し、法を決めると言う三権分立が集まった組織。

しかも幾つもの世界を管理している組織。その様な組織に反論できるものは存在はしていない。

各管理世界の代表にしても、自分達の世界を管理している管理局に強く言う事は出来ない。失敗すれば戦争に発展してしまうのだから、多くの人々の代表で在る代表者達も強く管理局に抵抗する事が出来ないのだ。

「そして今の惨状。魔法技術しかないのに、全くＡＭＦに対する対抗策が成されていない」

「それは！？地上本部が私達の話を聞いて！！」

「ハア～、本当に呆れるわ。ねえ、フェイトさん？地上は低ランクの魔導師が主流なのよ？そんな状態で、貴女の部隊。機動六課と同じ事が出来ると思うの？」

「ッ！！」

機動六課は通常では考えられないほど戦力が充実した部隊。しかも日夜ガジェットを倒す為の訓練を行い続けていたのだから、ガジェットは敵ではない。

だが、一般的な地上の部隊は機動六課の様に戦力が充実している

わけでも、ガジェット対策の訓練を詰んでいる訳でもない。当然、ガジェットに地上の部隊が勝てる可能性は低いのだ。

「住民の避難も殆どされていない。地上本部襲撃から数日も時間が在った筈なのにね。スレイプモンが住民の避難を行わなかったら、多分、怪我人は続出。数千人以上の死傷者を出しているでしょうね。そしてそれに対しても、管理局は反省なんてしない」

「そんな事在る筈無い！！管理局がそんな事を！？」

「・・・・・十年前にクロノが言っていたわね。“世界はこんな筈じゃないことばかり”それは管理局にも適用されるんじゃないの？」

「ッ！！」

フェイトはハッとしたと言うような顔をしてリンディを見つめた。世界はこんな筈じゃないことばかりに溢れている。次元世界を護っている管理局も世界の一部でしかない。しかも管理局は権力が集中している場所。

当然ながら、自身の権力の為や欲望の為に動く人間も必ず存在している。管理局だけが例外など在りえないのだ。

「そして全ては本局上層部の思惑通りに進んでいたわ。私達を除いた全てがね」

「本局上層部の思惑？」

「そう、本局上層部の真の思惑は、“地上本部の完全掌握”！！」

「ッ！！」

リンディが告げた本局上層部の思惑にフェイトは目を見開いた。
地上本部の完全掌握。同じ管理局で在りながら、本局の真の目的が地上本部の完全掌握だと告げられたのだから、驚愕するのも当然だろう。
しかし、リンディはフェイトの驚愕には一切構わずに、更なる事実を告げる。

「陸と海の仲の悪さは知っているわよね？その原因は、地上の人材や予算を本局が吸い上げているから。しかも地上に事件が起きても本局は知らん振り。そんな状況では陸と海の仲は悪化する一方。しかも万年人材不足の状況なのに」

「そ、それは・・・・」

リンディの言葉にフェイトは反論しようとするが、その通りなので言い返す事が出来なかった。
陸と海では扱う事件の規模が違うからと言う理由で、本局は地上から人材や予算を吸い上げている。当然ながら、地上の戦力は減るばかりであり、地上の局員は本局を嫌うと言う状況に陥っているのだ。
その様な状態に在る事も分かっている本局は、何とかして地上の実権を握ろうと画策している。
そしてそれに打って付けの状況が舞い込んで来た。

「この事件を地上ではなく本局が解決すれば、地上は本局に逆らえなくなるでしょうね。何せ何も出来なかったんだから。その為には地上の無能さを明らかにする状況を作らなければならない。そしてその為に、本局は貴女達の部隊、機動六課を設立した」

「ッ！！」

フェイトは再び信じられないというように、リンディを見つめた。
フェイトの知る話では、機動六課の設立の目的は予言に書かれた管理局崩壊の予言を回避する為だと自身の上司である八神はやてやクロノ・ハラウオン、聖王教会のカリム・グランシアから聞かされていたのに、機動六課設立の真の目的が、地上本部の掌握に在ると言われたのだから、困惑するのも当然だろう。

「唯でさえ陸と海の仲は最悪なのに、本局は地上に勝手に部隊を設立した。これに寄って地上は本局に悪感情を更に持ち、地上は更に意固地になる。これが先ずは第一段階よ」

「・・・・嘘だ」

「次に第二段階。地上の無能さを明らかにして、本局の有能さを明らかにする。この状況を作る為に打って付けの場は、公開意見陳述会場ね。あそこの警備の管轄は地上本部に在るから、ガジェットの襲撃に何の対策も取っていない地上部隊は蹂躙されるしかない。その状況ではガジェットに対抗できる機動六課が動けない状況も作る必要が在る。思い当たるでしょう？魔導師なのにデバイスの携帯を禁じられて、内部の警備をさせられたのだから？」

「・・・・ア、ア、ア、ア」

リンディが次々に明らかにする本局上層部の思惑に、フェイトは恐怖の声を上げて後ずさりし始めるが、リンディは逃がさないと言う様に言葉を続ける。

「そして最終段階。大規模な事件を起こした者を、本局の人間が捕

まえる。はい、これで地上の無能さは明らかに成って、本局の有能さが示されるわね。つまりね、フェイトさん」

「・・・ヤメテ・・・・ヤメテ」

リンディが次に告げる言葉が分かったフェイトは、恐怖の声を上げてリンディの言葉を聞こえないように耳を押さえて蹲る。

だが、リンディは逃がさないと言うようにフェイトに近付き、耳を押さえているフェイトの両腕を凄まじい力で引き離し、残酷な真実を耳元で告げる。

「・・・全部ね。本局の思惑どおりだったの。この沢山の人々が危険に晒される状況も何もかも、本局上層部の願いどおりだったのよ」

「イヤアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！！」

リンディが告げた残酷過ぎる事実にフェイトは否定の叫びを上げて、頭を抑えて蹲り始める。

自分達一機動六課の行動は全て本局の思惑通りだった。其処に在る犠牲や悲しみの感情なども一切考えずに、本局は自分達の思惑通りに事が進む様に準備を続けていた。

そして願いどおり、本局は地上本部を掌握出来る状況を作り上げた。その結果、どれほどの犠牲が出ても、本局は機動六課を前に出し、事件を解決した“奇跡の部隊”とでも祭り上げて、民衆に本局こそが世界を護っていると知らしめ、地上を本局が掌握する。

勿論、失敗すれば全てを失う可能性が在ったが、それでもその見返りは権力に依存する者達からすれば魅力的なものだろう。

「最も、まさかあの予言の犯人が、スカリエッティだとは本局も思っても見なかったでしょうけど。あの予言は正に本局上層部に取っては最高のものだった。どうフェイトさん？貴女達、管理局の縄張り争いのせいで地上の、クラナガンの人々を危険な目に合わせている気分は？」

「・・・・ウ、ウゥ、ウワァァァァァァァーーーー！！！」

フェイトは顔を床に付けて大声で泣き始めた。

全てが仕組まれた事だった。全ては本局が地上を掌握する為に作り上げた状況。

クラナガンの人々が危険な目に合っているのも、ゆりかごの中でヴィヴィオが苦しむ様な状況に合ったのも、全ては本局の上層部達が願っていた状況だと、ハッキリとフェイトには分かってしまった。

そう考えれば幾つもの辻褄が合う。機動六課の設立を認めた本局の上層部達。

幾らクロノやこの世界のリンディ、聖王教会のカリム、そして伝説の三提督の支援が在ったとは言え、本局内部から反対意見が出なかったのにも納得できる。

機動六課の後見人以外の思惑が裏で動いていたのだ。

その様にフェイトが絶望の真実に嘆きの声を上げ続けるが、リンディは慰めの言葉も掛けずに、フェイトに背を向け、ブラックの居る場所へと向かい出す。

後には、悲しみの涙を流し続けるフェイトだけが残されるのだった。

スカリエッティのアジト一番奥、其処では惨劇としか呼べない地獄が生み出されていた。

壁からオブジェの様に生えている六本の足。この六本の足の主は、ナンバーズ６－セインとナンバーズ７－セッテ、そして管理局の査察官－ヴェロッサ・アコーズだった。
彼女達は侵入してきたブラックウォーグレイモンＸへと挑んだのだが、ブラックウォーグレイモンＸは壁に隠れていたセインを逸早く見つけると、壁の中から無理やり連れ出し、壁にＩＳを発動させる間際も無くセインを叩き付けて、オブジェの様にセインを壁から生やした状態にした。
次にセッテ。彼女は自身のＩＳ－スローアームズを使って、ブーメランブレードを操り、ブラックウォーグレイモンＸに攻撃を加えたのだが、ブラックウォーグレイモンＸは両腕のドラモンキラーを使って難なくブーメランブレードを砕き、その事に驚愕しているセッテに一瞬の内に近付き、セインと同様にオブジェの形にして壁に生やしたのだ。序にこの時にヴェロッサも壁に埋め込んだ。
因みにブラックウォーグレイモンＸがヴェロッサを態々運んで来たのは道案内の為だ。何時もならば気にせずに前に進み、手当たり次第に破壊して目的の場所に向かうのだが、今回はルインとリンディが頼んだので、仕方が無く最短の道を聞く為にヴェロッサを利用したのだ。
ヴェロッサとシャッハは本当に運が無かったとしか言えないだろう。この場所の入り口にさえ居なければ、ブラックウォーグレイモンＸに目を付けられる事は無かったのだから。
そして現在、ブラックウォーグレイモンＸは、残されたナンバーズ３－トーレと激戦を繰り広げていた。
「クッ！！ライドインパルス！！」
ーーービュウン！！
トーレは自身の高速機動のＩＳ－ライドインパルスを使用して目

の前に居る黒い機械的な鎧を身に纏った漆黒の竜人ーブラックウォーグレイモンXに向かって、両手足から生やしたインパルスブレードを全力で振り下ろす。

「ウオォォォォォーー！！！」

ーーーバキィィィィン！！

トーレが叫ぶと共に振り下ろしたインパルスブレードはブラックウォーグレイモンXの体にぶつかった瞬間に、粉々に砕け散った。

ブラックウォーグレイモンXが何かをした訳ではない。

ただその鎧にぶつかっただけで、トーレのインパルスブレードは跡形も無く砕けたのだ。

自身の武器が簡単に粉々に砕けた事に、トーレは呆然としたするが、ブラックウォーグレイモンXは構わずに、呆然としているトーレに向かって腕を常人では見る事さえも不可能なスピードで振り抜く。

「邪魔だ」

「ライドインパルス！」

ーーービュン！！

ブラックウォーグレイモンXの一撃が決まる前に、トーレは再び自身のISを発動させ、何とかブラックウォーグレイモンXの攻撃をかわした。

既にこのやり取りは何十回と繰り返している。トーレは自身のISを既に連続で使用し続け、ブラックウォーグレイモンXの攻撃をかわし続けていたが、その体は既にボロボロだった。

ブラックウォーグレイモンXの攻撃はかわしたとしても、その攻撃に寄る衝撃波に寄って体が傷付いていくのだ。
しかも、連続でISを発動させ、自身の限界を遥かに超えるスピードを出してかわさなければ行けないほどに、ブラックウォーグレイモンXの攻撃は速い。
そうしなければトーレは既にやられたセッテやセインのように壁に顔から埋められた状態に成っているだろう。
しかし、トーレは凄まじい勘違いをしている。“ブラックウォーグレイモンXは全く本気を出していないのだ”。

（つまらん。この世界のこいつ等はこの程度の力しか持っていないのか？）

（仕方無いですよブラック様。この世界はデジモンの存在が無いんですから、ナンバーズの実力も低いのは当然です）

ブッラクウォーグレイモンXとユニゾンしているルインが落ち着かせる様に言葉を言うが、ブラックウォーグレイモンXは不機嫌そうにトーレを見つめる。

（・・・・・リンディはまだ掛かるのか？そろそろの筈だぞ？）

（もう少しだそうです。アッ！それとデュークモンが、そろそろゆりかごの玉座に着きそうです）

（そうか。成らば遊びの時間は終わりだ。真の惨劇の始まりだ）

（了解です、マイマスター）

ーーーガシィィィン！！

「なっ！？」

ブラックの言葉に答えるようにルインが了承した瞬間に、動き回っていたトーレは突如としてバインドが巻き付き、体が空中に拘束された。

それと共にブラックウォーグレイモンXは黒いエネルギー弾をドラモンキラーの爪先に出現させる。

「時間が来た。消えろ」

ーーードゴオオン！！

「グァァァァァァァーーーーー！！！！」

ブラックウォーグレイモンXが投げ付けたエネルギー弾を、その身に受けたトーレは悲鳴を上げながら壁へと激突し、壁を掘り進みながら何処へとも無く消えて行った。

その様子を見ていたスカリエッティは体を震わせ、ブラックウォーグレイモンXを姿を見ていた。

恐怖ではなく、歓喜に体を震わせて。

「フッ、フハハハハハハハハハハッ！！素晴らしい！素晴らしい！！私の娘達が一撃にも与えられないとは、君の様な存在にもっと早く出会いたかったよ！！」

スカリエッティはもはや自分が助からない確信していた。

しかし、それでもスカリエッティは興奮する。目の前にいるブラックウォーグレイモンXの前には、人造魔導師も、戦闘機人さえも、Sランクオーバーの魔導師さえも、そして世界を管理している管理

局さえも無力。
　自身の行って来た全ての技術を持ってしても絶対に敵わないと、断言出来る存在に出会えた事にスカリエッティは心の底から歓喜する。

「欲しいよ。小賢しい計算など吹き飛ばす理不尽な力！無理を通して道理を捻じ伏せる力！君の力は全てそれに当て嵌まる！！その力だ！その力が私に在れば、こんな馬鹿騒ぎも、ナンバーズも、聖王も、『ゆりかご』もいらなかった！！その力さえあれば、私は、僕は思うままに、夢を追いかける事が出来ただろう！！」

　スカリエッティは心の底からブラックウォーグレイモンXの力を欲した。
　全てを破壊し、自身の思いのままに進める圧倒的な力。その力こそスカリエッティが望んでいた力そのもの。
　それが最後の時の瞬間に見つかった事を心の底から残念に思いながら、スカリエッティはブラックウォーグレイモンXに羨望の眼差しを送るが、ブラックウォーグレイモンXはスカリエッティの眼差しなど気にせずに再び黒いエネルギー球を作り上げる。

「貴様の夢など関係ない。俺にアイツの悲しみの声を聞かせた貴様は、消えろ」

　言葉と共にブラックウォーグレイモンXは、黒いエネルギー球をスカリエッティに向かって全力で投擲する。
　迫り来る黒いエネルギー球を見つめながら、スカリエッティは羨望の笑みを浮かべて呟く。

「・・・・欲しかったなぁ～」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

黒いエネルギー球はスカリエッティに直撃し、トーレ同様に壁を掘り進みながら遠くへと吹き飛んで行った。

それを確認したブラックウォーグレイモンXはスカリエッティの姿を模った壁に開いている穴に背を向け、背後に何時の間にか居たリンディに声を掛ける。

「最後のナンバーズは如何した？」

「もう終わったわ。他のナンバーズと同様に壁にめり込ませて来たわ」

「そうか」

リンディの言葉にブラックウォーグレイモンXは頷くと、足を出口の方に向けて歩き出し、リンディも同様に歩きながら声を掛ける。

「それと管理局の通信を傍受したら予想通りの動きを行っている事が判明したわ。真の惨劇ープランΩを実行する事に成りそうよ」

「予想通りか。成らば、その為の準備は如何なんだ？」

「クイントとなのはさん、ガブモン君が実行中。その他の準備も殆ど終わり掛けている。後は引き金さえ引かれれば、プランΩは始まり、管理局の崩壊、再誕が始まるわ」

リンディは邪悪な笑みを浮かべながらそう言い、ブラックウォーグレイモンXとその身と融合しているルインも同様に邪悪な笑みを浮かべ、スカリエッティのアジトから出て行くのだった。

地上本部に在る一室。その部屋の中には四名の人物が存在していた。
一人は茶色のコートを着た男性ーゼスト・グランガイツ。
一人は地上本部の重鎮ーレジアス・ゲイズ中将。その娘であり、副官のオーリス・ゲイズ。
そして一般の局員である思われる女性局員が一人。
地上本部の一室に存在し、ゼストは険しい表情を椅子に座っているレジアスに向け、互いに見据え合っていた。

「レジアス。聞きたい事は一つだけだ。八年前に俺と俺の部下を殺す様に指示したのはお前なのか？」

ゼストはそう言うと共に、懐から二枚の写真をレジアスの執務机の投げ付ける。
写真の一枚にはゼストの部下達が写り、もう一枚の写真には地上の平和を理想に頑張っていたレジアスとゼストの姿が写っていた。

「俺は良い。俺は、お前の正義になら殉ずる覚悟が在った。だが、俺の部下達は何故死んだ！？」

ゼストの叫びに対して、レジアスは何も答えずに辛そうに顔を俯かせながら写真を見つめる。

「どうして、こんな事になってしまった？俺達が護りたかった世界は、俺達の欲しかった力は、俺とお前が夢見た正義は、何時の間にこんな姿になってしまった？」

「ッ！！」

レジアスは更に苦悩の表情を浮かべた。彼は地上の平和の為に頑張り続けていたが、何時の間にかその理想は変わり、平和の為ならば違法や犯罪者で在るスカリエッティとも手を結び、違法も行い続けていた。

本局には優秀な魔導師や戦力を奪われていく。その為に、人員不足や戦力不足に追われ、地上の人々を護る力を失っていく現状を変える為に人造魔導師や戦闘機人を使って、地上の人員不足を解消しようとしていたのだ。

しかし、それを依頼していたスカリエッティにも裏切られ、地上の人々は脅威に襲われ続けている。

この様な現状が自分の望んだ正義なのかとレジアスは深く苦悩していた。

「ワシは……」

ゼストの質問に答えようと、レジアスは苦悩するように声を出す。

その時に部屋の隅の方にいた女性局員が静かに立ち上がり、右手に鉤爪のような武器を装着させ、右手を隠しながらレジアスの背後に静かに移動し始めた瞬間。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！！

「ハアァァァァァァーーーー！！！」

『ッ！！』

部屋の横壁が突如として崩壊し、その中から一人の女性が姿を現し、全員が驚愕に目を見開いた。

何故ならば現れた人物は、もう既に死んでいる人物。ゼストと共に殉職したとされる女性。

「ナカジマッ！！」

女性ークイント・ナカジマの姿にゼストは驚愕と困惑の叫びを上げるが、クイントは気にせずにレジアスの背後に居た女性局員を殴り付ける。

「貴女は邪魔よッ！！」

ーーードゴオン！！

「キャアァァァァァァーーーーー！！！」

『なっ！？』

クイントの拳を腹に受けた女性局員は悲鳴を上げながら、クイントが現れた別方向の壁に激突し、女性の姿はナンバーズと同様の戦闘スーツを着た女性の姿に変わった。

女性局員の正体は、ナンバーズ２のドゥーエだったのだ。用済みに成ったレジアスを殺そうと動いていたのだが、クイントに阻まれ、壁に激突して目を回す様な状態に成っていた。

その事に全員が驚愕の表情を浮かべる中、クイントは優しげな笑みを浮かべながらレジアスに近付き、肩に手を置く。

ーーーポンッ！

「こんにちはレジアス中将。さっそくだけど、私のお願いを聞いて貰って良いかしら？」

「まっ！待てナカジマ！レジアスとは俺が話をして！！」

ゼストはクイントを止めようと、クイントの肩に手を置くが、クイントはレジアスとは打って変わって、険しい視線をゼストに向け、全力でゼストの腹に向かって拳を突き出す。

「この～馬鹿親が！！」

ーーーードゴオン！！

「グフッ！！」

クイントの拳を受けたゼストは苦痛の声を上げて、腹を押さえながら蹲るが、クイントは構わずにゼストの襟首を掴み上げる。

「如何言う事ですかゼスト隊長？何でルーテシアちゃんの父親で在る貴方の事を、ルーテシアちゃんが知らないんですか？」

ーーーギクッ！！

「そ、それは・・・・」

ゼストは気まずげにクイントの視線から顔を逸らした。

ゼストとルーテシアは実の親子である。当時、ゼスト隊は死亡率が高く危険な任務を負う事が多い部隊だった。その上、組織だった犯罪者を相手取る機会も多かったので、反管理局主義者のみならず手を逃れた犯罪者やその類型から恨みを買う事も多い。

その為に隊員の殆どが独身者で占められていた。例外としては子供や夫がいたクイントぐらいだろう。

しかし、隊員も人間であり、女性局員も当然居たのだから、間違いも犯す。
そしてその中にいたメガーヌも当然ながら間違いを犯した。上司で在るゼストと一夜どころか何度も間違いを。その結果がルーテシアで在る。
しかし立場上、籍をそう簡単には入れられる訳も無く、ルーテシアが生まれてからもズルズルと時が過ぎ、ゼストとメガーヌが籍を入れる事は無かった。
メガーヌの親友であり、同じ部隊だったクイントはもちろんその事を知っていたし、祝福もした。
それなのにルーテシアに事情を深く聞いたらゼストの事は知っていても、父親で在る事は知らなかったと告げられ、クイントは元々の用事とゼストを殴る為に急ぎ地上本部に向かい、先ほど到着したのだ。

「どうせ、自分の命が残り少ないからと言う理由で、ルーテシアちゃんとしっかりと向き合わなかったんでしょうね？」

「グウッ！！」

図星を指されたゼストはうなり声を上げながら、クイントに視線から顔を逸らした。
クイントの言うとおり、ゼストは自身の残りの命が少ない事を分かっていた為に、ルーテシアの悲しみを少しでも減らす為にと思い、自身が実の父親で在る事を隠していたのだ。
それを見たクイントは顔に幾つも青筋を浮かべるが、今は時間が無いと思い、ゼストの襟首から手を離し、再びレジアスに顔を向ける。

「とにかく、レジアス中将？私達に協力して貰いますよ？本局上層

部の思惑を潰して、管理局を再誕させる為にね？」

「な、何だと？」

レジアスは疑問の声を上げるが、クイントは笑みを浮かべたまま、色々と今回の事件の裏に隠されていた本局の本当の思惑を伝え、レジアスは戸惑いながらも協力を約束したのだった。

上空に浮かぶゆりかごへと向かったなのは、ヴィータ、はやて、そして大勢の管理局魔導師隊は、既に全てのガジェットが破壊されたと言うのに未だにゆりかご内部へと一人を除いて突入する事が出来なかった。

何故ならば、ゆりかごに入ろうとすれば音速を超えるスピードでゆりかごの周りを飛び回っているグラニの発生させている衝撃波に寄って、ゆりかごへと近付く魔導師達は全員吹き飛ばされるからだ。

ーーーピイィィィィーーー！！

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

『ウワァァァァァーーーー！！！』

「クソッ！！あの野郎のせいでゆりかごに近付けねえ！！」

衝撃波を受けない範囲から様子を見ていたヴィータは、飛び回るグラニを睨み付けながら叫んだ。

既に多くの局員がグラニの発生させている衝撃波に寄って戦闘不能に成っている。その上、何人かの魔導師達がグラニに向かって射

撃や砲撃を放っても、グラニのスピードの前にあっさりとかわされる上に、はやての広域魔法もグラニはあっさりとかわしている。
管理局の魔導師は一人足りとも通さないと宣言する様に、グラニは一人足りとも管理局の魔導師達を通さなかった。ただ一人を除いては。

「何であの野郎？なのはだけは通しやがったんだ？」

グラニはこの世界の高町なのはがゆりかごに近付くのを阻まなかったのだ。
そのお陰でなのははゆりかごへと侵入する事が出来た。
それはグラニの主で在るデュークモンの願いなのだが、その事を知らないヴィータは自身の横に居るはやてと共に疑問に首を傾げるが、すぐに何とかゆりかごへと入る為に、再びグラニに向かって攻撃を放つ。だが、やはりグラニは全ての攻撃を簡単にかわし、管理局の魔導師達を翻弄し続けるのだった。

ゆりかご内部、玉座の間では、玉座に座らせられて手足を拘束されているヴィヴィオと、その横で微笑を浮かべながら立っているクアットロが玉座の間に通じる頑丈な扉を見つめていた。
見つめていた扉は突如として強力な衝撃が与えられたかのように大きく歪み、一瞬の内に砕け散る。

ーーーガラガラガラガラ

扉が砕け散ると共に、扉を破壊した者ーデュークモンがゆっくりと部屋の中に足を踏み入れ、拘束されているヴィヴィオを視界に捉える。

「・・・・・・すぐに拘束を解くのならば、八割殺しで済ますが？」

「怖いですわねぇ～。でも～、貴方は此処までですわ。確かに素晴らしい力ですが、私達の切り札に勝てませんからねぇ～」

そう言いながらクアットロは、ヴィヴィオの頬に向かって指を伸ばすが、デュークモンは全く気にせずにゆっくりと歩みを進め、クアットロはヴィヴィオの頬に後一歩で届くぐらいの距離で指を止める。

「良いんですかぁ～？この子の頬に傷が付きますわよぉ～？」

「幻影にその様な事が出来るのか？」

「ッ！！」

自身のＩＳがいとも簡単に見破られた事にクアットロは目を見開くが、すぐに微笑を浮かべながら幻影を消滅させ、デュークモンの頭上にモニターを映し出す。

『私のＩＳを見破ったのには驚きましたわ。貴方はやはり危険な存在。此処は切り札を使わせて貰いますわぁ～』

「うぅ～、あ、あぁ！！」

「ヴィヴィオッ！！」

苦しみ始めたヴィヴィオの姿にデュークモンは心配そう声を上げ、ヴィヴィオの下へと急ぎ駆け出そうとするが、突如として強力な虹

色の魔力風が吹き荒れ、デュークモンは足は止まってしまう。

「ムッ！！」

『良い事を教えてあげますわぁ～。その子は古代ベルカの王族の遺伝子から生まれた人造魔導師。古代ベルカ王族の固有スキル『聖王の鎧』を持ち、レリックとの融合を経て、真の力をこの子は取り戻す。古代ベルカの王族が自らその身を作り変えた究極の生体兵器、『レリックウェポン』としての力を』

「ヤダァ～！！！やだよぉ～！！ママ～！！ママ～！！」

『すぐに誕生しますわ！私達の王。ゆりかごの力を得て無限の力を手に入れた究極の戦士。『聖王』がッ！！』

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオン！！

クアットロが叫ぶと共に虹色の閃光が、眩いばかりに光輝き、デュークモンの視界を埋め尽くした。

『ハハハハハハハハハハハッ！！！』

クアットロは喜びの笑い声を上げ続ける。

自身の最大の切り札で在る聖王が目覚めた事に歓喜しているのだ。

ベルカ最強の王『聖王』。その存在は長い歴史の置いても最強の武勇を誇った戦士。

ヴィヴィオはその遺伝子から生まれた人造魔導師。その力ならばデュークモンさえも倒せる思っている。

しかも、今のヴィヴィオはクアットロの思いのままに動く人形。最強の手札が自身の手に在る上に、本体で在る自分自身は遠く離れ

た場所にいる。デュークモンは何も出来ない。
だが、彼女は重要な事を忘れていた。聖王はゆりかごの最終防衛システム。敵に対してしか反応しない存在。
そうクアットロが忘れている事。“デュークモンにはゆりかごの防衛システムが全く起動していなかった”事実を忘れていた。

『ハハハハハハ・・・・・・・ハッ？』

発生していた虹色の魔力風はまるで最初から存在していなかったの様治まり、玉座には静かに座ったままのヴィヴィオの姿しかなかった。

『何故！？何故目覚めないの！？聖王が何故！？』

ヴィヴィオの姿が全く変わらない事にクアットロは驚愕の声を上げ、自身の手元に在るコンソールを弄り回すが、ヴィヴィオが聖王へと姿を変える事はなかった。
その様子を黙って見ていたデュークモンは、自身の左手のイージスを下に向けて構え出し、静かな声でクアットロに話を掛ける。

「聖王が目覚める筈は無かろう。何故ならば、ゆりかごは王同士で戦う事を望んで居ないのだから」

『何を言っていますの！？』

「こう言う事だ」

ーーーブオン！

クアットロの言葉に答えると共に、デュークモンは自身の体の周

りに魔力粒子を漂わせ始め、クアットロは呆気に取られたようにデュークモンの周りに漂っている魔力光を見つめる
デュークモンの周りに漂う燦然と輝く“虹色”の魔力光。
ヴィヴィオと同様の聖王の血筋を示す魔力光、“カイゼルファルベ”
絶対に在り得る事の無い魔力光をデュークモンは自身の体の周りに纏っていた。

『・・・・・あ・・・な・・・・・た・・・・・は・・・・・一体・・・・・何者・・・・何ですの？』

「私はデュークモン！！聖王を護る一振りの剣！！貴様は異世界とは言え、私の主君を傷つけ、あまつさえ兵器などと呼んだ。断じて赦さん！！」

デュークモンは叫ぶと共に、下に向けていたイージスにエネルギーを集め始め、クアットロは恐怖に震える。
デュークモンがディエチを壁を破って吹き飛ばした事を思い出したのだ。
しかし、もはやデュークモンは止まらず、更にエネルギーを集めイージスは寄り強く光り輝いていく。

「後悔しながら吹き飛ぶが良い！！ファイナル・エリシオン！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオン！！

『イヤアァァァァァァァァーーーーー！！！！！』

デュークモンの放ったファイナル・エリシオンは一切の停滞も見せずに、クアットロが居る最深部までの壁を破りながら直進し、ク

アットロは断末魔の叫びと共に光の中に消えて行き、モニターが消失した。
それを確認したデュークモンはイージスとグラムを何処へとも無く消失させ、急ぎ玉座に拘束されているヴィヴィオの下へと駆け出す。

「大事は無いか？」

「ヒィッ！」

デュークモンの姿にヴィヴィオは恐怖の声を上げた。
無理も無いだろう。幾ら聖王家の血筋とは言え、見た事も無い、しかも人間ではないデュークモンの姿に恐怖を覚えるのも当然だ。
その様子にデュークモンは一瞬悲しげな表情を浮かべるが、すぐにヴィヴィオを拘束している手枷や足枷に手を伸ばし、一瞬の停滞も無く引き千切る。

ーーーバキン！！

「これで君は自由だ・・・・・母親の所に帰りたいのならば、私が君を送ろう？」

「・・・・・帰れないよ」

「何？」

ヴィヴィオの言葉にデュークモンは訝しげにヴィヴィオを見つめると、ヴィヴィオは涙を溜めた瞳をデュークモンに向ける。

「・・・・・ヴィヴィオは兵器だもの。なのはマ・・・・なのはさ

んの下に何て帰れないよ」

「・・・・君は兵器などではない。私が保証しよう。君は君なのだ」

「違うよ！！本当の両親なんて私には無い！！私が子供の姿をしていたのも、誰かに取り入って魔法のデータを収集するためだったんだよ！こんな私が・・・なのはさんたちのそばに居て良いはずが無いんだ！」

ヴィヴィオは涙を流しながらデュークモンに向かって自身の存在を否定する様な叫びを上げ、デュークモンは心の底からヴィヴィオの言葉と姿が悲しいと思った。

ヴィヴィオの言うとおり、ヴィヴィオには本当の両親など存在しない。

ヴィヴィオは確かに兵器として望まれて生まれてしまった。だが、デュークモンには何が在っても護りたいと思う存在。

その存在が異世界とは言え、自身を否定する様な叫びを上げた。デュークモンはその事が心の底から悲しかった。

「・・・・・違う。君は優しい子供だ。誰より優しい子供だと私は知っている。だから頼む！！自分を否定する様な叫びなど上げないでくれ！！この通りだ！！」

デュークモンは言葉と共に自身の頭を深く下げた。

頭を下げた程度ではヴィヴィオの心は変わらないだろう。だが、それでもデュークモンは自身が出来る最大の行為を行う。

異世界だとかは関係ない。デュークモンに取ってはヴィヴィオが生きていて、笑顔を浮かべる事が何よりも嬉しいのだ。

忘れもしないあの惨劇の日。初めて出来た友を失った異世界のヴィヴィオの悲しみ。そして再び友を失ってしまった時の悲劇を、デ

ュークモンは一日たりとも忘れた事は無い。

「君を兵器などと呼ぶ存在を私は絶対に赦さない。君が悲しむのならば、私はそれを止める為に戦おう」

「・・・・・・」

デュークモンの言葉にヴィヴィオは無言で顔を俯かせ、デュークモンは同じ様に無言に成りながらヴィヴィオに背を向け、ヴィヴィオの周りに強力な結界を張り巡らせる。

ーーーシュウン！！

「ッ！！」

「安心してくれ。これは君を戦いに巻き込まない為の結界だ。これから起きる戦いにな」

結界が突如として張られた事に驚愕するヴィヴィオに、デュークモンは優しく言葉を言いながら、再びグラムとイージスを取り出し、部屋の入り口の扉を睨み付ける。

「・・・・・漸く来たか。高町なのは！！」

「えっ！？」

デュークモンの宣言にヴィヴィオは驚愕の表情を浮かべて扉を見つめてみると、破壊された扉から白いバリアジャケット―エクシードモードにレイジングハートを変形させた管理局のエース・オブ・エース―高町なのはが険しい表情を浮かべて玉座の間へと足を踏み

入れた。
それを確認したデュークモンは、ヴィヴィオから離れ始め、グラムをなのはに向かって構え出す。
「待っていたぞ。貴様が来るのを」
「・・・・・貴方は、いえ貴方達は一体何者なんですか？何でガジェットから人々を護ったり、ゆりかご内部に侵入してヴィヴィオを救い出したんですか？」
なのはは質問すると共にレイジングハートをデュークモンに向かって構え出す。
「私はデュークモン。ヴィヴィオの悲しみに満ちた叫びを聞いて、駆け付けた騎士だ」
「・・・・・だったらすぐに他の者達に命じて、戦いを止めて下さい。貴方達の行動のせいで管理局は妨害に在っています。このままだと公務執行妨害で貴方達を逮捕する事に成ります」
「公務執行妨害か・・・・・・クッ、クハハハハハハハハハハハハ！！！」
「何がおかしいんですか！？」
突如として大声で笑い始めたデュークモンになのはは怒りの声を上げて、レイジングハートを向けるが、デュークモンは厳しい眼差しをなのはに向け、グラムに聖なるエネルギーを集め始める。
「ふざけるな！！貴様ら管理局こそが人々を苦しめているのだろう

が！？そして貴様の行動こそがヴィヴィオを苦しめる現状を作り上げた！！」

「私の行動！？」

「そうだ！！貴様はヴィヴィオがスカリエッティに狙われている事を知っていたはずだ！なのに何故ヴィヴィオを奪われ易い状況など作り上げたのだ！？」

「そ、それは！？」

デュークモンの叫びになのははうろたえたように顔を逸らし、デュークモンは怒りに満ち溢れながら確信する。

目の前に居るなのはは、自分の力を過信し、相手の力を甘く見た愚か者だとハッキリと分かった。

それはデュークモンの怒りを振り切るほどに最悪な事実だった。

「貴様は叩きのめさせて貰うぞ！！セーバーショット！！」

「ッ！！ディバインバスターー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

デュークモンのセーバーショットとなのはのディバインバスターは互いの中間で激突し、爆発が起きた。

今此処に異世界の聖王の忠実な騎士ーデュークモンとこの世界の聖王の養母ー高町なのはの激闘が開始されたのだった。

後編　下

クラナガンの人々の救援を終えたスレイプモンは、廃棄都市のビルの上に立ちながら上空に浮かぶゆりかごを眺めていた。

「そろそろ始まった頃だろう。デュークモンとこの世界のなのはの戦いが」

（そうね。と成れば、私達も動くべきでしょう？）

「そうだな。プランΩ。出来れば行いたくは無かったが、それももはや無理のようだ」

スレイプモンとその身に融合しているティアナは、既にリンディから管理局の行う行動を聞き、プランΩを実行するしかないと判断していた。

プランΩ。それは管理局が在る行動を行った時のみに実行する事を決めていたスレイプモン達に寄る全ての真実の暴露と管理局の崩壊の実行。

既に管理局はその行動を実行する事を通信を傍受していたリンディの証言から聞き、スレイプモンは本当に残念だと言うに目を細める。

「・・・・・出来る事ならば、プランΩだけは本当に行いたくなかった。私達はこの世界の者ではない。全てが終われば去るつもりだったのに・・・・・管理局は本当に愚か者達の集まりだ」

（・・・・・そうね。だけど、もう実行するしかないわ。全てを変える為にもね？）

「そうだな」

スレイプモンは答えると共にブレイクミラージュを両手に顕現させると、ブレイクミラージュの演算能力を全力で起動させ出す。
同時に管理局の内部に在るシステムを完全に掌握し、今ミッドで起きている全ての事実を全管理世界に秘密裏に放送し始める。

ゆりかごの周りに居る局員達は未だにゆりかご内部に入る事は出来ず、グラニの発生させている衝撃波に寄って翻弄され続けていた。

ーーーピィィィィィーーーー！！！

ーーードゴオオオオオオン！！

『ウワァァァァァーーー！！！』

「如何したら！如何したら通れるんや！？このままじゃ、なのはちゃんまで！！」

吹き飛ばされる局員達の姿を見ながらはやては悔しそうに叫ぶが、グラニは嘲笑うかのように衝撃波を撒き散らしながら飛び続ける。
既にガジェットは存在しないと言うのに、管理局員はなのはを除いた全員が一歩たりともゆりかごに入る事が出来なかった。
進入しようとすればゆりかごの周りを飛び回るグラニに全員が吹き飛ばされ、多くの怪我人が既に続出している。
局員達もグラニを撃ち落そうと砲撃やはやての広域攻撃を放ち続けているのだが、音速を超えるスピード動き続けているグラニに当

たる筈も無く、運が良く当たったとしてもグラニの装甲の前では豆鉄砲が当たった程度のダメージしか与える事が出来ないのが現状だった。

「クソッ！あいつも化けもんだぜ！！」

「落ち着くんやヴィータ！！もうすぐ本局から艦艇も来る！！そうなれば方策も取れるわ！！」

はやてはそうヴィータに言うが内心ではかなりの不安に襲われていた。

（何やこれ？私は何か重要な事を忘れておる気がする？一体何や？）

漠然とした不安。それは自身が忘れている事に関係してるとはやては内心で思うのだが、その忘れている事が分からずに言い知れない不安に包まれていると背後からヘリが近付いて来る。

『八神部隊長！！』

「はやてちゃん！！」

「主ッ！！」

「ッ！！スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、それにシャマルにザフィーラまで！？」

ヘリの中に乗っているＦＷメンバーと機動六課隊舎が襲撃された時に負傷を負ってしまい、前線から離れていた筈のシャマルとザフィーラの姿にはやては驚愕しながら質問した。

シャマルとザフィーラは病院に居る筈の上に、ＦＷメンバーは廃棄都市から地上本部へと向かっていた戦闘機人の確保に向かっていた筈だ。
それなのにそのメンバーが全員が、ゆりかごの近くへとやって来ている。

「何か在ったんか！？地上本部に向かっていた筈の戦闘機人達はどないしたんや！？」

「・・・・・戦闘機人達は全員確保出来ました。ギンガさんも助かりました。だけど、戦闘機人を倒したのは蒼い機械の狼で・・・・・・ギンガさんを助けたのは・・・その・・・死んだはずの・・・・ギンガさんとスバルの母親で在るクイント・ナカジマさんらしいんです」

『ッ！！』

ティアナが告げた事実に、はやてとヴィータは顔を見合わせた。
ギンガとスバルの母親であるクイントは、既に故人に成っている人物。
その人物がギンガを救出したと、ティアナは告げた。一体どう言う事なのかとはやてが質問しようとすると、シャマルが更なる事実を告げる。

「それだけじゃないのよ！！廃棄都市にいた戦闘機人の反応が消失する瞬間に、なのはちゃんの魔力反応が出現したの！！しかも同時に、七個もよ！！」

「何やて！？」

「何だって！？」

シャマルが更に告げた事実に、はやてとヴィータは叫びを上げた。
何故ならば自分達の知るなのはは一人だけであり、そのなのはは確かにゆりかご内部へと入って行くのをはやてとヴィータは目撃している。なのに、そのなのはの魔力反応が廃棄都市に、しかも同時に七個の反応が出現したと言う。
その様にはやてとヴィータが次々と起こる不可思議な事態に混乱していると、突然にゆりかごの上部に離れたクラナガンからさえも一望出来るほどの巨大なモニターが出現する。

ーーーブウン！！

『ッ！！』

突如としてゆりかごの上部に出現したモニターにはやて達は驚愕しながら慌ててモニターを見つめて見ると、其処には。

『セーバーショット！！！』

『ディバインバスターー！！！』

ドゴオオオオオオオオオオン！！

互いに砲撃を撃ちあうデュークモンとなのはの姿が映し出されていた。
その映像にゆりかごの周りに居る局員達と、そして安全な場所に避難されたクラナガンの人々は呆然としながら見つめるのだった。

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

「クッ！！」

砲撃を互いに撃ちあったデュークモンとなのはの砲撃を、中間でぶつかり合い激しい爆発が起きるが、その衝撃は全てなのはの方に向かって来た。

それが意味する事に気が付いたなのはは悔しげに顔を歪めながら、デュークモンから離れるように距離を取ってレイジングハートを構える。

（私の方に全て衝撃が襲い掛かった。全力じゃないけど、エクシードモードの私の砲撃に撃ち勝つ何て！？）

自身の全力では無いとは言え最大の武器である砲撃に簡単に撃ち勝って見せたデュークモンに、プライドが傷付けられたなのはは悔しげな顔をしたままデュークモンを睨む。

だが、デュークモンはなのはの気持ちなど全く気にせずに、床に向かってグラムを突き立てる。

ーーードスッ！！

「ゆりかごシステム完全掌握。浮上停止。ＡＭＦシステム解除」

「なっ！？」

デュークモンの呟いた言葉の意味に気が付いたなのはは困惑と疑問に満ちた声をだしながらデュークモンを見つめる。

それと共にグラムの突き刺している床から光の線が発生し、玉座

全体に光の線が走った瞬間に、ゆりかご内部全域を覆っていたＡＭＦが解除され、ゆりかごの浮上も停止した。
それと共になのはは自身の体が軽くなるのを感じ、呆然と自身を右手を見つめる。

「・・・・・如何してＡＭＦを解除したの？ＡＭＦが在れば有利に成るのに？」

床からグラムを抜いてるデュークモンに向かってなのはは呆然としながら質問した。
ＡＭＦ。通称アンチマギリンクフィールド。効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化する能力が在り、その効果範囲内では攻撃魔法どころか移動系魔法も妨害される。しかもゆりかごを覆っていたのは高濃度のＡＭＦ。Ｓランクオーバーで在るなのはも弱体化を免れる事が出来ないほどの高濃度で存在していた。にも関わらず、デュークモンはそれを解いてしまったのだから、なのはの力は万全な状態に戻ってしまう。敵で在る筈の者に塩を送る様な行動がなのはには理解出来なかった。
しかし、デュークモンからすれば当然の事だった。

「言った筈だぞ。貴様は叩きのめすと？負けた時の言い訳をされたくないだけだ」

デュークモンがＡＭＦを解いた理由は唯一つ。
なのはを全力で叩きのめし、完膚なきまでに敗北させる為だった。
もはやデュークモンは、目の前に立っている“時空管理局員の高町なのは”を赦す気は無かった。

（赦さん。この女だけは絶対に赦さんぞ。この女の行動のせいで、この世界のヴィヴィオはあのような言葉を叫んだ！！私は絶対に赦

さん！！）

デュークモンがなのはの事を赦す事が出来ない理由は一つ、この世界のヴィヴィオが告げたあの言葉。

“ヴィヴィオは兵器だもの”

（ふざけるな！！ヴィヴィオでは兵器ではない！！この女がヴィヴィオと確り向き合っていれば！スカリエッティの戦力を甘く見なければ！この様な事態には成らなかった上に、ヴィヴィオが傷付く事は無かったのだ！！）

もし、ヴィヴィオが連れ去られずなのは達の下に居続ければ、ゆりかごは浮かび上がる事も無く、ヴィヴィオも自身の出生の秘密を知る事は無かっただろう。

ほんの僅かな油断。その油断こそが、ヴィヴィオの心に傷を負わせた。

そしてその油断を呼んだのは、先ず間違いなくなのはの自身の力に寄る過信だとデュークモンは先ほどの一撃とその前の言葉で確信していた。

（デュークちゃんの力は映像で見ている筈なのに、全力の攻撃じゃ無かったよね？）

（先ず間違いない。この女はリミッターを外した自分に勝てる者はいないと、心の奥底で思っている。愚か者でしかない！）

自身と融合しているヴィヴィオの言葉に答えると共に、デュークモンはグラムをなのはに向けて構え出す。

「全力で来るのだな？もはや負けた時に言い訳など、不可能だぞ？」

「ッ！！馬鹿にしないで！ディバインバスターー！！！」

デュークモンの言葉に、プライドを完全に傷付けれたなのはは、今度こそ全力で砲撃を放ち、デュークモンに凄まじい勢いで迫る。

だが、デュークモンは迫り来る砲撃を見ても、慌てずに構えていたグラムを迫る砲撃に向かって全力で振り抜く。

「無駄だ！！」

ーーーバシュン！！

「なっ！？」

グラムが振り抜かれると共に、デュークモンに迫っていたディバインバスターは一瞬の内に霧散した。

今度は正真正銘に全力の砲撃だったと言うのに、簡単に霧散された事実になのはの動きが止まった瞬間、デュークモンの姿がなのはの視界から消失する。

ーーービュン！！！

「ッ！！何処に！？」

視界から消えたデュークモンの姿になのはは慌てて辺りを警戒しながら見回し始める。

しかし、なのはの警戒など無意味だと言うようになのはの背後にデュークモンは移動し、グラムをなのはに向かって振り抜く。

「ムン！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！》

デュークモンが背後に居る事に気が付いたレイジングハートは、慌ててプロテクションを発動させ、攻撃を受け止めようとする。

ーーーバリィィィィィィン！！

「ウッ！キャアァァァァァァァーーーー！！！！」

ーーードゴオオン！！

一瞬の停滞も見せる事無くプロテクションはグラムの一撃に崩壊し、なのはは悲鳴を上げながら壁に激突してめり込んだ。

その様子を眺めていたデュークモンは、ゆっくりと壁にめり込んでいるなのはに歩み始める。

「鉄壁だと貴様の防御は言われているようだが、今の一撃は力を全く込めずに放ったのだぞ？それで鉄壁と呼ばれるとは、随分と脆い鉄壁だな」

「・・・・・・ブラスターシステム、リミット？、リリース！！」

《Ｂｌａｓｔｅｒ．ｓｅｔ》

「ムッ！」

壁に埋め込んでいるなのはが叫んだ瞬間に、膨大な魔力が発生し、デュークモンが足を止めて警戒するように注意深くなのはを観察し

始める。
目の前になのはが使ったシステムは、恐らく自身の世界のなのはのセラフィーモードと同様なシステムだと気が付いたのだ。セラフィーモードには遥かに及ばないだろうが、それでも警戒するには十分な物だと判断し、デュークモンは油断なくなのはの動きを注視する。
その僅か時間の間になのはは壁から飛び出し、再びレイジングハートをデュークモンに向かって構えると、先ほどのディバインバスターよりも遥かに大威力の砲撃を魔法をブラスターシステムで強化した状態で放つ。

「エクセリオンバスターー！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオン！！

放たれたエクセリオンバスターは、デュークモンへと凄まじい勢いで迫るが、デュークモンは構えも取らずに歩みを再開し、その体に砲撃は直撃した。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

ーーードッドッドッ

「ッ！そ、そんな！？」

自身の砲撃が直撃したにも関わらず、砲撃を体に受けながらも歩みを続ける虹色の魔力光を体の周りに発生させているデュークモンの姿になのはは悲鳴を上げた。
自身の中でも最強の魔法で在るスターライトブレイカーに匹敵する筈なのに、エクセリオンバスターを体に受けながら歩むを止めな

いデュークモンになのはは一瞬恐れを覚えるが、すぐさま表情を険しくして更なる力を解放する。

「ブラスターシステム！リミット？！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

なのはが叫ぶと共にエクセリオンバスターの威力は更に倍増するが、それでもデュークモンは歩みを止めない所か、砲撃の中を全速力で駆け抜ける。

「オォォォォォォォォーーーーー！！！！！」

「ウッ！ウワァァァァァァァーーーー！！！！」

砲撃の中を進んで来るデュークモンの姿になのはは恐怖の声を上げながら、更に砲撃の威力を上げるが、デュークモンの走りを止める事は出来なかった。

そして遂になのはの目の前にデュークモンは現れ、グラムをなのはに向かって振り下ろす。

「このデュークモンにその程度の砲撃は通じんぞ！！」

ーーードゴオオオオン！！

「ガハッ！！」

叫ぶと共に振り抜かれたグラムの一撃を避ける事が出来ず、なのはは苦痛の声を上げながら、再び壁に激突した。

その様子を眺めながらデュークモンはグラムをなのはに向かって

構え出し、自身が予測したブラスターシステムの正体を苦痛に苦しんでいるなのはに語り出す。

「ブラスターシステム。大仰な名前の割にはつまらんシステムだ。自己ブーストの極限と言った所だろうな？」

「グッ！！」

全身を襲う苦痛に苦しみながらも、ブラスターシステムの正体を指されたなのはは悔しげな声を上げた。

ブラスターシステム。それはこの世界のなのはの切り札であり、自身とデバイスに過剰としか言えないほどの自己強化を行うシステム。強力な力を手に入れる事が出来るシステムだが、その反面に使用者と使用デバイス、双方の命を削るほどの負担を掛けてしまう。正に諸刃の剣を表したシステム。

しかも、使用後は必ず心身ともに凄まじいほどの消耗が発生する上に、深刻な後遺症が残るのは間違い。

強力無比のシステムだとデュークモンも認めるが、使用後の事を何も考えていない欠陥品としか言えないシステムだと断言出来ると判断した。

「その様な自虐のシステムを使うとは、余程貴様は命がいらんようだ・・・・・・いや、これも上層部のシナリオの内なのだろうな。貴様がこの件に関われば、必ず使うと踏んでいたのだろう。自身を顧みず人々を護った本局のエース。事件後の良い内容に成るだろうな」

「・・・・・・如何言う事なの？上層部のシナリオって？」

聞き覚えの無い事実に、なのはは苦痛に苦しみながらもデューク

モンに質問した。
　それを聞いたデュークモンは無表情に絶望の一なのは達管理局に取っての絶望の真実をなのはに語り出す。
「全ては本局上層部の描いていたシナリオだ。地上本部を完全に掌握する為に。貴様の部隊、機動六課は生み出された」
「ッ！！！」
　デュークモンが告げた真実になのはは目を見開くが、デュークモンはリンディがフェイトへと語ったこの事件の裏に隠されていた本局上層部の真の思惑を全て告げる。
「・・・・・・・嘘だよ・・・・・・・・そんなの嘘だよ」
　全てを聞き終えたなのはは、教えられた絶望の真実に体を恐怖に震わせ、顔を青褪めさせた。
　機動六課設立の裏の裏に隠されていた絶望の真実。地上本部との仲を更に悪化させ、地上を意固地にさせる状況を生み出し、ＡＭＦに対する対抗策を生み出せていない地上の無能さを民衆に見せ付け、その事件を引き起こした者を本局直轄の部隊で在る機動六課に解決させ、地上の実権を完全に掌握する。
　その為に生まれるであろうミッドチルダの人々の犠牲を完全に考えてない。
　自分達の欲望の満たす為の悪夢の思惑を実行した本局上層部。そしてそれの一端を担っていた自分自身になのはは凄まじい恐怖と絶望に襲われながら体を震わせる。
「だが、この計画には弱点が在った。公開意見陳述会の前に事件が終わっていれば、或いはゆりかごが浮かばない状況が出来ていれば

全ては無駄に成り、地上の人々に犠牲が出る事は無かった。そしてその為の鍵を貴様らは偶然にも手に入れていた」

「・・・・・事件を解決出来る鍵・・・・・・・ッ！！まさか！？」

デュークモンが告げた言葉になのはは首を傾げながら少し考えて何かに気が付いたように、なのはが玉座の間に入って来てから一言も喋らずに、デュークモンが張った結界の中で顔を俯かせるヴィヴィオに顔を向けた。

そう、ヴィヴィオこそが事件を解決、或いは抑止出来る鍵だったのだ。

ヴィヴィオがスカリエッティの下にさえ居なければ、ゆりかごは浮かばず、スカリエッティは最強の切り札を手に入れる事も無く、事件が起きなかった可能性が高い。

「先ほども言ったが、貴様らがヴィヴィオを連れ去れる状況さえ作り上げねば、状況は確実に変わっていただろう。そしてヴィヴィオが心に傷を負う事もなかった」

「ッ！！・・・・・心に傷を？」

デュークモンが告げた事実に、なのはは未だに自身の事を一度も見ようとしていないヴィヴィオを注意深く見つめた。

「私は貴様が来る前に、あの子に言ったのだ。“母親の所に帰りたければ、私が送る”とな。だが、あの子は帰れないと私に告げたのだ！！」

「・・・・帰れない？」

「そうだ！！あの子は自分が兵器だから帰れないと私に告げた！！何故あの子が兵器などと呼ばれなければいけない！！」

「・・・・・ヴィヴィオが・・・・・自分を兵器って言った？」

もはやなのはは呆然としながら言葉を呟くのが精一杯だった。

自身の知るヴィヴィオは、甘えん坊で泣き虫の可愛い子供。その子が自分自身を兵器などと呼んだ。

それを呼ばせる原因を作った者の正体に気が付いたなのはは、自身の手を呆然と顔の前に掲げて恐怖に震え出す。

「・・・・・私のせい・・・・・私がスカリエッティの力を甘く見たから・・・・・ヴィヴィオが心に傷を負った・・・・・ウゥ、ウワァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！」

全ての事実に行き着いたなのはは、顔を床に伏せて大声で泣き始めた。

全ては自分の、機動六課のスカリエッティに対する戦力の見通し甘さが生み出した状況だった。

デュークモンの言うとおり、スカリエッティの戦力の見通しの甘ささえ無ければ、ヴィヴィオは連れ去られず、最悪の事態に発展する事も無かった。しかし、現実には本局上層部の願っていた最悪の状態に起きている。全ては管理局の望んだ事。

管理局は人々の平和よりも自分達の欲望の為に、今回の事件が起きる様な状態を作り上げたのだ。

その様になのはが絶望の事実に打ちのめされている間に、デュークモンはリンディから届いた念話に内心で僅かに目を細める。

（プランΩの実行？・・・ということは、やはり管理局はあの行動を実行すると言う事か？）

（ええ、傍受した通信で確定したわ）

（そうか。成らば、私達もそれに合わせて動く）

（任せてね、リンディお姉ちゃん！！）

（クス、ええ、お願いね）

リンディはそう告げると共に念話を切り、デュークモンもそれを確認すると、グラムを泣き続けるなのはの俄然に突きつける。

ーーースチャッ！！

「絶望するのは勝手だが、まだ話は終わっていないぞ」

「ッ！！」

デュークモンの言葉になのはは泣き腫らした目を驚愕で見開きながら、デュークモンを見つめた。

話は終わってはいない。つまり、まだ在るのだ。ミッドを襲ったこの事件の裏に隠された秘密がまだ存在している。

その事が分かったなのはは顔色を蒼白に変えるが、デュークモンは一切の容赦せずに更なる絶望を語り出す。

「貴様は疑問には思わんか？このゆりかごが隠されていた世界に？」

「・・・・ゆりかごが・・・・・・隠されていた世界？・・・・・・ッ！！！」

言葉の意味に気がついたなのはは体に電流が走った様な衝撃を感じた。
ゆりかごが隠されていた世界の名はミッドチルダ。
次元世界の中心世界で在り、管理局の発祥の地。
その世界にゆりかごは眠っていた。普通ならば絶対に在りえない。
何故ならば管理局は古代や滅んだ世界の遺物ー通称ロストロギアの回収を絶対としている組織。その上、ミッドチルダには管理局以外に次元世界にかなりの影響力を持っていて、聖王を崇め称えている宗教組織ー聖王教会が存在している。しかも聖王教会は聖王の遺物に関する物や、古代ベルカに関係しているロストロギアを管理している。
その両組織が存在している世界に、ゆりかごはスカリエッティが動かす時まで誰にも発見されずにいた。絶対に在りえない事だ。どちらかの組織が隠して置かない限りは。
そして聖王教会は在りえない。幾ら次元世界に多大な影響力を持つ聖王教会でも、ゆりかごほどの巨大な遺物を、管理局の発祥の地であるミッドに隠して置く事など不可能。
ならば、隠した組織は一つしか在りえない。

「・・・・・時空・・・・・・管理局・・・・・そんな」

「事実だ。そして最強の質量兵器と呼べるゆりかごを破壊せずに置いた理由は一つしか在るまい？」

「ア、ア、ア、ア、アァァァァァァァァーーーーー！！！！」

なのはは絶望の声を上げながらも気が付いてしまった。
管理局がゆりかごを隠した理由など一つしかない。
“管理局はゆりかごを使うつもりだった”。自分達で質量兵器の廃絶など叫んでいながら、管理局は質量兵器を使うつもりだったの

だ。
そしてゆりかごの起動には“聖王の血を引く者”が必要。つまり、ヴィヴィオを生み出したのはスカリエッティではない。
ヴィヴィオを真に生み出した全ての元凶と呼べる組織。その名は時空管理局。

「ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！！！」

それは自身の信じていたものが完全に砕けた者だけが上げられる叫びだった。
管理局は自分達で違法研究を否定し、質量兵器も否定していた。
それなのに蓋を開けて見れば、その全てを行っていた。管理局が言っていた事は全て偽りだった。
一部の上層部だけかも知れない。だが、自分達で否定した行いを裏では平然と行っていた時点で、管理局の言葉は偽りだったとしか呼べないだろう。

「自分達で否定しながら、裏では平然と行う。それが今の管理局だ。一般は分からんが、少なくとも上層部、しかも司法組織のトップで在った最高評議会が自ら裏で推進していた。人手不足の解消などと言う理由を使い、裏では違法を繰り返す。奴らが使う言い訳はこうだ。『管理局こそが正義』・・・・・ふざけるな。子供に自らを兵器などと呼ばせる組織の何処が正義なのだ！？」

「ウゥ、ウゥゥゥ、ウワアアアアアアアーーーー！！！！！」

もはやなのはにはデュークモンの言葉に答える事は出来ず、床に顔を付けながら、手を何度も床にぶつけていた。
デュークモンの言葉は最もだと思ったのだ。確かに管理局は多く

の人々や世界を救っていた。
だが、自分達で決めたルールさえも護らずに、平然と違法を繰り返し、挙句に自分達の権力の為に罪の無い人々を巻き込む様な最悪のシナリオを作り出し、それを解決して寄り自分達の権力を上げるなど、もはや管理局は犯罪組織と呼んで良いほどに腐敗していた。
その事が完全に分かってしまったなのはは更に涙を流し始め、それを見ていたデュークモンはプランΩを実行し始める。

「私達はその様子を見ていた。私達の力は強大だ。その力を管理局に渡せば、管理局の腐敗は更に増大し、取り返しのつかない事態に成ると思い、私達は表に出ず見守り続けていた・・・・・だが、地上の在る者達は、我らの存在に気が付いてしまった」

「・・・・・エッ？」

言葉の意味に気が付いたなのはは顔を床に付けながらも、呆然とした声を上げた。
その様子にデュークモンは内心で計画通りと融合しているヴィヴィオと共に内心で笑みを浮かべながら、プランΩ通りに話を続ける。

「あの者達が我らの存在に気が付いたのは、本当に偶然だった。そしてその者達は私達とコンタクトを取り、地上の人々の為に力を貸してくれと私達に頼んで来た。だが、その者達も管理局員。むやみやたらに信用する事は出来なかった。しかし、今回の事件の時にその者達は私達に土下座までして頼んだのだ。『我々管理局の縄張り争いのせいで、ミッドの罪無き人々が苦しんでいる！！我々はどうなっても構わない！その代わりにミッドの人々を護ってくれ』とな」

「・・・・それじゃあ・・・・・貴方達が現れたのは・・・・・その局員達の願いの為に？」

「違うな。私達は管理局の為になど動くつもりは無い。動いたのは罪の無い人々と、悲しみの声を上げた少女の為だ。事件の元凶である管理局など知った事ではない。奴らの願いは事の序に過ぎん」

デュークモンはそう告げると共に、右手のグラムを構え出し、なのはの体に狙いを付ける。

「さて、話は終わりだ。貴様も十分過ぎるほどに自身の罪の重さを知っただろう。引導をくれてやる」

「・・・・・・」

デュークモンの言葉に対して、なのははもはや生気の失せた目を浮かべて、グラムを見つめるだけだった。

もはやなのはにデュークモンと戦う気力は無い。全ての元凶は自身の所属している組織の上に、ヴィヴィオの心に傷を負わせたのは自分の責任。

母と慕ってくれたヴィヴィオと向き合わず、スカリエッティの戦力の高さを甘く見た為にヴィヴィオの心に傷が生まれてしまった。

（ハハハハハハッ・・・・・何だ・・・・・ヴィヴィオの事を大切に思っていながら・・・・・仕事だとか理由を付けて・・・・・しっかりとヴィヴィオと向き合わなかった・・・・・そのせいで・・・・こんな事に・・・・・・・・ゴメンね、ヴィヴィオ・・・・私は最低な人間だね）

自身の行ったヴィヴィオへの行動が全て裏目だった。

その事が完全に分かってしまったなのはは、もはや戦う気も起きず、デュークモンの一撃を受けるつもりで目を閉じる。

「最後は潔いな。案ずるな、ヴィヴィオは私達が護ろう。貴様はあの世に行くんだな！！」

ーーーブン！！

デュークモンは叫ぶと共にグラムをなのはに向かって突き出し、なのはは深く目を閉じながら最後の瞬間を覚悟するが。

「・・・・・めて」

ーーーピタッ！！

聞こえて来た小さな呟きが耳に届いたデュークモンは、グラムをなのはの体に当たる寸前で止め、声の主である結界に包まれたヴィヴィオに目を向ける。

「・・・その人を傷つけないで・・・・・その人は・・・・・・・・その人は！！ヴィヴィオのママだ！！」

ーーーバリィィィィン！！

「まさか！？目覚めるのか！？」

ヴィヴィオが叫ぶと共に一瞬の内にデュークモンが張った結界は、ヴィヴィオの体から溢れ出る様に発生した虹色の魔力風に破壊された。

それが意味する事に気が付いたデュークモンは、目を見開きながら虹色の魔力風の中心に目を向けると、その人物は現れた。

その人物は黒い黒衣を着て、金髪の髪に、緑と赤の瞳を持った女

性。
デュークモンと共にゆりかごのもう一人の主。
“聖王ヴィヴィオ”がその姿をデュークモンの俄然にその姿を現した。
「もう・・・・・・なのはママを傷つけさせない！！」
ーーービュン！！
「ムッ！！」
自身の目の前に一瞬の内で移動したヴィヴィオの姿に、デュークモンは僅かにうろたえた。
ヴィヴィオはその様子に構わず、虹色の魔力光を纏った右手をデュークモンに突き出す。
「ハアッ！！」
ーーードゴオン！！
「クッ！！」
イージスを使ってヴィヴィオの拳を防御するが、攻撃は放たず、次々とヴィヴィオが繰り出して来る拳や魔法を防御する事に専念する。
デュークモンには異世界とは言え、ヴィヴィオを自身の手で傷付ける事など出来ない。
その事が本能的に分かっているヴィヴィオは、自分がデュークモンを倒すと言う様に次々と拳や魔法を繰り出し、デュークモンの動きを抑えて行く。

「・・・・・如何して・・・・・ヴィヴィオが私を？」

目の前で起きているデュークモンとヴィヴィオの戦いに、なのは
は信じられないと言うように戦いを見つめる。
ヴィヴィオを傷つけたのは自身の甘さのせいだと、なのははもう
十分過ぎるほどに分かっているし、話を聞いていたヴィヴィオを分
かっている筈だ。
それなのにヴィヴィオは自分を護る為に戦っている。なのはには
何故ヴィヴィオが戦うのか全く分からなかった。

「・・・・・全部私のせいなのに・・・・・・ヴィヴィオの心に傷
が出来たのは・・・・私のせいなんだよ・・・・・それに・・・・
ヴィヴィオを兵器にしようとしたのは管理局・・・・それなのに如
何して？」

（あの子に取っては、それでも貴女が母親なんだよ）

「ッ！！」

聞き覚えのあり過ぎる声の念話に、なのはは辺りを見回す。
しかし、念話の主の姿は全く発見出来ず、疑問を覚えていると、
再び念話が届く。

（如何するの？そのまま其処で悲しむのかな？娘が貴女を護る為に
戦っているのに？）

「・・・・・私に、ヴィヴィオを娘なんて呼ぶ資格なんて無いよ・・
・・・だってヴィヴィオを不幸にしたのは、時空管理局なんだよ・・
・・・それにあの子の心に傷を負わせたのは私自身・・・・今更

母親なんて言えないよ！！」

（・・・・・ねえ、さっきあの子は貴女の事を何て呼んだの？）

「ッ！！」

念話の言葉になのははデュークモンと戦っているヴィヴィオを見つめた。

ヴィヴィオはなのはの事を確かにママと呼んだ。それが意味する事に気が付き、なのはは大粒の涙を流しながら、近くに落ちていたレイジングハートを拾い上げる。

ーーーカチャッ！

「ゴメンね、ヴィヴィオ。私は馬鹿だよ。こんなにもヴィヴィオの事を大切に思っていながら、ヴィヴィオの気持ちに気がついて上げられなかった」

なのはは言葉と共に立ち上がり、ヴィヴィオを戦っているデュークモンに向けてレイジングハートを構え出す。

「貴方の言うとおり、私は、私達は管理局は正義なんかじゃない。最低な組織だと私も思う。ブラスターシステム。リミット3」

なのはが最終段階のブラスターシステムを起動させると共に、なのはの周りに四つのレイジングハートの先端を模ったビット－ブラスタービットが姿を現し、デュークモンの周りに移動を始める。

「そして私も最低な人間。ヴィヴィオの思いを踏み躙っていた。資格なんて多分無い。それでもそれでも！！！」

なのはが叫ぶと共に、なのはの前に膨大な量の魔力が集中して行き巨大な魔力の球体が作られていく。
更にデュークモンの周りに存在していたブラスタービットにも魔力が集中して行き、なのはの目の前の魔力球と同様に魔力球が生まれて行く。

「ッ！！これは！？」

自身の周りに生み出されて四つの魔力球に、デュークモンは驚いた声を上げて、四つの魔力球となのはの姿を視界に映すと、なのはは自身の体を襲う激痛に苦しみながらも叫ぶ。

「私はヴィヴィオのママに成りたい！！全力全開！！スターライトブレイカーーーー！！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

叫ぶと共に放たれた五つの強力無比のスターライトブレイカーは、デュークモンへと直撃し、巨大な爆発が起きた。
だが、デュークモンは四方から放たれた四つのスターライトブレイカーとなのはの放ったスターライトブレイカーを受けても顕在だった。

「グウッ！！その程度では私の『聖王の鎧』は貫けんぞ！！」

「そ、そんな！？」

五つのスターライトブレイカーを受けても、尚もデュークモンの体の周りに発生している虹色の魔力光を貫く事は出来ず、なのはは

悲痛の叫びを上げて、スターライトブレイカーの中を歩き始めたデュークモンの姿を見つめる。
自身の最強の砲撃を、しかも五つも同時に受けて尚も歩みを止めないデュークモンの姿に、なのはが諦め掛けた瞬間。

「全力全開！！！」

「なっ！？」

「えっ！？」

突如として聞こえて来た声とそれと共に発生した膨大な魔力に気が付いたデュークモンとなのはは、驚いた声を上げて声の聞こえて来た方に目を向ける。
其処には自身の前に、虹色の魔力光を放つ巨大な魔力球を生み出しているヴィヴィオの姿が存在していた。

「スターライトブレイカーーーー！！！！」

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

ヴィヴィオは叫ぶと共に、虹色の魔力球に拳をぶつけ、なのはの最強魔法ー虹色に輝くスターライトブレイカーをなのはの桜色のスターライトブレイカーを受けているデュークモンに向かって放った。
迫り来る六つ目の虹色に輝くスターライトブレイカーを見つめながら、デュークモンは呟く。

「・・・・・合格だ」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！

！！！！

デュークモンが呟くと共に、虹色のスターライトブレイカーもデュークモンへと直撃し、巨大な爆発が玉座の中に起きた。
それと共に砲撃は消えてなのはは床に膝をつき、荒い息を吐き始める。

「ハア、ハア、ハア、ハア、これなら終わったよね？」

爆発が起きて爆煙に包まれる場所を見つめながら、なのはが呟いていると、ヴィヴィオがなのはに近寄って来る。

「・・・・・なのは・・・・・ママ」

「・・・・・ゴメンね、ヴィヴィオ。私にはママって呼ばれる資格は無いよ」

「・・・・」

なのはの言葉にヴィヴィオは顔を俯かせ、目の端に涙を浮かべるが、涙が流れる前になのははヴィヴィオを抱き締める。

ーーーガバッ！

「それでも私はヴィヴィオのママに成りたい・・・・・良いかなヴィヴィオ？」

「ッ！！うん！ママッ！ママッ！」

「ありがとう、ヴィヴィオ」

なのはとヴィヴィオは互いに抱き締め合いながら嬉し涙を流し続け、自分達の心が漸く繋がったのを互いに実感する。
そして少し経ってから脱出しようと立ち上がり、最後にデュークモンが居た場所に目を向けようとした瞬間に、煙の中から声が聞こえて来る。

「・・・・・・流石に今のは『聖王の鎧』を撃ち破ったぞ」

『ッ！！』

煙の中から響いた声に、なのはとヴィヴィオが顔を向けて見ると、煙を吹き飛ばす様にグラムが振るわれ、煙が一瞬の内に消滅する。

ーーーブオン！！

「そっ！そんな！無傷だ何て！？」

煙の中から姿を現したデュークモンの体に傷一つ存在していなかった。
自身の最強の砲撃魔法ースターライトブレイカーを、しかもヴィヴィオが放ったのと合わせれば、合計六つもその身に喰らいながらも、傷一つ付かなかったデュークモンの姿に、なのはとヴィヴィオは恐怖に震える。
しかし、、デュークモンはなのはの言葉を否定するように首を横に振るう。

「いや違うぞ。確かに貴様らの一撃は私の『聖王の鎧』を撃ち破り、私にダメージを与えた。この身に『聖王の鎧』が無ければ、私のイージスや鎧に傷を負わせて居ただろう」

そうデュークモンは告げるとグラムを構え出し、なのははヴィヴィオを護る様に立つが、デュークモンは一切構わずにグラムを突き出す。

「ロイヤルセーバーーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

『えっ！？』

デュークモンはなのはとヴィヴィオにではなく、自身の横に在った壁に向かってロイヤルセイバーを放ち、ゆりかごに巨大な穴を開け、外への出口を作り出した。

その様子になのはとヴィヴィオを疑問の表情を浮かべていると、今度こそデュークモンはなのはとヴィヴィオに顔を向けながら、グラムを穴の先に見える蒼い空を向けて突き出す。

「もはやお前達と戦う理由は存在しない。私にお前達は絆を見せた。その絆が在れば如何なる事が在ろうと超えて行けるだろう」

デュークモンは言葉と共にグラムを顔の前に立て、宣誓を行い始める。

「高町なのは！此処に誓え！例え世界の全てを、仲間や親友と戦う事に成ろうと、ヴィヴィオを守り抜くと！」

「・・・・・・誓う！例え世界や皆が敵に成っても絶対にヴィヴィオを護ります！！」

なのはは叫ぶと共にレイジングハートを掲げ、デュークモンとの誓いを宣言した。
例えこの世の全てを敵にしても、ヴィヴィオは必ず護る。それが自分やヴィヴィオの為に戦ってくれたデュークモンへの礼だと思ったのだ。なのはは既にデュークモンが何故自分と戦ったのか分かっていた。
これから先、必ず欲望に塗れた者達がヴィヴィオを狙って来る。それがもしかしたら、自分の親友達や所属する管理局かもしれない。だからこそ、デュークモンは確かめたのだ。
なのはが本当に迷わずヴィヴィオを護れるのかどうかを。

「此処に聖王の騎士たるデュークモンが認める！！聖王の血を引くヴィヴィオを高町なのはに預けると！！もしこの誓いを破る時、或いは破ろうとする者達が現れた時は、私は再び現れ、全てを終わらせるであろう！！その事を決して忘れるな！！」

「はいっ！！」

デュークモンの宣言に答えるようになのはは叫ぶと、ヴィヴィオに支えられながらデュークモンが開けた穴へと向かい出し、外へと脱出して行った。
なのはとヴィヴィオの姿が見えなくなるまでその様子を見守っていたデュークモンは、完全になのはとヴィヴィオの姿が見えなくなると、背後を振り返り、何時の間に立っていたガブモンと異世界のなのはに顔を向ける。

「流石は異世界とは言えお前自身だな？」

「そうでもないよ。多分、私が少し手を貸さなかったら、砕けたままだっただろうからね。全然駄目だよ」

「ちょっと厳しくないかなあ？」

そろそろ認めて上げたらと言う気持ちでガブモンがなのはにそう質問すると、なのはは見るだけで恐怖を感じる様な笑みを浮かべて答え出す。

「別に構わないと思うよ。だって、自業自得だったんだしね。自分の甘さのせいでこんな事態を引き起こしたんだもの。もっと反省すべきだよ。プランΩが終わって会いに行ったら、少しお仕置きにしないとね」

「むう～」

「あ～」

（・・・・・なのはお姉ちゃん怖い）

全身から黒いオーラを放ちながら、容赦なく異世界とは言え自分自身をこけ落とす様な宣言を放つなのはに、デュークモンとガブモン、そしてデュークモンと融合しているヴィヴィオはそれぞれ恐ろしいと言う思いを抱いた。

余程この世界の自分自身の行動に腹が立っているらしい。異世界と言え、ヴィヴィオを自身の不注意で危険な目に遭わせた行動に、なのはは腹が立ってしょうがないのだ。他人を護る事に命を掛けるのは確かに尊いものだが、この世界の自分自身はブラックにボコボコにされる前の自分だとなのはには分かっていた。

（今回の事で変われれば良いけど。変わらなければ、何時か取り返しの付かない事を行っていただろうから。それがどんな結果でも、

犠牲なんて見ようとせずに、ただ闇雲に自分の行動こそが正しいと思って・・・そんな訳は無い。人にはそれぞれの思いが在る。自分だけが絶対に正しいなんて事は在りえない。その事が分かってくれている事を願うよ）

そうなのはは、この世界の自分とヴィヴィオが出て行った穴を見つめながら呟くと、ディーアークを取り出し、デュークモンとガブモンに顔を向ける。

「・・・・・ゆりかごの中に居た戦闘機人二人の運びも終わったし、始めようか。プランΩを」

「ああ」

「うん！」

（頑張ろう！！）

なのはの言葉に答える様に、デュークモン、ガブモン、ヴィヴィオはそれぞれ頷くと、プランΩの本格的な実行をし始める。

惨劇が始まる。真の愚か者どもが引き金を引く、後の各管理世界の歴史に刻まれる残酷で無慈悲な惨劇が。

“王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん”

ゆりかごから脱出したなのはとヴィヴィオは互いに支え合うように飛び続け、ゆりかごから急ぎ離れようとしていた。
二人とも分かっているのだ。デュークモンがゆりかごの中に残ったのは、ゆりかごを完全に破壊する為なのだと。それを示す様にゆりかごの周りを音速で飛び続けていたグラニも、その動きを落とし、自身の主であるデュークモンが現れるのを待つかのように、ただゆりかごの周りをゆっくりと飛び続けている。
そして二人が在る程度ゆりかごから離れると、二人の前に顔を絶望に染めたはやてとヴィータに、ヘリに乗ったスバル、ティアナ、エリオ、キャロがその姿をなのはとヴィヴィオの前に現した。
その様子を見たなのはは、自分とデュークモンの会話が聞かれていた事に気が付き、ヘリの中に乗り込みながらゆりかごに顔を向ける。

「・・・・・なのはちゃん・・・・・・ゆりかごでのあの生物との会話は？」

「多分事実だよ。全部本局上層部の思惑だった・・・・・・私達は取り返しの付かない事をしていたんだよはやてちゃん」

『・・・・・・』

なのはの答えに対してその場にいる誰もが絶望に染まりながら言葉を失った。
スカリエッティがこの事件の犯人ではなかった。確かにスカリエッティは実行者では在るが、事件そのものを引き起こす原因を作り上げたのは間違いなく時空管理局と言う組織そのもので在り、自分達機動六課でも在ると誰もが分かってしまった。
人々の為。平和の為と言いながら、自分達は最終的に多くの人々の幸せを奪ってしまった。

理想ばかり見て、現実を見ていなかった。その結果がこれだ。
罪無きクラナガン人々を危険な目にあわせ、多大な犠牲が生まれてしまった。
彼らが現れなければ、もっとより多くの犠牲が出ていた事は間違いないとなのはは確信していた。

「・・・・・私達は理想にばかり目を向けて、現実が分かっていなかったんだよ。あの人達は現実を確りと見て、それでもクラナガンの人達を護った。あの人達は正義なんて免罪符は絶対に使わない。自分達の信念の為に動くんだよ。例え世界が敵に成っても、あの人達は信念に合わなければ、世界とさえも戦うだろうね」

「ッ！！」

なのはの呟いた言葉に漸くはやては自身が忘れていた事を思い出し、ハッとしたようにゆりかごを見つめる。

“されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の真の思いのままに、動く者達なり”

（そうや！漸く思い出しだ！予言の最後の文章には、確かにあの人らが法の味方や無いって予言には書かれておった！だけど如何してそれが予言に・・・・・・ッ！！まさか！？）

はやては最悪な可能性に気が付いてしまった。もしあの新たに現れた予言が、続きではなく、中心に埋め込まれる文だったとしたら、全ての謎が一瞬で解ける。

“旧い結晶と無限の欲望が交わる地。
死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち。
天に死せる王の嘆きが響き渡る時、交わる事無き、異界の者達は怒り狂い、無限の欲望の野望は砕け散る。
不屈の心を胸に宿す蒼き鉄の狼、星を打ち砕く光を解き放ち、死者達を沈黙に伏させる。
絆の果てに現し、赤き鎧にその身を包み込んだ聖なる騎士、全てを撃ち抜き、人々を脅威から護らん。
王をその身に宿す聖騎士、赤き鎧船にその身を乗せ、天に浮かぶ翼の内より、死せる王を救わん。
世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達と共に、深き闇を打ち砕く。
されど、彼の者達は法の味方に在らず、彼の者達は自身の胸に宿る真の思いのままに、動く者達なり。
それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる”

「ア、ア、ア、ア、アアアアアアアアーーーーー！！！！！」

「如何したはやて！？」

『はやてちゃん！？』

「主！？」

『部隊長！？』

「はやてお姉ちゃん！？」

突如として恐怖の声を上げ始めたはやてに、ヴィータ、なのは、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてヴィヴィオが心配げにはやてに向かって叫ぶ。

しかし、はやてはもはや皆の心配に満ちた叫びなど気が付かずに、上空に浮かぶゆりかごを見つめ体を恐怖に震わせながら呟く。

「・・・・・・予言が・・・・・予言が・・・・・成就される」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

『ッ！！！』

はやてがポツリと言葉を呟いた瞬間に、上空に浮かんでいたゆりかごの横から突如として爆音が響き、なのは達が慌てて爆音が響いた場所を見て見ると、煙の中から再びその身を巨大化させたデュークモンがグラニの背に乗りながら現れる。

デュークモンは自身に攻撃を加えた管理局の最新鋭艦ーＸＶ級大型次元航行船クラウディアを主力とした次元航行艦隊を睨み付ける。

「・・・・如何言うつもりだ？私達は不甲斐ない貴様らの変わりに動いたと言うのに、行き成り攻撃して来るとは？何か私がしたか？」

『貴君らの行動はミッドチルダに著しく混乱を招いた』

『クロノ君！？』

クラウディアから聞こえて来た声に、はやてとなのはは信じられないと言う声を上げた。

デュークモン達の行動がミッドチルダに混乱を招いたなど在りえない。彼らの行動があったからこそ、大勢の人々を救う結果に成ったと言うのに、クロノはデュークモン達の行動こそが混乱を招いたと告げたのだ。

ミッドに映されたモニターの事を言ってるとしたら分かるが、そ

れをデュークモン達が映したと言う証拠は無い。それなのにクロノは一方的にデュークモン達のせいだと言う様に宣言し続ける。

『その巨大な力で人々を惑わし！管理局がこの事件の元凶だと言う証拠も無い理由を作り上げ、人々を混乱の渦に巻き込んだ貴君らの行動は、次元犯罪者に登録されるほどの罪だと本局は判断した！速やかに武装を放棄し、投降するのならば、情状酌量の余地は在るぞ』

その宣言を聞いていたなのは達や、クラナガンの大勢の人々は本局や上空に浮かぶ艦隊に怒りを覚えた。

クラナガンの人々は、自分達を救ってくれた恩人で在るデュークモン達を犯罪者にされた事に、なのは達ーこの事件の裏に隠されていた真実を知った者達は、デュークモン達を犯罪者にして全てを闇に葬ろうとしている本局の者達の行動に怒りを覚えた。

この瞬間に、ゆりかご内部でのデュークモンが告げた事実が全て本当だったと多くの者達が気が付き、全員が憎しみを抱き始める。

「ゆりかごでの会話は聞いていたようだな？成らば、私達に地上の局員が頭を下げた時の言葉は嘘だったのか？」

『その様な事実は…』

『いやッ！！全て事実だ！！！』

『ッ！！！！！』

クロノの言葉に覆い被さるように叫ばれた大きな声に、誰もが慌てて辺りを見回すと、上空に再び巨大なモニターが映り、映像に映し出された厳つい顔をした壮年の局員ー地上本部のトップーレジアス・ゲイズが怒りの表情を浮かべながら叫ぶ。

『彼の言っている事は全て真実だ！！ワシは確かに彼らに頭を下げて救援を頼んだ！！そしてゆりかごの内部の映像を映したのは彼らではない！！スカリエッティのセットしていた演出用のシステムの誤作動だとスカリエッティのアジトを占拠した私が送った地上局員達から報告が届いている！！！！』

『なっ！？その様な報告は…』

『貴様ら本局は再三に渡って私が送った通信を無視した上に！本局常勤していた空戦魔導師を援軍として送らなかったではないか！！！地上の人々が危機に合っていると言うのに！！だから私は彼らに援軍を頼んだのだ！！！以前から私は彼らの協力を得られないかと一人の地上局員を秘密裏に彼らの世界に送っていたのだ！！』

クロノの言葉に被さる様にレジアスは大声で叫ぶと、レジアスの横に地上本部の局員を服を着た女性が姿を現し、スバルは驚愕しながら叫ぶ。

「お、お母さん！！！」

『地上局員ーゼスト隊に所属していたクイント・ナカジマです。レジアス中将の命令の下、急ぎ彼らを連れて私はミッドに帰って来ました。彼らの世界は技術力高く、また、あのように巨大な力を持つ者達が多数存在しています。その世界から別世界を調べていた調査者と偶然私達地上本部はコンタクトを取り、彼らの協力を得られないかと長年交渉を続けていたのです。地上の戦力不足は深刻なレベルでした。日夜多発する犯罪、その犯罪に対して本局は何もしてくれない所か“自分達の方が大きな事件を扱っているのだから当然だと言う様に地上に戦力を吸い上げて行く現状”。その現状に心の底

から憂いていたレジアス中将は彼らに頼み続けていたのです！！』

顔を伏せると共に目を押さえながら涙を流して叫んだクイントの言葉に、多くのミッドチルダの人々は地上本部は自分達を護ろうとしていた事に気が付き、全ての元凶が本局に在ったと思い始める。

本局が地上の戦力を吸い上げていたから、地上は犯罪に追われていた。しかも、今回の事件でも本局、正確に言えば本局上層部の権力欲こそが全ての原因。それをデュークモンへの攻撃でハッキリと認識していた人々は、本局と上層部が事件の原因だと考え始める。

『そしてその思いが彼らを動かしました！！彼らは！デュークモン！スレイプモン！メタルガルルモンXは一部の欲望の為に人々が危険に晒される現状に怒りを覚え、ミッドの人々を護る為に動いてくれたのです！！』

『ワアアアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！！！！！』

クイントの叫びに答える様にクラナガンの人々は歓喜の声を上げ、ゆりかごの前に浮かぶデュークモンを、廃棄都市のビルの上に立つスレイプモンを、そして何時の間にかゆりかごの上に立っていたメタルガルルモンXを見つめる。

デュークモン達が完全に味方だと認識したのだ。彼らは自分達を護る為に動いてくれた。

『デュークモン！！デュークモン！！！！デュークモン！！！！』

『スレイプモン！！スレイプモン！！！！スレイプモン！！！！』

『メタルガルルモンX！！！メタルガルルモンX！！！！メタルガルルモンX！！！！』

ミッドに在る各都市に住む人々は喜びの声を上げて、映像に映るデュークモン達を見つめると、クイントは内心で計画通りだと笑みを浮かべ、本局を徹底的に追い落とす為に更に言葉を叫ぶ。

『そして彼らが今まで動けなかったのは本局のせいなのです！！本局には自分達管理局こそが絶対だと叫び！魔法主義者の人間が大勢居ます！！彼らの力は魔法では無い！その為に彼らの存在が明かるみに出れば、本局は彼らの世界を無理やり管理するか、滅ぼす可能性が在りました！！その可能性が在った上に！最高評議会の正体を知ってしまった彼らは管理局を信じる事が出来ませんでした！！』

「最高評議会の正体やて！？」

クイントの叫びにはやてが疑問の叫びを上げ、ゆりかごの周りにいる局員達やなのは達も疑問の表情を浮かべた瞬間に、再びレジアスが前に出て叫ぶ。

『民衆の皆さん。管理局が創設されて１５０年以上経っています。その様な期間を生きられる人間など存在していません。ですが、私は最高評議会が代替わりしたと言う話など全く聞いた事が在りません。皆さんは如何ですか？』

レジアスの質問に対して誰もが答える事は出来なかった。

確かに最高評議会が代替わりしたなどと言う話は全く聞いた事が無い。

その事が分かった人々や局員達が疑問を思い浮かべ始めるのを確認したレジアスは叫ぶ。

『これこそが最高評議会の正体だ！！』

ーーーブウン！！

『ッ！！！』

モニターに映し出された映像に人々や一般局員は目を見開く。
何故ならば、モニターには人の姿など存在せず、カプセルのようなものに浮かんだ三つの人間の“脳髄”しか存在していなかった。

『これこそが管理局最高評議会の正体です！！彼らは自分達こそが世界の指導者だと叫び！多くの違法を繰り返していたのです！！そしてそれは本局の幹部達も同様です！！』

ーーーブオン！！

『ッ！！！』

次に映し出されたのは何処かの管理局の研究所であり、其処で生み出されてた思われる子供が苦痛の叫びを上げ続けていた。
その様子を管理局の制服を着た幹部が無表情に見つめ、研究員と思われる者から渡された資料を読み上げ告げる。

『失敗作だ。魔力も持たずに生まれるとは、焼却処分にしろ』

『ハッ！！』

『ッ！！！』

信じられないと言うように多くの人々や一般の局員は、命じた幹部とそれを平然と実行しようとしている研究員の姿を見つめる。

目の前で起こっているのは先ず間違いなく違法の研究だろう。その研究を管理局は否定しながら平然と行っていた。デュークモンがゆりかご内部で告げたのは、全てが真実だったと此処に完全に証明されたのだ。
最後まで映像を映し出す事無く、レジアスは映像を消すと、本局の艦隊に質問する。

『これで彼らの証言が本当だと示されたな。貴君らは速やかに本局内部の違法を行った幹部と言う名の犯罪者を捕まえたまえ！それこそが管理局の真の在るべき姿だ！！』

そう叫びレジアスは艦隊の反応を待つ。
艦隊内部に居る局員達は大慌てだった。自分達の組織が裏で行っていた上に、その推進者が最高評議会であり、自分達の上司である本局上層部達だった。
しかも、今の状況は正に最悪だろう。何故ならば、自分達はミッドを救った恩人であるデュークモンに攻撃を行ってしまった。もはや本局上層部を捕まえても何らかの処分が確実に下ると考えて間違いない。
本局上層部達が描いていた思惑が一瞬の内で崩壊し、地上が完全に有利な状況に成ってしまったのだ。
確かに本局上層部の描いた思惑は完璧と呼ぶに相応しい物だった。しかし、デュークモン達の登場で完全にシナリオは崩壊し、本局は最悪の状態に成ってしまった。
そしてその様な状態に成れば、上層部と共に裏で甘い蜜を吸っていた局員も状況が悪くなる。全ての悪事が明らかに成ったのだから、徹底的な調査を各管理世界は命じるだろう。
もはや自分達には未来が無い事を分かりながら、管理局の艦隊はクロノが乗るクラウディアを先頭に幾つかの艦艇は本局に戻る為に船首を本局の方に向かわせ始めるが、上層部の甘い蜜を味わってい

た局員達が乗る八隻の艦艇は、そのままその場に佇み続け、デュークモン達に憎しみに視線を向ける。
彼らは既にこの後に起きる調査で自分達が処断されるであろう事を分かっていた。高ランクの魔導師だからと言う理由は罪が免除されるなどと言う事は絶対に在りえない。
そんな事をすれば、民衆は大暴動を起こし、全次元世界の規模の戦争に発展する。
戦争を起こさない為に、少数を犠牲にするのは当然の行いだ。つまり、彼らの未来は先ほどの放送で完全に潰えたのだ。

『・・・・・・撃てエェェェェェェーーーーーー!!!!』

ーーードグオン!ドグオン!!ドグオン!!

「ムッ!!」

八隻の艦艇の中で、唯一アルカンシェルを装備した艦の提督が叫んだ瞬間に、それぞれの艦艇から艦砲がデュークモンに向かって放たれ、デュークモンはイージスを掲げながら防御した。

「血迷ったのか貴様ら?今ならば多少は罪が軽くなると思うが?」

艦砲が収まると共に、デュークモンは自身の周りに在った煙を振り払いながら八隻の艦隊に質問するが、構わず艦隊は再び艦砲をデュークモンに向かって放ち続け、迫り来るエネルギー砲をデュークモンは防御しながら呟く。

「やれやれ、何処までも愚かな奴らだ!!もはや一切の手加減はせんぞ!!ファイナル・エリシオン!!!」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオン！！！

デュークモンのイージスから放たれたファイナル・エリシオンは、向かって来ていた艦砲を全て一瞬の内で消滅させ、八隻の艦隊の隊列を乱した。

それと共にデュークモンはグラニに乗って、メタルガルルモンXは自身の飛行能力を使って、スレイプモンも同様に艦隊に向かい出し、本格的な惨劇が始まった。

「ロイヤルセーバーーーー！！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオン！！

デュークモンが放った強力な突き一ロイヤルセイバーに寄って、一隻の艦艇は大穴をその船体に開けながら爆発した。

それを見ていた無事な他の艦艇内部に居る局員達は慌て始める。

一撃。しかもただの突きとしか思えない一撃で、管理局の誇る艦艇が爆散した。

彼らはデュークモン達の力を甘く見ていたのだろう。如何に強力な力を持っていたとしても、八隻もの管理局の艦艇には勝てないと。そして人間を殺すことは無いと彼らは何処かで思っていた。

それこそが大きな間違いだ。彼らは自分達の信念を妨げるものには容赦などしない。

その事を彼らは身を持って知る事に成った。

「オーディンズブレスッ！！！」

ーーーガチガチガチガチッ！！

ーーーバリィィィィィィィン！！！

スレイプモンの発生させた局地的なブリザード―オーディンズブレスに寄って三隻の艦艇は一瞬の内に凍り付つき砕け散った。

「レイジングハート、セラフィービット展開」

ーーーガコン！！

「嘘ッ！？何でレイジングハートが！？」

メタルガルルモンXの握っているレイジングハートの姿に、離れていた所で戦いを見ていたなのはは驚愕の声を上げ、他の六課の者達も信じられないと言うようにメタルガルルモンXの姿を見つめる。

レイジングハートはなのはのデバイスである上に、今もなのはの手に握られている。それなのにメタルガルルモンXは使用している。

長年の相棒だったなのはには分かる。メタルガルルモンXの握るレイジングハートは間違いなく、自身のレイジングハートと同一の物だと。

その事になのはが疑問と困惑に包まれていると、再びゆりかご内部で聞こえた念話がなのはに届く。

（確か貴女が撃てるスターライトブレイカーは五発だけだったよね？なら、私達の方が上だよ。だって私達は七発だもの）

「ッ！！まさか！？」

聞こえて来た念話の意味に気が付いたなのはがメタルガルルモンXを見つめて見ると、背中に金色の翼を十枚生やし、六つのセラフィービットの前に信じられないほどの大きさを持った魔力球を作り上げ、レイジングハートの先端にも同様に魔力球が生まれていた。

そして全ての魔力球が完全に完成した瞬間。

「（全力全開！！セブンズ・スターライトブレイカーーー！！！！！！）」

ドグオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

放たれた七つの巨大としか言えない砲撃は、一瞬の内にスレイプモンと同様に三隻の艦隊を跡形も無く消滅させた。
時間にして凡そ十分にも満たなかった。経ったの十分にも満たない時間で、管理局の誇る艦艇が七隻も消滅してしまった。これを見ていた管理局員、そして人々は何故彼らが自分達の世界から出ようとしなかったのかハッキリと理解した。
彼らの力は強大過ぎる。彼ら三体でこれなのだ。クイントの話では他にも同等の力を持つ者達が居ると言う。
その者達まで一斉に動けば管理局を滅ぼす事が可能だろう。味方ならば心強いが、敵にだけは絶対にしたくないと、戦いを見ていた人々全員が心の底から思った。

「さて、残るは一隻だけだ！」

『ヒィッ！！！』

デュークモンの言葉に、残っているアルカンシェルを装備した艦の乗員全員が恐怖の声を上げた。
彼らは漸く分かったのだ。自分達が触れてはは成らない禁忌と呼べる存在達に手を出してしまった事を。

『ア、アルカンシェルだ！アルカンシェルを使うぞ！！』

『ッ！！！』

聞こえて来た恐怖に震える提督の叫びに、戦いを見ていた局員達とクラナガンの人々はギョッと目を見開いた。

アルカンシェル。放てば発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を反応消滅させる魔導砲。そんな物をこの様な場所で放てば、クラナガンの人々は一人残らず死んでしまう上に、ミッドは滅びるだろう。

戦いを見ていた他の艦艇達も慌てて船首を向けて、アルカンシェルを放とうとしている艦に攻撃を行おうとするが、間に合わずエネルギーがチャージされ始める。

その様子を見ていたデュークモンは、グラニを艦に向け、急ぎ向かい出す。

「貴様らは本気で滅ぼしてくれる！！」

（行くよッ！！）

ーーーピィィィィィーーー！！！！

デュークモン、ヴィヴィオ、そしてグラニは叫びながら艦へと向かい出し、その身から虹色のデジコードを発生させ体を覆って行く。

その幻想的な様子に人々が魅了されていると、虹色のデジコードは弾け飛び、中から背中に五対の白き翼を生やし、真紅の鎧を身に纏った騎士が現れる。

デュークモンとヴィヴィオ、グラニの心が一つに成った時に現れるロイヤルナイツ－デュークモンの隠された全ての力を解放した姿。その名も。

「デュークモン・クリムゾンモードッ！！！」

デュークモン・クリムゾンモード、世代／究極体、属性／ウィルス種、ワクチン種、種族／聖騎士型、必殺技／無敵剣（インビンシブルソード）、クォ・ヴァディス

真紅の鎧を身に纏い、背中に五対の白き翼を生やしたデュークモンが真の力を解放した姿。しかし『ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：グラニ』との融合が無ければ短時間しかその姿を保てない。鎧は熱で紅蓮に光り、“デジタルハザード”を封印した“電脳核（デジコア）”を持っている。両手にはエネルギー状の武器－神槍『グングニル』と神剣『ブルトガング』を持っている。必殺技は、神剣『ブルトガング』で相手を切り裂く『無敵剣（インビンシブルソード）』に、神槍『グングニル』で敵を電子分解させ、異次元の彼方へ葬る『クォ・ヴァディス』だ。

現れたデュークモン・クリムゾンモードの姿に再び人々は魅了された。

虹色の魔力粒子を体から発生させ、背中に天使の翼を思わせる様な五対の翼。

そしてその紅蓮に輝いている真紅の鎧。正しく現代に蘇った神話に出て来る騎士の姿に人々は生涯忘れないと言える程に魅了されてしまったのだ。

だが、徐々に最後の艦にアルカンシェルのエネルギーが集まって始まり始めている事に気が付いた人々は、誰もが絶望の表情を浮かべ始める。

しかし、デュークモン・クリムゾンモードは慌てずに右手に神槍－グングニルを出現させ、全力で振り被り、艦に向かって投擲する。

「（クォ・ヴァディス！！！！）」

ーーードスン！！

投げられたグングニルは光速で艦に向かい、グングニルは艦の外壁に突き刺さった。
しかし、アルカンシェルへのエネルギーチャージは止まらず、誰もが今度こそ終わりだと諦めた瞬間に。
ーーーシュウゥゥゥゥゥゥーーーー！！
艦は一瞬の内に、内部にいる人間と共に電子分解され、粒子へと変わりながら消滅した。
『ワァァァァァァーーーーーーーー！！！！！』
ミッドに襲い掛かった危機が完全に消滅した事に人々は喜びの声を上げながら抱き合い、ある者はデュークモン・クリムゾンモードを崇める様に祈り始める。
その様子にスレイプモンとメタルガルルモンXは苦笑を浮かべながら、デュークモン・クリムゾンモードに顔を向けて見ると、デュークモン・クリムゾンモードは再びグングニルを生み出し、自身の背後に存在しているゆりかごに顔を向ける。
「安らかに眠れ」
（さようなら、ゆりかご）
「（クォ・ヴァディス！！！！）」
ーーードスン！！！
管理局の艦艇と同様に、グングニルはゆりかごの外壁に突き刺さり、その身を電子分解されながら虹色の粒子に変えて行き、ミッド

チルダの空に幻想的な光景を作りながら、長き時を存在していたゆりかごはその身を消滅させて行くのだった。

時空管理局本局、其処でも惨劇は起きていた。
全ての真相が暴露された本局上層部の幹部達は、逸早く逃げようと残っている艦艇に乗り込み、付き従う局員達共に管理外世界にでも逃げようと思っていた。
そしてそれは半ば叶う状況だった。何故ならば、現在の本局は各管理世界から寄せられる抗議や事情説明の通信に追われていた為に、元凶で在る幹部達を気にしていられる状況ではなかったのだ。
幹部達はその隙に裏で横領していた資金を持って逃げるつもりだった。
だが、それは阻まれた三つの異形に寄って。

ーーードゴオオン！！

「ゲブッ！！」

艦の中に一人の幹部が乗り込もうとした瞬間に、艦の扉は弾け飛び、乗り込もうとした幹部は扉と共に吹き飛んで行った。
その様子に他の幹部達や局員達の動きが止まると、艦の中から三つの異形が現れ、幹部達と局員達を睨みつける。

「残念だけど。此処から先は通行止めよ」

「貴方達には、しっかりと裁きを受け貰わないとね」

背中に金属の翼を背負い、両手を刃の形にしたデジモン－バイオ・

スラッシュエンジェモンへとその身を進化させたリンディと正義の味方のよう姿をしたデジモン―バイオ・ジャスティモンへと進化したクイントは恐怖に震えている幹部達と局員達に言葉を言った。
そして最後の異形―漆黒の体に機械的な鎧を身に纏った漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンXは足を一歩前に出しながら、恐怖に震える者達を睨みつける。

「つまらん連中だろうが、少しは俺を楽しませろ」

ーーービュン!!

ブラックウォーグレイモンXが言葉を言い終わると共に、その姿はリンディ、クイントと共に消失し、そして。

『ギャアアァァァァァァァァーーーーーーーーーーー!!!!!』

断末魔の叫びがドック中に満ち溢れ、血吹雪が其処かしこで上がる惨劇が起きた。

十数分後―漸く幹部達が居なくなっている事に気が付いた局員達が、慌てて幹部達を捕まえようと動き出し、幹部が入ったと思われる艦が在るドッグの中に踏み込んで見ると、手足が完全に折れ曲がり、全身が血だらけでありながら、辛うじて生きている幹部達や局員達を発見し、その惨状に誰もが恐怖を覚えるのだった。

“世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人、その身の因子を宿し二つの異形となりし者達と共に、深き闇を打ち砕く”

エピローグ（前書き）

今は此処までです。

次回はおまけとコラボの作品を移転します

エピローグ

ミッドチルダを襲った事件。後の歴史に置いて『時空管理局本局暴走事件』、通称『Ｚ．Ｈ事件』が解決してから十日が経った。

事件が解決してからすぐに本局の幹部達、並びにそれに付き従っていた局員達は全員が逮捕された。

しかし、その数は信じられない事に２００人近くの要員が逮捕され、その他にもミッド行政府、並びに各世界の調査者達が本局内部を調査した所、使途不明金や横領などが本局内部で多発していた事が判明した上に、高ランクの魔導師だからと言う理由で罪が無かった事にされたり、罪が軽くなっていたりしていた事が判明し、全ての者達を捕まえた所、合計で１０００人以上の局員が一斉に逮捕された。

この事には調査に当たっていた者達だけではなく、各管理世界の代表達も全員が顔を青褪めさせた。

法を司っていた組織内部で１０００人以上もの犯罪者が存在していた。

自分達がどれだけ平和ボケしていたのかハッキリと分かったのだ。

しかも、それに加担していた管理局では無い者達もやはり存在し、もはや次元世界中が上から下への大騒ぎの事態に成ってしまったのだ。

「まさか、此処まで腐敗していたとはね。流石に驚いたわ」

「ええ、私達の予想以上ね」

元々泊まっていたホテルの一室でテレビで報道されている内容を見ていたクイントとリンディは、管理局の腐敗に頭を痛め、ブラッ

クとヴィヴィオ、ギルモンを除いた他のメンバー達も同様に頭を手で押さえながら眩暈がしていた。
彼らの予想以上に、管理局の腐敗は進行していた。
元々プランΩの真の目的は、今の管理局を崩壊させ、新たに再編させる事が目的だったのだが、正直言って再編ではなく完全に滅ぼした方が良かったと思うぐらいに管理局は腐敗していた。

「・・・・一応、現在は政府主導で組織を再編させている見たいですね。それに管理局に最終的に残る権限は逮捕権だけであって、他の権限は各世界の政府が新たに作り上げる予定の機関が持つ事に成るみたいです。それと定期的に管理局の内情を調べる調査団が出る事が決まったそうですよ」

「それが良いわね。少なくともそれで管理局の暴走は少しは無くなるでしょうし、今までの様に罪を無かった事にする事は出来なくなるわね」

ティアナの報告にリンディは頷きながら答え、他の者達も同様に頷く。
管理局が暴走しても止まらなかった理由の一つには、管理局に権力が集中し過ぎていた事も在る。
幾ら次元世界を護る為とは言え、それでも管理局には権力が集中し過ぎていた。その為に管理局内部の人間の中にはまるで自分達こそが世界の主だと思う様な者達が出ていた。
だが、逮捕権だけしか残らないとなれば、今後は今までの様に好き勝手に罪を消したり法を作ったりする事は出来ない。そうなれば違法を行え無くなるだろう。最も全部が消えるかと言われれば不可能だろう。今まで散々違法を裏で行っていたのだから、今更管理局が止めるとは思えない。
そうならない為にも権力の分散は必要であり、また管理局を監視

する者達も必要なのだ。

「それにしても、地上はともかく本局は良く潰れなかったわね。正直此処までやっていたのなら、潰されてもおかしくないのにね？」

報道されているテレビを見ながらクイントが疑問の声を上げると、ティアナの首に巻き付いていたクダモンがクイントの方に顔を向ける。

「なに、本局に潰されて貰うと新たな組織を作らねば成らん。そうなれば予算も掛かるし、作っている間に次元犯罪者達が暴れるやも知れん。そう成ると困るからこそ、管理局を再編する事に各世界は決めたのだろう。それに私達の事も在る」

「事件が終わってすぐに私達は消えましたからね。民衆と違って世界の代表達は私達をハッキリと味方と認識していないんです」

「それに、レジアス中将が連絡でデュークモン君達の世界との通信が途絶えた事とクイントさんが姿を消した事を報告しましたから、各世界の代表達はデュークモン君達が現れた本当の目的は管理世界を混乱させる為ではないかと疑っていますからね。此処で管理局を滅ぼすと色々と無防備に成りますから、管理局を潰さなかったんです」

クダモン、ティアナ、なのははそれぞれクイントの質問に対して答え、クイントは納得したと言う様に頷く。

各世界の代表達が管理局を滅ぼさなかった目的の中には、万が一でもデュークモン達との戦争が起きた時の戦力確保の為だ。管理世界の多くで流されたデュークモン達の戦闘の様子を見た者達ならば、出来る事ならデュークモン達の戦闘を避けたいと思うだろう。

だが、世の中は何が起こるか分からない。もしかしたら今回の事件でデュークモン達に家族を殺された者達が報復に出るやも知れない。そうなれば、デュークモン達は人間を敵と見なし、滅ぼす動きをし出すかも知れない。そうなった時に、戦う事が出来る戦力が無いと不味いので各世界は管理局を潰さずに置く事を決めたのだ。

最も以前の様に多大な権限を管理局には持たせる気は無い。流石に護るべき世界にアルカンシェルを撃ち込もうとした人間が居た組織など信用出来る筈は無い。少なくとも管理局ー正確に言えば本局が信用を取り戻すのは当分先の事に成るだろう。

「本局に比べると地上はまるで逆の状態よ。予算が削減される事に成った本局とは違って、地上の方は予算が上がる事が決まったみたいね。レジアス中将はここぞとばかりに地上の戦力確保に乗り出したわ」

レジアス・ゲイズは今回の事件を逆手に取って、地上の改革を行い始めている。

最も在る程度現状が安定したら今の役職を放棄し、一局員に戻って一からやり直すと決めている様だ。親友で在るゼストに再び顔を向け出来るように地上の平和を願いながら、最初からやり直すと決めたのだ。

そうクイントに話した時の彼の眼は、生き生きとした目だったクイントは全員に語り、リンディ達はそれぞれ笑みを浮かべて頷く。

「レジアス中将は流石ね。彼は確かに道を踏み外したけど、本局の幹部達に比べれば百倍マシね・・・・・・この世界のクロノも出来ればそう言う人物に成って欲しかったわ」

「落ち込まないで下さいよリンディさん！この世界のクロノ君だって悪気が在ってデュークモン君達に攻撃した訳じゃ！」

「慰めないでなのはさん！！・・・・私は本気でクロノへの教育を間違ったと思っているの」

なのはの慰めの言葉に対して、リンディは落ち込みながら床に膝を抱えながら座り込む。

デュークモン達に攻撃を行った艦隊の者達は全員が処罰を受ける事に成った。上層部からの命令が在ったとは言え、ミッドを護ってくれたデュークモン達に攻撃を加えた上に、失敗すればデュークモン達の世界との戦争に発展していた可能性も在る。

あのデュークモン達と同等の力を持っている者達が大挙として押し寄せてくれれば、世界が幾つも滅ぶ可能性が高い。その事を分かっている各世界の代表達は、艦隊にいた者達を全員処罰する事に決めたのだ。

当然ながら、艦隊の中に在ったクラウディアの艦長であるクロノも裁かれ、正式な処分が下されるまでは謹慎処分を受けているらしい。

「私の世界のクロノは、管理局に疑念を持てたから良かったけど。この世界のクロノは管理局を正義だと信じすぎていたわ。それがどれだけ危険な事かも分からずに・・・・・もっと空気を読める子に育って欲しかった・・・・・そう言えば、十年前もなのはさんとフェイトさんが戦いそうに成った時に転移して現れていたし・・・・・・・・それにこの世界のフェイトさんに色恋で近づいた人物の邪魔をしているらしい・・・空気を読めない上にシスコンなんて・・・・本気で育て方を間違ったわ」

「あの～、リンディさん？」

異世界とは言え自身の一人息子で在るクロノの事を好き勝手言っ

ているリンディの姿に、なのはは汗を流しながら声を掛けるが、リンディは答えずに小声で自身の行った教育に付いて呟き続ける。
その様子になのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、クイントは冷や汗を流しながらリンディを見つめながら顔を見合わせ、残っているブラック、ルイン、ヴィヴィオ、ギルモンに顔を向けて見ると。

「2を出す」

『ムッ！！』

四人は円の字に座りながらトランプゲーム一大富豪をやっていた。

ーーードガシャァァァァァン！！！

「何だ？うるさいぞ？」

「そうですよ。折角珍しくブラック様がヴィヴィオちゃんのお願いを聞いているんですから、少し静かにして下さい・・勿体ないですけどジョーカーを使います。次に8です」

倒れているなのは、ガブモン、ティアナ、クダモン、クイントにブラックとルインは言葉を告げると、再び大富豪を再開し始める。
それを見たなのは達は冷や汗を流しながらブラック達のマイペースに驚くが、落ち込んでいるリンディを励まそうとティアナがブラックに近づく。

「え～と、ブラック兄さん？」

「今は取り込み中だ。キングだ」

ティアナの声にブラックは素っ気無く答えると、再びルイン、ヴィヴィオ、ギルモンと向き合い、大富豪を再開しようとする。
ティアナはそうはさせないと言う様にリンディの方に顔を向ける。

「リンディさんが落ち込んでいるんだけど」

「・・・・・時間を教えてやれば良い」

「ハッ？時間？」

ティアナはブラックの言葉の意味が分からずに呆然とするが、ブラックは無言で部屋の中に備えられている時計を指差す。
その様子に疑問を覚えながら、ティアナ達が時計を見て見ると、今日、レジアス中将の計らいで漸く会う事が出来る様に成った機動六課と会う時間が迫っている事に気が付き、慌てて顔を見合わせる。

「不味いですよ！！約束の時間が！」

「本当だ！もうこんな時間に成って居たなんて！ブラックさんも早く教えて下さいよ！」

「すぐに準備しましょう！ほら！リンディも落ち込んでないで準備して！」

「ウゥゥゥ、何であんな空気を読めない子に育ってしまったの」

時間が迫っている事に気が付いたティアナ達は慌ててそれぞれ準備をし始めるが、既に準備を終えているブラック、ルイン、ヴィヴィオ、ギルモンは慌てずに大富豪を再開するのだった。

聖王病院の一室。その部屋には紫色の髪の女性ー今回の事件で保護されたメガーヌ・アルピーノがベットに横に成りながら眠り続け、その横には壮年の男性ーゼスト・グランガイツとその肩に座っている赤い小人の様な者ーユニゾンデバイスー『烈火の剣精』アギト、そしてメガーヌの娘であるルーテシア・アルピーノが心配そうにメガーヌを見つめていた。

だが、アギトだけはメガーヌの事だけではなく、ゼストとルーテシアの間に在る不穏な空気を変えるように呟く。

「・・・・そのさ・・・・クイントの姉御の話だと、ルールーのお袋さんは二ヶ月半ぐらいで目覚めるそうだぜ」

「・・・・・・うん、クイントさんから聞いた」

「・・・・・・俺もだ」

ルーテシアとゼストは言葉短くアギトの言葉に頷くが、アギトはその様子に頭を抱えたくなった。

事件が終わった後、ゼスト、ルーテシア、アギト、そしてメガーヌはレジアスが権限を使って保護してくれた。元々ルーテシアをスカリエッティの下に運んだには最高評議会であり、彼女が今回の事件に加担したのも母親であるメガーヌの為だった事と、スカリエッティに寄るマインドコントロールが施されていた事が判明した為、管理局はルーテシア達を逮捕する事が出来ず、レジアスが保護責任者に成り、ルーテシア達は保護されたのだ。

だが、アギトは再会した時からゼストとルーテシアの間には壁が出来てしまった感じを受けていた。

（ハア～、やっぱりクイントの姉御の言うとおり、旦那がルールーの父親だったって事が原因だよな。全くよぉ。旦那も体の事が在ったからって、そんなルールーに取って重要過ぎる事を隠しておくなよ。もし、話していれば結構ルールーも安心したかも知れねえのに）

ゼストとルーテシアの間に在る壁の原因はひとえに、ゼストがルーテシアの実の父親であった事を隠していた事が原因だ。

ゼストはスカリエッティの実験に寄ってレリックウェポンに成ってしまった人物。しかし、その状態はルーテシアと違ってかなり不安定であり、長くは生きられないと宣告されている。その事が在ったからこそ、ゼストはルーテシアに少しでも悲しみを与えない為に実の父親である事を隠していたのだが、クイントがルーテシアに父親はゼストで在る事を明かしてしまったので、再会した二人の間には不穏な空気が満ちる様に成っていた。

その事を分かっているアギトは、何とか二人の間に空気を変えようとここ数日頑張っていたのだが、結局成果は出なかった。

（う～、クイントの姉御はこの場所に来れるか分かんねえし、アタシが頑張んなくちゃいけねえんだけど、本当にどうしたら良いんだよ！？）

アギトは本気で頭を抱えながら、二人の間に在る不穏な空気を消そうと考え続けるが、良い案が浮かばず更に頭を悩ませ始めた瞬間に、病室の扉が開き、果物がたくさん入った籠を手に持ったクイントが入って来る。

ーーーガチャン

「・・・・・・やっぱりこうなっていたのね」

「クイントの姉御！」

病室の中に入って来たクイントは、ゼストとルーテシアの間に在る空気に気が付くと、頭が痛いというように手を頭に載せ、クイントの姿を見たアギトは喜びの声を上げてクイントに近付いた。

クイントはアギトに持って来ていた果物籠を差し出すと、アギトは浮遊魔法を使用し、空中に果物籠を浮かし、病室に置かれている机へと降ろす。

それを確認したクイントは、不穏の空気を纏っているゼストとルーテシアに近付く。

「全く、親子なのに何でそんなに不穏な空気を纏っているんですか？メガーヌが起きたら、怒られますよゼストさん」

「・・・・・分かっている筈だぞナカジマ。俺はもう長くない」

「だから何ですか？ルーテシアちゃんを悲しませない為に、親だった事を隠していたとでも言うんですか？だとしたら、ゼストさん。貴方はルーテシアちゃんを確りと見ていないですね？」

「何だと？」

ゼストは険しい声を出しながらクイントに振り返る。

だが、クイントはゼストの険しい顔を見ても関係ないと言うように、ルーテシアに近付き頭を撫で始める。

「この子が頑張れたのは、メガーヌの事だけではないんですよ。貴方やアギトちゃんと言う大切に思っていてくれる人達がいたから悲しくても頑張れた」

「だ、だが俺は・・・・・」

クイントの言葉にゼストは動揺した声を上げるが、クイントは構わずにルーテシアを抱き上げ優しげな笑みをルーテシアに向ける。

「ルーちゃんも自分の心に正直に成りなさい。ゼストさんの事を如何思っているのか。自分の心からの気持ちを伝えるのよ」

「・・・・・うん」

ルーテシアは笑みを浮かべながら頷き、それを確認したクイントはルーテシアを床に降ろす。

降ろされたルーテシアはゆっくりとゼストに近付き、気まずげな表情を浮かべているゼストの手を握り締める。

「・・・・一緒に居て・・・・少ししか一緒に居られなくても・・・・私は一緒にいたい・・・・お願い・・・お父さん」

「ッ!!・・・・・・ルーテシア!!!」

ーーーガシッ!!

自身を父親と呼んでくれたルーテシアに、ゼストは嬉し涙を流しながら力強く抱き付き、ルーテシアもゼストを力強く抱き締める。

ゼストはこの時に誓った。例え残り少ない命だろうと、残りの全てをメガーヌとルーテシアの為に使おうと誓ったのだ。

そしてその様子を嬉しげな笑みを浮かべながらアギトが見つめていると、クイントがアギトにそっと近寄り小さな声で声を掛ける。

「今、私の知り合いがスカリエッティのデータからゼストさんとル

ーちゃんの有効な治療法を探しているから安心しなさい。ちょっと問題が在る人物だけど、絶対に治療法を見つけてくれるからね」

「ありがとな、クイントの姉御」

「気にしないで、それじゃ私は行くわね」

クイントはアギトに笑みを浮かべながら手を振るうと、病室を出て行き、後には互いに抱き締め合うゼストとルーテシアと、その様子を嬉しげに眺めるアギトだけが残されたのだった。

数ヵ月後、クイントが送って来た治療法に寄って、魔導師として戦う事は出来なくなったが、人並みの寿命を取り戻したゼストは新たに入隊した地上の局員達の教育係として働き、アギトは自身のロードに成ったシグナムと共に道を歩み始め、ルーテシアは体の中に在ったレリックを取り出され、ミッドチルダに在る魔法学院ーＳｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院に入学して、多くの学友達と楽しそうな笑みを浮かべていた。もちろんその傍らには、正式にゼストの妻に成ったメガーヌが優しげな微笑みを浮かべているのだった。

因みにクイントが病室から出て行った後、クイントは急ぎ仲間達の向かった場所へと向かおうとするが、その直前で偶然歩いていた入院中のギンガと鉢合わせる。

「か、母さん！？何で此処に居るの！？行方が分からないんじゃ！？」

再び行方が分からなくなっていた母親で在るクイントとの突然の再会にギンガは慌てた声を上げた。

しかし、ギンガの姿を見たクイントは、ギンガの言葉には答えず

に、笑みを浮かべながらギンガの病院着の襟首を掴む。

ーーーガシッ！

「丁度良かったわ。これから機動六課隊員達が居るアースラに行くけど、ギンガも来なさいね」

「えっ？ちょっと母さん！？私入院中！！」

「大丈夫よギンガ。マッドだけど優秀な医者を紹介して上げるから、そんな悪趣味なドリルの腕もすぐに治るわ・・・・心に深い傷が出来て、数日は確実に精神に異常が起きるかも知れないけどね」

「えっ！？イヤアァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

クイントの言葉の意味が分かったギンガは悲鳴のような声を上げて、クイントの手から逃れようとするが、戦闘機人で在る筈のギンガの力でもクイントから逃れる事が出来ず、ギンガは悲痛な叫びを上げ続けるのだった。

スカリエッティ達に寄って破壊された機動六課隊舎跡地。其処には巨大な管理局の艦艇ーアースラが停泊していた

本来ならば事件が解決した今、隊舎の修復が始まっても良いのだが、現在の機動六課メンバー全員には臨時施設として使っていたアースラ内部での謹慎処分が言い渡されていた。

これに関しては今回の事件で機動六課が最終的に役に立たなかった事、地上本部との軋轢を増やした最悪の部隊とミッドチルダ中でささやかれている為である。故に機動六課メンバーは事件後全員外

に出る事が出来ないのだ。
　そしてそのアースラ内部の食堂には機動六課隊長陣とＦＷメンバー、そして未だに大人姿のままのこの世界のヴィヴィオが集まっていた。

「・・・・先ず地上本部から送られて来た私らの処分内容やけど、ＦＷメンバーは全員お咎め無しで地上のそれぞれの部隊に編入が決まりや。だけどエリオとキャロに関しては管理局を辞める事も赦されている見たいや」

『エッ！？』

　落ち込みながらはやてが告げた事実にエリオとキャロは驚きの声を上げ、他の者達も驚いたように顔を見合わせる。
　エリオは九歳でＢランクを取った優秀な魔導師の上に、キャロはレアスキル『竜召喚』を持った少女。それほどの才能を持つ者達を万年人材不足の管理局が手放すとは思っても見なかったのだ。
　しかし、これは実を言えばリンディがレジアスに頼んだ事だった。今のリンディは子供を戦場に出す事を最も嫌っている。自身の所に居るヴィヴィオが戦う決意をした時に聞いた悲しみに満ちた声。
　戦いに出れば何時命を落とすかもしれない純然たる事実。そして命の大切さをその身で味わったリンディには如何しても機動六課で戦っているエリオとキャロの存在が赦せなかった。
　だからこそ、レジアスに頼んで二人の未来を縛り付けるような行為だけはしないでくれと頼んでいたのだ。最もあくまで二人に赦されているのは他の者達よりも在る程度の行き先の自由だけであって、最終的な決定は二人に任せるつもりだった。

「質問は後で来る地上本部からの派遣者達に聞いてな。次に隊長陣やけど」

困惑の表情を浮かべるエリオとキャロに告げながら、はやては異世界のなのは一以降高町なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムに顔を向け、深く頭を下げる。

「・・・・・堪忍な皆・・・・・・機動六課隊長陣は全員全ての階級と資格を剥奪し、地上本部勤務の一士からやり直しが決まったわ。他の機動六課隊員も殆ど地上本部勤務や・・・・ゴメン・・・・ほんまにゴメン」

「・・・・はやてちゃん」

『・・・・はやて』

「・・・・主」

頭を深く下げて涙を流しながら謝り続けるはやての姿に、高町なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムは慰めの言葉を掛けようとするが、言葉は誰も出なかった。

慰めれば逆にはやてが傷付いてしまう事がわかっているからだ。

機動六課が設立する前に友人や家族に将来を絶対に傷付けないと約束したのに、結果は殆どの者達が今までの功績を全てを失う様な形に成ってしまった。かと言って今回の事件を解決したデュークモン達を責められる筈も無い。居場所が分からないのもそうだが、彼らは民衆から絶大な人気を持っている上に、Sランクオーバーの魔導師でさえも勝てないほどの力を持っている。

しかも、彼らには他にも仲間が居る事が分かっているので攻撃した何て日に成ったら、管理世界が滅ぼされるもかも知れない。あの攻撃した艦隊に対する無慈悲な行動を見れば明らかだろう。

その事が分かっているはやては如何する事も出来ず悲しみの涙を

流し続け、他の者達は何とか慰めようと声を掛けようとした瞬間。

ーーードゴオン！！ガラガラガラッ！

『ッ！！』

食堂に在った扉が吹き飛び、全員が突然の事態に目を見開きながら食堂の入り口の方を見て見ると、其処には。

「う～ん～？もうちょっと派手に登場した方がインパクト在ったかな？」

「イヤちょっと待ってよ！？何で登場にインパクトが必要なの！？普通に入れば良いんじゃないの！？」

「駄目だよ、ガブモン君。私はこの世界の自分に圧倒的な実力差を見せたいの。だから、登場は派手にすべきだと思うの？」

「・・・・・・・ヴィヴィオがこの前見ていたアニメに影響されていない、なのは？」

『なっ！？』

吹き飛んだ扉からゆっくりと歩いて来る毛皮を被った生物ーガブモンと言い争いをしているレイジングハートを右腕に握り茶色の髪をサイドポニーにした女性ー異世界のなのはの姿に、機動六課メンバーは全員信じられないと言うな顔をしてなのはと高町なのはを見比べる。

二人の姿はまさに瓜二つだった。

同一人物なのだから仕方が無いのだが、その事を知らない機動六

課メンバー達は誰もが困惑したように二人を見回す。
だが、なのははそんな様子に一切構わず、この世界の自分自身ー高町なのはの前に立ち、優しげな笑みを浮かべる。
「始めましてこの世界の私。私は貴女より強い高町なのはだよ」
「此方こそ始めまして。私は何処かの誰かのようにコソコソと動かない高町なのはです」
「・・・・・随分な言い様だね？誰のおかげで潰れかけていた時に、立ち上がれたのかな？」
「覚えが無いよ。だってあの時の念話の主は正体を教えてくれなかったし、貴女だって証拠は無いよね？」
互いに笑みを浮かべながら言葉を言い合うが、その雰囲気はもはや険悪としか言い表せないものだった。だが、それも仕方ないだろう。
なのはは大勢よりも自分の大切な人達の為に戦い、自身も幸せを掴むと決めた存在。
方や高町なのはは、少しでも多くの人々に笑みを浮かばせようとする為に自分さえも省みず戦う存在。
二人の生き方は在る出来事ーブラックにボコボコにされた時から大きく変わってしまった。
そんな二人が出会えば、互いにいがみ合うのは当然の結末だった。
「ブラスターシステムだったかな？何であんな欠陥システム積んでいるの？使用後の事を何も考えていないなんて命がいらないのかな？」

「貴女には関係ないよ」

なのはの質問に対して高町なのはは素っ気無く答え、顔を背けようとする。

その様子を見たなのはは、目の前の高町なのはの気持ちを正確に読み取り、怒りの表情を浮かべて首もとの襟を掴む。

ーーーガシッ！

「別に貴女が死んでも私には関係無いけど。この世界のヴィヴィオをもう一度でも傷付けたりしたら、その時は私が貴女を二度と飛べない体にして上げるよ。覚えておくんだね」

「・・・・・」

なのはの言葉に対して、高町なのはは無言を貫き、辺りには一瞬即発の空気が満ち溢れた。

その様子にガブモンを除いた全員が不安そうな表情を浮かべ始めた瞬間に、入り口の方から手を打つ音が響く。

ーーーパンパンッ！！

「はい二人とも其処までよ。私達は戦いに来たんじゃないんですからね」

『ッ！！』

聞こえて来た声に、その声に聞き覚えが在る者達が全員驚いた表情を浮かべて入り口の方を見て見ると其処には、黒い髪に金色の瞳を持った男性一人間体のブラック。

その傍らに寄り添うように立つ銀色の髪に蒼い瞳を持ち、青と白のロングコートを着たはやて達に取って忘れられないと存在と瓜二つの姿をした女性ールインフォース。
同じ様にブラックに寄り添うように立つ翡翠の髪に黒いドレスを着た女性ーリンディ。
赤い恐竜の様な生物ーギルモンの背に乗った子供姿の異世界のヴィヴィオ。
首に狐の様な生物ークダモンを巻き付かせている異世界のティアナ。
そして未だに暴れ続けているギンガを片手で抑えているクイントの姿が存在していた。

「さて、色々と説明して上げましょうね」

そうリンディは笑みを浮かべながら告げ、その場に居た機動六課メンバーは誰もが困惑するのだった。

ーーー十数分後

「つまり、貴女方が予言に在った人物達で、平行世界から休暇の為にはるばるやって来たと言う事良いんですやろか？」

「概ねその通りよ。予言に私達の事が記されていたのは知らなかったけどね」

アレから互いの事情を説明し在ったリンディとはやては険しい顔

をしながら向かい合い、他のメンバーは困惑したようにリンディの背後に居るなのはとティアナを見つめる。
　平行世界。実在するのかどうかも分からなかった世界から来訪者だと告げられたのだから、困惑するのも当然だろう。だが、現になのはとティアナ、ヴィヴィオと言う同一人物が二人居る上に、自分達の知るリンディよりも若いリンディが存在しているのだから、平行世界の実在を示す良い証拠だった。

「・・・・・質問ですけど、あの生物達は何処に居るんですか？フェイトちゃんから聞いた話やと、貴女とあの生物達は仲間やそうですけど？」

「あら？もう目の前に居るわよ」

『ッ！！』

　リンディが告げた事実にその場の全員が驚いた表情を浮かべて、辺りを見回す。
　だが、デュークモン達の姿は発見出来ず、からかわれたのかと思い、はやてが表情を更に険しくすると、リンディがそっと手をなのはとティアナ、そしてこの世界のヴィヴィオと楽しく遊んでいるヴィヴィオと遊んでいるギルモンを示す。

「その三人がそうよ。正確に言えばデュークモンはヴィヴィオとギルモンが、スレイプモンはティアナとクダモン、そしてメタルガルルモンXはなのはさんとガブモン君が正体よ」

『なっ！？』

　その場に居る機動六課メンバー全員が信じられないと言う声を上

げて、なのはとその横に座っているガブモンを、ティアナとその首に巻き付いているクダモンを、そして最後にこの世界の自分自身と楽しそうに遊んでいるヴィヴィオとギルモンを見つめる。
あの圧倒的とした言えない力を持ったデュークモン達の正体がなのは達だと告げられたのだから、当然だろう。
その様子になのは達は苦笑を浮かべると、それぞれ説明を始める。

「本当だよ。私達の世界ではデジモンって言う生物が存在していて、そのデジモンと絆を結んでいけばデジモンは人間と融合して究極体と呼ばれる存在に進化する。私はガブモン君と融合してメタルガルルモンXに進化出来る」

「私はクダモンと融合してスレイプモンですね。それに魔導師と融合すれば、その人物が使用しているデバイスや魔法も使用出来るように成るんですよ。もちろんレアスキルもです」

ティアナはなのはの説明を補足するように説明すると、両手にブレイクミラージュを顕現させる。
ブレイクミラージュの姿を見たはやて達はティアナとクダモンがスレイプモンで在る事を確信し、同時に何故デュークモンが虹色の魔力光と『聖王の鎧』を持っていたのと、何故あそこまでこの世界のヴィヴィオを傷付けた事に怒りを顕にしたのか分かった。
異世界の聖王で在るヴィヴィオと融合していればヴィヴィオの力を全て使える上に、異世界とは言え大切なパートナーであるヴィヴィオを傷付けられた事を怒っていたのだ。
だが、同時に疑問が浮かび上がった。何故異世界とは言え管理局をボコボコにする様な行動を取ったのかと言う疑問だ。
なのはは管理局に入らなかったとしても、あそこまで徹底的に管理局を攻撃する理由は存在しないし、ティアナにしても実の兄であるティーダが入局していた管理局を攻撃する理由が存在しない。

そしてリンディ、クイントにしても長年を勤めていた管理局を人物達。
他の者達は如何だが分からない無いが、彼女達が管理局に敵対する理由が見えず、はやて達は困惑の表情を浮かべる。
その様子にリンディは、はやて達の内心で正確に読み取り管理局に敵対した理由を語り出す。

「私達が管理局に敵対する理由だけど、私達は管理局員ではないわ。寧ろ敵ね。私やなのはさんは元の世界では管理局に命を狙われているわ」

『ッ！！』

その場に居る全員が目を見開きながらリンディとなのはを見つめた。

「私が狙われる理由は、私が管理局の持っていた理論を根底から覆す存在だからね」

「根底を覆すやて？」

リンディの言葉にはやてが疑問の声を上げると、リンディは右手をはやて達に見える様に掲げながら指を鳴らす。

ーーーパチン！！

ーーーシュウン！！

『ッ！！』

リンディが指を鳴らすと同時に、無数の魔力剣ークロノが得意とするスティンガーブレイド・エクスキューションシフトが前触れも無く発動され、リンディの背後に出現した。
その様子を見たはやて達は誰もが信じられないと言う気持ちを持った。何故ならばリンディの手にはデバイスなど握られていない上に、魔法の発動時には必ず浮かび上がる筈の魔法陣も出現していなかった。しかも、魔力反応さえも感じられない。
この瞬間に、何故リンディが自身を管理局の存在を根底から揺るがすと告げたのか誰もが理解した。
確かにリンディの今行った事は管理局の挙げていた理論を崩壊させるに十分な事だ。
魔力も無く魔法を使う。それは魔導師の存在を根底から否定する事なのだから。

「これが私の命を管理局が狙う理由。魔導師至上主義に染まった本局の者達からすれば、私は在ってはならない存在。その証拠に元の世界では私は管理局員全員に、発見したら即座に抹消するように命令が出ているわ」

「そんな!?」

リンディが告げた事実にフェイトは悲痛の叫びを上げた。
異世界とは言え、義理の母親で在るリンディがその様な事態に成っているとは思わず、悲痛な叫びを上げたのだ。
だが、叫ばれたリンディは気にせずに魔力剣を消去し、はやて達に険しく歪めた顔を向ける。

「当然でしょう。魔法は魔導師だけが使うべき力。そんな考えを持っている者達からすれば私は脅威としか呼べない存在。そして魔法を越える力など管理局は絶対に認めない。その結果が今回の事件よ」

『ッ！！』

「ハッキリ言わせて貰うわ。はやてさん。貴女は地上の人々を危険に晒す気だったの？」

「なっ！？」

リンディの言葉にはやては何を言っているんだと言うように叫び、他の者達も困惑した表情を浮かべる。

その様子にリンディはやはり気が付いていなかったのかと言うような表情を浮かべ、リンディの背後に居るなのは達も険しい視線を機動六課の者達に向ける。

「今回の事件。この事件に隠されていた本質は知っているわね？本局の真の狙いは地上本部掌握だった事はもう分かっているわね？」

「は、はい・・・・」

リンディの質問に対してはやては落ち込んだ表情を浮かべながら頷いた。

「その事実だけでも危ない事なのよ。何せ本局が地上を掌握すれば必ず地上の戦力は今までよりも奪われて行く。その結果待っているのはミッドチルダの治安の悪化。これは必ず起きるわ。唯でさえ今の地上はギリギリだったのに、これ以上戦力が奪われたらミッドは犯罪者が横行する無法地帯に成るわ」

「そ、それは、その時は本局が」

「動かないわね。今までの状況を見れば簡単に推測出来る。本局に取って重要なのは“海”。地上の事なんて気にしないでしょうね。多分、更に戦力は減り地上の治安は悪化の一歩を辿る。その時に貴女は如何動く？」

「・・・・・地上の戦力を確保しようと思います」

「無理よ。だってその時には地上は本局の下部組織に成ってしまっている。本局に意見をするなんて事は夢のまた夢。なら最終的に戦力不足して居る管理局が行き着く先は何処か？一つしかないわね。人造魔導師研究」

『ッ！！！』

リンディが呟いた言葉に、機動六課メンバーは改めて知らされる事実に言葉を失い、人造魔導師で在るフェイトとエリオは体を恐怖に震わせる。

既に機動六課メンバー達も管理局が違法研究を行っていた事は知っている。

リンディの言葉はあながち間違いではないのだ。

「魔導師以外を戦力として認めない本局の者達が戦力確保するには人造魔導師研究しかないわ。その結果は十分過ぎるほどに分かる筈よ。沢山の者達が苦しむ最悪の世界が生まれる。表の人々は知らない最悪の世界が。そしてそれを取り締まる筈の管理局が行っているとは誰も思わない。追っている執務官にしても研究者を逮捕すれば解決すると思っていた。そうでしょう、フェイトさん？」

「・・・・・・はい」

リンディの言葉に対してフェイトは顔を俯かせながら頷いた。
フェイト自身。今回の事件はスカリエッティだけを捕まえれば解決すると思っていた。
確かにスカリエッティを捕まえれば、ミッドを襲った脅威は消えるだろう。だが、根元は残り必ず同じ悲劇が何時か起きる。その時にも管理局が事件を起こした犯人を捕まえて終わり。
結果残るのは自作自演の様な事件の連発だろう。

「管理局はつかまる事も無い上に、組織には在って然るべきの浄化機能も存在していなかった。その結果、管理局は腐敗して行ったわ。自分達の行いこそが正義だと叫ぶ集団に成ってしまった」

「そ、それは！？」

「正義。良い言葉よね。この言葉さえ在ればどんな事を行っても赦されてしまう。特に民衆から認められている正義ならば尚更ね」

リンディの言葉に誰も言葉を発する事が出来ず、顔を下に俯ける。
現状の管理局がまさにそれだ。管理局は自らこそが正義だと叫び、色々な違法や犯罪を行っていた。
そしてその事に誰も気が付かず、進み続け、あわやミッドに大惨事を起こすような事件を引き起こしてしまった。
その犠牲に対しても管理局は気にせずに自分達こそが世界を護ったと叫ぶつもりだったのだろう。

「私は理想を否定する気は無いわ。だけど、今の管理局は理想に溺れて、其処から生まれる犠牲を見ようとしなくなってしまっている。例え世界を一つ滅ぼしても管理局は気にせずに先に進み続け、最終的には自分達の作り上げる平和の為ならば次元犯罪者と同じ行為を行っても気にしない組織に成ってしまうでしょうね」

「・・・・・だから、そうなる前にこの事件で管理局を変えようと、全ての事実を民衆に教えたんですか？」

「結果的に言えばそうね。私達は最初は動くつもりは無かったし、管理局を滅ぼす様な動きをするつもりは無かったわ」

はやての質問に対して、リンディは答えた。

本来、リンディ達はこの世界では何もせずにゆっくりと休暇を取るつもりだった。

元々この世界はリンディ達の世界ではない上に、リンディ達の力は圧倒的としか言えないほどの力だ。その力に対抗する術が無い世界で猛威を振るえば、必ずや世界に混乱を巻き起こす。

その事が自分達の世界での出来事で痛いほど分かっているリンディ達は何が在っても動くつもりは無かった。だが、スカリエッティの行った在る行動だけは、リンディ達には如何しても赦せない事だった。

「私達が動いた理由は一つだけ。この世界のヴィヴィオが泣いたからよ」

『ッ！！！』

リンディが告げた動いた理由に、高町なのはを除いた機動六課メンバー全員が信じられないと言うように、リンディ達を見つめた。

管理局を滅ぼせるかも知れないほどの力を持った者達が動いた理由。

たった一人の少女ーヴィヴィオが泣いたからだと言う小さな理由。その為だけにリンディ達は動いたのだ。

「私達全員には誓いが在るわ。何が在ろうと、世界が敵だろうと、ヴィヴィオを泣かせた者達は何を持ってしても滅ぼす。それだけは絶対に違える事の無い誓いよ」

リンディの言葉に答える様に、背後に居たなのは達も同意する様に頷き、機動六課の者達は信じられないと言うように顔を見合わせる。

多くの世界よりもたった一人の為に動いた。その生き方は十年前のシグナム達ー守護騎士達と同じ生き方だが、何処か迷っていた十年前のシグナム達と違って、リンディ達には迷いなど無い。

本気でヴィヴィオが泣かなければ動くつもりは無かったのだろう。

その事に気が付いたはやては、リンディに食って掛かるように叫ぶ。

「本当に動くつもりは無かったんですか！？大勢の人々が犠牲に成ると分かっていても！？」

「犠牲が生まれる事を知っていた管理局員の貴女には言われたく無いけど。本気で動くつもりは無かったわ。だって、全部管理局が確りしていれば防げた事態なのよ。他人の過ちを態々尻拭いするほど私達は甘くはない」

「そうだよ。今回の事件の犠牲は全部もっと確りと地上と連携が取れていれば防げた事件。予言の事なんか関係せずに地上と共同で事にあたって居たら、今回の事件でクラナガンの人々に出る犠牲は少なかったかも知れない」

「地上本部襲撃から数日の時間が在ったんです。その時間を人々の避難の方に優先していれば、今回のスカリエッティの襲撃には犠牲が出る事は無かったでしょうね」

はやての言葉に対してクイント、なのは、ティアナはそれぞれ冷静に答え、はやては言葉も出す事が出来なかった。
今回の事件は、全て管理局が最初から真剣に当たっていたら犠牲は限り無く少なく済んでいただろう。
最終的に今回の事件での死亡者の数は数百人。怪我人を入れれば数は増えるが、それでも大規模な事件にして被害者の数は少ないだろう。
だが、それはデュークモン達が動いたからに過ぎない。彼らが動かなければ犠牲者の数は数千人以上に成っていただろう。
しかしそれも、事前にクラナガンから人々が避難していれば出なかった犠牲だ。

「予言で少しは先の事を分かっていたのならば、それに対する人々の護りこそが重要。だけど、この部隊にクラナガンの人々を一人残らず避難させられるだけの力が在るかしら？」

「そ、それは・・・・」

「出来ないですよね？この部隊に居る者達が全員動いても、スレイプモンの様に大勢の人々を安全な場所に運びながら、大量のガジェットを破壊する事など不可能です。せいぜいこの部隊に出来るのは事件を起こした犯人達を捕まえるのが精一杯ですよ」

声をつまらせたはやてに、ティアナは冷静に歴然たる事実を告げる。
確かに機動六課は他の部隊よりも優秀な人材が存在している。だが、その多くの者達が直接的に戦う者達しか居ない。その様な者達が人々の避難誘導を出来る筈も無い。

「理想を夢見るのは良いわ。だけど、現実を見なさい？物事には必ず隠された本質が存在している。その本質を解決してこそ本当の意味で事件は解決する。唯起きた現象だけを解決しても、同じ事を繰り返すだけよ。嘗ての闇の書事件の様にね」

ーーービクッ！

リンディの言葉にはやては体を震わせた。

今回の事件は在る意味では幾度も現れ続けた闇の書に似ている。

大元が存在する限り幾度も同じ様な事件が起きるだろう。例えスカリエッティが捕まったとしても、第二、第三のスカリエッティは必ず生まれる。

管理局と言う組織が自らの間違いに気が付き、内部が変わらない限り。

「今回の私達の行動で管理局は変わらざる得ない。変わらなければ何時かは自滅する。その事が分かっているレジアス中将は全力で管理局を変える行動を取っているわ」

「・・・・・・私が行った行動は間違いやったんですか？」

「間違いとは言えないわ。貴女も本気で人々の平和の為に動いていた。だけど、理想ばかりに目が行ってしまっていた為に、見るべき物事を見ていなかった結果が今回の顛末よ。本気で世界を変えたいのならば多くをその目で見て、その体で味わって学びなさい。その為にも一局員に戻って最初からやり直す事ね」

「・・・・・・分かりました」

リンディの言葉にはやては顔を俯かせながら頷いた。

今回の事件ではやて達は今まで築き上げた全てを失った。だが、それがマイナスに働くかどうかはこれからのはやて達の行動しだい。今回の経験を全く生かせず、同じ様な過ちを繰り返すのならば、はやて達には世界など護る事は出来ないだろう。
全てはこれからの彼女達の行動しだいなのだ。
出来る事ならばレジアスと同じ様に自身の罪を知って、先に進んでくれる事を内心で願いながら、リンディは顔をはやてから逸らし、フェイトの足元に居るエリオとキャロに顔を向ける。

「さて、次にエリオ・モンディアル君とキャロ・ル・ルシエちゃん事だけど、フェイトさんは二人をこれからも戦わせる気なのかしら？」

『エッ？』

「二人に関しては私がレジアス中将に頼んで、他の者達よりも自由が赦されているわ。普通の子供の様に学校に通うのも赦されている。管理局を一時辞めて普通の子供として生きるのも良いのよ」

「あ、あの、如何してそんな事を？」

「・・・・・・罪滅ぼしかしらね。私は十年前に自分達の都合を優先して、一人の幼い少女の人生を利用した事が在るのよ？」

キャロの質問に対してリンディは憂いを覚えたような表情を浮かべて答えた。
リンディは十年前になのはを勧誘したのを、Ｐ・Ｔ事件の時に利用した事を心の底から悔いていた。あの時になのはを利用したのは間違いだったと今のリンディには良く分かっている。
管理局の為。世界の為。そんな免罪符を掲げて一人の少女の人生

を歪めて、失敗すれば死んでしまうような状態にまで追い込んでしまった。

「だからこそ、私は子供が戦う事を否定するわ。取り返しの付かない傷を負わせてしまった時に、私は何も出来無かった。その時の悲しみは本当に辛いものなのよ」

リンディは深い悲しみに満ちた視線を食堂の端でこの世界のヴィヴィオ、ギルモンと楽しく遊んでいる自分達の世界のヴィヴィオに向ける。

なのはだけではない。ヴィヴィオもまた心の底に深い傷を負ってしまっている。

しかも、ヴィヴィオの心の傷は絶対に治る事は無い。あの悲しみに満ちた声で泣き続けたヴィヴィオの姿をリンディ達は忘れる事は無いだろう。

「だからフェイトさん。三人で良く相談してこれからを決めて。戦う道を選ぶのか？それとも普通の子供と同じ様に歩ませるのか？お願いね」

「・・・・・わ、分かりました。三人で良く相談して決めます」

リンディの言葉に思う所が在ったのか。フェイトは困惑しながらもリンディの言葉に頷き、エリオとキャロの顔を良く見つめて悩む様な表情を浮かべる。

その様子にリンディは笑みを浮かべると、最後に高町なのはに顔を向ける。

「なのはさんはもう十分過ぎる程に分かっているわね？」

「・・・はい・・・・・私は結局逃げていただけでした・・・・・・・本当ならばヴィヴィオの母親を名乗る資格は無いです・・・・・・・だけど私はヴィヴィオの母親に成ります！絶対にヴィヴィオを悲しませたりしません！」

「うん！良い答えだね。それなら体も万全にすべきだね」

『えっ？』

高町なのはの宣言に対してなのはが笑みを浮かべながら答え、機動六課の者達が困惑した声を上げた。

体を万全にする。なのははそう告げたのだ。

高町なのはの体は八年前の怪我の後遺症が残っている上に、今回のデュークモンとの戦いで使用したブラスターシステムの後遺症も残っている。今の高町なのはの体は管理局の技術でも全快は不可能と言う程にボロボロだった。

そのボロボロの体を万全にすると告げられたのだから、誰もが困惑するのも当然だろう。

しかし、なのははそんな様子には一切構わず、高町なのはの肩を凄まじい力で握り締めながら、自身と高町なのはの足元に転送用魔法陣を出現させる。

「私の世界の最高峰の医者の下に連れて行ってあげるよ」

「序にギンガも行きましょうね」

「イヤアァァァァァーーーー！！！スバル助けて！！」

「ギ、ギン姉？」

クイントの腕から逃れようとしているギンガの姿に、スバルは困惑したように声を出すが、クイントは構わずにギンガと共に魔法陣に乗り込み、その場からなのは達と共に転移する。

ーーーシュウン！

「・・・・・体の傷は必ず治るわね。心に深い傷は出来るでしょうけど」

「だろうな。奴が平行世界の人間の体や、戦闘機人の体を調べない筈が無い」

「ご冥福を祈るしかないですね」

なのは達が消えた場所を見つめながらリンディ、ブラック、ルインはそれぞれ言葉を言い、なのは達が向かった先に居る者の正体を知っているティアナ、クダモン、ガブモンは同意する様に頷く。

その様子を見た機動六課メンバーは全員が不安そうな表情を浮かべて、消えた高町なのはとギンガの事を心配するのだった。

数時間後。高町なのはとギンガ・ナカジマは体を完全に治療されて戻って来たが、二人とも何かに怯える様に体を震わせ続け、仕切りに『マッド怖い。マッド怖い』と顔を蒼くしながら呟き続けていた。

その様子に機動六課メンバー全員とヴィヴィオは心配そうに声を掛け続けたが、二人が元の精神状態に回復するには数日も時間が必要だった事を記しておく。因みにその様子を見ていたなのはは見るものを魅了する様な笑みを浮かべていたらしい。

そしてこの件が原因だろうが、この先、高町なのはは地上本部の仕事をしながらも定期的に休みを取る様に成り、ワーカーホリック

から脱したらしい。

数ヶ月後。機動六課隊長陣は決まっていた通り、地上本部に一士と全員所属し、地上本部で一からやり直し始める。今度は今までのように物事の本質を見えるように成ってから、もう一度自分達の夢をそれぞれ追う事を決めて。

ＦＷメンバーは今回の事件から自分達も勉強不足だった事が良く分かり、スバルとティアナは自分達の古巣に戻って、もう一度勉強してからそれぞれの夢をもう一度目指す事を決めた。特にティアナは異世界の自分自身と別れるまでの間に何度も模擬戦を繰り返していたので、必ず超えると心に決めている。

そしてエリオとキャロだが、最終的に彼らはフェイトとの相談の結果。ルーテシアと同様にＳｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院に通う事を決まった。リンディの言葉が在ったのも理由の一つだが、フェイト自身、自分の行動が本当に正しいのか迷い続けていたのも在り、フェイトは二人を説得して学校に通わせる事を決めたのだ。

その後、二人はルーテシアと再会し、仲の良い学友として生活している。

そして最後にレリックを外され、元の幼子に戻ったこの世界のヴィヴィオは、正式に高町なのはの養子に成り、高町ヴィヴィオと成った。

この件に関しては聖王教会が猛反発を起こしかけたそうだが、デュークモンの聖王の騎士として宣言を聞いている教会の教皇が、デュークモンの言葉を無かった事にして勝手に自分達の思い通りにヴィヴィオの人生を操れば、再びデュークモンが現れ、教会を潰すかも知れないと宣言し、反発を抑えた。

聖王教会は聖王を崇める者達が集まる場所。其処が聖王の騎士たるデュークモンの言葉を無かった事にすれば、教会は自らの掲げるものを否定する事に成る。そうなれば、教会は存在意義を失う事に成り、瓦解してしまう可能性に気が付いた教皇は、ヴィヴィオへの

一切の干渉を禁じたのだ。
そのお陰でヴィオは何の障害も無く、高町なのはの娘に成る事が出来た。
現在はエリオ達同様、Ｓｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院の初等部に通って、多くの同年代の学友達と共に色々な事を学び始めている。時たま訪れてくる異世界のヴィヴィオとは姉妹の様に仲が良く、ギルモンと共に遊ぶ事が在るらしい。

最後に今回の事件でブラック達にボコボコにされた戦闘機人達やスカリエッティに付いてだが、彼女達は事件が終わった後、全員聖王病院で入院する事に成った。
ノーヴェ、ウェンディ、ディード、オットーは精神的なものに寄って。
ウーノ、トーレ、クアットロ、セイン、セッテ、ディエチは肉体的なものに寄って。
ナンバーズの殆どの者達は重症患者として入院する事に成ってしまった。
無事で済んでいるのは、ナンバーズの内の二人、クイントに殴り飛ばされたドゥーエと地上本部襲撃時にスバルに寄って大怪我を負わされたチンクぐらいだろう。他の者達は何かしたの精神的外傷（トラウマ）を負ってしまっている。
特に酷いのはノーヴェ達であって、桜色をした物を見るだけで恐怖に体を震わせ、彼女達の居る病室には一切桜色の物を持ち込む事を禁止されるほどである。
ウーノ達にしても壁に埋め込まれていたせいか閉所恐怖症に成ってしまっていた。
クアットロとディエチは精神的外傷（トラウマ）は免れたが、何故か二人ともデュークモンの存在を神聖視し、聖王教会に傷が治り次第入信した

いと言っているらしい。
　そしてスカリエッティだが、体自体は一番重症で在りながら、その目は凄まじい程に生き生きとした光を浮かべており、ベットの上で全身を包帯でぐるぐる巻きにされながらも何かを考え続けるようにぶつぶつと小声で呟き続け、病院の関係者達を恐怖に陥れている。
　そのスカリエッティを甲斐甲斐しく世話しているのがドゥーエであり、他のナンバーズの世話をしているが逸早く治療を終えたチンクである。
　本来ならば今回の事件のような事を起こしたスカリエッティ達も裁かれる筈なのだが、スカリエッティが管理局最高評議会に命令されて違法研究を行っていた事と、スカリエッティがその為に生み出された人造生命体で在る事が分かり、管理局に保護されている状況に成ってしまったのだ。因みに彼らの入院費用は、全てスカリエッティが隠していた個人資産から出されている。

　そして最終的に彼らは、在る程度社会復帰出来るほど回復すると、地上の戦力を上げると言うレジアスの思惑も在って、ノーヴェ、チンク、ウェンディはスバルとギンガの父親であるゲンヤ・ナカジマに引き取られ、ナカジマ家の養子に成った。
　残るクアットロ、セイン、ディエチ、ディード。オットーは聖王教会に入信し、見習いシスターとして働いている。
　他のナンバーズ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、セッテはスカリエッティの体の治療費を稼ぐ為に、ノーヴェ達と同様に地上本部で働く道を選んだ。
　スカリエッティは最終的に禁固二十年の刑を、管理世界から言い渡された。
　体の怪我が完全に治らない事も在ったが、彼は既に人造研究には興味が無く、ブラックの存在だけを求めていた。
“自身の全てを持ってブラックの存在を解き明かし、何時か彼らが

住む世界に行く”

それこそが今のスカリエッティの夢で在り、目標でも在る。
各管理世界としてもスカリエッティの目的は、再びデュークモン達とコンタクトを取ると言う目的と一致するので、スカリエッティの頭脳が必要になった場合必要な研究を手伝う事を条件に禁固二十年の刑にしたのだ。

事件解決から一ヵ月後。今回の事件でミッドを危険に晒させた幹部達は全員がミッドチルダに作られた仮設の裁判所内部で、自分達が作って来た法に寄って裁かれ、死刑が宣告された。
一番の元凶であった最高評議会が何者かに寄って暗殺されていた事も在り、彼らは発見された全ての罪を背負って死刑にされた。
ミッドの人々はもはや彼らを正義などと呼ばない。ミッドの人々が彼らを呼ぶ時の言葉は一つ。

“ミッド最悪の大罪人”

後の歴史に彼らの名は汚名として刻まれ続けるだろう。
付き従っていた局員達にしても、全員が無期懲役を言い渡されている。

「これで少なくとも、管理局の闇の一部は消えたわね」

「だろうな。だが、この先は分からん」

「全ての闇が消えた訳ではないですからね。この世界がこれから良い世界に変わるかどうかは、この世界に住む人々次第ですよ」

遠くに見える仮設の裁判所をビルの屋上から眺めながら、リンディ、ブラック、ルインはそれぞれ言葉を言う。
ブラックは在る程度そのまま裁判所を眺め終えると、裁判所に背を向ける。

「行くぞ。休暇は終わりだ。この世界には俺の敵になる存在は居なかった」

「そうね。十分に体は休めたし、私達は戻りましょう」

「了解です、ブラック様」

ブラックの言葉に対して、リンディとルインはそれぞれ答えると、足元に魔法陣を発生させ、その場から転移して、自分達の世界に戻って行くのだった。

おまけ

ーーールインSide

深夜。誰もが寝静まる時間帯。
その様な時間帯にルインは唯一人アースラ内部の通路を歩いて食堂へと向かっていた。
だが、その表情は不機嫌さで満ち溢れていた。

（全くイヤですね。何で私があの連中の為に歩かなければいけないんですかね？・・・・あの生真面目。私の事を守護騎士達にだけは伝えておけば良いのに。絶対にややこしい事に成りますよ）

ルインがこの様な夜更けに食堂に向かっているのは、昼間の話し合いの時にシグナムから念話が届いたからだ。

“深夜に会って話がしたい”

その様な念話が届いた理由もルインは分かっている。
ルインの容姿はこの世界では十年前に消滅した筈の『夜天の魔導書』の管制人格であるリインフォースと蒼い瞳以外、瓜二つと言って良いほどに似過ぎている。半身なのだからルインとリインフォースの容姿が似ているのは当然なのだが、ルインの正体を知らない守護騎士達や八神はやてからすれば驚きだろう。
昼間は、はやてが闇の書の主だった事を知らない者達もいた為に聞かなかったのだろうが、それでもルインの正体が気になり、深夜に呼び出し聞こうとしているのだ。
本来ならばルインは主で在るブラックや仲間のリンディ達以外の頼みを聞く事が無い上に、相手は異世界とは言え八神はやてと守護

騎士達。ルインにとっては和解する事などありえない敵なのだが、今回だけはルインも色々とはやて達の言いたい事があるので了承したのだ。

（あの生真面目には本気でムカつきますね。元の世界に戻ったら必ず嫌がらせして上げましょう。この容姿と奴の名を使ってブラック様達と何処かの高級レストランで食事を取るのも良いですね。いえ、それよりもヴィヴィオちゃんがお寿司を食べたいと言っていましたし、回転寿司で食べるのも良いですね。最近はリンディさんと一緒に寝ていますし、此処は少しでもポイントを稼いで、何としても私をママと呼ばせたいです）

その様にルインが内心で元の世界に戻ってからの行動を考えながら通路を進んでいると、食堂へと辿り着いた。

人の気配など本来ならば無い筈の場所から感じられる複数の気配に、ルインは表情を険しくしながら食堂の中へと入り込み、食堂内部を見渡す。

「・・・・・呼び出しに応じて来て上げたんですよ。出て来たら如何です？『烈火の将』シグナム。『鉄槌の騎士』ヴィータ。『湖の騎士』シャマル。『盾の守護獣』ザフィーラ。あの生真面目の名を受け継いだ『祝福の風』リインフォース・ツヴァイ。そして『夜天の王』八神はやて」

「・・・・・・やはり貴様は闇の書に関わりの在る者か？」

暗がりの中からシグナムの声が響くと、食堂の明かりがつき、警戒しながらルインを見つめているはやて達が姿を現す。

「・・・・アンタは一体誰や？何で消えたあの子と瓜二つ何や？」

「ハァ～・・・・やっぱりですか」

「何がだよ！？」

ルインの呆れたような声にに、ヴィータは噛み付くように叫ぶが、ルインは構わずに近くに置いてあった椅子に座り語り出す。

「やっぱり、あの生真面目は闇の書に隠されていた真実を話していなかったんですね？」

「闇の書に隠された真実やて？」

「そうですよ。闇の書の闇と呼ばれた防御プログラムに隠された真実。闇の書の闇は真の主を得た時、世界を滅ぼす暴走を行わず、真の主にその力を与えるんですよ」

『なっ！？』

ルインが告げた闇の書の隠された真実に、はやて達は驚いた声を上げた。

あの幾つもの世界を滅ぼし、多くの悲しみを生み出した闇の書の闇である防御プログラムが真の主ならば制御出来る物だと告げたられたのだから、驚愕するのも当然だろう。

「そもそも闇の書の闇たる防御プログラムは人間が望んだ果てに生み出された存在。世界さえも手中に治めようとした人間と言う存在が生み出したものが、扱えない筈は無いでしょう？ですが、世界など人間個人でどうこう出来るものではない。アレの力を扱えるのは人間では不可能だった。その結果が制御出来ない力の暴走に至り、

全ての闇の書の悲劇に繋がったんですよ」

「で、出鱈目を言わないで！？」

「そうだ！そんな重要な事を何でアタシらが知らなかったんだ！？」

「管制人格で在った奴もその様な事は言っては居なかった！？」

「これ以上の戯言は赦さんぞ！！」

ルインの告げた事実に対して、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、シグナムは否定の叫びを上げて、それぞれ待機状態のデバイスを取り出し始める。

ルインの言葉が真実だとすれば、はやては真の主で無いと言う事に成り、あの時の行動が全て無意味だった事に成る。その様な事が、はやてに忠誠を誓っているシグナム達には認められず、ルインの言葉を否定したのだ。

だが、ルインはその様子を見ても呆れたように目を細めながら冷静に話を続ける。

「貴女達守護騎士達が知らなかったのは当然ですよ。闇の書の真実は真の主と管制人格、そして防御プログラムだけが知るべき事。守護騎士プログラム程度の下級のシステムが知るには重すぎる真実だからです。だって、例え守護騎士達や管制人格が主と認めようと、最終的な主の判断権は管制人格の生真面目ではなく。防御プログラムだけが持っている。防御プログラムこそが闇の書に取って最も大切なものなんです。管制人格だったあの生真面目が伝えなかった理由も簡単ですよ。“貴女達に背負わせたくなかった”。奴は闇の書に隠された真実を知りながら、半身であった防御プログラムを滅ぼす手伝いをしてしまった。防御プログラムの苦悩と孤独を知りなが

らもね」

「苦悩と孤独やて？」

「望まれて生まれたのに誰もが否定し、その存在を認めようとしない。主に成れる存在も見つからず、ただ永久に目覚めれば全てを破壊する様な行動しか取れない。体の自由は存在せず、本来の姿で表に出る事も出来ず、ただ破壊を行う事しか出来ない。そして勝手に生み出しておきながら世界に否定され続ける。最後には仲間であった守護騎士達や半身で在った管制人格にさえも否定され、孤独の内にこの世界の防御プログラムは消えた。それは何て悲しく寂しい最後なんでしょうね」

『・・・・・』

深い悲しみに満ちたルインの言葉に対して、はやて達は言葉も出す事は出来なかった。

もはやはやて達はルインの告げた真実は、全て事実だと内心で認めていた。

深い悲しみに満ちたルインの言葉には、十分過ぎるほどに説得力が在った。

生み出されたのに誰もが否定し、真の主が見つからなければ本当の姿で現れる事も出来ず、ただ破壊しか出来ない存在。そして最後には仲間や半身にさえも否定された。

それを行わなければ世界が滅びていたとは言え、一方的に否定されたこの世界の防御プログラムの悲しみは計り知れないだろう。

そしてはやて達は同時に気が付いた。目の前に居るルインこそ、異世界の闇の書の闇の防御プログラムが真の主を得た事に寄って、本来の姿を取り戻した存在だと気が付いたのだ。

「“世界に否定されし深き闇を従えた黒き竜人”。予言の一文に在ったものやけど。深き闇って、闇の書の防御プログラムやったんやな」

「そうですよ。ブラック様だけが私の存在を認め、名さえも与えてくれて共に歩もうと言ってくれました。あの時は本当に嬉しかった。私にとっての主はブラックウォーグレイモン様だけです。あの方を護る為ならば喜んでこの身を差し出しましょう」

ルインは夢を見ている様に語り、ブラックとの出会いを思い出す。あの時にブラックが現れなければ、自身もこの世界の自分と同様に消滅していただろう。ブラックだけが自分と言う闇の存在を認めてくれた。罪深い存在であるルインを認めてくれた。

だからこそ、ルインは全身全霊を持ってブラックに仕える。

何者であろうとブラックの存在を脅かす者は赦さない。

その想いを胸に持って、ルインはブラックと共に歩んでいる。

故にルインは目の前の守護騎士達の行いをが赦せない。

「それで貴女達、守護騎士達は一体何をやっていたんですか？」

「何？」

ルインの言葉の意味が分からず、シグナムは疑問の声を上げ、シャマル、ヴィータ、ザフィーラも訳が分からないと言うようにルインを見つめる。

その様子にルインは、守護騎士達が何も分かっていない事に気が付き、本気で呆れたと言うような視線をシグナム達に向ける

「主を敬い敬意を示し、忠義を尽くす。騎士としては最も大切な事ですが、騎士はそれだけでは無い筈です」

「何を言って？」

「騎士が行う役割はもう一つ。主が間違った道に進みかけた時に声をかけ、その道を正しく戻す事です」

『ッ！！』

ルインが告げた言葉に、シグナム達はハッとしたような表情を浮かべ、ルインとはやての顔を見つめる。

ルインは言外にはやてが今の道を進んでしまったのは、シグナム達のせいでも在ると告げたのだ。

「闇の書の存在で八神はやての負い目が在るんでしょうけど、それでも貴女達の行動は騎士として最低の行為です。騎士の所業に寄って生まれた負債を主で在る八神はやて一人に背負わせた。本来ならば貴女達が背負うべき負債を主で在る八神はやて一人に背負わせるなど、騎士として相応しくない最低の行いです。この世界の生真面目が何の為に貴女達を残したと思っているんですか？消えて行く自分の変わりに主を支えて欲しかったからでしょうが！！」

「ま、待ってや！？皆は私の為に…」

「黙っていなさい！私が話しているのは守護騎士達で在って、貴女ではない！！」

はやての言葉をルインは切り捨て、すぐさま顔を俯けているシグナム達に顔を向ける。

「主を護ると言う事は、何も体だけでは無いです。その心も護れて

こそ、真の騎士と呼べる存在です。デュークモンは例え自分がこの世界のヴィヴィオちゃんに憎まれようと高町なのはに戦いを仕掛けました。彼は真の騎士です。本当に護るべきものが見えていたからこそ、彼は異世界とは言え主君の大切な母親とさえも戦った。その結果、この世界のヴィヴィオちゃんに嫌われる事に成ったとしても彼は止まらなかったでしょう」

デュークモンに取ってはヴィヴィオの幸せこそが一番大切な事。その為ならば、自身の主であるヴィヴィオに嫌われようと戦う。その姿は正に主君の為に自分さえも差し出す騎士。

だが、シグナム達は騎士を名乗っていても、はやての体しか護れず、心は護れなかった。

その為にはやては本来ならば背負わなくていいものまで背負い、理想ばかりに目を向け、現実を見れなくなってしまっていた。ある種の逃避の様に。

「主の言葉だけに従うのは騎士とは呼べません。主が間違った道を進み始めた時に、止める行動を行う事こそが真の忠義の騎士です。本当に騎士を名乗りたいのならば、自分の心にもう一度問い掛けなさい。自分達が願った事をね」

ルインはそうシグナム達に向かって告げると、食堂の入り口に足を向け、食堂を出て行く。

その様子を見ていたシグナムは、フッと顔を天井に向け、ヴィータ達に声を掛ける。

「・・・・・まさか、異世界とは言え、我らが否定した者に騎士を語られるとはな・・・・・私は将を名乗る資格は無いな」

「・・・・それを言うならアタシもだ・・・・・護るなんてほざい

ていながら・・・・結局何も分かって居なかった」

「・・・・私もよ・・・・体の傷は治せても・・・・心の傷には目を向けていなかった」

「・・・・盾の守護獣などと叫びながら・・・・本当に護るべきものが見えんとは・・・・我も愚か者だ」

「・・・・リインもです・・・初代の名を継ぎながら・・・・初代の思いを継げて無かったです」

「・・・・皆」

それぞれ自身の未熟さを表す様に語るシグナム達に、はやては慰めの言葉を掛けようとするが、シグナム達ははやての言葉に構わず、はやての前に並び膝を付く。

「主はやて。今此処に我々は再び誓います。我々の夢ー主と共に平穏な日常を歩む。その願いを我々は必ず叶えます。貴女の望む未来の中に、それが無ければ我々は貴女に剣を向けるかもしれません」

「・・・・シグナム」

はやてはシグナムが告げた言葉に落ち込みながら顔をうつむかせる。

自身の家族で在るシグナム達にさえも否定されてしまったと想い、絶望がはやての心に浮かび始めて来たのだ。

シグナムはその様子に辛そうな表情を一瞬浮かべるが、すぐに表情を真剣に戻しはやてに言葉を告げる。

「ですが、もし貴女の望む未来の中に、我々の望む平穏が在るのならば、我々は主の剣となり盾と成って、共に歩み、貴女の体と心を全身全霊を持って護ります。この誓いだけは絶対に違えません！」

「ッ！！・・・・・・ありがとうな・・・・皆・・・・ヒック、ヒック」

シグナムの言葉とヴィータ達の力強い同意の頷きに、はやては嬉し涙を流しながら言葉を言う。

そのはやての表情は本当に嬉しそうな朗らかな笑みを浮かべていたのだった。

その様子を隠れながら伺っていたルインはもはや用は終わったというように、度こそ食堂に背を向け、自身が寝泊りしている部屋に向かって歩きながら内心で不満の叫びを上げる。

（全く！あの生真面目は異世界でも気に入りませんね！絶対に帰ったら嫌がらせしてあげます！）

そうルインは内心で叫ぶと、自身の部屋に向かって足早に歩いて行くのだった。

ーールインＳｉｄｅ　ＥＮＤ

ーーークイントＳｉｄｅ

アースラ内部に在る訓練室。

その訓練室内部では三つの蒼い閃光が互いにぶつかり合い、それ

に寄って激しい激突音が何度も訓練室内部に鳴り響いていた。
その内の一つの閃光ークイントは、自身に迫って来ている、残る二つの閃光ーギンガとスバルに向かって嬉しそうな笑みを向けながら叫ぶ。

「ほら！もっと素早く攻撃しないと私には当たらないわよ！私を超えるんじゃなかったの！？ギンガ！スバル！」

『ハアァァァァァァァーーーー！！！！！』

ギンガとスバルはクイントの言葉に答える様に叫びながら、自分達の足に装着されているデバイスーギンガはブリッツキャリバーを、スバルはマッハキャリバーを加速させクイントに拳を放ち始める。
クイントもそれに答えるように、自身も履いているローラブーツを加速させ、ギンガとスバルに向かって拳を放ち始めた。

何故クイントとギンガ、スバルが戦っているのかと言うと、ことの起こりは二時間前に遡る。

二ーー時間前

クイントは食堂で朝の朝食をこの世界の娘であるスバルと一緒に取っていた。
だが、その量はどう考えても朝食の量ではなく、既に十人分ぐらいの皿が二人の横に置かれていた。
それでも尚、二人の食事の量は衰えず、次々と大量の料理がクイントとスバルの口の中に消えて行く。

「・・・・・正に親子ね。スバルと同等の量を食べるなんて」

目の前に置かれている大量の料理が次々と消えて行く様子を見ながら、この世界のティアナは頭を抱える様に呟き、自身の横に座ってクダモンに小皿によそった料理を渡している異世界の自分自身に声を掛ける。

「・・・・驚かないの？大食いチャンピオンが目の前に二人も現れたのに？」

「一々驚いてたら、気が持たないわよ。それに、これ以上の量を食べるデジモンとも出会った事が在るからね。驚けないから」

「デジモンに取ってはこの程度の量の食事など普通だと言う者が居るからな。一般的な世界の常識など既に忘れた言葉だ」

「・・・・・どんな世界なのよ、貴女の世界は？」

この世界のティアナはどんよりした気持ちに成った。

最初に会った時から既に数日経過したが、それでもこの世界のティアナは異世界の自分自身の経験した出来事に何度も頭を抱えたくなった。

曰く、管理局員だった筈の兄ーティーダと親友だった広域次元犯罪者に引き取られて鍛えられた。

曰く、Sランクオーバーの実力者が大量に存在する世界を旅した。

曰く、世界を滅ぼせる力を持った神のような存在に喧嘩を売った。

曰く、第二の師と呼べる存在は、学ランを着た獣人。

などなど、この世界のティアナからすれば卒倒する様な出来事を次々と平然に語られている。

「・・・・・・凡人って何なのかしらね？私が貴女の戦いを経験したら、一瞬で死んでいるわよ？」

「そうでもないわよ。私も一人なら絶対に死んでいたでしょうね。生き残れたのはクダモンのおかげよ」

「それは違うな。ティアナの頑張りが在ってこそだ」

「・・・・・とにかく、私の常識は消えたわ」

この世界のティアナはもはや呆れたように、言い争いに近い事を始めた異世界のティアナとクダモンを見つめる。

その間にもクイントとスバルの食事は続き、そろそろ終わりにさしかかろうとした瞬間。

「母さんッ！！！」

食堂に大きな叫び声が響いた。

その声の主に気が付いたクイントは食事を止めて、声が響いた食堂の方を見てみると、ギンガが怒りに満ちた顔をしながらクイントに向かって歩いて来る。

「あらギンガ？思ったよりも早く精神が回復したみたいね」

「ええ、お陰さまで体の調子は好調よ」

「良かったわ。流石はフリート。マッドだけど腕は次元世界一ね」

「・・・・・・そのマッドに私は体を弄り回させたのは何処の誰ですか？」

ギンガは皮肉げにクイントに声を掛けた。
ギンガは数日前にクイントの紹介で、クイントの世界の最高の医療技術を持つフリートの治療を受けたのだが、体は確かに完全な状態に治った。
だが、フリートが治療だけで終わらせる筈も無く、色々とギンガの精神に深い傷を残しそうな事を行い掛けた。最もその前にクイントがフリートを止めたのだが、治療している時に隙在らばフリートは自身の欲求のままに動いたりして、最終的にギンガ、そして同行して治療を受けた高町なのはも精神に深いダメージを精神に負い、今日までアースラ内部の医療室で恐怖に震えていたのだ。
もちろん、その事を知っているクイントはギンガの皮肉の意味も分かってるのだが、気にせずに笑みをギンガに向ける。

「まあ、最終的には何も無かったんだから良いでしょう。あぁ見えてフリートは一応常識を持っているからね」

「・・・・あの人に常識が在るとは思えなかったけどね」

「え～と？ギン姉？お母さん？」

ギンガとクイントの会話の意味が分からなかったスバルは疑問の声を上げるが、ギンガもクイントも答えず、クイントは別の話を始める。

「さて、終わった事は良いとして、ギンガ、スバル。二時間経ったらアースラの訓練室に来なさい」

『エッ？』

突如として告げられたクイントの言葉の意味が分からず、ギンガとスバルは疑問の声を上げた。
クイントは座っていた椅子から立ち上がり、ギンガとスバルに意味深な視線を向けながら二人に背を向ける。
「この世界の私はもう居ないんでしょう？だったら、私が代わりに鍛えて上げる。貴女達の不完全なシューティングアーツを完成させて上げるわ。この世界に私が居る間にね」
クイントは言葉を告げると共に、二人に背を向けて歩き始める。
残されたギンガとスバルは困惑したように顔を見合わせるが、クイントの言葉の意味が分かると嬉しそうな笑みを浮かべるのだった。

現在

ーーードゴオン！！
「ガハッ！」
「スバルッ！！」
クイントが無言と共に突き出した拳は、スバルの脇腹へと直撃し、スバルは苦痛の声を上げながら吹き飛んで行く。
吹き飛ばされるスバルの姿を見たギンガは、スバルに向かって心配そうな叫びを上げるが、すぐさま殺気を感じ、クイントに向かって構えを取る。

それに対してクイントは笑みを浮かべると、両足のローラブーツを更に加速させ、ギンガに肉薄しながら拳を連続で放つ。

「良い判断ね。スバルを追い掛けていれば、その時点でアウトだったわよ」

「クッ！（強い！私達の知っている母さんよりも遥かに！バリアジャッケトもデバイスも無しでこの強さ・・・・あのリンディさんって言う人と同じ存在！）」

次々と繰り出されるクイントの拳を両腕で防御しながら、ギンガはクイントの正体に気が付き戦慄した。

魔導師には魔法を発動させる為に必ず魔力を必要とする。だが、クイントの攻撃は魔力の使用など関係ないので、魔法の発動で動きを読む事が出来ない上に、戦闘機人で在る筈のギンガやスバルに簡単に迫れる戦闘能力。

どれを取っても厄介としか言えない存在にクイントは成っていた。

（母さんの世界の管理局が危険視する筈ね。母さんの様な存在が沢山いたら、魔導師や戦闘機人の意味なんて無いわよ）

ギンガは何故クイントの世界の管理局がリンディの抹消命令を出したのかハッキリとその体で感じ、納得したと言う様に内心で頷いた。

クイントやリンディの様に魔導師を超えた存在が何十体と居たら、管理局に取っては脅威としか呼べないだろう。だが、違う。クイントの世界の管理局が真にリンディ達の存在を恐れているのは、魔力も無く魔法を発動させる事だけではない。

クイントがその気に成れば、Ｓランクオーバーの魔導師にさえも勝つ事が出来る様に成る“進化の存在”。

それを使えば、現在のギンガとスバルではクイントに勝つ事さえも不可能なのだが、クイントはこの戦いでは進化するつもりは無かった。その為にフリートに前々から頼んでおいたローラブーツを両足に付けて、ギンガとスバルと戦っているのだ。

（やっぱり二人のシューティングアーツは不完全よね。全てを教える前にこの世界の私が死んだ事が原因だろうけど。なら、二人にシューティングアーツを少しでも鍛えて上げるのが私の役目ね）

先ほどまでの攻防でクイントはギンガとスバルのシューティングアーツが不完全で在る事を見抜いていた。

恐らくこの世界のクイントが全てを教える前に死んでしまった事で、二人のシューティングアーツは細かな所がクイントのシューティングアーツとは違うのだ。

その事に気が付いたクイントはギンガとスバルを鍛え直す積もりで戦っている。

「クス、面白い技を見せて上げるわ、ギンガ。私の世界のギンガとスバルが苦労して完成させた技よ」

「エッ！？母さんの世界の私達が！？」

一時攻撃を止めて立ち止まったクイントに向かってギンガは疑問の声を上げると、クイントは頷き、右拳に力を集中させながら構えを取り出す。

「私の世界のギンガは早い段階でシューティングアーツの弱点に気が付いたわ」

「シューティングアーツの弱点？」

「そう、シューティングアーツの一番の特徴はローラーでの加速度をそのまま打撃力に変える。だけど、それが特徴であり弱点でも在る。例えば狭い密閉空間では加速度が付けられず思ったよりも威力が出なくなる。それに攻撃の軌道も見切られ易いわね。覚えが無い？」

「ッ！！」

ギンガはハッとしたように目を見開きながら、ナンバーズが地上本部に襲撃して来た時の事を思い出した。

確かにクイントの言葉どおり、あの時も狭い密閉空間でナンバーズ達とギンガは戦い、ギンガは敗北した。一対三だった事も在るが、確かにクイントの言うとおり加速が思うように付けられず、ギンガは本来の力を出せなかった。

その原因の一つには密閉空間での戦いをギンガが経験した言が少なかった事も上げられるだろう。

戦闘の経験から密閉空間での対処も見つけられるかも知れないが、ギンガは二十にも満たない年齢。当然ながらクイント寄りも遥かに経験が少ない。

「屋外での戦闘なら豊富でしょうね。ゲンヤさんはシューティングアーツの特徴を良く知っているから、ギンガにはそれを活かせる場所で鍛えてくれた筈よね？」

「その通りよ、母さん」

「だから、今から見せる技を良く覚えなさい。この技は対密閉空間用の技だけではなく、十分に屋外でも最高に使える技なんだからね」

「・・・・絶対に物にして見せるわ！異世界の私達の技なんだからね！」

「良い答えよ！！しっかり防御しなさい！」

ギンガの叫びに答える様にクイントは叫ぶと共に、構えていた右拳の周りに渦のようなものを発生させ始める。

（アレはリボルバーシュート？何で射撃魔法のリボルバーを？）

クイントの右腕の周りに発生した現象を見たギンガは、クイントの言う技が自分の知る物であった事に疑問の声を内心で上げるが、それでも警戒は止めず、クイントの技に対する防御行動を取った瞬間。

ーーーードゴオオン！！

「ッ！？」

クイントの姿が突如としてギンガの視界から消失し、ギンガの防御の上からクイントの右拳が突き刺さっり、ギンガは驚愕しながら壁へと吹き飛んで行き、背中から壁に激突した。

その様子を離れていた所で見ていたスバルも信じられないと言うように、ギンガを壁へと吹き飛ばしたクイントを見つめる。

スバルの見ていた限り、クイントの拳はギンガの防御の上に直撃した。にも拘らず、クイントの一撃は防御していた大人の女性並みの体重を持つギンガを軽々と吹き飛ばしたのだ。

離れていたスバルでさえも何が起きたのか分からないのだ。恐らく受けたギンガにも訳が分からないだろう。

だが、驚愕はそれでは治まらなかった。

「ガハッ！！」

「ッ！！ギン姉！？」

罅が入った壁の前でギンガは突如として血を吐き、スバルは心配そうな表情を浮かべてギンガに近寄ると、その表情は更に驚愕に染まった。

何故ならば確かにギンガは両腕でクイントの一撃を防御した筈なのに、ギンガの姿は腹部の部分のバリアジャケットが消失していた状態に成っていただけではなく、腹部には赤黒い痣が刻まれていたのだ。

それだけではなくギンガの左腕に装備されているリボルバーナックルもかなりの損傷が見える状態に成っている。

クイントが放ったのは僅か一撃。それだけで防御さえもしていた筈のギンガが、完全に戦闘不能な状態に陥った。

「今のが私の世界のギンガとスバルが編み出した対密閉空間用の技よ。しかもこれは本来リボルバーナックルを装備した状態でこそ、最大の威力を発揮する技。私が今の状態で使っても、本来の威力の半分以下が限界ね」

「これで半分以下！？」

スバルは信じられないと言う声を上げて、未だにダメージから回復する事が出来ずに苦しんでいるギンガを見つめる。

ギンガの苦しみ方からして、凄まじい威力なのは先ず間違いない。それなのにクイントは本来の威力の半分以下だという。ならば本来の状態で放てば、一体どれほどの威力に成ると言うのだろう。

その事に気が付いたスバルは自分達が覚える技に恐怖するが、ク

イントは構わずに今度はスバルに向かって右拳を構え出す。

「さて、次はスバルの番よ。技を手っ取り早く覚えるのには、その体で受けるのが一番！」

「エッ！？ちょっとお母さん！？」

「今の技は私の在る技を、私の世界のギンガとスバルが見て覚えた技。二人は研究を重ねて編み出したから二、三年掛かったけど。そんな時間は貴女達には無いわ。だからその体で覚えなさい！大丈夫よ。傷が出来てもフリートに治療を頼むから」

「全然大丈夫じゃないよ！！」

スバルはクイントの言葉に対して涙ながらに叫ぶが、クイントは構わずにギンガの時と同様にスバルへと右拳を叩き付け、訓練室に悲鳴を轟かせるのだった。

このクイントとギンガ、スバルの訓練はクイントが元の世界に戻る日まで続いたが、訓練に向かうギンガ、スバルの表情は亡き母親と訓練出来る喜びに満ち溢れていたと言う。

ーーークイントＳｉｄｅ　ＥＮＤ

ーーーリンディＳｉｄｅ

機動六課の者達と出会ってから数日が経ったある日。その日のリンディは朝から非常に不機嫌だった。

ブラックがまた何処かで好き勝手に暴れた訳では無い。その事はもはや日常茶飯事に成っているので、リンディはその事に関してはもう諦めている。
では、何故リンディは不機嫌なのか。それはこの世界で最も会いたくない人物が、アースラへとやって来る事が分かったからだ。

「・・・・・」

「リンディさん。そんなに不機嫌なオーラを振りまいていたら、ヴィヴィオが泣きますよ？」

「そうですよ。少しは落ち着いて下さい」

アースラのブリッジ内部の座席に座りながら、不機嫌さに満ちたオーラを放つリンディに向かって、なのはとガブモンはそれぞれ抑える様に声を掛ける。
だが、リンディは変わらずに不機嫌オーラを全力で放ち続ける。
その様子になのはとガブモンは溜め息を吐くが、リンディが何故不機嫌なのかも十分過ぎるほどに理解していた。

「やっぱり私と同じだね。リンディさんも嫌悪しているんだよ」

「そうだろうね。今のリンディさんには納得出来ないんだろうね。この世界の自分自身が」

そうリンディが此処まで不機嫌なオーラを放つのは、なのはと同様にこの世界の自分自身が赦せないからだ。今のリンディは子供を戦いの場に出す事を嫌っている。
そのリンディにとって、過去の自分の行動ーなのはを想いを利用して戦いの場に出した事ーは、本気で自分を殺したくなる程に赦せ

ない事。そしてこの世界のリンディ・ハラオウンは管理局員のまま。
リンディがなのはと同様に自分自身を嫌うには充分過ぎる理由だった。

「・・・・会わなければいけないのは分かるのよ。この世界の私にも色々と言いたい事が在るからね」

「その気持ちは充分過ぎるほどに私には分かります。私も何度この世界の私をボコボコにしたいと思った事か」

「・・・・・・アレだけやっても足らないの？」

ガブモンは冷や汗を流しながらなのはを見つめて呟いた。
此処数日、フリートのマッド治療の影響から漸く回復した高町なのはとなのはは互いにぶつかり合っていた。
在る時は料理勝負で、どちらの料理の腕が上なのか。
また在る時は地球の中学レベルのテストで学力を競い。
また在る時は魔法技術で競い合い。
また在る時は死闘さながらの模擬戦を行ったりしていた。
そしてその全てになのはは高町なのはに勝利し、圧倒的な実力差を示したのだ。
料理勝負ではなのはの方に圧倒的に分が在る。何故ならばなのはは母親である桃子の喫茶店を継ぐために日夜料理の腕を上げている。
学力にしても中卒の高町なのはと違って、なのはは高校を出ている為に学力も上。
魔法技術にしても、なのはは伝説の地で在るアルハザードで学んでいる。
そして最後の模擬戦。ブラスターシステムを遥かに超える強化を行えるセラフィーモードを使いこなせるなのはに高町なのはは全く歯が立たず、圧倒的な実力差を見せつけて敗北に追い込んだ。

最もなのはと高町なのはの模擬戦で使ったのは互いにエクシードモードまでだが、それでもなのはの方が圧倒的だった。にも関わらず、なのはは未だに高町なのはとの争いを止める事は無かった。

「充分過ぎるほどに、僕は実力差を示したと思うんだけど？」

「全然足らないよ。あっちだってまだ負けたと思っていないからね。絶対に負けを認めさせて上げるんだから！」

（無理だと思うよ。だって二人とも結局の所は似ているんだもん。特に頑固な所がね）

息を撒くなのはの姿を見ながら、内心でガブモンは冷や汗を流しながら呟いた。

結局の所、なのはと高町なのはがいがみ合う理由は一つ。“同属嫌悪”なのだ。

二人ともベクトルはかなり違うが、それでも根元たる頑固な所だけはそっくり。だからこそ二人のなのははぶつかり合っている。

（ティアナとヴィヴィオの二人だけだよね。出会っても全然喧嘩しなかったのは）

なのは達と違って二人のティアナとヴィヴィオの仲は結構良好である。

ティアナは互いに銃使いと言う事で、語り合ったり模擬戦を行ったりしている。なのはとリンディと違ってかなりの良好な関係である。

ヴィヴィオにしても純真な性格の為に、互いにいがみ合う事など無く、姉妹の様に仲が良く、ギルモンが進化したグラウモンの頭の上に乗って毎日楽しそうに遊んでいる。

にも関わらず、二人のなのはの関係は益々険悪に成っていくばかりで、ガブモンが頭を痛めていると、ブリッジの入り口の扉が開き、翡翠の長い髪を頭の後ろで縛った女性ーこの世界のリンディ・ハラオウンがブリッジの内部に足を踏み入れ、リンディへと近寄って来る。

「・・・・・こんにちはが正しいのかしらリンディ？」

「・・・・・そうね。それが正しいわリンディ・ハラオウン」

困惑しながら質問して来たリンディ・ハラオウンの言葉に、リンディは素っ気無く答えながら椅子から立ち上がり、険しい視線をリンディ・ハラオウンへと向ける。

「・・・・・自分を見ると言うのは、不思議なものね」

「そうね。フェイトから聞いていたけど、こうして異世界の自分と出会うと言うのは、不思議な気持ちに成るわ」

「余り良い気分ではないけどね」

リンディは素っ気無く答えると、椅子に座るようにリンディ・ハラオウンを促す。

それに対してリンディ・ハラオウンは頷くと、近くに置いてあった椅子に座り、リンディも椅子に座りなおすと互いに向き合う。

「・・・・・アースラに来るのは久しぶりだけど。貴女は如何なの？」

「私からすれば忘れられない場所ね。何せ私が、リンディ・ハラオ

ウンが死んだ場所だから」

「ッ！！！」

告げられた事実にリンディ・ハラオウンは驚愕に目を見開きながらリンディを見つめるが、すぐさまリンディの横に立っているなのはに顔を向け、なのはは無言で頷く。

同意の頷き。それをみたリンディ・ハラオウンは呆然としたしながらリンディを見つめると、リンディは語り出す。

「私達の世界での十年前。私達の世界のリンディ・ハラオウンは一つの存在と闇の書事件で出会った。その存在は存在するだけで世界に悪影響を与え、世界を滅ぼす可能性を持った存在だった。リンディ・ハラオウンは多くの世界の為にも存在を滅ぼす為に、その存在が告げた警告を無視して攻撃を加えた。結果、アースラは撃沈。その時の唯一の死亡者が、リンディ・ハラオウンよ」

「・・・・・だったら、如何して貴女は私の前に居るの？」

「貴女の目の前に居るのはリンディ・ハラオウンの成れの果てよ。そして私は唯のリンディに成った。あの人を護る事を決めてね」

「あの人？」

リンディの言葉にリンディ・ハラオウンは疑問の声を上げた。

リンディ・ハラオウンの知る限り、十年前の闇の書事件の時に、自身が護りたいと思う様な人物は息子であるクロノやアースラメンバーになのはやフェイト位だ。

だが、今のリンディの言葉には深い愛情が感じられた。息子や友人に向ける愛情ではなく、死んだ夫ークライド・ハラオウンに向け

ていた愛情が。その様な人物が思い浮かばず、困惑しながらリンディを見つめる。
その様子を見ていたリンディは、リンディ・ハラオウンが内心で考えている疑問を正確に察するが、疑問には答えずに用件を質問する。

「それで貴女は如何して此処に来たの？本局の総務統括官である貴女はかなり忙しい状況だと思っていたんだけどね？」

「・・・・ええ、お陰さまで本局は創設以来の大混乱の状況よ」

リンディ・ハラオウンは頭が痛いと言う様に答えた。
現在の本局は、リンディ達の管理局の真実暴露、及び各世界の調査者達が調べた事に寄って大混乱に塗れている。潤沢な予算や多大な権限を与えられながら、内部に大量の犯罪者を匿っていた。
その事実だけでも最悪だと言うのに、護るべき世界―ミッドチルダにアルカンシェルを撃ち込もうとした。この事により管理局本局は完全に民間からの信用を失い、現在は各世界が主導で再編に在ったっているのだ。
その様な重大な時期に総務統括官であるリンディ・ハラオウンがアースラへとやって来たのだから、何か在ると考えるべきだろう。
最もリンディには既に予測が付いている。この状況でリンディ達に会いに来る理由など簡単に思い浮かぶ。

「地上本部への取り成しや、協力なんて絶対にしないわよ。今回の事件は完全に本局の自業自得。そんな連中に力を貸す理由は無いわね」

「・・・・・やっぱり駄目かしらね？」

「無理ね。寧ろ今更私達ーデュークモン達が本局に協力する方がおかしいわよ。この状況で協力したら益々本局は立場を悪くするわね。地上本部への取り成しは自分達で頑張りなさい。最も今まで散々地上を馬鹿にしていたエリート意識が高い本局がおいそれと頭を下げるとは思えないけどね」

「・・・・・私よりも現状が分かっているわね」

リンディ・ハラオウンは自身よりも目の前の異世界の自分の方が良く現状を分かっていると、心の底から思った。

リンディの言うとおり、今の現状でデュークモン達が本局に協力するのは在りえないのだ。

あそこまで散々ボロボロにしたのに今更本局にデュークモン達が協力すれば、本局の者達が彼らを脅していると民衆に思い込まれ、唯でさえ信用が地に落ちている本局の信用は、地の底まで落下するだろう。そうなれば、何とか潰されずに済んでいた本局が今度こそ潰される事に成りかねない。

そんな事に成ったら次元犯罪者が暴れに暴れ、各世界の治安は悪化の一歩を辿る事に成る。

その事が分かっているリンディ達は、地上には影ながら多少の協力はしても本局には協力する気など一切無い。

地上本部への取り成しもそうである。現在地上の改革に乗り出しているレジアスに頭を下げるだけで、地上は本局と共同体制を整えられる状況に成っている。

今回の事でレジアスも陸と海は本格的に共に動く現状を作るべきだと言う考えが浮かんだので、その様なシステムの準備も行える状況にしている。

だが、本局には未だに自分達こそが地上よりも上だと言う考えを持つ者達が大量に居る為に、この案件は一向に進まず、表に出る事は殆ど無い。

リンディ達からすれば馬鹿としか言えない本局に協力する理由など存在していないのだ。

「この現状に成っても、本局には馬鹿が本当に多いわ。レジアス中将も呆れて、地上と本局は完全に別組織にした方が良いのではないかと、各世界の代表に進言し始めた位よ」

「・・・・耳が痛いわね。私も呆れている位よ。まさか管理局が此処まで腐敗していたなんて思っても見なかったわ」

「客観的に見ればすぐに気付くけど。管理局内部からでは気付かないでしょうね。理想に溺れた者達では気付く事は出来ないわ・・・・・私も管理局を離れて漸く気が付けたのだからね」

「・・・・私もその一人なのかしら？」

「そうに決まっているでしょう。機動六課が地上に作られたらどう言う結果を生むのか考えずに後見人に成っていたんだからね」

リンディは切り捨てるように答えた。

今回の事件で最終的には悪いのは本局の上層部達だが、機動六課の後見人で在ったリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、聖王教会の支援者ーカリム・グランシア、その他の多くの本局の支援者達にも原因が在るとリンディは思っている。

結局の所は彼らも本局の思考に染まり切っていた。

その為に彼らは地上の現状が全く分からない状態で予言の為に無理やり機動六課を作り上げてしまった。それが地上に取ってどれほど赦せない事なのか全く知らずに。

最初から機動六課は本局の管轄ではなく地上の管轄として作られていれば、或いは正式な会議に寄って作られた部隊だったら現状は

かなり変わり、地上とも連携が取れていただろう。
だが、機動六課は無理やり本局が作った部隊。その部隊に本局を嫌っている地上が協力する理由は無い。はやてと親しい地上の部隊ならば別だが、高々二、三部隊では地上の現状は分かる筈が無い。

「今回の事は完全に本局の地上の認識不足が招いた事態よ。充分に反省する事ね。それと私達は絶対に協力はしないわ」

「・・・・・分かったわ」

リンディの言葉にリンディ・ハラオウンは顔を俯かせながら頷き、座っていた椅子から立ち上がる。

「・・・・・また会えるかしら？」

「私は出来れば会いたくないわ。私がこの世で一番嫌いなのは・・・・・自分自身だから」

「・・・・そう。色々と話がもっとしたかったわ」

リンディの言葉にリンディ・ハラオウンは残念そうな声を出して、リンディに背を向け、ブリッジの入り口に向かって歩き出し、ブリッジを出て行った。
それを確認したリンディはなのはへと顔を向け、何かを同意するように頷く。

「なのはさんの気持ちが良く分かるわ。確かに平行世界の自分自身なんて、出会わない方が良いわね」

「ですよね。違う人生だと特に会わない方が良いですよね」

（・・・・・ティアナとヴィヴィオはそうでも無いんだけどね）

顔を見合わせ同意し合うリンディとなのはの姿を見つめながら、ガブモンは溜息を吐くのだった。

ーーーリンディＳｉｄｅ　ＥＮＤ

前編

とある管理外世界。その場所は岩だけしか存在しない無人世界。
その場所をブラックは静かに歩き続けていた。しかし、何時もとは違い、首に掛かっているネックレスは存在せず、パートナーである筈のルインもブラックの傍にはいなかった。
本来ならばブラックが一人で勝手に動くのは日常茶飯事なのだが、今回は完全に何時もとは違っていた。何故ならば、今ブラックが歩いている世界は本来のブラックの世界ではなく、平行世界の管理外世界だったのだ。
マッドであるフリートの実験に付きあわされてしまい、ブラックは通信機の役割も担っているネックレスも持たずに平行世界に飛ばされてしまった。
当初はその事でブラックは非情に不機嫌ではあったが、リンディの小言を聞かずに済む事。ヴィヴィオに付き纏われない事。その様な事から完全に開放されたブラックは伸び伸びと自身の目的通りに動ける現状に歓喜し、世界を好き勝手に動き回る事を決意して歩き続けていた。
最もブラックが現れたのが無人の管理外世界だったのは幸運としか言えないだろう。もしも管理世界にでもネックレスを着けていないブラックが現れていたら、今頃は大惨事と言う言葉が生温い状況が生まれていただろうから。

「・・・・・チィッ・・・・無人の管理外世界か・・・・・どうやら完全に外れのようだな・・・まぁ、良い。とにかく強い奴だ。俺の心を満たせるだけの敵と出会えればいいのだが・・・・・・ムッ！」

ブラックは自身に向かって来る複数の気配に気がついた。
そしてそのまま黙って気配が感じられる方向を見ていると、管理

局の者と思われる局員達がブラックの方に向かって飛んで来る。
その姿にブラックは僅かに不機嫌そうに顔を歪めるが、構わずに前に向かって歩き出す。
一般的な管理局員など七大魔王とさえ戦った事があるブラックからすれば、雑魚どころか路傍の石同然の存在。当然ながら強敵を求めているブラックからすれば、興味さえも湧かない存在でしかない。だからこそ、本当に珍しく黙ってその場に去るつもりだったのだが、その前に局員達はブラックの周りを囲み、その中のリーダーと思われる人物ーこの世界のクロノ・ハラウオンがブラックの姿に疑問を覚えて思わず呟く。

「・・・・ユウ？」

「邪魔だ。とっと失せろ」

「なっ！？言葉を喋れるのか！？」

「フン、言葉を話せては不味いのか？そんな事よりもさっさと失せろ。俺の邪魔をするな」

「待ってくれたまえ！私達は時空管理局の者だ！！」

（誰だ？コイツは？）

歩き出そうとした瞬間にクロノの横に立っていた男性ークロノに似た顔立ちをした男性にブラックは疑問を覚えた。
少なくともブラックの記憶の中にそのような人物は存在していない。ブラックはその事に疑問を覚え、男性の顔を静かに見つめ続けるが、その間に男性はブラックに向かって再び質問を行い出す。

「今、この世界で局所的だが空間の位相が不安定になっている。我々は、その調査に来た。そして、その空間の異常の中心部分に来た結果、君に遭遇したんだ」

「ほう、ならば簡単だ。その空間の異常の原因は、俺自身だ」

『ッ！！』

ブラックの告げた答えに局員達と男性、そしてクロノは驚愕し、思わずブラックの姿を見つめるが、ブラックはもはや関係ないと言うように足を進めようとする。

しかし、その前にクロノがブラックの前に立ち塞がり質問の叫びを放つ。

「何故そんな事をする！？」

「フン、理由など無い」

「何だと！？」

「簡単な事だ。俺はそう言う存在だ。存在するだけで、空間に異常をきたし、世界を不安定にする存在。それが俺だ」

『・・・・・』

ブラックの答えにクロノだけではなく、他の局員達までも言葉を出す事が出来なかった。

“存在しているだけで世界に異常を引き起こす”。しかもそれは自身の意思と関係なしで。

それが事実だとすればどれほどまでに辛い事なのか想像する事さ

えも出来ない。
　それを味わう事が出来るのはブラックだけだろう。或いはブラックのパートナーであるルインぐらいだ。

「貴様の質問には答えた。さっさと其処を退け。これ以上俺を苛つかせるな」

「待ってくれ！　僕達は無闇に争うつもりはない！君の身柄は管理局で保護する！身柄の安全も保証する！」

「身柄の安全？・・・・・・クックックックックックックハハハハハハハハハハハハハハッ！！！」

「何が可笑しいんだ！？」

　突如として笑い声を上げ始めたブラックに対して、クロノに似た男性が質問の叫びを放った。
　その事に対してもブラックは笑いをおさめる事が出来なかった。ブラックからすれば当然だろう。よりにもよって平行世界とは言えクロノに、管理局に、自身の身柄の安全を保障するだと告げられたのだから、もはや笑うしかブラックにはできない。

「クックックックックックッ、よりにもよって管理局の人間に安全の保障などと言われるとは思っても見なかった・・・・・消えろ。今すぐ消えれば見逃してやる」

『ウッ！！』

　深く静かなブラックの殺気を浴びたクロノ達は怯み、思わず背後に足が後退する。

それを確認したブラックは殺気を振り撒きながら前へと進んで行く。
敵にならない存在などにブラックは全く興味は無い。だからこそ、珍しく暴れる事もせずに管理局員の前から姿を消そうとする。
しかし、此処で一つの不運が起きた。余りに強力すぎるブラックの殺意に一般的な局員が耐えられる筈も無く、恐怖心に駆られてブラックに向かって射撃魔法を撃ち出してしまう。

「ウッ、ウワァァァァァァッ！！」

ーーードゴオン！！

「なっ！？何て事を！？」

ブラックに射撃魔法が直撃するのを目撃したクロノに似た男性は声を上げ、クロノも慌て始める。
しかし、クロノ達が対処を行う前に射撃魔法が直撃した事によって発生した煙の中からブラックが飛び出し、射撃魔法を放った局員の前に瞬時に移動する。

ーーービュン！！

「ヒィッ！！」

「・・・・・つまらん。恐怖に駆られて攻撃とは」

「クッ！！ブレイズキャノン！！」

ーーードグオオオン！！

「本気でつまらん！」

ーーーバシュン！！

『なっ！？』

クロノが放った砲撃はブラックが振るった右腕の風圧によって一瞬の内に四散した。

その現象にクロノだけではなく他の局員達も驚くが、ブラックは構わずに目の前に立っていた局員を殴り飛ばす。

「邪魔だ」

ーーードゴオオン！！

「ガハッ！！」

ブラックの拳を受けた局員は一撃の下に吹き飛んでいき、その勢いのまま岩壁にぶつかり意識を完全に失った。

それを確認するまでも無くブラックは静かに殺意を振り撒きながら、周りで震えている局員達とクロノ達を睨みつける。

「気が変わった。貴様は一人残らず叩きのめしてやる。少しは頑張るんだな。俺の疼きを抑える為に！！」

「クッ！！攻撃開始だ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

クロノは叫ぶと同時に周りに居た局員達とクロノに似た男性はブ

ラックに向かって魔法を放つが、彼らは身を持って知る事になった。この世には触れてはいけない史上最悪にして最凶の存在が居る事を。

平行世界の地球。その地に存在する海鳴市の高町家の中で同じ顔の二人の少女ー高町なのはと高町桜はゲームで遊んでいた。

本来ならば存在しないはずのなのはの姉の桜。彼女もまたブラックと同じように異界の人間の生まれ変わりだった。彼女もリリカルなのはの世界に転生し、ジェルシードに関わる事件や闇の書事件を解決に導き、原作では死んでしまった筈の存在さえも、もう一人の転生者と仲間達と共に救い出した。

そしてそんな二人に突如として通信が届き、桜は自身のデバイスであるレイジングソウルを服の中から取り出して通信先にいる切羽詰ったエイミィがモニターを映る。

『いきなりゴメン！ユウ君いる！？ユウ君に直接繋ごうと思ったんだけど、捉まらなくて！』

「えっと・・・・ユウは朝から出かけてて・・・・・・行き先は私達にもさっぱり・・・・でも、昼までには戻ってくるって聞いてますけど」

『そんな！それじゃ間に合わない・・・・・・・ゴメン2人とも！何とかユウ君探してきて！このままじゃクロノ君たちがやられちゃうよぉっ！！』

『ッ！！』

半泣きになりながらエイミィが告げた事実になのはと桜は、ただ

事ではない判断すると、即座に立ち上がり、同じように家の中にいた兄である恭也と姉である美由希に向かって桜が叫ぶ。

「恭也兄さん！美由希姉さん！！大至急ユウを探して来て！！私となのははクロノ達の応援に行くから！」

「分かった！気をつけて行って来い！！」

桜の叫びに恭也は即座に答え、美由希も黙って頷き外へと駆け出して行く。

桜はそれを確認するとエイミィに転送を頼み、なのはと共にアースラへと転移していった。

しかし、桜は知らなかった。向かう先に存在している最凶の者が、桜ともう一人の転生者を絶対に認めないという事を。そして自分達がどれほど恵まれて生まれて来た事を知る事になるとは、神ならぬ桜には全く分からなかった。

破壊し尽くされた岩壁。

その場所には多数の局員が傷付きながら倒れ伏し、同じぐらい傷ついているクロノとクロノに似た男性ークロノの実の父親ークライド・ハラオウンが漆黒の竜人ーブラックによってそれぞれ両手のドラモンキラーの爪先に掲げられていた。

「グウッ！！・・・・・ば、化け物か」

「つまらん。本気でつまらんぞ。少しは俺を楽しませろ！！」

ーーードゴオオン！！

『ガハッ！！』

ブラックは叫ぶと同時に二人を勢いよく地面に叩きつけ、クロノとクライドは苦痛の叫びを上げた。

しかし、その姿を見てもブラックは喜びの感情など抱かずに苛立ちだけが募っていた。ハッキリ言ってブラックは本気で今の戦いをつまらなく感じていた。

少しは楽しめるかと思い戦ってみたが、結局ブラックの本能を鎮める所か逆に本能の疼きを上げるだけで、ブラックの苛立ちは募るばかりだった。

局員やクロノ達が放つ魔法は非殺傷設定の為に、ブラックからすれば避ける必要も無くその身に食らってもダメージを受ける事は無い。だが、逆にその事がブラックの苛立ちを募らせ、手加減する事無く殆ど一瞬で武装局員達を倒し、クロノとクライドにしても逃げ続ける事で二十分ぐらい持たせるのが精一杯だった。

「つまらん」

ブラックは地面に倒れたままのクロノとクライドに感情が全く篭っていない言葉を掛けると、そのまま二人に背を向け、その場を去ろうとする。

そしてそのままブラックは崖の間を通り過ぎようとするが、その瞬間にクロノとクライドは同時に立ち上がり、ブラックの頭上に存在している大岩に向かって砲撃を撃ち出す。

『ブレイズキャノン！！！』

ーーードグオオオオン！！

「ムッ！」

ーーーガラガラガラガラガラッ！！！！

二人が放った砲撃によってブラックの頭上に存在していた大岩が崩れ、油断してたブラックは大岩の下に飲み込まれた。

それと共に周りの崖も崩れ落ち、大岩の隙間を塞ぎブラックは完全に大岩の下に閉じ込められてしまう。

一時的にもブラックの脅威から解放されたクロノとクライドは安堵の息を吐きながら地面に膝をついていろと、空から二人の少女ーバリアジャケットを纏い、それぞれデバイスを手に握った桜となのはがクロノの向かって降りて来る。

「クロノーー！！！」

「クロノ君！！」

「ッ！！桜！！なのは！！如何して此処に！？」

「エイミィさんに頼まれたの。クロノ達がピンチだから助けて欲しいって。本当はユウの方が良かったんだけど、今日は朝から何処行ったか分からないから、私達が先に応援に来たの」

「・・・・そうか、正直助かるが・・・・来ない方が良かったかもしれない」

『エッ？』

クロノの苦渋に満ちた声に桜となのはは同時に疑問の声を上げ、クロノと同様にボロボロになりながら膝をついているクライドがブ

ラックが生き埋めになっている大岩の方に顔を向けながら呟く。
「ハッキリ言って、この敵は強すぎる。私達の魔法が全く効かないんだ」
「エェェェッ！！魔法が！？」
「それでソイツは何処に居るのよ！？」
「今はあの大岩の下だが、先ず間違いなく生きている。だが、これも何時まで持つか・・・・せめて1時間・・・・いや、３０分持てばいい所…」
ーーードゴォォォォォォン！！！！
『ッ！！！』
クロノの声を遮るように大岩は粉々に砕け散り、細かい瓦礫も跡形も無く吹き飛んだ。
その現象に全員が目を見開き、大岩が在った場所に顔を向けてみると、砂煙の中に影が映り出す。
「三十秒しか持たなかったか・・・・・」
「いい加減に限界だ。貴様らは殺す」
『なっ！？』
苛立ちに満ちた声と共に砂煙の中から出て来たブラックの姿に、なのはと桜は驚きの声を上げた。

その見覚えのあるブラックの鎧と鉄鋼に二人は思わずブラックの姿を凝視してしまうが、逆にブラックはなのはと桜の姿に疑問を覚えた。

（誰だ？高町なのはの横に立っている小娘は？この世界では奴には姉妹が居るのか？）

「・・・嘘・・・・ユウ君のバリアジャケットそっくり・・・・」

（ユウ？誰だ？聞き覚えが無い名前だ？あの小僧に似た男に、高町なのはに似た娘。一体この世界はどうなっている？）

ブラックは自身のいる世界の現状が良く分からずに疑問の覚え、苛立ちも忘れて考えようとするが、その考えは恐れを含んだ桜の呟きに中断する。

「な、何で・・・・」

（ムッ？）

「さ、桜お姉ちゃん？」

恐怖に震えている桜にブラックだけではなくなのはも疑問を覚えるが、桜は答えずにブラックを見つめながら、本来ならば知るはずの無い事を呟いてしまう。

「ブ、ブラック・・・・・ブラック・・・・ウォー・・・・グレイモン・・・・・」

（何！？）

自身の名を名乗る前に呟かれた事にブラックは内心で驚愕し、目を細くしながら桜の姿を注意深く見つめ始める。

「貴様、何故俺の名を知っている？」

「そ、その前に、ちょっと聞かせて・・・・・デジモン、ダークタワー、ホーリーストーン、チンロンモン・・・・・この単語に聞き覚えは？」

「・・・・何故貴様がその単語を知っている。それは貴様が知る事は出来ないは・・（いや待て・・・・俺はこのような出来事を知っている・・・・まさか、まさか！？あの娘は！？）」

ブラックは桜の呟いた言葉に疑問を覚えるが、すぐにある仮説に思い至り、信じられないと言う瞳で桜の顔を見つめた。

しかし、今度は桜がブラックの言葉に諦めたように目を伏せながらレイジングソウルの柄を強く握り始める。

ーーーギュウッ！！

「・・・・そう・・・・・・レイジングソウルッ！！」

ーーーガシャン！！

桜が叫ぶと同時にレイングソウルはブラストモードへと変形し、突然の桜の行動になのは、クロノ、クライドは驚愕する。

しかし、桜はその様子に構わずにブラックにレイジングソウルの照準を合わせて躊躇い無くなのは達が更に驚く命令をレイジングソウルに向かって叫ぶ。

「非殺傷設定解除！！」

「やはり貴様は！？」

ブラックは桜の叫びに桜の正体を確信した。

初めて見る敵に対する迷いの無い非殺傷設定解除の命令。その事だけでもブラックが桜の正体を確信するには充分だった。

知っていたからこそ出せる命令。ブラックにとってはその様な出来事は充分過ぎるほどに理解している。“何故ならば今の桜の行動は、ブラック自身も行った事がある行動なのだから”。

しかし、桜はブラックの叫びや様子には一切構わずに特大の砲撃をブラックに向かって放つ。

「フルパワー！ポジトロンレーザー！バージョンＦ！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

桜が放った手加減無用の砲撃は、ブラックの体を飲み込んだだけではなくそのまま背後の崖に激突し、それよって崖にも巨大な亀裂が走り、崖は一瞬の内に崩壊した。

その様子を目撃したクロノは慌てながら、焦りと恐怖に震えている桜に向かって叫ぶ。

「なっ！？桜！？いきなり何を！？しかも非殺傷を解除するなんて！？」

クロノがそう叫ぶのも当然だろう。

桜の一撃は非殺傷設定でも充分過ぎるほどの威力が在る上に、それを殺傷設定で放ったのならば並みの者では死んでしまうだろう。

だが、桜の行動はブラックに対しては正しい行為だった。最もブラックにはダメージが全く無いのだが。
その事を知らないなのは、クロノ、クライドは桜の行動に質問を繰り返そうとするが、その前に焦りと恐怖に染まった桜が叫ぶ。

「逃げるわよ！！」

「さ、桜お姉ちゃん！？」

「ブラックウォーグレイモンを相手に、まともに戦って、勝てるわけないわよ！！」

「えっ！？」

桜の叫びになのはは驚いた声を上げるが、桜は構わずになのはの手を掴み取りその場から本当に逃げ出した。

「ちょっ！桜お姉ちゃん！！」

なのはは全速力で逃げようとしている桜を引き止めようとするが、その前にブラックが居る筈の崖の瓦礫の山が吹き飛び、それと共に飛び出したブラックが桜の前に立ち塞がる。

ーーードゴオオオオオオオオオン！！

ーーービュン！！

「フン、逃げられると思っているのか？この俺の事を知りながら」

「クッ！！」

無傷のブラックの姿に桜は悔しそうに声を上げ、なのははブラックの姿に目を見開いた。
しかし、ブラックは桜となのはの様子には一切構わず、苛立ちが募った視線を桜に向ける。

「今の攻撃で確信したぞ。貴様は・・・・・・いや、そんな事はもう如何でもいい・・・・・どうやら貴様は少しは骨がある奴のようだ」

「・・・・だったら、如何なのよ？出来れば、私としてこのまま見逃して貰いたいんだけどね？」

「フッ、無理だな。貴様は・・・・・・殺すッ！！！」

『ッ！！』

ブラックが叫ぶと共に凄まじい殺気に桜となのはに叩きつけ、その殺気に桜となのはは本能的な恐怖を心の底から味わった。
最初からブラックの正体を知っている桜は当然として、なのはにも如何してクロノがこの場に来ない方が良かったと告げたのかハッキリと理解出来た。目の前に存在しているブラックは恐怖の根源そのもの。
例え自分と桜が一緒に戦ってもブラックの足元にも及ばないと理解出来たが、既になのはブラックが放ち続けている凄まじい殺気から抜け出す事が出来ず、体を恐怖で震わせる事しか出来なかった。
しかし、ブラックはその様子に一切構わずに恐怖に体を震わせているなのはに向かって、右手のドラモンキラーを突き出す。

「先ずは貴様だ！！！」

「クッ！！」

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

ブラックのドラモンキラーがなのはの体に直撃する直前に、何とかブラックの殺気の影響から抜け出す事が出来た桜は、恐怖に震え続けているなのはの手を高速移動魔法を使用しながら引っ張り、ブラックの攻撃をかわした。

そしてそのまま高速移動魔法の影響が治まる前になのはの方を振り向き、未だに恐怖から抜け出せていないなのはに活を入れる。

「なのは！！此処で死んだらユウとはもう会えないわよ！！！」

「ユウ君ッ！！」

桜の告げた人物の名前になのははハッと我に帰り、自身の手を握りながら引っ張り続けている桜の顔を見ると、桜は真剣な顔をしながら頷く。

「そうよ！！だから絶対に生き残るの！！フォーメーション対ブレイズ戦！！」

「う、うん！！」

桜の叫びになのはは即座に頷き、レイジングハートを構え直しながら背後を振り向いてみると、先ほどの殺気を撒き散らしながら追って来るブラックの姿を目にする。

「逃がさんぞッ！！」

「行くわよ！！」

「うん！！」

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

凄まじいスピードで接近して来たブラックを桜となのははギリギリまで引きつけ、高速移動魔法を使用する事で左右に避けた。

ブラックはその様子に二人の次に行うであろう行動を経験から完全に予測するが、あえてこの場は二人の思惑通りに動き、そのまま前へと僅かに進む。

そしてその間にブラックの背後へと回った桜となのはは、バスターモードとブラストモードへと変えたレイジングソウルとレイジングハートをブラックの背に向けて照準を合わせて同時に砲撃を撃ち出す。

「ダブルッ！！」

「ポジトロンッ！！」

『レーザーッ！！』

ーーードグオオオオオオオオオオン！！

「フン・・・・（インペリアルドラモンの技の猿真似か。本物には遠く及ばん。だが、もう少しだけ付き合ってやろう。もう一人の“敵”が来るまではな）」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

桜となのはが同時に放った二つのポジトロンレーザーはブラックの背に存在している『ブラックシールド』へと直撃し、ブラックはそのまま地上へと叩きつけられた。
そして魔力爆発によって辺りに煙が渦巻くと、何時の間にか復活して上空に浮かんでいたクロノとクライドがブラックが落下した場所に向かって追い討ちをかけるように数百本の魔力剣を撃ち込む。

『スティンガーブレイド！　エクスキューションシフトッ！！』

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！！

クロノとクライドが同時に放ったスティンガーブレイド・エクスキューションシフトはブラックがいるであろう場所に次々と向かい、再び魔力爆発が地上に起きた。

「これぐらいなら少しは・・・・」

「淡い期待なんか持たない方が良いわよ。よくて軽く殴られた程度のダメージじゃないかしら？」

「・・・・桜？君はアイツを知っているのか？」

「・・・・・知識としては・・・・だけどね」

クロノの質問に対して桜は油断無くブラックのいるであろう場所を睨みながら答えた。
その桜の答えになのは、クロノ、クライドは僅かに訝しげな視線を桜に向けるが、その前に煙の中から先ほどのクロノとクライドに勝るとも劣らない数の赤黒いエネルギー剣が煙を吹き散らしながら桜達に向かって突き進んで来る。

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

「ッ！！皆！避けて！！（何！？この攻撃は！？）」

凄まじいスピードで向かって来た無数のエネルギー剣を避けながら、桜は自身の知らない攻撃に疑問を覚えた。

桜の知識の中には今の攻撃などブラックウォーグレイモンには存在していない。しかし、現実にブラックのいたであろう場所から攻撃が放たれて来た。

その事実に桜が動揺を覚えていると、次の瞬間に煙の中から無傷のブラックが姿を現し、凄まじいスピードで桜に急接近して来る。

「クッ！！」

ブラックの姿を目撃した桜はブラックから距離を取ろうとするが、ブラックのスピードは凄まじく徐々に距離は縮まって行く

桜はその事に悔しそうにしながらも辺りに存在している岩場に近寄り、崖に成っている場所を背にし始める。

その様子を目撃したブラックは瞬時に桜の狙いに気がつくが、先ほどと同じように桜の策に気がついてないと言うようにスピードを更に上げ、桜に向かって突進する。

ーーービュン！！

（今ッ！）

《Ｆｌａｓｈ（フラッシュ）　ｍｏｖｅ（ムーブ）》

ーーードゴオオオオオオオオオオオオン！！

先ほどと同じように桜はギリギリまでブラックを引きつけながら高速移動魔法を使用してかわし、ブラックはその勢いのまま崖に激突し、崖全体に一瞬の内に罅が広がり、崩落した。
その現象に上空で様子を見ていたなのは、クロノ、クライドは、先ほどの桜のポジトロンレーザー以上の崖の崩落に目を見開きながら、呆然と崩落した崖の瓦礫を見つめた。桜の砲撃以上の現象と言う事は、ブラックの攻撃力は魔法を超えていると言う事になる。
その事実になのは達が驚愕しながら呆然となった瞬間に、桜が慌てた顔をしてなのはに向かって叫ぶ。

「バカ！なのは！危ない！」

ーーードゴオオオオオオオオオオン！！

「はぁあああああっ！！」

「ッ！！」

桜が叫ぶと同時に崩落した瓦礫の中からブラックが飛び出し、なのはの目の前に普通の人間ならば視認するのが不可能なレベルでのスピードで移動した。

（なっ！？何よ今のスピード！？全然見えなかった！さっきまのスピードを軽く超えているわよ！！）

桜はブラックの在り得ないレベルでのスピードに内心で驚愕の声を上げるが、ブラックは構わずに咄嗟の事態で動きが完全に止まってしまっているなのはに向かって右腕のドラモンキラーを振り上げる。

「ムン！！」

「なのは！！」

《Ｂｌｉｔｚ（ブリッツ）　Ｒｕｓｈ（ラッシュ）》

ーーービュン！！

桜の悲痛な悲鳴が響いた瞬間に、金色の閃光がなのはの横を通り過ぎ、なのははブラックの攻撃から逃れた。

突然の事態になのはが慌てて自身の服を掴んでいる相手の顔を見てみると、険しい顔をしたフェイトが存在していた。

「なのはッ！！大丈夫！？」

「フェイトちゃん！！何で此処に！？」

「私達も、エイミィに頼まれたんだ。クロノ達を助けて欲しいって。ユウは、姉さんやアリサたちが探してくれてるよ」

「そうなんだ・・・・えっ？私“達”？」

「ムッ！」

なのはがフェイトの声に疑問を覚えて聞き返した瞬間に、ブラックは突如として自身の背後を振り返った。

その事になのはも疑問を覚えた瞬間に、ブラックの頭上から巨大な炎の鳥が舞い降り、ブラックに直撃する。

「シャドーウイングッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオン！！

「ハンマースパーークッ！！」

ーーーガアアアアアアアアン！！

シャドーウイングの炎に包まれていたブラックに対して、赤い髪の少女ーヴィータが電撃を纏っていた巨大なハンマーを叩きつけ、ブラックは地上へと吹き飛んでいた。

その様子になのはは嬉しげな笑みを浮かべ、シャドーウイングを放ったシグナムとハンマースパークをブラックに叩きつけたヴィータの姿を見つめていると、更に追い討ちを掛けるようにブラックが落下した地点に向かって上空から三つの白い砲撃が降り注ぐ、

「響け！終焉の笛！ラグナロク！！」

ーーードグオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

「はやてちゃん！！」

ブラックにラグナロクを撃ち込んだ主ーリインフォースとユニゾンしているはやての姿に、なのはが更に喜びの声を上げた。

それと共になのはとフェイトの周りに転送用の魔法陣が出現し、その中からアルフ、シャマル、ザフィーラ、ユーノが姿を現す。

「あたし等もいるよ！！」

「みんな・・・・」

駆けつけてくれた仲間の姿になのははは感動したように瞳を潤ませ、自身の周りの仲間達の姿を見つめていると、桜が険しい顔をしながらなのはに向かって叫ぶ。

「なのは！感動してる最中悪いけど、ブラックウォーグレイモンがあの位でやられる訳ないから、気を引き締めなさい！」

ーーーブン！！

桜が叫び終えると同時に煙の中から全くダメージを受けた様子を見せていないブラックが姿を現した。

その姿に全員が気を引き締めなおし、不気味なほどの静かにしているブラックに向かって構えを取りながら向き合うのだった。

戦闘場所から数キロ離れた岩山。

その場所の頂点に突如として光が溢れ、光が収まった後には青と白のロングコードを纏った長い銀髪に青い瞳を持った女性ーリインフォースにソックリな容姿をしたブラックのパートナー事、ルインフォースー愛称ルインが岩山の上に立っていた。

「さてと、ブラック様は何処でしょうかね？出来るだけ早く見つけないと、ブラック様の事ですから無茶をしますし、早く合流しましょう」

そうルインは呟きながらブラックの反応を探す為に、探索魔法を使用しようとすると、遠くの方から爆発音が響いて来る。

ーーードゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

「・・・・・・はぁ～、さっそく暴れているんですね。もう！！すぐに目を離すとこれなんですから！！」

遠くから聞こえて来た爆発音の正体にルインは僅かに不機嫌そうな声を出しながら空へと浮かび上がる。

ルインには今の爆発の主の正体が分かっていた。自身の主であるブラックがリンディやヴィヴィオと言う抑止力を失えば如何言う行動を取るかなどルインには簡単に分かる。だからこそ誰よりも早くブラックの後をルインは追って来たのだが、どうやら完全に一足遅かったようだ。

「此処は平行世界だから暴れたら不味いのに・・・・・ブラック様に言っても仕方ないでしょうね・・・・とにかく様子だけでも見に行きますか」

そうルインは呟き終えると、高速移動魔法を使用しながらブラックが戦っているであろう場所へと向かい出すのだった。

設定

【クラス】キャスター
【マスター】雨生龍之介
【真名】フリート・アルハザード
【性別】女性
【属性】混沌・悪
【ステータス】
【筋力】　D　【魔力】　A＋＋
【耐久】　A　【幸運】　A
【敏捷】　C　【宝具】　E～EX

【クラス別スキル】
陣地作成：EX
自らに有利な陣地を広範囲に作り上げる。
街一つは簡単に自身の領域に短期間で支配することが可能。また、この支配された空間での出来事は全て感知可能。長期間ならば世界支配も可能

道具生成：EX
魔力を帯びた道具を生成出来る。自らの陣地内であれば、生前で作った物は全て再現可能。

【保有スキル】
全ての都（アルハザード）の英知：A
異世界の膨大な知識を保有している。その知識は脳死に至らなければ、蘇生も可能なほどである。また、その身に宿る技術は魔術師とサーヴァントには全て未知のものなので、対処する事はよほどの運と経験がなければ不可能。

道具召喚：ＥＸ
自身が作り上げた様々な道具を呼び寄せる事が出来る。

不死：Ａ
自らの陣地内部ならば、陣地の本拠を破壊されない限り死ぬ事は無い。
また、不死、再生殺しの宝具を食らっても“本拠”を破壊しない限り、復活し続ける。

うっかり：ＥＸ
本人の意思も無視して勝手に発動してしまうスキル。
発動した場合、歴史にさえも影響を及ぼす出来事が確実に起きてしまう。このスキルの発動に巻き込まれたら、最後、幸福になるか不幸になるかは巻き込まれた者の行いしだい。
現在、抑止力（リンディ）の消失によってランクが測定不可能になっている。

【宝具】
『自らが作り上げし物の宝庫』
ランク：Ｅ～ＥＸ
種別：対界宝具
自らが生前に作り上げた物品を全て使用する事が出来る。
物品の中には世界破壊兵器も存在しているので、途轍もなく危険な宝具。

【詳細】
とある世界を管理していたシステムが長い年月を得て魂を宿し、肉体を手に入れた存在。
その世界の英知を全て己の者にし、己の探究心の為ながら一般人でなければ多くの被害を及ぼす事は躊躇わない。しかし、生前に於い

て得た友が次々と死んで行くことに寂しさを覚えて自らが得た英知と共に世から消滅した。
消滅する寸前に友の墓を破壊から護り切る為だけに世界と契約して英霊となったのだが、世界でさえもその有り余る探究心を抑制し切れずに英霊の座に強固な封印を掛けて決して呼び出さないように封印していた。だが、聖杯の異常と呼び出される時に近くにあった触媒のせいで現世に復活してしまった、世界にとっての頭痛の種二号。
（一号はブラックウォーグレイモン）

第一話　召喚（前書き）

作者のゼクスです。
今回投稿する特別編以降、特別編は全て此方に載せます。また、漆黒の竜人に載っている特別編も近々全て此方に移転します。
それと今回投稿する作品は、携帯から投稿です。

第一話　召喚

何処とも知れる空間。
その空間の中を漂う意識が存在していた。それはゆっくりとゆっくりとまどろむように意識の覚醒の兆候を繰り返すが、それは完全に覚醒することなく、ただ静かに眠りと目覚めの狭間を行き来し続けていた。
それは覚醒寸前に至る瞬間の間で、何時自身の意識は完全に覚醒するのかと疑問を持ち続けていた。
今回も再び眠りの淵に落ちてしまうのかと考えていると、どこからともなく調子に乗ったような、まるで遊んでいるかのような声が届いて来る。

ーーー♪閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ。繰り返すつどに、四度・・・・・あれ、五度？・・・え～と、満たされるトキをー、破局する。

（・・・・クスクス・・・・オモシロイ・・・・シラナイコトガ・・・・アッタンデスネ・・・・オモシロイッ！）

ソレは流れ込んで来た声と知識によって目覚めてしまった。
本来は目覚めないはずの存在が、刺激を受けたことによって覚醒してしまった。
そしてソレはゆっくりと聞こえて来た声の方向に意識を動かし、それは現世へと現界してしまう。

現世に存在するとある一軒家。
その家に住んでいた住人は、突如として襲って来た快楽殺人者ー

雨生龍之介（うりゅうりゅうのすけ）によって末っ子一人を残して殺害された。更に龍之介は自身の実家に存在していた書記を使って、儀式的な殺人を敢行したのだ。

ソレは本来ならばただの異常な殺人劇で終わるはずだった。だが、今龍之介が居る地ではとある魔術儀式が行われた。更に龍之介には先祖から伝わっていたその儀式に関わる為に必要なモノが備わっていた。

故に偶然にも全てが揃った状況でイレギュラーが重なり、龍之介はその魔術儀式に参加する為に必要な存在ーサーヴァントの召喚に成功してしまった。

「問いますよ」

龍之介が家に住んでいた男女とその二人の長女の血で遊びで書いた魔法陣から立ち込めていた霧の中から女性の声が響き、龍之介は霧の中から現れた人物の姿に目を見開いた。

人が本来ならば持てる筈が無い透き通った蒼い髪をポニーテールに纏め、まるでルビーをそのまま埋め込んだように輝く紅い瞳。凡そ自然で出来たとは思えないほど整った容姿と顔。その身に纏っている服は汚れ一つ感じさせない綺麗な白衣。

幻想的と呼べるその姿に龍之介が言葉を失っていると、魔法陣から現れた女性は龍之介に問いかける。

「私をキャスターの座へと呼び、現界させた召喚者・・・いかなる理由で呼んだのでしょうか？」

「・・・えと、雨生龍之介っす。職業はフリーター。趣味は人殺し全般。子供とか若い女が好きっす。最近は基本に戻って剃刀に凝っています」

「人殺し？」

龍之介が告げた事実に深く関わっている人物でなければ気がつかない程度に女性は眉を顰め、部屋の中を見回す。

部屋の中には惨殺されたこの家の主達とその子供と思わしき長女の亡骸が存在し、更に部屋はその人物達の血で壁が塗りたくられていた。更に自身が現れた魔法陣に目を向けてみると、召喚された影響で焼き焦げていたが殺された人物達の血で描かれていた事実に気がつく。

女性は心の底から不快そうに眉を顰めるが、呼び出した当人である龍之介は女性の変化に全く気がつかず、部屋に隅の方を軽瓢（けいひょう）に手で示す。

「まぁ・・・小難しい話はおいておいてさ・・・アレ、食べない？」

「フゥーーーッ！！」

龍之介に手で閉められた子供ーこの家の末っ子で今は猿轡とロープで拘束されているーは、恐怖からか必死に身を捻り始める。

女性はその子供を確認すると、ゆっくりと白衣の中に手を入れる。龍之介はその様子に何かが起きると漠然と思いながら女性の一挙一動を見逃さないように注視した瞬間、龍之介の首に前触れも無く注射器が突き刺さる。

ーーートスッ！

「・・・・えっ？」

突如として自身の首に刺さった注射器に龍之介は呆然と声を出すが、次の瞬間、その身を信じられないほどの激痛が駆け巡り、同時

に肉体がボコボコと変形し始める。

ーーーボコボコッ！！

「ガッ！！アァァァァァァァァーーーーー！！！なんだよ！？ゲベッ！！な、何だよ！？これ！？」

「エクリプスウィルス・フリート・バージョン。撃ち込まれた相手の細胞を急激に活性と死滅を繰り返させるウィルスです。あぁ、安心して下さい。死んだりはしませんよ。死んだたら、私の現界に支障が起きますからね・・・・生きた魔力炉として生きなさい」

「アァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーー！！！！！」

「・・・あぁ、忘れていました。これは貰っておきますね」

ーーーブザン！！

女性が呟くと同時に、肉体の膨張が届いていなかった龍之介の右手が前触れも無く斬り飛ばされた。

その腕を女性は無言で右手で掴み取り、その手の甲に刻まれているサーヴァントを使役する為に重要な令呪を楽しげに眺める。

「興味深い対象ですね。異世界の魔法・・いえ、この世界では魔術でしたか・・・あぁ、本当に研究しがいがある産物ですよ」

そう女性は呟くと共に持っていた龍之介の右手を何処へとも無く消失させると、今度は目の前の惨劇で震えている男の子に目を向ける。

その事実に男の子は恐怖から大粒の涙を零しながら、床を這って逃げようとするが、女性はゆっくりと男の子に手を伸ばし、その身を縛っていたロープを無言で切り裂く。

ーーーブザン！！

ーーーパサッ！

「ヒィッ！！」

「怖がらせてしまいましたね。残念ですけど、ご両親とお姉さんは助けられません。ごめんなさい・・・せめて今はゆっくりとお休みなさい」

「アッ！・・・・」

女性が男の子の額に触れた瞬間、男の子の意識は遠退き深い眠りに落ちた。

それを確認した女性は、ゆっくりと男の子を抱き上げ、フッと部屋の一箇所に置かれていた不可思議な生物を模した銅像に目が行く。

「あぁ、これが触媒だったんですか。いや～、まさか、異世界移動の実験に使用した銅像がこんな一般家庭に流れ着いて、召喚の触媒に使用されるとは・・・・天文学的な確率ですね」

そう女性は呟きながら、左手で棚に置かれていた銅像を眺める。

その銅像は女性が生前実験の為に作り上げた銅像であり、実験の為に使用して行方が全く分からなくなった物品だった。因みに別段何か特殊な素材を使っている訳でも、特殊な機能も存在していないただの銅像である。

多少形はとある生物を模しているが、ただの銅像でしかないために放置していたのだが、まさか死後で呼ばれる触媒になるとは女性は夢にも思ってなかった。

「さぁて、聖杯戦争ですから・・・・中々に面白そうですね。ゆっくりと研究させて貰いましょうかね・・・・クスクス」

女性ー異世界において最も敵に回してはならない人物の二人目として認識されていた人物ーフリート・アルハザードはこれから起きる激動の戦いに、久しく忘れていた好奇心を疼かせながら部屋を出て行く。

後日、この家の末っ子だった子供は警察署の前で発見され、警察に保護されて孤児院に最終的に送られたが、少年は成人するまで支援金が送られ、後に警察組織の改革に乗り出す政治家になるのだった。

第二話　参戦（前書き）

様々なご意見ありがとうございました。
全ては無理かもしれませんが、出来るだけ使用を考えてみます。

第二話　参戦

深い闇に満ちた空間。
その空間の主であるフリートは、自身の目の前に展開している複数のモニター画面を興味深そうにそれぞれ眺めていた。
モニターに映っているのは、今回の聖杯戦争の参加者である魔術師とサーヴァント達。
召喚されたのは一番最後だったが、それでもフリートは参加者の誰にも、この地の管理者や古くから住んでいる老獪にも気づかれずに冬木市の陣地化を終えたのである。
そして現在は、冬木市に集結した魔術師とサーヴァント達を街中に放っている自身が作り上げたサーチャーを使用して他の参加者達を監視していた。

「ふ～む、アサシンのサーヴァントは未だに現存して、マスターは中立地帯で安全を得ていますか・・・それを指示したのは遠坂時臣と言う男・・・・そして遠坂時臣が召喚したサーヴァントも並のサーヴァントではないですね・・・ライダーに関してもマスターは未熟そうですが、それを補うほどのサーヴァント・・・・ランサーはマスターが油断と慢心を持っていますから、そこから衝けば切り崩せそうです・・・セイバーは今のところは様子見ですね・・・ですが、問題はその隣に居る女性の方でしょう」

フリートはそう呟きながら、モニターの一つに映っているセイバーと共に街を歩いている銀髪に赤い瞳をした女性ーアイリスフィール・フォン・アインツベルンに険しい眼差しを向ける。
一目見ただけでフリートには、アイリスフィールが普通の人間とは違っていることに気がついた。
自身の世界に存在していた人工的に作られた人間に近い印象を、

フリートはアイリスフィールから感じているのだ。

「う～む・・この世界の魔術師に関する情報が少ないのは不味いですね・・・暫らくは身を隠して情報を収集に徹した方がいいでしょうか？・・・・ムッ！！」

突如として自身が冬木市中に張り巡らしている監視網から魔力の奔流を感じたフリートは、眉を僅かに顰めながら魔力の奔流を放った主が映るモニターに目を向ける。

そのモニターに映っているのは、港場の倉庫街に立っているランサーの姿と倉庫街に身を隠しているランサーのマスターであるケイネス・アーチボルト。

先ほどの魔力の奔流は獲物を誘き寄せるための撒き餌だったのだとフリートは思いながら、丁度いいと内心で考える。

（これは他のサーヴァントの情報を手に入れられる良い機会ですね・・・・おや？）

ランサーとケイネスが映っているとは別の他のモニターの映像を目撃したフリートは、映し出された様子に首を思わず傾げた。

先ほどのランサーが発した魔力の奔流によって、次々と他のマスターとサーヴァント達も動き始めていた。他のサーヴァントとマスターの情報を集めているアサシンも含め、フリートを除いた全てのサーヴァントが一箇所に集まろうとしている。

その状況を即座に把握したフリートは、口元を笑みに歪めてゆっくりと立ち上がる。

「これはますます嬉しい状況ですね。クスクス、他の参加者達の情報が一気に手に入るチャンスですよ。それにこの状況は利用出来ますね」

そうフリートは呟くと共に、何処からともなく刀と小刀を取り出し、白衣の中に仕舞う。
そのままモニターを消滅させて、ゆっくりとアジトの出口に向かって歩きながら呟く。

「さぁ～て、“性格が違う私の顔見せに行きましょうかね”」

そうフリートは不穏な言葉を呟くと、サーヴァント達が集結しようと港場へと向かうのだった。

冬木市のとある港場。
その場所が聖杯戦争の本当の意味での初戦の開催場だった。戦っているのは呪符らしき布を巻いた長槍と短槍を握った軽装な装いの端整な男ーランサーのサーヴァントーと、不可視の剣を振るっている蒼いドレスに白銀と紺碧に輝く甲冑を纏った翡翠の瞳の少女ーセイバーのサーヴァント。
二体のサーヴァントは互いに己が持つ武器を相手に向かって繰り出し、倉庫街を破壊しながらそれぞれ戦っている相手の実力に戦慄を感じていた。
そしてセイバーとランサーの戦いを見ている者が複数居る。セイバーと共に街を探索していたアイリスフィールに、ランサーであるマスターのケイネス・アーチボルト。
猟犬のように隠れて隙在らばケイネスを暗殺しようとしているセイバーの本当のマスターである切嗣とそのパートナーである舞弥。
その他にもセイバーとランサーの激闘を見つめている者達がいる。
そして戦いの場から一キロ近く離れた地点の海上で、フリートは眼鏡を掛けながら戦場を眺めていた。

（流石は最速と最優と呼ばれている二体ですね。技術に実力、共に超一流ですよ・・・・まぁ、本気で戦えば、私の敵じゃないんですけどね）

セイバーとランサー。共に超一流の実力を持った英霊達なのだが、本気のフリートと戦えばセイバーとランサーでは勝てる可能性はゼロに近い。

何せ、フリートの本気とは生前に作り上げた自らの宝具を一斉に使用するという意味に他ならない。

そうなれば、それはもう戦いとは言えない。ただの一方的な蹂躙でしかない。

最もフリートにはそれを実行する気は無い。己の目的を完遂する為には、今しばらく他の英霊達にも消えて貰う訳にはいかない。

何よりも他の英霊達はフリートにとっては、大事な研究対象でもあるのだ。

（フフフッ、やっぱり研究は楽しいですね。生前では結局実現不可能だった死者蘇生を限定ながらも成功させている聖杯・・・・必ずその原理を手に入れて見せます！！・・・・おや？）

自身が見つめている先の視界で、フリートは一瞬だけ身を隠しながら移動する影を捉えた。

即座にフリートは掛けている眼鏡を操作して、戦いの場に放っていたサーチャーが捉えている映像を右側のレンズに映し出す。

（・・・・やはり、現れましたね、アサシン・・・・そしてもう二人・・・・セイバーと共にいる女性の協力者でしょうか？・・・・ムッ！・・・・マスターでしたか）

コンテナの山の隙間に隠れながらワルサー狙撃銃を構えている切嗣の右手の甲に刻まれている令呪を目撃したフリートは、切嗣こそがセイバーの本当のマスターだと確信した。
他のサーヴァントで未だ発見していないのはバーサーカーとそのマスターだけ。
その他は全てサーチャーを使用して発見している。状況から考えて切嗣がバーサーカーのマスターとは考え難い。

(やけに目立つ動きだと思っていましたが、やはり囮でしたか・・・・少し警戒を強めた方がいいですね。あの男には)

そうフリートは内心で呟くと共に、右手に転送用の魔法陣を発生させ、小さな黄色いバッタを思わせるメカを呼び出す。

ーーーブン!

「行きなさい」

ーーーシュン!

フリートの声と共にバッタはフリートの手から飛び出し、空中で迷彩を行い、宵闇の中に消えていた。
それを確認すると、フリートはセイバーとランサーの方に視線を戻す。
丁度その時にランサーは左手に握っていた短槍を足元に放り捨て、右手に握っていた長槍の呪符を剥がしていた。
ランサーが遂に宝具を使用する気なのだとフリートは悟り、目を凝らしていると、蜃気楼のように凄まじい魔力を立ち上らしている深紅の槍を目撃する。

（フ～ム。見たところ、大規模な威力を発揮するタイプではなく、ディバイダーと同じ武器その物のが、宝具としての性質を帯びているタイプでしょうね。となると、もう一本の槍にも何かしらの能力が宿っていると考えるべき・・・・・アレ？もしかして、介入は無理なんじゃ？）

今更ながらに自身が入り込む余地がない可能性にフリートは気がついた。

どう考えてもあのセイバーとランサーの戦いに割ってか入れば、空気が読めない馬鹿としか見られないだろう。しかもその後には、確実にセイバーとランサーの怒りが待っている。

生前に共に過ごした戦いの邪魔をしたら凄まじく激怒する竜人の事を思いだしながらフリートは、再び戦いを再開したセイバーとランサーに目を向ける。

（・・・・・ちょっと、此処で他のサーヴァントが消えるは困りますね・・・・・まぁ、簡単にはどちらも消えないでしょうから、空気が読めない馬鹿が現れない限りは、今回は情報だけで良しとしましょう）

当初の予定とは形はかなり変わってしまうが、別段フリートには問題はなかった。

己の思惑通りに進まない事など世の中には溢れている。寧ろフリートにとっては、己の予想通りに進む方がつまらない事が多い。予想通りに進んでも楽しい事は確かにある。

だが、フリートにとっては予想外こそが楽しいのだ。故にフリートは自身の目論見が崩れても対して気にせずにセイバーとランサーの戦いを観戦する。

そして二体のサーヴァントの戦いを見つめていると、ランサーが突き出した深紅の槍によってセイバーが振るっていた不可視の剣が

一瞬だけ真の姿である”黄金の剣“を晒す瞬間を目撃する。

（・・・・・今のは・・・・・・なるほど、ランサーの持つ深紅の槍の効果は、”魔力遮断”。効果が及ぶ範囲は、槍の刃辺りまで・・危険度はディバイダーほどではないですけど、もう一本の槍の効果次第では危険ですね）

冷静にフリートはランサーが持つ宝具の力を分析する。
ランサーが振るう深紅の槍の効果は一般的な魔術師には脅威だが、フリートにとってはさほど脅威ではない。生前には魔力を無効化や遮断する技術は存在し、その全てをフリートは使いこなせる。
寧ろフリートが気になるのは、深紅の槍を解放する時にランサーが捨てた短槍の方だった。

（恐らくランサーが短槍を捨てた事自体が罠でしょうね。”槍は本来ならば両手で一槍が基本”。ですが、確か居ましたね。聖杯が送って来た知識の中に、魔を断つ赤槍と”呪いの黄槍”を振るう英霊が）

フリートはランサーの正体にたどり着いた。
フィオナ騎士団、随一の戦士。”輝く貌（かお）のディルムッド・オディナ。それこそが今回の聖杯戦争でランサーのサーヴァントとして召喚されたランサーの真名。

（フ～ム、かなり私の初戦の相手に相応しいんですけど・・・・・誰か居ませんかね、空気が読めない馬鹿）

ーーーピピッ！

（ん？）

突然に音を鳴らした眼鏡にフリートは訝しみながら、眼鏡を操作してみる。
すると、雷鳴を鳴り響かせながら空中を疾走する二頭の逞しくも美しい牡牛が牽いている戦車に乗った巨漢の男がセイバーとランサーが戦っている場所に向かう姿が、右側のレンズに映し出された。

「・・・・・・いましたね、空気が読めない馬鹿が」

真っ直ぐに戦車に乗ってセイバーとランサーが戦っている地点に向かう巨漢の男ーライダーのサーヴァントの姿に、フリートは呆然と呟いた。
確かに誰かに介入して欲しいとは思っていたが、まさか本当に空気を読まずに介入して来る人物がいるとはフリートとは思っても見なかった。
しかしこれで、当初の目論見通りに事が運べるとフリートは笑みを浮かべながら、白衣の中から薬が入った小瓶を取り出す。

「・・・・・・目的完遂の為とは言え、この薬の効果が消えた後は、凄く嫌なんですよね・・・・・でも、仕方がありません！！我慢しましょう！！」

ーーーゴクンッ！

意を決すると共にフリートは持っていた小瓶の中身を飲み干した。

港場。その場所はセイバーとランサーの激闘によって見る影もな

いほどに荒れ果てていた。
それを行った張本人達であるセイバーとランサーは互いに油断なく睨み合っていた。
しかしセイバーは本来ならば両手で握る筈の剣を右手だけでしか握っていなかった。ランサーが仕掛けた策にまんまとセイバーは引っ掛かり、ランサーの二つ目の宝具である”癒えぬ傷を負わせる”黄色の短槍ー《必滅(ゲイ・ボウ)の黄薔薇》ーによって、左手の腱が断たれしまった。
故にアイリスフィールの治療魔術を使用しても傷は癒えず、ランサーが消滅するか、《必滅(ゲイ・ボウ)の黄薔薇》が失われない限りセイバーの左手の傷は癒えない。
左手を奪われてしまったセイバーは歯噛みしながらも、目の前にいる好敵手であるランサーと睨み合っていると、突然に上空から雷鳴が轟く。

ーーーガアアアアアアアンッ!!

「ッ!・・・・・・・戦車(チャリオット)?」

雷鳴を轟かせ、紫電をまき散らせながら夜空を疾走してくる戦車の姿にアイリスフィールは唖然として驚愕を口にする。
セイバーとランサーも突然の戦車の出現に緊迫しながら戦車を見つめると、戦車は丁度セイバーとランサーの真ん中に降り立つ。
それと同時に御者台から威風堂々と巨漢の男が立ち上がる。

「双方、武器を収めよ。王の御前である!!」

巨漢の男は先ほどの雷鳴に負けないほどの大音声で叫び、凄まじい気迫が宿った炯々たる瞳でセイバーとランサーを見回す。
無論、セイバーとランサーは現れた男の気迫には全く怯まず、自

分達の勝負に水を差した男に険しい視線を向けると、巨漢の男はとんでもない事を叫ぶ。

「我が名は征服王イスカンダル！此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した！」

その宣告にこの場に居合わせた全員が呆気にとられた。

聖杯戦争において真名は攻略の要になる重要な要素。自らの真名を堂々と名乗り上げる者など初めてだろう。

誰もが呆気にとられて言葉を失っている中、最初に復帰したのは御者台の中でうずくまっていたライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットだった。

「何を・・・考えてやがりますかこの馬鹿はあああっ！！」

ーーーベシッ！

「ギャフッ！」

錯乱あまりに掴みかかって来たウェイバーをライダーは無言でデコピンを食らわせて黙らした。

そのままライダーは何事もなかったように、左右にいるセイバーとランサーを見回しながら問いかける。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが、矛を交える前に問うておくことがある？うぬらが聖杯に何を期するかは知らぬ。だが、今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうか」

「貴様・・・何が言いたい？」

「うむ、噛み砕いて言うとだな・・・・・ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はない？さすれば余は貴様らを朋友として、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」

そのイスカンダルのあまりの突拍子もない提案に今度こそ誰もが言葉を失った。

セイバーは怒りすら忘れて呆れかえり、対面にいるランサーは話についていけずに途方にくれていた。彼らが参加しているのは、文字通りの戦争である。

それなのにイスカンダルはいきなり現れ真名を名乗り、あげくの果てには矛さえも交えていないのに従えと宣告して来たのだ。

英断なのか愚挙なのかは、判断しずらいがこの場においては愚挙に近かった。

「・・・先に名乗った心意気には感服せんでもないが・・・・・その提案には承諾しかねる」

そうランサーは刃物のように威嚇的な眼孔をイスカンダルに向けながら話す。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓い交わした新たな主君ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「そもそも、そんな戯言を述べるために、貴様は私達の勝負に水差したというのか？」

ランサーの宣言に続くように不愉快そうに眉を動かすセイバーが問いかけた。

生真面目な彼女にとっては、ライダーの提案は許しがたいことだ

った。

「戯れ事が過ぎたな征服王。騎士として許し難い侮辱だ」

「ムゥッ・・・・・・待遇は応相談だか？」

『くどい！！』

なおも言い募るライダーを、セイバーとランサーは一蹴した。
更にセイバーは憮然としたまま言葉を付け加える。

「重ねて言うならば、私もまた一人の王としてブリテンの国を預かる身だ。いかな大王と言えども、臣下に加わる訳にはいかない」

「ほう？ブリテンの王とな？・・・・・こりゃ驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは」

「・・・・・その小娘の一太刀を浴びてみるか？征服王」

言葉と共にセイバーは剣の構えをライダーに向かってとる。
並々ならぬセイバーの闘気にライダーは困ったように眉をしかめて、深く溜め息を吐く。

「こりゃー交渉決裂かぁ。勿体ないなぁ。残念だなぁ」

「ら、い、だあぁぁぁ」

ライダーが残念さ満ちた声で呟くと同時に、腫れあがった額を押さえながら、どん底まで掠れた声をウェイバーはあげた。

「ど～すんだよぉ。征服とか何とか言いながら、けっきょく総スカンじゃないか・・・・・オマエ本気でセイバーとランサーを手下に出来ると思っていたのか？」

「いやまぁ、”ものは試し”と言うではないか」

「”ものは試し”で真名をバラしたンかい！！」

あまりの事実にウェイバーは逆上して、ライダーの胸鎧をポカポカと連打しながら泣きじゃくった。

その哀れさを誘う光景にアイリスフィールは、軽蔑したものか同情したものか悩んでいると、低く地を這うような怨嗟に満ちた声が鳴り響く。

《そうか、よりにもよって貴様か》

「あ・・・・・う・・・」

聞こえてきた憎悪に満ち溢れた声に、ウェイバーは声の主の正体とその理由に行き着き、身体が凍りついた。

ウェイバーは聖杯戦争に参加するに至る経緯の中で、今憎悪の声を隠れながら上げている人物から、イスカンダルを召喚する為の聖遺物を盗みだした経緯があった。

最終的にはイスカンダルの召喚に成功したが、聖遺物を盗まれた人物がウェイバーを許す筈がない。

《いったい何を血迷って私の聖遺物を盗みだしたのかと思ってみれば、よりにもよって君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねぇ。ウェイバー・ベルベット君》

「あ・・・あぁう・・・」

《残念だ。実に残念だなぁ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才には、凡才なりに凡庸で平和な人生を手に入れられたはずだったのにねぇ》

自身が放つ敵意によって恐懼に固まっているウェイバーに、ぞっとするような冷ややかな猫なで声で隠れているランサーのマスターは、さらに声を続ける。

《致し方ないなぁウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持ってあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味。その恐怖と苦痛を余すところなく教えてあげようではないか。光栄に思いたまえ》

そう声の主は、恐怖に身を竦ませているウェイバーに声をかけた。真の魔術師たることは、死を観念することに他ならない。その意味を言葉の上でしか理解していなかったウェイバーは、今こそ身に染みて味わっていた。隠れながら自身に殺意を向けている人物の視線は、それほどまで致命的だった。

だが、この時に隠れているランサーのマスターは決定的な勘違いをしていた。ウェイバーに言った言葉は、自身にも降りかかることに全く気がついていなかったのだ。後に彼は自身が言った全てをその身に。彼などでは足下どころか、爪一つ及ばない人物に骨の髄まで絶望を染み込まらせてしまうのだった。

最もそんな未来が待ていると知らないランサーはマスターは恐怖に震えているウェイバーに残虐な視線を向けていると、ウェイバーの肩に優しく力強い手が、ウェイバーの肩に置かれる。

ーーーポン！

「ッ！」

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな」

恐怖に震えていたウェイバーを支えるようにはライダーはウェイバーの肩に手を置きながら、いずこかに潜んでいるランサーのマスターに向かって、底意地の悪い憫笑を向ける。

「だとしたら片腹いたいのぅ。余のマスターであるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

そのライダーの言葉と共に沈黙が降り、姿無き者の怒りの気配だけが夜気を伝播する。

ライダーはその気配に剛胆に大笑すると、今度は誰にともなく夜空に向かって大音声で張り上げる。

「おいこら！！他にもおるだろが。闇に紛れて覗き見をしている連中が！！」

「・・・・・どういうことだ、ライダー？」

いきなりのライダーの叫びに、セイバーは怪訝な声で質問し、ランサーも怪訝な顔する。

するとライダーは満面な笑みを浮かべながら、セイバーに向かって親指を立てて示す。

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真っ向切っての競い合い、

まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては惹かれて出て来た英霊が、よもや余ひとりということはあるまいて」

ライダーのその宣言にアイリスフィールは、潜んでいる切嗣のことが看破されたのかと肝を冷やす。

しかし、どうやらライダーの意中には他のサーヴァントしかなく、再び辺り一面に轟き渡れとばかりに、大声で呼びかける。

「情けない。情けないのぅ。冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーはマスターが見せつけた気概に、何も感じることがないと抜かすか？誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するというのなら、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなぁ。んん！！」

ライダーはそのままひとくさり豪笑を放つと、不敵な笑みで口元を歪めながら、挑発的な眼差しを周囲の闇に向けて叫ぶ。

「聖杯に招かれし英霊は、今！此処に集うがいい！なおも顔を見せぬ臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものとしれ！！」

そのライダーの大熱弁に、ソレは即座に応じた。

『グオオオオオオオオオオオオオッ！！！！』

「ヌウ！？」

突入として海の方から響き渡ったライダーの大音声の叫びさえもかき消してしまうほどの咆哮に、ライダーは海の方に目を向ける。

セイバーとランサーも先ほどの咆哮はただごとではないと慌てて海の方に目を向けると、ソレはゆっくりと上空を旋回していた。

ソレの姿を目撃した誰もが言葉を失い、呆然とアイリスフィールが呟く。

「・・・・・・ま、まさか・・・・・・そ、そんな！？」

「う、嘘だろう・・・・・誰が、誰が・・・アレを・・・・・呼び出したんだ」

「グルウゥ！！」

アイリスフィールとウェイバーが現れたソレに掠れた声を出していると、ソレは低い唸り声を上げながら、ライダー達を上空から見下ろす。

全長約十メートル以上の大きさを持ち、長い尾を揺れ動かし、赤い鱗で全身を覆った巨大な翼を羽ばたかせている生物。幻想種の頂点に位置する象徴。

魔術師、サーヴァントが絶対に見間違えることがない神秘が彼らの目の前にいた。

『りゅ、竜種！？』

「グオオオオオオオオオオオオッ！！」

驚愕に満ち溢れたアイリスフィールとウェイバーの叫びに応じるように、赤き竜は咆哮を辺りに轟かせた。

その凄まじい咆哮によって衝撃波が巻き起こり、セイバーはアイリスフィールを守るように立ち、ランサーは赤き竜に向かって身構え、ライダーはウェイバーの襟を掴む。

その様子を竜は上空から愉しげに眺め、目の前に居る者達を灰燼に帰す為に口に魔力を集めようとする直前に、竜の背から涼やかな

声が響く。

「止めよ。今日は挨拶だけで訪れたのだ。お前の炎で終わらせるのは、つまらん」

「グルウゥ」

背から聞こえてきた声に、竜は不満そうにしながらも口に集めようとしていた炎を霧散させた。

ライダー達はその竜の動きに竜を操っている者が背にいると思って目を向けると、美しく輝く蒼銀の鎧に身を包み、腰に刀と思わしき武器を帯刀した女性が存在していた。

その女性は長い蒼い髪をポニーテールにしてまとめ、冷たい色をした紅い瞳をライダー達に向けながら手綱を握っていた。

「あいにくと、真名の名乗りは封じられているので、代わりにクラス名で我慢して貰おう。私のクラスはキャスター。聖杯戦争で最弱のクラスだ」

そう女性ー明らかに性格が変わっているフリートーは、皮肉げに自身のクラスをライダー達に告げながら、竜の背に乗ったままライダー達を見下ろすのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・出遅れた」

竜の背に乗ったフリートを見つめるライダー達の背後で、寂しげ

に呟く、街灯のポールの頂点に立つ黄金の英霊がいたが、誰も気がついていなかった。

第二話　参戦（後書き）

今回使用宝具

名称：《見通す魔鏡》
ランク：D
分類：対人宝具
詳細：形は一般的な眼鏡の形をしているが、ありとあらゆるセンサー機能が備わっている。最大百キロ先まではっきりと見え、フリートが作成したサーチャーが捉えている映像も常時見ることが可能。また、視覚からに対する幻影や精神に影響を及ぼす何らかは全て無効化される。

名称：《小バッタ一号機》
ランク：E
分類：対人宝具
詳細：対象にした人物を常に監視し、動きを使用者に常に報告する。大きさは手のひらサイズの上に、隠密能力に秀でている。また、自爆機能が備わり、万が一見つかったら、対象者に取り付き自爆するので、決して発見してはいけない。
なお、爆発の威力は人が跡形もないほどに変わり果てる威力だが、周りには全く影響が起きないように結界が自動で展開されるので、”周り”は安全である。

名称：《性格変化薬》
ランク：D
分類：対人宝具

詳細：一定時間使用者の性格を変えてしまう秘薬。しかし、使用者は性格が変わっている間の記憶を全て覚えているので、自分らしくない言動に正気に変えった後に苦しむ。
また、福次効果として、既に精神を変えている影響で洗脳や魅了などの効果は通じない。

第三話　集結（前書き）

活動報告の方にあるフリートのサーヴァントステータスに追加を加えました。

ご意見をくれた方々ありがとうございます。

本編の方は今しばらくお待ちください。

第三話　集結

聖杯戦争に参加する魔術師達が出来ることならば呼び出したくないサーヴァントのクラスが、二つ存在している。

一つは狂戦士のクラスであるバーサーカー。基礎能力が低いサーヴァントを強化するクラスだが、その代わりに他のサーヴァントのクラスに比べて消費魔力は数段勝り、何よりもサーヴァントの理性が失われてしまう為に制御することが最も難しいクラス。

故に聖杯戦争で必勝を確実に狙うのならば、かなり大博打を打たなければならない難しいクラスなのだ。その為に大抵の魔術師は好き好んでバーサーカーのサーヴァントをまず呼ばない。

そしてもう一つの呼び出したくないサーヴァントのクラスがキャスター。魔術師のクラスだった。

その理由は他のクラスであるセイバー、ランサー、アーチャーの三騎士と呼ばれるクラスにある。

前述した三つクラスのサーヴァントには《対魔力》のスキルが保有される。このスキルは魔力を用いる攻撃を無効化してしまうスキルな為に、どうしても魔術に頼って攻撃してしまうキャスタークラスは、セイバー、ランサー、アーチャーと戦う上で圧倒的なハンデが課せられしまうのだ。

故にキャスターのクラスは聖杯戦争に於いて最弱と呼ばれ、召喚されたキャスタークラスのサーヴァントは大抵が保有される《陣地作成》のスキルを使用して、作り上げた陣地の中に建て籠もり、向かって来た敵を撃退するのが定石だった。

だが、そんな聖杯戦争の定石を粉砕するキャスターのサーヴァントが、赤い竜の背に乗りながら呆然としているライダー達を見下ろしていた。

「やれやれ、何時まで間の抜けた顔している？其処で叫んだ征服王

の呼び掛けに応じて現れたのだ。少しは声を出して欲しいな」

「グルウゥ」

性格が完全に変わり、何時も着ている白衣とは違って、戦装束である蒼銀に輝く鎧に身を包んでいるフリートの言葉に同意するように竜は唸った。

その様子にフリートは冷笑を口元に浮かべ、岸壁に聳え立つデリッククレーンに目を向ける。

「やれ」

「グオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

ーーーードグオオオオオオオンッ！！！

フリートが命じると共に竜はデリッククレーンに口を向け、閃光がその口から放たれた。

その凄まじい威力にデリッククレーンは破片一つ足りとも残さずに消滅した。

ライダー達はその竜の力に、目の前に滞空している竜は紛れもなく幻想種の頂点に位置する竜種だとはっきり理解した。

しかも今の竜の一撃には余力さえも感じられる。対人宝具ではすまない。対軍、いや対城宝具の域に目の前の竜はいるのだと、その場にいる誰もが理解した。

「フム？・・・・・まだ、呆然しているのか？よしでは、残り“三つ”。隠れて様子を伺っているネズミを撃つか」

「グルウゥ！」

「ッ！待てキャスター！」

フリートの宣言に獰猛な笑みを浮かべた竜の姿に、ランサーは慌てて叫んだ。

竜とフリートはこの港場に潜んでいる者に対して攻撃を加えようとしている。

事実、先ほどの攻撃はランサー達は知らない事だが、デリッククレーンに潜んでいたアサシンを狙って攻撃したもの。

そして港場にはまだ潜んでいる者達がいる。その中にはランサーのマスターもいる。

故にランサーはフリートと竜の行動を慌てて止める為に叫んだのだが、慌てているのはランサーだけではなかった。

「舞弥！すぐにその場から移動しろ！あのキャスターは、僕らのことにも気がついている！」

《了解！すぐに移動します！》

切嗣の指示にインカムの向こうにいる舞弥は答え、即座にその場から移動を開始する。

通信が切れるのを切嗣は確認すると、自身も隠れていたコンテナから離れる為に銃器を手早く片付け、最後にフリートと竜に目を向け、気がつく。

フリートがライダー達に向けていた視線が、何時の間にか切嗣へと向けられ、その口元が冷笑に歪んでいることに。

（ッ！？）

切嗣の全身に怖気が走った。

アレは不味い。アレを野放しにしたら何れ取り返しがつかない何が引き起こされてしまう。
切嗣の今までくぐり抜けて来た修羅場によって鍛えられた第六感がそう叫んでいた。
しかし、フリートは切嗣への興味を失ったのか、ゆっくりと視線を外し、握っていた手綱を手放すと、竜の背から飛び降りてコンテナの上に降り立つ。

ーーートンッ！

「さて、征服王とやら。一体いかなる用向きであのような介入を行ってまでランサーとセイバーの尋常な立ち会いを阻んだのだ？それにあのような他の英霊を臆病者呼ばわりする発言・・・・・下らぬ用向きならば、我が契約竜の劫火で焼き尽くしてくれるが？」

「ラ、ライダー！」

「わかっとる！安心せよ坊主！」

自身に向かって涙混じりながら叫んで来たウェイバーに対して、ライダーは先ほどセイバーとランサーを勧誘していた時以上の覇気を持って答えた。
ウェイバーはその覇気に満ちた叫びに遂にライダーが本気になったのだと内心で歓喜した。
流石に幻想種の頂点に位置する竜種を従えているような相手を勧誘する気は、剛胆なライダーでも持ってなかったのだと、ウェイバーは安堵の息を吐く。
何せフリートがコンテナに降りたとはいえ、竜は未だに上空に竜は滞空している。対応を間違ったら、即座に宣言通りに劫火を放って来るのは間違いない。

故に流石にライダーでもフリートは勧誘しないとウェイバーは思うが、彼はまだライダーと言う漢を侮っていた。

「そこにいる、キャスターよ！・・・・余の配下にならんか？待遇は相談するぞ！」

ーーーバタッ！

晴れやかな笑みと共に親指を立てながら突き出したライダーの姿に、ウェイバーは倒れた。

他のセイバー、ランサー、そしてアイリスフィールも思わず唖然としながらライダーを見つめ、倒れていたウェイバーが起き上がってライダーに掴み掛かる。

「お、お前は何を言っているんだ！？ア、アレが見えないのか！？りゅ、竜だぞ！？幻想種の頂点！！竜種なんだぞ！？」

「言われんでもわかっとるわ！余も本物の竜を見るのは、初めてだ」

そのライダーの言葉に、ウェイバーは気がつく。

ライダーの瞳がまるで憧れていたモノを目にしたように光り輝いていることに。確かに竜など言う幻想種の頂点に位置する存在を目撃する機会など、幾ら英霊でもないに等しいだろう。

ウェイバー自身、もしも敵として現れなければ呆然と目の前にいる竜を見つめていただろう。

しかし、残念ながら自分達が参加しているのは戦争であり、目の前にいる竜はフリートの契約竜。敵として現れた存在。

しかもライダーはどう考えてもふざけているとしか思えない事を、フリートに告げてしまった。

一体どういう答えが返って来るのかと、ウェイバーは震えながら

フリートに目を向けようとする。
そして背後を振り返ってみると、フリートは額を右手で押さえながら、ライダーを見ていた。
「離れた所で見ていても思ったが・・・・・このような男に世界は征服されかけたのか？」
「ハハハハハハハハッ！見よ坊主！竜を従えているキャスターにも、余は感心されとるぞ！」
「呆れられているんだ！」
豪笑しているライダーに向かってそうウェイバーは叫び、その場にいる全員が困ったように困惑していると、突然にフリートは身に着けている鎧の中から一本の笛を取り出す。
そしてそのまま笛を口元に運ぶと、上空に滞空している竜に向かって笛の音を奏で出す。
ーーー♪～♪♪～～♪
「グオオオオオオオオオオオオッ！！・・・・・・・キュル～～！」
「か・・・可愛い」
笛の音と共に竜の身体が光り輝き、光が消えた後には肩に乗れるほどに小さくなり、先ほどまでの獰猛な姿など感じさせない愛くるしい竜が存在していた。
フリートの肩に降り立つ小さな竜の姿に、アイリスフィールは羨望の声を出すが、竜はまるでアイリスフィールには目を向けずにフリートに擦りよる。

「キュル〜〜」

「ご苦労だった。しばらくはその姿で休め。そこにいる者の相手にあの巨体は不利だからな」

肩に乗っている竜を撫でながら視線をライダー達の背後にフリートは向ける。

ライダー達もそれに釣られて背後を振り向いてみると、額に青筋を浮かべた黄金の英霊が街灯のポールの頂上に立っていた。

金色の輝きを発している輝く甲冑の立ち姿に、ウェイバーは思わず息を呑む。

「あいつは・・・・・」

昨夜遠坂邸を監視している時に一瞬見ただけだったとはいえ、ウェイバーはポールの頂上に立つ黄金の英霊を見間違えなかった。

間違いなく昨夜、遠坂邸に侵入したアサシンを圧倒的な破壊力で葬り去ったサーヴァントに他ならない。

既にこの場にキャスターであるフリートがいることも考え、更にライダーの呼びかけに応じて現れたのだとすれば、理性を持ち合わせているということになる。それが意味することは、目の前にいる黄金の英霊は狂化しているバーサーカーではないという事実。

となれば、消去法で残るのは、三大騎士クラスの最後の一角であるアーチャー。

フリートを含めたこの場にいる全員が黄金の英霊のクラスを確信していると、アーチャーは青筋を浮かべたままフリート達を見下ろしながら喋りだす。

「我(オレ)を差し置いて“王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も湧

くだけではなく・・・・我(オレ)を無視するとは・・・赦し難き所業」

開口一番、アーチャーである黄金の英霊は声音に隠しきれない怒りを滲ませながら、眼下に対峙する四人のサーヴァントを侮蔑も露わに見下ろす。

傲然たる態度とその口調は、ライダーの尊大さに近しい印象はあるが、根幹から異なっていた。征服王は他者を認めるに対して、王を名乗っているアーチャーは自身以外の他者を対等に認めていない。

流石のライダーも自分以上に高飛車な存在の出現に、困惑しながら顎の下を掻く。

「難癖つけられたところでなぁ・・・・・イスカンダルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我(オレ)ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

（つまり、奴の時代には王と呼べる存在は奴一人だったと言うことだな）

もはや侮辱と呼ぶにも度の過ぎる宣言を、さらりと言い捨てるアーチャーを見ながら、フリートは手に入った情報を吟味していた。

もし先ほどのアーチャーの侮辱としか言えない宣言を聞いたのが、本来のフリートだったら不愉快になって、アーチャーに嫌がらせを行っていただろう。しかし、現在のフリートは戦闘者に近い性格になっているので、アーチャーの宣言は聞き流していた。

最も性格は変わっていても、逆鱗の部分は変わっていないので、もしアーチャーが逆鱗に触れでもしたら、目的を忘れてアーチャー殲滅に乗り出すだろうが。

そんな風に人知れず死刑台に一番近い場所にいると知らないアー

チャーに、フリート同様に先ほどの宣言を聞き流したライダーが、溜息を吐く。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？貴様も王たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？雑種風情が、王たるこの我（オレ）に向けて？」

順当に考えれば、理があるライダーの言い分に対して、アーチャーの真紅の双眸は、更に傲岸な怒りを帯びた。

そこには真名を秘めるという打算はかんじられない。ただひたすらに感情的なばかりの癇癪しか感じられず、黄金の英霊は募っていた怒りを殺意に変えて放出しだす。

「我が拝謁の栄にしてなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

そうアーチャーが断じると同時に、アーチャーの背後の左右の空間が陽炎のように歪む。

次の瞬間に、歪んでいる空間から、眩い刃の輝きが忽然と虚空に出現した。

その正体は抜き身の剣と槍。どちらとも目を奪われるような装飾に彩られているだけではなく、隠しようない猛烈な魔力を放っていた。

明らかに尋常な武器ではなく、宝具としか思えない代物。

それは昨夜、アサシンを一方的に抹殺せしめた時に起きた不可解な攻撃の再現。昨夜、遠坂邸を監視していた者達はそれを理解した。ただ一人を除いて。

（なるほど、アーチャーの宝具の正体。そしてその真名が見えた）

誰もがアーチャーの異様に身動きが取れなくなる中、フリートだけがアーチャーの正体にたどり着いていた。
自身もアーチャーに似た宝具だということもあるが、それよりも基本的に製作者であるフリートは、ランサー、セイバー、そしてライダーの宝具には在るモノが、アーチャーが出現させた宝具には全く無い事を一目見ただけ見抜いていた。

（あの宝具達には、全く使われた気配がない。ライダー達の宝具には在るのに、あの宝具達にはない。つまり、恐らく宝具として存在が確立される前の代物。“原典”。そしてアーチャーの発言）

ただ一人、アーチャーの力に呑まれることなく、フリートだけがアーチャーの真名を看破した。
バビロニアの王にして、人類最古の王と称される存在。この世の全てを手に入れた王。
“英雄王ギルガメッシュ”。それこそが、遠坂時臣が聖杯戦争を確実に勝利するために呼び出したアーチャーの真名。
本来ならば時臣としては、最も隠して起きたい情報だったが、アーチャーの唯我独尊の行動と、フリートという異常な存在のせいで、初戦で看破されてしまった。

（これで五体のサーヴァントの真名と大体の宝具の力の情報は手に入った。初戦とは考えられん戦果だな。残るは、バーサーカーだけだが、現れないところ考えると、別の機会なり・・ムッ！）

「グルゥゥ！」

突如としてあらぬ場所から吹き荒れた魔力の奔流に、フリートは即座に目を向け、フリートの肩に乗っていた竜は警戒するように唸

りながら、魔力の奔流が起きている場を睨んだ。
その魔力の奔流に気がついたのはフリートだけではなく、居並ぶ全員が魔力の奔流の発生地点に目を向け、屈強な人影が実体化する瞬間を目撃する。
セイバーとランサーが戦っていた場所から僅かに離れた地点で実体化した存在は、”影”としか形容出来ない存在だった。
長身で肩幅が広く、一分の隙もなく、底抜けに黒い甲冑で全身を覆い隠し、面貌さえも細く穿たれたスリットから燃える不気味な双眸しか判断出来ない無骨な兜で隠している。
状況から考えれば、新たに現れたサーヴァントは、バーサーカーに間違いない。
此処に聖杯戦争でも、異例中の異例が起きた。フリートが消滅させたアサシンの代わりにやって来た“新たな三体の隠れ潜んでいるアサシン”を含めれば、初戦にして召喚された全てのサーヴァントが集結したのだから。
しかし、新たに現れたバーサーカーのサーヴァントには、フリートとアーチャー以外の全員が困惑していた。
新たに現れたバーサーカーには他のサーヴァント達がそれぞれ持ち合わせていた”輝き”が全く見えず、ただ“負の波動”しか感じられないのだ。

「・・・・・なぁ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなぁ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだわなぁ」

油断なくバーサーカーを見据えながら、揶揄するように質問して来たランサーに、流石のライダーも顔を顰めながら答えた。
黒い騎士姿であるバーサーカーが放っているのは、掛け値なしの殺気だけ。魔力から生じた旋風さえも、怨嗟の唸り声と感じるほど

に禍々しい。
ライダーもそんな気配を放っている相手と交渉する気力は涌かず、自身の横にいるウェイバーに問う。
「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？アレは」
「・・・・判らない。まるっきり判らない」
「何だぁ？貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と”観える”ものなんだろう、ええ？」
英霊と契約しマスターになった者には、他のサーヴァントのステータスを”読み取る”透視力が授けられる。
英霊を招いた聖杯から与えられる、マスターならではの特殊能力。セイバーの背後にいる代行のマスターであるアイリスフィールには不可能だが、ライダーの正式なマスターであるウェイバーには備わっている。
現に目の前にいるセイバー、ランサー、アーチャー、そしてフリートの能力値をウェイバーは把握している。たが、バーサーカーのステータスは。
「見えないんだよ！あの黒いヤツ、間違いなくサーヴァントなのに・・・・ステータスも何も全然読めない！」
「ふむ」
狼狽しきったウェイバーの弁明に、ライダーは眉を顰めながら、改めてバーサーカーを凝視する。
バーサーカーが纏っている闇色の甲冑には、何の特徴もなく、装着者の素性を判断出来る要素は一切ない。

いや、見れば見るほどにバーサーカーの細部が、ぼやけて、ますます不鮮明になっていく。
その事実にライダーだけではなく、アイリスフィール、セイバー、ランサーも気がつくと、黙ってバーサーカーを凝視していたフリートが呟く。

「なるほど・・・あのサーヴァント。生前はどうやら誰かに扮装した逸話を持った英霊のようだな」

「ムッ？・・・・・キャスターよ？何か気がついたのか？」

フリートの呟きを耳にしたライダーは、フリートに目を向けた。
それは他の者達も一緒なのか、その場にいる全員がフリートに目を向けると、フリートはバーサーカーを見ながら話す。

「あのバーサーカーが纏っている闇は、知ろうとすればするほどに深まっている。つまり、自身の正体を隠して起きたいという逸話から生まれた特殊能力なのだろう。そして僅かに判別出来るところから見て、生前は騎士の類に違いない」

「ほぉ。僅かな観察で其処まで見切るとは」

フリートのバーサーカーに対する推測に、ライダーは思わず感嘆した。
自分達が全くバーサーカーの素性に関する情報が手に入らないと頭を悩ましていたのに、フリートはほんの少しだけの情報で、バーサーカーの生前に関する事柄を見抜いた。
卓越した知力と分析能力にアーチャーを覗いた全員がフリートに対する警戒を強めていると、バーサーカーがゆっくりと街灯の上に立つアーチャーに身体を向け出す。

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが・・・」

自身に向かっておぞましい視線を向けてくるバーサーカーに、アーチャーは耐え難い屈辱を感じた。

そしてアーチャーの背後に浮いていた宝剣と宝槍が、反転して切っ先がバーサーカーに向けられる。

「せめて散りざまで我を興じさせよ。雑種」

ーーードン！ドン！

アーチャーが冷徹な宣告を放つと共に、剣と槍が虚空を走った。

その攻撃は遠距離攻撃を行える者からすれば、杜撰としか言えない投擲だったが、それでも宝具には違いなく、破壊力は絶大だった。

まるで発破をかけられたかのように路面は砕け、バーサーカーがいた地点は木っ端微塵に砕けたアスファルトが粉塵となって視界を覆い隠していた。

『・・・・・ッ！！』

僅かに粉塵が薄れた瞬間、アーチャーとフリートを除いた全員が息を呑んだ。

舞い上がった粉塵が薄れていく中で、バーサーカーは健在だった。そのバーサーカーが立っている地点から、僅かに逸れた足元に、クレータ状に抉れた路面に突き刺さる槍が存在し、バーサーカーの手には剣が握られていた。

バーサーカーはあの一瞬の間に、自身に向かって飛来した宝剣を掴み取り、獲得した獲物を使って、宝槍を打ち払ったのだ。

「・・・・・奴め、本当にバーサーカーか？」

自身が目撃したバーサーカーの凄まじい技巧に、ランサーは張り詰めた声で呟き、ライダーもバーサーカーの技巧には唸ざるえなかった。

「狂化して理性を無くしているにしては、えらく芸達者な奴よのぅ」

（さて、いかなる力を使ってあの握っている宝剣を操った）

注意深くバーサーカーを見ながら、フリートはバーサーカーの力を見極めようとする。

宝具とは、そもそも使い手である英霊のためだけに特化した専用の武器。アーチャーやフリートのように特殊な宝具も存在するが、バーサーカーのように手に入れたばかりの宝具を自在に操るなど本来は不可能。

それを実行せしめたバーサーカーも、恐らくは特殊な宝具の類の所持者だと、フリートは考えながらその正体を見極め出す。

（・・・・・ん？違う・・・・・・・まさか！？奴の力は！？）

「・・・その汚らしい手で、我が宝物に触れるとは・・・・・そこまで死に急ぐか、狗ッ！！」

怒りの叫びと共に、再びアーチャーの周囲が揺らめき、新たな宝具の群れが出現する。

その数、十六挺。しかも槍や剣だけではなく、斧、槌、矛、更には用途や素性も知れない奇怪な刃物さえもある。それら全てが正真正銘の宝具。

「そんな、馬鹿な・・・・・」

新たな宝具の数々の出現に、ウェイバーは思わず呻いた。
それはアーチャーの真名にたどり着いたフリートを除いた全員が同じ気持ちだろう。無尽蔵に宝具を所持しているなど、それは異常としか言えない状況。
しかもアーチャーは昨夜の対アサシンの時も踏まえて、同じ武器は使用していないのだから。

「その小癪な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか・・・・・さぁ、見せてみよ！」

ーーードドドドドドドドッ！！

アーチャーの号令と共に、虚空に浮かんでいた宝具の群れが先を争ってバーサーカーに殺到した。
絨毯爆撃と見間違う攻撃。しかし、その攻撃の標的となっているバーサーカーも異常な存在だった。
いの一番飛来した矛を左手で掴み取ったと思えば、握っていた右手の剣と共に縦横無尽に振るい、宝具の洗礼を打ち返しだす。
その技巧は狂化して理性を失っているとは信じられないほどに、精緻に華麗だった。

「・・・・どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとは相性が最悪だな・・・・おまえさんもそう思うだろう？キャスター」

「確かに同意見だ。バーサーカーの方は強い武器を拾えば拾うだけ強くなる。アーチャーの攻撃は自ら深みに嵌る一方でしかない・・・・・最もあのバーサーカーも“二本”までが限界のようだが」

「なぬぅ？ソイツは一体どういう意味・・」

ーーードゴオンッ！！

フリートの意味深な言葉について質問しようとした瞬間、ひときわ大きな轟音が響いた。

その音にライダーが戦いの場に目を戻してみると、倒壊した建造物の影響で粉塵が立ち込める中で、左手に片刃の曲刀を握り、右手に戦斧を握ったバーサーカーが立っていた。

アーチャーの攻撃を全てバーサーカーは退けたのだ。その証拠にバーサーカーの足元には宝具が散らばっていた。

その実力にセイバーとランサーは戦慄する。いずれ聖杯戦争を勝ち残っていけば、アーチャーとバーサーカーとも矛を交える展開もありえる。だが、どういう処方で立ち向かえばいいのかと悩む。

そして注目されているバーサーカーは、何気になく手元に残っていた二本の宝具を掲げ、予備動作もなくアーチャーに向かって投擲する。

しかし、狙いが曖昧だったのか、二本の宝具はアーチャーの足場のポールに向かい、バターのようにポールを寸断する。

ーーーザンッ！

ーーーギギギギッ！ドン！

寸断されたポールは地響きを立てながら倒壊した。

そして街灯の頂点に立っていたアーチャーは、街灯が倒れる前に身を翻し、何事もなかったように地面に着地するが、その面貌は凶相に変わっていた。

「痴れ者が・・・・天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ!!その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片ひとつ残さぬぞ!!」

怒りによって紅蓮に燃える双眸をバーサーカーに向けながら、アーチャーは吼えると共にみたび背後の空間を歪ませて、宝具の群れを呼び出す。

その数は先ほど倍の三十二。流石の今度ばかりはライダーも押し黙った。アーチャーの潜在力は、フリート以外の誰にも計りきれなかったのだ。

そして憎悪に燃える視線をバーサーカーに向け、アーチャーが号令を放とうとした瞬間、その視線はあらぬ方角に転じた。

その視線の先に何が在るのかを悟ったフリートは、アーチャーとバーサーカーの戦いは終わりだと確信する。

「貴様ごときの諫言で、王たる我の怒りを鎮めろと?大きく出たな、時臣・・・・命拾いしたな、狂犬」

さも忌々しげに吐き捨てながら、アーチャーは展開していた宝具の群れを納めた。

そのままアーチャーは居並ぶサーヴァント達に目を向ける。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

最後まで傲慢な言葉を言いながら、アーチャーは実体化を解き、この場から去って行った。

アーチャーが残していた輝きの残滓が漂う場所を見ながら、ライダーは苦笑する。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほどに豪毅な質ではなかったようだな」

呆れた風にライダーは苦笑しながら呟くが、そんな暢気な場合ではなかった。アーチャーに負けず劣らず脅威であったバーサーカーが未だこの場にいる。

戦っていたアーチャーの消失によってバーサーカーは、所在なさげに双眸をさまよわせ、新たな獲物を見定める。

その標的にされたセイバーは背筋に悪寒が走り、思わず身構えた瞬間、バーサーカーから呻きが放たれる。

「・・・・・ｕｒ・・・ａｒ・・・・・ｕｒ・・ッ！！」

全身から殺意を迸らせ、黒い騎士は野獣の如き勢いでバーサーカーはセイバーに向かって突進した。

「■■■■■■■■■■■■ッ！！！」

「はあっ！」

ーーーギィィィィン！！

不気味ながらも凄まじい気迫と共にバーサーカーが振り下ろしてきた”得物”を、セイバーは危なげなく不可視の剣で受け止めた。

しかし、受け止めたバーサーカーの武器の正体を見極めて、セイバーは愕然とする。

バーサーカーが振るった武器の正体は、先ほどバーサーカーが寸断した長さニメートルのポールの鉄屑だったのだ。

そしてそれがセイバーに取っては一番の驚愕だった。

セイバーの振るっている剣は、風に覆われているとは言え。宝剣

の中の宝剣である至高の宝具。
その剣とバーサーカーが持っているただの鉄屑が拮抗している。
そんな有りえない事態にセイバーは困惑しながら、バーサーカーが握っている鉄柱に目を向け、ある事実に気がつく。

「なん・・・だと？」

目の前の広がる事実に、セイバーは思わず目を疑った。
バーサーカーが手にしている鉄柱には、葉脈のように黒い筋が幾重にも絡みつき、鉄柱全体を覆うように広がっていた。
その黒い筋の起点はバーサーカーの両手。バーサーカーが身に着けている籠手に掴まれた箇所から、蜘蛛の巣状にバーサーカーの魔力が鉄柱全体に浸透していたのだ。

「貴様は！？まさか！？」

「・・・・・そういうことか。あの黒いのが掴んだものは、何であれヤツの宝具になるわけか」

バーサーカーの宝具の正体をセイバーが驚愕と共に理解すると同時に、見守っていたランサーとライダーも同じ結論にたどり着いていた。
バーサーカーの宝具は、槍や剣と言った形ではなく、特殊能力型の宝具だった。しかもその能力は恐ろしい力だった。
何せアーチャーの宝具の支配権を乗っ取るだけではなく、ただの鉄屑がセイバーの持つ宝剣と鍔迫りあうほどに強化してしまうのだから。
アーチャーとは別の意味で無尽蔵に宝具を持ち合わせている強敵の出現に、ランサー、ウェイバー、アイリスフィールは驚くが、ライダーだけは静かに肩に竜を乗せながら、豪快な槍捌きでセイバー

を攻め立てているバーサーカーを見ているフリートに横目を向ける。
（こやつ・・・・・・バーサーカーの宝具を短時間で見抜きおった。余でさえ、セイバーと鍔迫りあているところを見て漸くたどり着いたというのに・・・・・・何者なのだ？）

よくよく考えてみれば、得体の知れない存在がもう一人いたことにライダーは気がついた。
竜という幻想種の頂点を従え、卓越した知力と分析能力を示したフリートもライダーを持ってしても底が見えない。
寧ろ見せている部分さえも、本人からすれば氷山から僅かに落ちる粉雪でしかない印象が感じられる。
そういう風にライダーがフリートに対して疑念を募らせている間にもセイバーとバーサーカーの戦いは続いていた。
しかし、バーサーカーの猛攻の前にセイバーは防戦一方だった。ここにきてランサーの《必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇》によって負わされた左手の傷が響いていた。
右手だけの握力でしか剣は振るえず、固有スキルの《魔力放出》でサポートとして何とかバーサーカーの猛攻を応戦の猛攻するのが限界だった。
だが、何時までも凌ぎきれる訳がない。しかし、それでも弱みを見せる訳にはセイバーはいかなかった。
傍観に徹しているライダーとフリートへの牽制をバーサーカーとの互角の拮抗で示さなければ、この状況をつけ込まれしまう。
たが、戦っているバーサーカーも相当な手練れだった。手負いとはいえ、最強のサーヴァントであるセイバーに反撃の隙を与えないのだから。

「■■■■■■■ッ！！」

「貴様は、一体！？」

そのセイバーの質問に対して、バーサーカーは裂帛の気合いと共に鉄柱を振りかぶる。

大技を使い、ガードもろともセイバーの矮躯を叩き潰そうとする。

「■■■■■■ッ！！」

「・・・悪ふざけはその程度にして貰おうか、バーサーカー」

ーーーザンッ！

セイバーに鉄柱が振り下ろされる直前、一条の紅き閃光が走り、バーサーカーが握っていた鉄柱は半ば辺りで両断された。

それを成したのは、セイバーの前に立つ長槍と短槍の二槍を握った槍兵。

右手に握る赤き長槍ー打ち合った魔力を打ち消す力を宿す《破魔（ゲイ）の紅薔薇（ジャルグ）》の切っ先をバーサーカーに向けて構えているランサーだった。

魔力を浸透させて疑似宝具にいかなる物でも変えられるバーサーカーの宝具に対して、ランサーの魔力を打ち消す《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》は有効な宝具。

ランサーの前ではバーサーカーの宝具は少なくともこの場では無意味に近いモノなのだ。

「そこのセイバーには、この俺との先約があってな・・・・・これ以上つまらん茶々を入れるつもりならば、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー・・・・・」

死闘最中ながらも、セイバーには決然と立つランサーの姿に感極まるものがあった。
ランサーの誇りの形は、まさに彼女が奉ずる”騎士道”に忠実。しかし、この場にそれを天晴れと評しない者がいた。
それがランサーのマスターだった。

《何をしているランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機であろう》

「我が主！セイバーは！必ずやこのディルムッド・オディナが誇りに懸けて討ち果たします！お望みなら、そこの狂犬めも先に仕留めて御覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に・・・」

《ならぬ》

ランサーの熱を帯びた嘆願を非情に断ち切り、ランサーマスターはよりいっそうに冷ややかにサーヴァントが逃れることが出来ない命令を下す。

《ランサー、バーサーカーと共にセイバーを殺せ。令呪をもって命じる》

令呪。その意味を理解する者全員が、その場の空気が凍りつくのを感じた。
サーヴァントに対する三度の絶対命令権。そしてそれを使用されて命じられたランサーにはもはや自由意思はない。
セイバーは視界の中で、ランサーの槍が反転するのを目撃し、素早くその場から飛び退いた。

同時にランサーの槍がセイバーがいた場所を擦過し空を切った。

「ランサー・・・・ッ！！」

ランサーに呼びかけようとセイバーはするが、途中で言葉に詰まった。

セイバーに向き直ったランサーの顔は、怒りと屈辱に歪みきった悲痛きわまりない状態だった。

それだけで英霊ディルムッドの心中は理解出来るが、令呪に束縛されたランサーにはどうすることも出来ない。

ただ命令通りにバーサーカーと共闘して、セイバーを殺すしかないのだ。

そんなランサーの傍らに、半分ほどの長さになった鉄柱を長剣のように構えたバーサーカーが並ぶ。

まさしくセイバーは絶対絶命。左手のハンデがあるだけではなく、ランサーまで敵側に回ってしまった。

「セイバー・・・すまん」

「・・・・・アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に・・・・・せめて貴女だけでも離脱して下さい。できる限り遠くまで」

セイバーは淡々とアイリスフィールに向けて目配せを行いながら、目の前に立って圧倒的な脅威に静かな眼差しで見据えた。

このままではアイリスフィールも確実に死んでしまう。故に誇り高きセイバーは自らの命と引き換えに活路を拓こうとする。

その問いにアイリスフィールが答えようとした瞬間、バーサーカーがセイバーに向かって疾駆する。

「■■■■■■■■ッ！！」

「セイバーッ！！」

「クッ！！」

アイリスフィールの悲痛な叫びに、セイバーはバーサーカーに対して剣を構え、次の瞬間、バーサーカーは背後に向かって吹き飛んだ。

ーーードゴオンッ！！

「■■■■！？」

「・・・・えっ？」

「なっ！？」

目の前で起きた光景にアイリスフィールは疑問の声を出し、セイバーは自身が目撃した光景に驚愕した。

それはランサーも同様だった。彼も目撃していたのだ。バーサーカーが吹き飛ぶ直前にセイバーとバーサーカーの間に入り込んだ蒼い閃光を。

そしてバーサーカーを吹き飛ばした張本人は、振り抜いた左拳をゆっくりと腰あたりに移動させながら右手に握っている刀身までも黒く染まった刀を、ランサーと起き上がろうとしているバーサーカーに向かって構える。

ーーースチャッ！

「気に入らないやり方故に、ランサーの代わりに私が助力させて貰うぞ、セイバー」

そう不敵な笑みを浮かべながら、フリートは背後で呆然としているセイバーに声を掛けるのだった。

「・・・・・・ヌゥ・・・少し出遅れてしもうた」

フリート同様にセイバー達の戦いに介入しようとしていたライダーが、自身の戦車の手綱を所在なさげに握っていた。

第三話　集結（後書き）

今回使用宝具

名称：《竜巫女より生まれし笛》
ランク：Ａ＋＋
分類：対城宝具
詳細：異世界の竜が住むアルザスの竜を使役することが出来る宝具。本来の持つべき巫女が使用すれば、アルザスに住む竜を全て召喚することが可能なのだか、フリートでは契約している竜のみ。とある異世界移動の技術も組み込まれているので、例え異世界でも竜召喚は可能。

第四話　魔剣

その場にいる全員がセイバーを守るように立ち、バーサーカーとランサーに向かって黒塗りの刀を構えているフリートに困惑を隠せなかった。

誰もがこの場に於いて、キャスターのサーヴァントであるフリートの参戦は有りえないと思っていた。

フリートのクラスは魔術師のキャスター。

故にランサーのマスターで在るケイネス同様に、自身に利益が無いこの場では動くはずがないと思っていた。

だが、今フリートはセイバーを守るように立ち塞がっている。

「・・・何故？私を守るのですか？キャスターの貴女が？」

「フム・・・・・理由は至極簡単だ。ランサーのマスターの行動は、ハッキリ言って私に取って不利益しかない。だから、参戦したのだ」

「何？」

セイバーはフリートの言葉の意味が分からなかった。

しかし、実際にケイネスの行動はフリートに取って不利益どころか、一部を除いて有害でしかない。

今しばらくはサーヴァントとは誰一人として欠けて貰う訳にはいかない。故に初戦でセイバーが消えるなど、フリートに取っては在ってはならないことなのだ。

（セイバーが消滅したら、折角回収していたセイバーの髪や血が消滅してしまう。そんなことを許せるか！）

フリートがセイバーの助力を行った一番の理由は、回収していたセイバーの髪や血液を守る為だった。
サーヴァントは完全に消滅しないかぎり、身体から離れた部分ー髪の毛や血液ーはその場に留まる。だが、その髪の毛や血液の持ち主であるサーヴァントが完全に消滅すれば、同時にそれらも魔力に変わって消滅してしまうのだ。
そんなことを例え性格が変わっていてもフリートが許す筈がなかった。

「聞こえいるか？ランサーのマスター。貴様の行いはハッキリ言って、私に取って有害以外の何ものでもない。今すぐにランサーを退かせるならば、無駄な労力を使わずに済むぞ？」

《それは私のセリフだ、最弱のサーヴァント。貴様の邪魔さえ無ければ、セイバーを討ち取れていたと言うのに》

「セイバーを討ち取れていた？・・・・なるほど、確かに“邪魔さえ入らなければ、セイバーを討ち取れていたかもしれんな”。だが、その後はどうなっていたと思っている？」

《何？》

「よもや貴様、理性を失っているバーサーカーがセイバーを協力して倒してくれたランサーに感謝するとでも思っていたのか？そんな筈が在るまい。この場では確かに退く可能性は在るが、次は確実にランサーを討ち取りにバーサーカーは動く。つまり、万全の状態でバーサーカーは再び現れる。あのアーチャーの常軌逸した攻撃を“無傷”でくぐり抜けたバーサーカーが万全の状態で」

《ッ！！》

フリートが告げた事実に隠れているケイネスが、息を呑む気配が空気から伝わってきた。

「視野が狭過ぎるな。戦いとは一度や二度ではない。ましてや、この争いは戦争だ。短期ばかり見ていては勝てる訳がない。既にセイバーは宝具を使用出来ない。ならば、この場ではバーサーカーをランサーとセイバーの二人がかりで攻め、ランサーの力でセイバー同様にバーサーカーに回復が不可能な傷を負わせれば良かったのだ。まさか、自分が召喚した英霊の力も把握していなかったのか？だとしたら、貴様は戦う者としても探求者としても“三流”だ」

《ッ！！き、貴様！？》

「それ以上の我が主の侮辱は許さんぞ、キャスター」

フリートの言葉にケイネスが怒りを露わにしようとした直前、両手に握る二槍をフリートに向かってランサーは構えた。

「それ以上の我が主の侮辱を許すと思っているのか？」

「侮辱だと？・・・・・・ランサー、私はこれでもかなり怒っているのだぞ。何せ貴様のマスターの馬鹿な令呪の使い方のせいで、“バーサーカーを労せずして倒せる千載一遇の好機が消えたのだからな”」

「何！？それは一体どう言う・・・」

「■■■■ッ！！」

ーーーバキィィィン！！

『ッ！！』

バーサーカーの叫びと共に響いた何が割れ砕ける音に、フリートを除いた全員がバーサーカーに目を向けた。

そして目を向けられたバーサーカーはゆっくりと自身の両腕を確かめるように動かし、更に高まった殺意の波動をセイバーだけではなく、フリートにも向ける。

バーサーカーのその様子にフリートがバーサーカーに対して何かを行っていたのだとその場にいる全員が悟り、フリートは自身がバーサーカーに仕掛けたこと簡潔に話す。

「殴り飛ばした時に、バーサーカーの両手に強力な縛りを施しておいた。先ほどの砕ける音はその術をバーサーカーが破壊した音だ。つまり、バーサーカーはそれまで一切両手が使えなかったと言うことだ」

「なッ！？それでは！？」

「そう。バーサーカーの宝具の起点は両手の籠手。両手が使えなければ、その力は全く使えない。私の術で両手が使えなかったバーサーカーは、あまり労力を使わなくて倒せた筈なのだが」

言葉と共にフリートは意味深な視線をランサーに送り、セイバーは何故フリートがバーサーカーに対して追撃を行わなかったのかを悟った。

令呪によってランサーはバーサーカーの援護を命じられてしまっている。当然ながらランサー自身にも被害が及ばない限り、バーサーカーの援護にランサーの身体は勝手に動くだろう。

つまり、フリートが作り上げたバーサーカーをあまり労せずして倒せる千載一遇の機会が、ケイネスが使用した令呪のせいで失われてしまったのだ。

「大方セイバーのステータスを見て判断したのだろうが・・・・・下らん。敵の宝具を奪える能力を持ったバーサーカーこそが一番の脅威だ。みすみす逃したな。得体の知れない存在を、簡単に討ち取れたチャンスを。フフフッ」

「・・・・・おい、ライダー」

「あぁ、余にもわかっとる、坊主・・・・あのキャスター・・・・涼しい顔をしとるが・・・・よほど内心ではランサーのマスターに対して怒っとるみたいだわなぁ」

さしものライダーも、徹底的にケイネスのプライドをボコボコにしているフリートに、冷や汗を隠せなかった。

その場にいる誰もが悟った。“フリートがバーサーカーに対して行った縛りは、ケイネスのプライドをボコボコにする為だけに行った”と言う事実に。

確実に今頃はケイネスの顔は怒りと屈辱に歪んでいると、弟子だったウェイバーは確信する。

それを肯定するように凄まじい怒気が放たれる。

《ランサーッ！！そこにいる無礼者も討ち取れッ！！》

「はッ！！」

（フッ。自らのプライドに固執している奴は、余りにも手応えがない）

ケイネスの指示にフリートは内心で喝采を上げた。
全て自身の思惑通り。後は当初の予定通りに進めるだけ。
そうフリートは思いながら、右手に握っている刀を構え直し、背後にいるセイバーに声を掛ける。

「そう言うことだ。ランサーは私が押さえる。バーサーカーの相手は頼むぞ」

「・・・・・分かりました。此処は貴女への貸しにしておきます。ですが、ランサーの槍は」

「重々承知している。安心しろ。この身を屈伏させられるのは、生前共に過ごした者達だけだ！」

ーーードンッ！！

叫ぶと同時にフリートはランサーに向かって飛びかかった。
その動きにランサーは素早く右手に握る長槍を構え、神速の突きを放つ。

「はッ！！」

「フッ！！」

ーーーギィィィィン！！

ランサーの神速の突きを、フリートは右手に握った刀で受け流した。
その時にフリートに生まれた左側の隙に向かって、ランサーは左

手に握っていた短槍をなぎ払う。

「貰った！」

ーーーガキィィィン！！

「なっ！？鞘だと！？」

ランサーの短槍がフリートに届く直前、フリートは左腰に差していた鞘を素早く抜き取り、短槍を弾いた。

そのまま二刀流のように両手に握った刀と鞘をフリートは持ち直し、ランサーと攻防を繰り広げだす。

フリートとランサーの戦いを離れたところから見ていたウェイバーとアイリスフィールは、ランサーと互角に戦っているフリートの技量に唖然とせざるえなかった。

キャスターのクラスは、そうじて肉弾戦の技量は低いはず。だが、そのキャスターである筈のフリートが、ランサーと互角の攻防を繰り広げている。

「・・こりゃあ、余も見誤っておったわ。竜なんぞに乗ってキャスターを名乗っておったから、てっきり竜を支援して戦う奴だと思っておったら・・・中々に接近戦もこなしておる」

ライダーの呟いた言葉は、ウェイバーとアイリスフィールも同じ思いだった。

竜と言う幻想種を従えているばかりか、ランサーとの互角の接近戦までフリートはこなしている。

死角が見えないとウェイバーが頭を悩ませていると、フッと先ほどまでフリートの肩に乗っていたモノが消えていることに気がつく。

「アレ？・・・・そう言えば、あの竜はどこに行ったんだ」

「モオ～モオ～」

「キュル~」

「ん？」

聞こえてきた二つの鳴き声に、ウェイバーが戦車の先の方を見てみると、牡牛の一頭の頭の上に乗っている竜を発見する。

「キュル、キュキュル？」

「モオ～モオ～オオ～」

「キュル~」

「オオ！？坊主見ろ！ゼウスの子らと、竜の間に友好が生まれておるぞ！」

（いや、何か凄まじく違う気がする）

ウェイバーは何故か分からなかったが、ライダーの言葉は間違っていると確信していた。

二頭の牡牛と竜は、友情を結んでいると言うよりも互いの主人の愚痴を言い合っているような印象をウェイバーは感じていた。

何故か遠からず自身も種族の差を踏み越えて、あの輪の中に入ってしまうような未来が待っていると、ウェイバーの中の何が囁くが、そんな未来はごめんなので現実に目を戻す。

フリートとランサーの攻防は、相変わらず一進一退だった。

隙あらば互いに攻撃を繰り出し、それを防いでいる。少なくとも武器を使った戦いは互角にしかウェイバーには見えなかった。
そう武器を使った戦いだけならば。

「祖は銀雪。穿つは槍」

（馬鹿な！？これだけの攻防をしながら詠唱だと！？）

聞こえてきた詠唱にランサーは驚愕せざるえなかった。
魔術の発動には精神集中が必要。大規模な魔術で在れば在るほどに、発動させる為には尚更にそれに精神集中が必要な筈。
しかし、今フリートはランサーと攻防を繰り広げながら詠唱を行っている。
本来ならばランサーが攻めきるチャンスの筈なのだが、フリートの剣は詠唱をしながらも一切鈍りはなかった。

ーーーダン！

「放たれよ！氷結槍！！」

ーーーザザザザザザザッ！！

詠唱が完成すると同時にフリートはランサーから距離を取るように離れ、素早く自身の周りに発生させていた氷の槍を撃ち出した。
ランサーは迫り来る氷の槍を目撃すると、迷うことなく前に進み出る。
ランサーのクラスにはセイバーのクラスほどではないにしても《対魔力》のスキルが保有される。例え打ち消せなくても、自身の《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》ならば、魔力で作れた氷の槍を打ち消せる。
故にランサーは前進を選択するが、次の瞬間、ランサーに迫って

いた全ての氷の槍が砕ける。

「砕けよ！」

ーーードンッ！！

「何！？」

フリートの指示通りに氷の槍は砕け散り、視界を埋め尽くすように発生した白い冷気にランサーの視界は遮れ、足が止まった。

《対魔力》と言っても、発生した現象は無効化出来ない。あくまで《対魔力》は、魔力を用いた攻撃にしか作用しない。

ランサーの視界を覆い尽くす冷気を《対魔力》で無効化することも、《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》で打ち消すことも無理なのだ。

「天鳴る轟雷。天空より降り注ぎ、我が敵に裁き下せ」

ーーーゴロゴロッ！！

「まさか！？」

聞こえて来た雷の鳴り響く音にランサーが空を見上げみると、雷雲に向かって左手を伸ばしながら空に浮かんでいるフリートがいた。

そしてそのままフリートは自身を見上げているランサーに向かって左手を振り下ろす。

「汝の意を知らしめん為に、高き天空より降り注げ！！迅雷！！」

ーーービカァァァァァン！！

ーーードゴオォォォォォン！！

「・・・・・・・て、天候操作・・・・・・う、嘘だろう？・・・・ま、魔法の領域じゃないか」

目の前で起きた出来事に、ウェイバーは全身の震えが抑えられなかった。

それは同じ魔術師であるアイリスフィールも同じ気持ちだった。天候を操れる魔術師など現代には存在していない。

更には、空から落ちて来た雷はランサーがいた地点以外に全く影響を及ぼしていない。

完全に天候操作しているフリートの力に、魔術師であるウェイバーとアイリスフィールが言葉を無くしていると、空に浮かんでいたフリートがゆっくりとアスファルトの上に着地する。

ーーートンッ

「・・・・・今ので決めるつもりだったのだが。最速の名は伊達ではないな、ランサー」

自身が起こした雷の落下地点に目を向けながらフリートが呟くと、吹き荒れていた煙の中から所々に火傷を負いながらも、戦意が全く衰えていないランサーが出てくる。

フリートがその様子を楽しげに眺めていると、ランサーが話しかけて来る。

「・・今のは危なかった。まさか、天候を操って雷を引き起こすとは・・・後一歩《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》を投げるのが遅かったら、討ち取られていたかも知れんな」

「ど、どういう意味だ、ライダー？」

「・・・・先ほどの雷が落下して来る一瞬・・・・ランサーは避けられぬと判断するやいなや、自身の槍を空に向かって投げおった。それによって一際大きな雷は霧散し、後は威力が劣る小規模な雷だけが残り、ランサーは自身へのダメージを最小限に抑えたのだ」

ライダーが告げた事実にウェイバーと近くで聞いていたアイリスフィールは言葉が出せなかった。

あのほんの僅か一瞬の間に、それだけの高度な戦いが繰り広げられていた。

直前に視界を塞ぎ、大規模な天候操作を駆使したフリートも、それだけの攻撃を最小限のダメージで逃れたランサーも、共に並みサーヴァントでは無いと二人の戦いを見ていた誰もが理解する。

そしてランサーはフリートの動きを警戒しながら、近くに落ちていた《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》を右手に持ち、フリートに向かって構える。

ーーースチャッ！

「恐るべき戦術だったが、俺の《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》の前では決定的ではなかったな。更に貴様は左手を自由に動かす為に、鞘を捨てた。もはや、先ほどまでのようには俺との斬り合いは出来まい」

「確かに・・・・・正直言って多少予想を超えていた・・・・・やれやれ、出来れば使いたくなかったが、使わざるえないか」

「何？」

フリートの意味深な言葉に、ランサーは訝しみながらフリートを見つめると、フリートは右手に握っていた刀をアスファルトに突き

刺す。

ーーートスッ

「さてランサー。私にこれを使わせることを後悔するぞ」

言葉と共にフリートは鎧の中から小刀を取り出した。
その小刀にランサーだけではなく、戦いを見ていたライダー、ウエイバー、アイリスフィールは疑問を抱かざるえなかった。
確か魔力は感じられる。だが、宝具と呼べるほどの魔力は感じられず。かと言って魔力が全く感じられない訳ではない。
一体何なのかとランサー達が疑問を抱いていると、フリートは前に向かって小刀を構え、迷うことなく左手の手の平に深々と突き刺す。

ーーーードスッ！！

「目覚めろ。《猛毒の一角》、リアクト」

ーーーードゴオォォォォン！！

《なっ！？》

小さな声でフリートが呟くと同時に、凄まじい魔力がフリートを中心に吹き荒れた。
その魔力にランサー達が驚愕していると、吹き荒れていた魔力は徐々に薄れ、両手に禍々しい魔力を放っている、長剣と短刀を握ったフリートが立っていた。

「紹介しよう。これが私の宝具。《魔導殺しの双剣》ケーニッヒ・

リアクテッド。ありとあらゆる魔導を否定する剣だ」

「何だと！？」

「さて、長話は終わりだ。時間が迫っている。一瞬足りとも目を逸らすな。逸らせば、お前は死ぬぞ」

ーーードンッ！！

「クッ！」

言葉と共に突進して来たフリートに対して、ランサーは即座に迎え撃つように二槍を構えた。

それに対してフリートは右手に握っている長剣の方のケーニッヒを、ランサーに向かって振り抜く。

「ハアッ！！」

「舐めるな！」

ーーーガキィィィィン！！

（何だ！？キャスターの力が上がっている！？）

フリートが振り抜いたケーニッヒを《必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇》で防御したランサーは、伝わって来た衝撃に違和感を覚えた。

先ほどまでよりも、明らかにフリートの力が上がっている。宝具を解放したとは言え、明らかにフリートの力は異常なレベルで引き上がっていた。

そのことにランサーは疑問を抱きながら、フリートが振り抜いて

来る二刀のケーニッヒを防いでいると、フッとフリートが振るっているケーニッヒに魔力が集中している事に気がつく。

ーーーゴオォォォォォッ！！

「まさか！？」

「気がついたか？フッ！！」

ーーーガキィィィィン！！

「グウッ！！」

フリートが振り抜いたケーニッヒの一撃によって、ランサーは防御していながらも吹き飛んだ。

しかし、ランサーは空中で態勢を整えると危なげなくアスファルトに着地し、警戒するようにフリートを睨む。

「・・・・・何という厄介な。その剣。大気中に存在している魔力を吸収して強化する剣だな？」

「正解だ。加えて言えば、貴様の持つ《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》同様に魔力を打ち消す力も宿っている。最もその効力は、”私の周り全体”だかな」

《ッ！！》

「何と厄介な剣なのだ。あの剣の握っとるだけで、魔力を用いた攻撃が通じなくなるとは」

流石のライダーも、ケーニッヒに宿る力には唸ざるえなかった。
魔力を用いた攻撃が全て無効化されると言うことは、ライダーの戦車を牽く牡牛が発生させる雷も無効化されてしまう。
ランサーの《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》にも魔力を打ち消す力が宿っているが、その範囲は刃先だけ。
フリートの握るケーニッヒは、その名の通り《魔導殺し》の名が相応しい剣だった。

（厄介な。だが、攻める隙は在る。あの剣は大き過ぎる。懐に入り込みさいすれば・・・）

「あぁ、言い忘れていたが、ケーニッヒは・・・・・伸縮自在だ」

ーーーブオン！！

《なッ！？》

フリートがケーニッヒを軽く振り抜くと共に伸びた刀身に、ランサーだけではなくライダー達も目を見開いた。
しかし、ランサーは素早く伸びたケーニッヒの刃を深く腰を沈める事で避け、その背後でセイバーに鉄柱を振り下ろそうとしていたバーサーカーの身体をケーニッヒの刃が深々と鉄柱ごと切り裂く。

ーーーブザンッ！！

「■■■■！？」

《なっ！？》

ケーニッヒに切り裂かれたバーサーカーは悲鳴を上げながら、崩

れ落ちた。
その姿にバーサーカーと戦っていたセイバーだけではなく、全員がバーサーカーを切り裂いたフリートに目を向ける。
「フゥ～・・・・これでバーサーカーは戦闘不能だな」
そのフリートの言葉を肯定するように、バーサーカーは切り裂かれた場所を押さえながらその身を霧散させるように霊体化して、その場から消えた。
それを確認したフリートは、再び辺りに目を向ける。
「さて、これで援護すべき相手は消えたぞ？まだ、続けるか？」
《クッ！・・・・・・ランサー、撤退するぞ。今宵は此処までだ》
そのケイネスの言葉に、ランサーは安堵の吐息を吐きながら槍の切っ先を下げる。
「感謝する。キャスター」
「私に感謝するのは止めておけ。貴様のマスターを潰す相手だからな」
ランサーはその言葉に僅かに眉を険しくするが、すぐに視線を逸らし、セイバーに視線を向ける。
二人の間には言葉は不要だった。今日の戦いの決着はいずれつけると、互いに理解しているのだ。
そしてランサーも霊体化して、その姿を消失させた。
セイバーはそれを確認すると、戦いを傍観していたライダーに目を向ける。

「・・・結局、お前は何をしに出て来たのだ？征服王」

「さてな。そう言うことはあまり深く考えんのだ」

「じゃすともーめんとぷりーず！？」

ライダーの言葉に叫んだのは、彼のマスターであるウェイバーだった。

「じゃ何か！？お前は色々と言っていたけど！本当は何も考えてなくて！セイバーとランサーの戦いに介入して、他のサーヴァントを呼んだのか！？」

「まぁ、そう言うことだなぁ」

ーーーバタッ

余りの事実にウェイバーは意識が遠退き、倒れ伏した。

流石にアイリスフィールも今度ばかりはウェイバーに同情せざるえなかった。

一歩間違えば、この場に集った全てのサーヴァントを敵に回すような行動が、その場の勢いだったなどと、知りたくはなかっただろう。

しかし、ウェイバーを気絶させた張本人であるライダーは気にせずにセイバーに目を向ける。

「セイバーよ。先ずはランサーとの因縁を精算しておけ。その上で貴様かランサーか、勝ち昇ってきた方と相手をしてやる。さらばだ」

ライダーはセイバーにそう告げると、二頭の神牛に鞭を入れ、稲妻を散らしながら去っていた。
フリートはそれを確認すると、自身の肩に戻って来た竜を乗せてセイバーに背を向けて去ろうとする。だが、その前にセイバーがフリートに質問してくる。

「待てキャスター」

「何か用か、セイバー？」

「・・・・・貴様、何故バーサーカーを見逃した？」

「何のこ・・」

「惚けるな。私に集中し、更にランサーの槍同様に魔力を打ち消す剣を持った貴様ならば、バーサーカーに重傷で終わらせたことは不自然だ。私を助けたことと言い・・・・・何を企んでいる？」

「・・・・・・・何れ分かる」

意味深な言葉を笑みと共にフリートはセイバーに告げると、その身を肩に乗っていた竜と共に霊体化させてセイバーの視界から消え去った。
セイバーは言い知れない嫌な予感を感じる。今回の聖杯戦争で最も警戒すべきなのは、征服王でも、あの黄金のアーチャーでも、得体の知れないバーサーカーでもなく、今自身の前から消え去ったフリートなのではないかと感じながら。

戦闘が在った港場から、僅かに離れた地点に存在するマンホール。
その鉄蓋が揺れ動き、マンホールの中から一人の男性が出て来る。
その男性の状態は酷いと言う言葉では足りないほどに、悲惨だった。
全身が血まみれで、いたるところで毛細血管が破裂し、重度の放射能被曝者と変わらなかった。
誰が信じるだろうか。彼こそが戦いに乱入して来た得体の知れないバーサーカーのマスターであると。
もはや彼の身体は生物としての限界を超え、死滅しかかっていた。
だが、それでも彼には聖杯戦争を降りると言う選択肢はない。
彼の望みを叶える為には、例え血肉の最後の一滴まで燃え尽きることになっても、聖杯戦争を勝ち残らなければいけないのだ。

「・・・・・待って・・・・・いて・・・・・くれ・・■・・必ず・・・・・・君を・・・」

男性はこの場には居ない誰かに向かって呟くと、壁を支えにしながら立ち上がる。
今夜の戦いで、バーサーカーもかなりのダメージを負った。完治するまでには時間が掛かる。
ひとまずは休息しようと、彼は歩き出した瞬間、暗がりから飛んで来た注射器が彼の首に突き刺さる。

ーーートスッ！

「・・・・・アッ？」

一瞬彼には自身の首に突き刺さる注射器が、何なのか分からなかった。
そして彼の意識は遠退き、意識が完全に途切れる前に彼が最後に見たのは、白衣を着た蒼い髪の女性だった。

第四話　魔剣（後書き）

今回使用宝具。

名称：《魔導殺しの双剣》（ケーニッヒ・リアクテッド）

ランク：A

分類：対軍宝具

詳細：ありとあらゆる魔導を分断（ディバインド）してしまう魔導殺しの双剣。持つだけで、魔力を用いた攻撃は無効化してしまうだけではなく、フリートの改造によって、分断（ディバインド）した魔力か大気中に漂っている魔力を刀身に吸収し、斬撃の威力を向上させる機能が追加されている。

また、ランサーの《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャグル）》同様に魔力によって創られた防具などは無効化してしまう。更に刀身は伸縮自在であり、剣から放たれる砲撃は《対魔力》のスキルでは無効化出来ない。

第五話　状況（前書き）

現在、本作における間桐雁夜に関するアンケートを実施しています。

1. 雁夜魔改造計画ルート（ネタ武器使用）
2. 《恐怖》ルート（魔導師化、使う魔法は同じ）
3. 絶望ルート（雁夜には救いなく、桜だけが救われる）

以上の三つです。詳細は活動報告の方にあります。

尚、1にあった時間制限とは、力が発揮出来る時間です。身体は万全になります。

現在のところの結果

1. 十二票
2. 五票
3. 二票

尚、混合も加えた票です。

締め切りは短いですが、今日の二十一時までにさしてもらいます。

活動報告か感想にご連絡ください。

第五話　状況

聖杯戦争の開催されている間、中立地帯に指定されている場所が存在する。
その場所こそが、冬木市の郊外に位置し、小高い丘の上に立つ冬木教会だった。
そして中立地帯に指定されている理由は一つ。この教会には聖杯戦争の監督役が居るからだった。
しかし、今その本来ならば公正な監督役が居ると思われている教会は、ただ一人のマスターを聖杯戦争に勝利させる場所になっていた。
それが理由で、未だサーヴァントが現存しているにも関わらず、中立地帯の中で安全を得ている人物がいた。
遠坂時臣の弟子であり、今回の聖杯戦争の監督役の実の息子でもあり、脱落したと思われているアサシンのマスターである言峰綺礼は自身が得た情報を時臣に知らせていた。

「港での初戦の顛末は以上ですが・・・・・間違いなくキャスターのサーヴァントは」

《アサシンの生存を知っているのは、間違いないと言うことだな、綺礼》

「はい」

目の前にある寂れた蓄音機ー遠坂家伝来の通信機ーから響いた時臣の声に、綺礼は頷いた。
港場にフリートが現れた最初の時に、フリートは乗っていた竜の劫火でアサシンが潜んでいたデリッククレーンを破壊した。

あの場にアサシンが潜んでいたことを知らない者から見れば、フリートが自身の力を示す為に不用意に力を晒したように思えるが、時臣と綺礼にはアレは警告なのだと理解していた。

《“アサシンを使って、自身の情報を調べたりすれば、次は私達に撃つ”という警告だろう》

「恐らくは・・・・・追加で送り込んだアサシンの視界から見たキャスターの戦闘の中で、天候を操っていたのを確認しました。その気になれば、此処に雷を落とす可能性も有り得ます」

《・・・・・フゥ～、此度のキャスターを召喚したマスターはかなりの当たりを引いたな。天候操作を行い、更には幻想種の頂点である竜を従えているほどの者を召喚したのだから》

通信機の向こうにいる時臣は、僅かに苦々しい声を出した。

誰も生存していると思っていなかったアサシンの生存がバレたばかりか、時臣と綺礼が裏で繋がっていることもフリートは知っていると二人は確信している。かと言って、その件でフリートをどうこう出来る訳がない。

決められたルールを最初から破っているのは、時臣と綺礼であり、更に追求すれば聖堂教会まで遡る。

少なくともフリートに何かしらの行動を時臣か綺礼が行えば、即座にフリートは報復としてルール違反の件を他のマスターに暴露する可能性が高い。

《・・・・・・・キャスターはしばらく放置だ。多少、此方の動きを牽制したのは、アーチャーを恐れてのことだろうからな》

状況的にフリートの牽制は、無数の宝具を所持しているアーチャ

ーを恐れてのことだと時臣は考えた。
確かにアーチャーであるギルガメッシュが盛大に宝具をひけらかしたのは、時臣と綺礼にしてもまずかったが、逆にその行動が他のサーヴァントとマスターの警戒心を高めた利点がある。
潜在力が明らかでないアーチャーよりも、真名が明らかになっている者からの方が対抗しやすい。故に時臣と綺礼は当初の予定通り、他のサーヴァント達が潰し合って数が減るまでは情報収集に専念することで方針を固めた。

《では、頼むぞ、綺礼》

「お任せ下さい、師よ」

綺礼の言葉に通信機の向こう側にいる時臣は、満足げな吐息を漏らすと通信を切った。
綺礼はそれを感じるが何の喜びも、師である時臣の為に頑張ろうと言う気持ちも湧いてこない。実際に彼が聖杯戦争に参加しているのも、時臣に師事しているのも彼自身の意思ではなかった。
偶然にも聖杯戦争に参加する為の資格である令呪が刻まれたことから綺礼は時臣の弟子になり、そしてアサシンを召喚して聖杯戦争に参加している。全ては遠坂時臣を勝利させて、聖杯を時臣が手に入れる為に。
その為だけに綺礼は聖杯戦争に参加していた。だが、港場での少し前まで別の目的が綺礼には在った。
その目的とは、聖杯戦争に参加する参加者の中にいたある人物との対峙。
セイバーのマスターとして、時臣が候補に上げていた“衛宮切嗣”。
時臣に切嗣に関する資料を渡された時から、綺礼は切実に切嗣との対峙を望んでいた。

しかし、港場にセイバーと共に現れたのは望んでいた人物である切嗣ではなく、全くの別人。
その瞬間に綺礼が聖杯戦争に参加し続ける意義は失われた。
結局今まで繰り返して来た退屈な任務だったと、三年間を総括し、綺礼は乾いた感慨に耽る。
だが、運命は綺礼の聖杯戦争の脱退を認めなかった。

「・・・・恐れながら、綺礼様」

「・・・何だ？」

音もなく現れた髑髏の仮面と黒いローブの女アサシンに驚くこともなく、綺礼は質問した。
アサシンはその問いに答えるように、手に持っていた首がねじ切られている蝙蝠の死骸を綺礼に差し出す。

「教会の外で此方の蝙蝠を発見いたしました」

「使い魔か？」

「はい。結界の外ではありましたが、明らかにこの教会を監視する意図で放たれたものかと」

（キャスターか？）

アサシンの推測に、一番可能性が高い犯人はアサシンの生存を唯一知っているフリートではないかと綺礼は考える。
しかし、その可能性はかなり低いと綺礼は即座に思い直す。港場で見せたフリートの実力ならば、いかに諜報能力が高いアサシンでも監視がバレないようにすることなど容易いはず。

では、フリート以外に誰が不可侵領域に指定されている教会を監視していたのかと、綺礼は手掛かりを探す為に蝙蝠の死骸をつまみ上げる。
そして綺礼は奇妙な物が蝙蝠の死骸に付いていることに気がついた。蝙蝠の死骸の腹には、バンドで縛り付けられたＣＣＤピンホールカメラが付いていたのだ。
ますますこれはキャスターであるフリートの仕業でないと綺礼は確信した。
魔術師と言う人種は世間一般のテクノロジーを軽蔑し忌避する傾向がある。港場でのフリートの実力から推察して、フリートは神代時代の英霊だと時臣と綺礼は推測している。更にキャスターであるフリートが召喚されてからの日数を考えれば、現代のテクノロジーを扱える技術の修得している時間など無い。
実際のところは現代どころか、魔法の領域のテクノロジーを平然とフリートは扱えるのだが、フリート自身、自身の素性は神代時代の英霊と思わせるように港場で動いたので、時臣と綺礼は完全に勘違いをしていた。
しかし、この場では綺礼に取ってそれは幸運に繋がった。
綺礼には、フリートの他に教会を怪しんで使い魔に電子機器を装備させるような人物に心当たりがある。
そしてもし蝙蝠の使い魔を放った人物が、自身が思い描いている人物だとしたら確かめなければいけない。数分後、綺礼は誰にも気がつかれないようにして、教会から夜の闇へと消えて行った。

冬木ハイアットホテル。
市内において地上三十二階の高さを誇る、今現在では木市の最高級のホテル。最高級の設備とサービスを誇り、利用者が納得するだけ品質と格式を持っていた。

そのホテルの最上階である三十二階のスイートルームを借り切って拠点としている聖杯戦争の参加者であるマスターがいた。
ランサーのマスターであるケイネス・アーチボルトである。
しかし、最高級のスイートルームを借り切っていながらも、彼は非常に苛立っていた。最も彼は借り切っているホテルのスイートルームが気に入らないこともあるが、今苛立っているのは今日の初戦の顛末である。
ケイネス自身は今日の初戦は万全を期して臨んだ。しかし、その成果は、期待していたものとは程遠いどころか、最悪以外の何ものでもなかった。
幼少の頃からケイネスは他の子供達よりも抜きん出ていた。どんな課題も、ケイネス以上の結果を出した者はいなく、ケイネスと競い合って勝ちを取れるようなライバルも存在しなかった。
結果彼は天才と呼ばれる人種に、自他共に認められていた。
その結果、ケイネスは世界は自分を中心に進んでいると認識していた。魔術師協会の総本山である時計塔において“ロード・エルメロイ”とまで呼ばれ、数々の華々しい研究成果をケイネスは作り上げた。
過去において様々な結果を作り上げたケイネスは未来でも自身の成功は約束されていると、本気で思っている。
そんな彼に取って自身の目論見が外れると言う事態は、許し難いどころか、神の秩序を辱める冒涜でしかない。
具体的に言えば、確実に仕留められたセイバーを取り逃がし、自身のプライドを平然とボコボコにしたフリートを討ち取れなかったなどと言う事態は、ケイネスに取って言語道断だった。

「出てこい、ランサー」

「は。お側に」

ケイネスの呼び出しに打てば響く速さで、美貌の英霊であるランサーはケイネスの膝下に恭しく屈した姿勢で実体化した。
本来ならば実体化などしなくても、サーヴァントとは、マスターで在れば会話出来る。
とりわけ時計塔とはおいて、降霊科の主任講師でもあるケイネスならば、なおのこと応答は可能なのだが、ケイネスはランサーとは表情の機敏を余さず観察して対話したいのだ。
しかし、それは友好を結ぶためなどでは決してない。寧ろ逆。“信用出来ないランサーの真意を見極めるため”。その為にランサーをケイネスは実体化させて対話させているのだ。
更に今回は内容が尋問に近いからこそ、尚更に対面しての対話だった。

「今夜はご苦労だった。誉れ高きディルムッド・オディナの双槍、存分に見せてもらった」

「恐縮であります。我が主よ」

ランサーはケイネスの賛辞に驕ることも、露骨に喜悦することもなく淡々と礼を返した。
その様子には不平不満を胸に秘めていることもない。控えめで慎み深い、武人の鏡にしかランサーは見えない。
しかし、ケイネスにはランサーの姿は決して真意を見せない不埒な姿にしか映らなかった。

「ああ、存分に見せてもらった上で問うがな・・・・・貴様、いったいどういう了見だ？」

「・・・・・と、申されますと？」

詰問の色を帯び始めたケイネスの声音にも、ランサーは慎み保ちながら答えた。

「ランサー、貴様はサーヴァントとして私に誓ったな？この私に聖杯をもたらすべく全力を尽くすと」

「はい、相違ありません」

「ならばなぜ遊びに興じた？」

「・・・・騎士の誇りに懸けて、戯れ事でこの槍を執ることはありませぬ」

自身の戦いを侮辱されながら、ランサーは怒りや狼狽もせずに淡々と答えた。

しかし、ケイネスは小馬鹿にしたように鼻を鳴らしながら、追い打ちをかけるように話かける。

「ならば、問うが、何故セイバーを仕留められなかった？一度ならず二度までもセイバーを圧倒しながら、更に私に令呪を一つ使用させながらも」

「・・・・・それは」

「それだけでない！！何よりも、この私を侮辱した最弱のサーヴァントであるキャスターを討ち取れなかったどころか、手傷ひとつ負わせられなかったのはどういうことだ！？」

先ほどまでの冷静な様子など捨てて、ケイネスはランサーに向かって怒声を放った。

しかし、フリートに関して別としても、セイバーに関しては初戦でありながらもランサーは充分過ぎるほどの健闘だった。
セイバーの左手に回復不可能な傷を負わせて、戦力の低下を及ぼしただけではなく、切り札である宝具を使用不可能に追い込んだ。ライダーの介入がなければ、あのままセイバーが敗れていた可能性は充分にある。
だが、ケイネスには確たる結果が出せなかった時点で腹立ったしくて仕方なかった。
ケイネスは自身の意にそぐわない結果がもたらされた時の感情を、持て余してしまう欠点がある。失敗や挫折とは無縁の人生を歩んで来た者によくある事だが、それゆえにケイネスは自身に対してではなく、ランサーに対して怒りを持っていた。

「・・・申し訳ありません。主よ・・・いずれ必ずや、あのセイバーとキャスターの首級(しるし)はお約束いたします。どうか、今しばらくのご猶予を」

「改めて誓うまでもない！それは当然の成果であろう！貴様は私と契約した！このケイネス・エルメロイに聖杯をもたらすと！それは即ち、残る六人のサーヴァント全てを斬り伏せることと同義だ！それを今更・・・・セイバーばかりか、最弱のキャスター風情に必勝を誓うだと？いったい何を履き違えている！？」

「・・・・・履き違えているのは貴方ではなくて？ロード・エルメロイ」

怒声を上げているケイネスとは違う、冷ややかな第三者の声が奥の寝室の方から響いた。
その声にランサーとケイネスが顔を向けてみると、燃えるような赤毛とは裏腹に、鈴烈な氷を思わせるような美女が腕を組みながら、

ケイネスに非難の眼差しを向けていた。
彼女の名前はソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ。降霊科の長の学部長の息女であり、ケイネスの一応婚約者である。
最も彼女がケイネスに向けている眼差しは、どう考えても未来の夫に向ける眼差しではなかった。

「ランサーは良くやったわ。間違いはキャスターのサーヴァントが言っていたように、貴方の状況判断ではなくて？」

「ソラウ、何を言うんだ？」

「キャスターが言っていたように、バーサーカーの宝具は危険過ぎるわ。その点、セイバーはランサーが宝具の使用を出来なくしていた。ランサーの提言通り、セイバーと共闘して、キャスターが言っていたように今後の流れを私達に有利にすべきだったのよ」

港場での戦いにはソラウはその場にはいなかったが、その顛末は彼女自身の使い魔を通じて逐一把握していた。
むろん面白半分で戦い観戦していた訳ではない。ソラウ自身には魔術刻印は宿っていないが、聖杯戦争に関する知識は充分に持っている。
その彼女から見ても、ケイネスのマスターとしての立ち振る舞いは不満だらけだった。

「貴方は令呪がどれだけ重要な物なのも忘れているの？初戦だと言うのに、不用意に使っただけじゃなくて、敵であるバーサーカーを護ることに使うなんて」

「・・・・君はセイバーの脅威を知らない。私にはマスターの透視力であのセイバーの能力が把握出来ていた。あれはとりわけ強力な

サーヴァントだ。総合力ではディルムッドを凌いで余り・・・」

「そのセイバーに回復不可能な傷を負わせて、宝具の使用を封じたのが誰か忘れているの？」

「グッ！」

断固として告げるケイネスの反論を、ソラウは冷ややかに封殺し、ケイネスは声を詰まらせた。

「それにね・・・・・・貴方まだ、あのキャスターを最弱なんて言っているの？竜なんて幻想種の頂点にいる最強種を従えているばかりか、天候操作なんて魔法の領域の魔術は簡単に扱って、更にはランサーと互角の接近戦までこなす。これだけの実力を持っているサーヴァントの何処が最弱なのか説明して欲しいわね」

「ウゥ・・・・・」

ソラウの質問にケイネスは呻くしかなかった。

天候操作などケイネスでも不可能な大魔術。更に竜種まで加えれば、フリートを最弱のサーヴァントなどと呼べる筈がない。

確かにケイネスは時計塔において神童と謳われるほどの逸材である。

現に今回の聖杯戦争において、ケイネスは《始まりの御三家》が敷いた戦いのルールを根底から覆す荒技を遂げている。

サーヴァントとマスターの間にある因果線を、二つに分割して、魔力供給のパスと令呪による束縛のパスを二つに分け、別々の召喚者に分けると言う荒技を成功させていた。

魔力供給のパスはソラウが。令呪のパスはケイネスが。

これがどれだけの荒技なのか、魔術を知る者からすれば驚愕に値

するだろう。言うなれば、既に完成しているシステムの機能を損なわず、自身が有利になれるシステムを後から追加したに等しい。
この点だけを見ても、ケイネスが優秀な魔術師であることは認められる。

「確かに貴方は神童と謳われるだけはあるわ・・・・・だけど、魔術師としては一流でも、戦士としてはキャスターの言う通り三流よ。一体誰のせいでキャスターがランサーと互角に戦えたと思っているのかしら？」

「わ、私のせいだと？」

「当然でしょう。貴方ランサーにキャスターと戦うように命じる前に、自分が何を使ってランサーにバーサーカーの援護を命じたか、忘れているの！？」

「・・・・・・アッ」

ソラウの指摘にケイネスは漸く港場での、最大のミスを理解した。
ケイネスはランサーにバーサーカーの援護して、セイバーを倒させる指示を“令呪”を使って出した。しかし、そのすぐ後にフリートを討ち取れとランサーに命じた。
令呪を使っていない指示と、令呪を使った指示。どちらが優勢されるかなど明らかだ。
だが、ランサーはケイネスの指示通りにフリートと戦っていた。
恐らくはセイバーを倒す障害になるとランサーは令呪を誤魔化していたのだろうが、その程度の事で令呪が誤魔化しきれるならば、ランサーは自身の意思に反してセイバーに攻撃などしなかっただろう。
つまり、令呪のせいでランサーはフリートに対して十全に実力を

発揮出来ていなかったのだ。もし発揮出来ていれば、早急にフリートはケーニッヒを使用していただろう。そうしなければ手傷を確実に負っていた。
ケイネスが使用した令呪は、バーサーカーを守っただけではなく、フリートまでも守ってしまっていたのだ。

（キャスター！！必ず！必ず殺してやる！この私に、ケイネス・エルメロイを侮辱し、敵に回したことを後悔させてやる！）

この瞬間、フリートはケイネスに取って不倶戴天の敵になった。
自身のプライドをとことんまでにコケにしていたフリートに、怨みの念を募らせる。
だが、もしも生前のフリートを知る者がいれば、ケイネスは自殺志願者にしか映らなかっただろう。港場でのフリートの言葉は軽いジャブでしかない。本来のフリートがケイネスと対峙したら、それこそ死んだ方がマシと宣言する未来しかない。
そんな事を知らないケイネスがフリートに対して怨みを募らせていると、突然に防災ベルの騒音が鳴り出す。

ーーージリリィィィィ！！

「何？何事？」

突然の防災ベルにソラウは当惑の呟きを漏らし、ランサーとケイネスは辺りを注意深く見ます。
同時に部屋に備わっていた電話のベルが鳴り出し、ケイネスは受話器を取って係員からの連絡を聞く。

「・・・わかった・・・下の階で火事だそうだ。すぐに避難しろと言ってきた」

受話器を元在った位置に戻しながら、ケイネスはソラウに状況を説明する。

「小火程度だか、どうやら火元は何カ所に分散しているらしい。まぁ間違いなく放火だな」

「放火ですって？よりにもよって今夜？」

「フン、偶然なわけがあるまいさ」

不敵にケイネスは笑いながら、全身が歓喜に震える。

今、ケイネスが欲しかったのは自身が味わった屈辱を拭いきれるだけの行動と結果。それを行える場が向こうからやって来たのだ。

「人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象どもがひしめく建物で勝負を仕掛ける気にもならんだろうからな」

「じゃあ・・・襲撃？」

「おそらくは。先の倉庫街で暴れたりない輩が、押し掛けてきたのだろう。面白い。不本意だったのはこちらも同じだ。そうだろう、ランサー？」

「はい。確かに」

ケイネスの質問にランサーは戦意を高めながら頷いた。

今の状況でこうも事を急いて襲撃をかけて来る組で考えられるとすれば、ランサーの《必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇》で負傷を負ったセイバーが一番可能性が高い。宝具と言う最大の切り札が使用出来ない状況は不

味すぎる。
港場での決着がつけられるかもしれない期待をランサーは感じ、ケイネスは指示を出す。
「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無下に追い払ったりするなよ」
「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですね？」
「そうだ。お客人にはケイネス・エルメロイの魔術工房を堪能してもらおうではないか」
何も考えずに、金額にものを言わせてフロアひとつを借り切った訳ではない。
ケイネスは自身が泊まっている場所を活動拠点として、徹底的に改装する為にフロアを借り切ったのだ。
その結果、ケイネス達がいる三十二階には二十四層の魔術城壁と呼べる結界が敷かれ、猟犬代わりに召喚した悪霊や魍魎が数十体。トラップにも抜かりはなく、廊下の一部に異界化させている空間も存在している。
「他の宿泊者どもが引き払えば、もう何の遠慮もいらない。お互いに秘術を尽くしての競い合いが出来るというものだ」
自身の工房に絶対の自信を持ってケイネスはソラウに話し、ゆっくりとソファーに座って敵が来るのを待つ。
己がいる場所が、最も狙いやすく崩し易い場所だとも気がつかずに。

屋外駐車場。
その場所には就寝中に火災警報で叩き起こされた宿泊客が居並んでいた。
その人々の間をホテルの従業員達が慌ただしく動き周り、避難状況を確認している。

「アーチボルト様！ケイネス・アーチボルト！いらっしゃいませんか！？」

確認が取れていない最後の一組を従業員達は探し求めていた。
何せ最上階のスイートルームをフロアごと借り切った大金持ち。
最もトラブルにあって欲しくない人物。
故に確認が取れないことを焦り、大声でフロント係の従業員が叫ぶ。

「アーチボルト様！いらっしゃいませんか！？」

「・・・・・はい、私です。ご心配なく」

背後から落ち着いた返答が響き、従業員は内心で安堵しながら振り返るが、すぐにそれは当惑に変わった。
従業員の背後にいたのはくたびれたコートを着た、冴えない日本人男性。
一度フロントで見た姿とは違う人物に苛立ち相手を問いただそうするが、何も言葉が出なかった。
男性一切嗣一はそれを確認すると、静かに言い含めるように告げる。

「ケイネス・アーチボルトは私です。妻のソラウともども避難しました」

「・・・・・そうですか。あぁ、はい。そうでしたか」

従業員は安堵の息を吐きながら、名簿にチェックを入れてその場から離れていく。

切嗣はそれを確認すると、人混みから離れて、一区間ほど離れた物陰に身を顰め、ポケットから携帯電話を取り出し、監視ポジションにいる舞弥に連絡を取る。

「準備完了だ。そちらは？」

《異常なしです。いつでもどうぞ》

冬木ハイアットホテルの斜向かいにある、建設中のビルの上階に隠れている舞弥は問題がないことを簡潔に伝えた。

その報告に切嗣は残るもう一つの携帯電話を取り出し、素早く一連の番号を入力する。

異変は即座に起きた。三十二階の高さを誇る冬木ハイアットホテルから不気味な音が断末魔の悲鳴を鳴り響き、ホテルは直立したまま崩落を開始する。

爆破解体という高等な解体技術が存在している。周囲には出来るだけ影響を及ぼさずに、最小限の爆薬で効率よくビルを瓦礫の山へと変えてしまう技術。

切嗣が今行ったのは正にそれだった。

事前の下調べで魔術師が根城にしそうな場所を調べ上げ、たった今、爆破解体をケイネス達が根城にしていた冬木ハイアットホテルに実行したのである。

ビルの崩落の影響で発生した粉塵を恐れて、避難していた人々は

逃げ惑うが、それを引き起こした張本人である切嗣は静か煙草に火を点けて、舞弥に連絡を取る。

「舞弥、そっちは？」

《最後まで三十二階には動きはありませんでした。標的はビルの外に脱出していません》

「・・・百五十メートルの高さから自由落下しては、幾ら魔術結界を張り巡らしていても無意味だ」

状況から考えてケイネス達の生存は絶望的だと切嗣は思う。

本来ならば死亡の確認をしたいところだか、流石にこれだけの騒ぎでは確認は不可能だと思い、舞弥に撤退の指示を告げようと携帯電話に手を伸ばし、その動きは止まった。

切嗣の視界の先には怯えて泣きじゃくる子供を抱えた母親がいた。

一瞬だけその親子の姿に、切嗣は自身の妻であるアイリスフィールと娘のイリヤが重なって見えたのだ。

（感傷だ・・・・・こんな事では駄目だ）

自身の胸の内に湧き上がった感情を、切嗣は気の迷いだと断じる。

昔の自身ならば、もっと冷徹に、それこそ誰一人避難などさせずにビルを崩落させていたと思いながら、一刻も早く昔の冷酷さと判断力を取り戻そうと切嗣は誓う。

しかし、この時にホテルにいた人々を切嗣が避難させたのは正解だった。もし人々を避難させずにホテルを崩落させていたら、その瞬間に切嗣は潜んでいる《小バッタ一号機》によって、肉片一つ残さずに死んでいたのだから。

自身が甘さだと断じた感傷に命を救われたとも知らずに、切嗣は

今度こそ舞弥に撤退の指示を出す為に携帯電話を耳に当てる。

「舞弥。撤退する・・・」

ーーーキィン！

「ッ！舞弥！！どうした？答えろ！？」

携帯電話の向こう側から届いた刃の響きに、切嗣は舞弥を呼ぶが、答えは返って来なかった。

「建物もろとも爆破するとは、魔術師とは到底思えない手段だな」

自身が居るビルの外の光景を眺めながら、言峰綺礼は柱の影に隠れている舞弥に声を掛けた。

教会を抜け出した後、綺礼は自身の求めている人物が現れるとしたらケイネスの下しか考えられないと思い、こうして網を張っていた。

そしてここぞと定めた場所に現れたのは、目的の人物で在った衛宮切嗣ではなかったが、さして問題はなかった。

どちらにしても、切嗣に至る鍵になる人物には変わらないのだから。

「言峰、綺礼」

「ほう？君とは初対面なはずだが。それとも私を知るだけの理由が在ったか？それに先ほど見せた身のこなし。君の素性は予想どおりのようだな」

聞こえて来る綺礼の呟きに、舞弥は内心で自身の迂闊さに舌打ちする。
この場所に何故周到に姿を隠していたはずの綺礼が現れたのかは、舞弥には分からない。
だが、一つだけハッキリしていることがある。綺礼は衛宮切嗣を知っている。

「私ばかりに喋らせるな、女。返答は一つだけでいい。お前の代わりに此処に来るはずだった男はどこにいる？」

ーーードン！ドン！ドン！

綺礼が放った問いに返ってきたのは、銃弾の三連射だった。
しかし、三発の銃弾は綺礼には当たらずに堅いコンクリートに当たった。綺礼は舞弥が銃口を向けた瞬間、銃口から発射される弾丸の弾道を予測し、先んじて身体を動かしたのだ。
常人に為せる業ではないが、綺礼は構わずに両手に握っている刃渡り一メートルほどの長さで、柄か極端に短い武器ー《黒鍵》と呼ばれる投擲武器ーを構える。
殺すつもりはない。生かしたまま捕らえて、切嗣に関する情報を吐かせる。
再び銃を向けてくれれば、先ずは銃を弾き、次で機動力を奪う。
冷酷に舞弥を無力化させる手を考えながら、綺礼が足を踏み出そうとした瞬間、綺礼の視界を白い闇が覆い尽くす。

ーーーボフッ！！

「煙幕だと！？」

全く予期していなかった奇襲に、綺礼は一瞬怯む。
その隙を舞弥は逃さずに、脱兎の如く掛け去り、コンクリートを走る音が反響する。
綺礼は舞弥が逃げ出したことを悟るが、迂闊には動けなかった。先ほどの煙幕は舞弥ではなく、第三者が放った物。深追いすれば、自身も危ないと経験から悟っていた。
そして煙幕が晴れるのを待ち、ゆっくりと床に落ちていた発煙筒を拾い上げる。

「・・・・・・フロアには私とあの女以外の気配はなかった。となれば、まさか地上から投げたのか？」

自身の邪魔をした発煙筒を握りながら、ゆっくりフロアの縁まで綺礼は移動し、強風に僧衣を煽られながら眼下に瞬く街を見下ろす。

「・・・・・まぁ、いい。今日のところは標的の存在が確認出来た。次こそは必ず・・・・待っていろ、衛宮切嗣」

そう綺礼は呟くと共に持っていた発煙筒を地上に向かって投げ捨て、その場から去って行った。

「あぁ、やっぱり真っ先に落ちましたね。ランサーのマスターのアジト」

自身の本拠地で冬木ハイアットホテルでの出来事を一部始終、サーチャーから送られて来る映像で見ていたフリートは呆れたように呟いていた。
そもそも、冬木市の街中にある建造物に隠れ家を作ること事態、

かなり危険なのだ。ただでさえ、冬木には長年住んでいる遠坂と間桐と言う土地勘を持った敵がいる。それなのにケイネスは目立つだけではなく、その気になれば破壊し易いビルにアジトを作った。
フリートからすれば、一体何をどう考えてホテルに何かアジトを作ったのか全く理解出来なかった。

「ケイネス・アーチボルト・・・・・遠坂の家に放置されていた資料だと、優秀な魔術師らしいですけど・・・・戦闘の素人なんて送った時計塔とか言う場所も何を考えているんでしょうね？」

フリートはそう呟きながら、《旅の鏡》で遠坂邸や冬木教会から盗み出した参加者に関する資料を読んでいく。
冬木市の陣地化が終わった後にフリートが実行していたのは、聖杯戦争に関する過去の資料と参加者に関する情報収集だった。
何せフリートの召喚者だった龍之介は、魔術回路を持っていただけの、魔術師でもないただの一般人。当然ながら、他の参加者達のように事前準備など全くない。
だから、フリートは冬木市の陣地化が終わり次第に遠坂邸内部にあった聖杯戦争に関する資料と教会に保管されていた資料を全て、サーチャーをマーカーにして空間を繋げる《旅の鏡》を使用して盗み出した。
両方から盗み出すチャンスは在った。召喚されてから三日も経たずに遠坂邸で起きたアーチャーによるアサシンの虐殺劇。
あの時に他に遠坂邸を監視していた者達はアサシンの消滅に気を取られて気がつけなかったが、フリートは気がついた。
“アーチャーの宝具の乱射によって発生した膨大な魔力の影響で、遠坂邸に張られている探査結界がほんの数十秒だけ機能が停止していたことに”。
確かアーチャーの力は強力。だが、その強力さがあの時には仇になった。内側から発生した膨大な魔力によって、一時的に探査結界

が機能停止した隙をフリートは逃さずに、超小型のマーカー機能も備えたサーチャーを遠坂邸内部に侵入させたのだ。
後はそれを起点にしてアーチャーがいない時や時臣が綺礼との連絡に集中している時を見計らって資料を《旅の鏡》で盗んでいた。
次の教会に関しては、綺礼やアサシンが教会に保護される前に資料を盗み出した。教会に関しては聖杯から送られて来た知識で知ってたので、聖杯戦争に関する資料を手に入れるなら、此処しかないと判断して資料を盗み出した。
因みに現在フリートが読んでいる資料は全てコピー。本物は既に遠坂邸と教会に戻してある。

「まあ、ランサーのマスターはどうでもいいとして・・・・問題はこっちですね」

呟くと共にフリートは背後を振り返り、治療用カプセルに入っているバーサーカーのマスターを眺める。
当初フリートはバーサーカーのマスターを捕らえて、令呪を奪い取り、バーサーカーのマスターはそのまま魔力炉として使用するつもりだった。
港場見たバーサーカーの宝具と技量は、フリートから見ても素晴らしかった。だからこそ、戦闘中にサーチャーが発見していたバーサーカーのマスターを捕らえに向かったのだが、バーサーカーのマスターの姿を目撃した瞬間、少しだけフリートは考えを変えた。
バーサーカーのマスターの状態は、余りにもフリートの目から見ても酷かった。一体何があそこまで酷い状態になっても、彼を動かすのか、興味が湧いたのだ。
手掛かりは彼を気絶させる前に聞いた誰かの名前。そしてフリートは彼のアジトである間桐邸内部を監視網で調べた。
そして見た。フリートが赦せないことを平然と行っている“蟲”どもの姿を。

怒りで世界破壊宝具を間桐邸にぶち込まなかったことは、奇跡だっただろう。激しい怒りは逆に冷静さを呼ぶ。

今のフリートは正にその状態だった。

「・・・・この男から詳しい事情を聞き次第、“あの子”を“蟲”どもから助けだしますかね・・・・取り敢えずは治療しますか。どういう結果になるにしても、身体がボロボロだと差し支えますからね」

そうフリートは結論を決めると、ゆっくりとバーサーカーのマスターである“間桐雁夜”の治療を今夜中に終わらせる為に準備を開始するのだった。

第六話　動向（前書き）

アンケートにお応えくださった方々、ありがとうございました！

最終的な結果、１の《雁夜魔改造》ルートに決定しました。

今回の話で使用する予定のネタ武器が、大体解ると思います。

デジモンや型月関係ではありません。

第六話　動向

早朝、冬木教会。
言峰綺礼は魔導通信機の前に立ち、定時連絡を時臣と行っていた。
「先ほど冬木ハイアットホテルの跡地を監視していたアサシンから連絡がありました。ケイネス・アーチボルトの生存を確認。現在はレスキュー隊の人間に暗示をかけて市内を移動中とのことです」
《流石は時計塔で神童とまで呼ばれている魔術師だ。あのような卑劣な手では敗れないと言うことか》
綺礼の報告に時臣はどこか満足げな答えを返した。
魔術至上主義の時臣に取って、昨晩起きた冬木ハイアットホテルの爆破は許し難い手段だった。
このような魔術師の誇りを侮辱するやり方を行う者には、制裁を加えなければいけないとさえ考えている。
《実行した犯人は、女だというのは間違いないのかね？綺礼》
「はい。アサシンが犯人を目撃していました。恐らくは単独犯でしょう。教会を監視していた者もその女に違いないでしょう」
綺礼はあえて自身が相対した舞弥の情報を時臣に隠さなかった。
隠さなければ時臣がアサシンを使って捜索を命じることが、綺礼には分かっていた。それを利用して自身の目的の人物である衛宮切嗣をアサシンを使って大々的に捜索する。
どのみち、既にケイネスのアジトだった冬木ハイアットホテルの情報は時臣に伝えている。ならば、今の状況を最大限に利用した方

が、自身の目的の遂行に一番近いと綺礼は判断していた。
これで別問題か何かが発生していたら時臣に舞弥に関する情報を隠していたかもしれないが、問題がない今、自身の目的遂行を綺礼は優勢する。

《・・・・・綺礼。その女の捜索をアサシンに命じろ。誰の命令で動いたのか。また、どの陣営なのかも調べ上げるように命じるのだ》

「ハッ。すぐにアサシンを動かします」

自身の師を利用していることに綺礼は何の抵抗も感じることなく、時臣の命令に頷いた。
そして綺礼は通信を切り、地下室を後にして自身にあてがわれている私室に足を踏み入れ、一瞬戸惑いを感じた。
部屋は間違いなく綺礼にあてがわれてた部屋。しかし、部屋の空気が明らかに変質していたのだ。
その原因の主は部屋に置かれていたソファーに寝そべりながら、ワインを優雅に飲んでいた。
綺礼はその意外としか言えない人物に、少なからず驚いた。

「アーチャー?」

我がもの顔でワインを飲んでいる、エナメルのジャケットにレザーパンツと言う明らかに現代風の服装に着ている黄金の髪に紅玉の如き双眸を持った人物ー時臣のサーヴァントであるアーチャーーの姿に綺礼は困惑を隠せなかった。
召喚されて以来、アーチャーが保有スキルである《単独行動》に物を言わせて好き勝手に物見遊山を繰り返し、最近では実体化して現代の装いを纏って夜の街を闊歩していることは時臣から聞いていたが、まさか自身の部屋にまで出向いて来るとは、綺礼は想像だに

していなかった。
「数こそは少ないが、時臣の酒蔵よりも逸品が揃っている。けしからん弟子もいたものだ」
「・・・・・一体、何の用だ？」
感情を押し殺しながら、綺礼はアーチャーに問う。
自身の集めた酒が無断で出されたばかりか、許しもなく勝手に飲まれているのだから、綺礼の反応は当然だろう。
しかし、アーチャーは全く悪びれたようすもなく、グラスを掲げて、意味深な視線を綺礼に投げ返す。
「退屈を持て余している者が、我の他にもいる様子だったのでな」
「退屈？」
「でなければ、時臣の意志に反して教会を飛び出すはずはなかろう？」
「・・・何のことかな？」
アーチャーの問いに、内心の動揺を悟られないようにしながら綺礼は問いを返した。
どういう次第かは解らないが、目の前にいる英霊は、自身の昨夜の行動を知っている。
見られていたのかと、僅かに綺礼は警戒心を抱くがアーチャーはワインを飲みながら綺礼に視線を向ける。
「どうなのだ綺礼とやら？お前も、あの時臣めに奉仕するばかりで

心満たされているわけではないだろう」

「今更契約が不服になったのか？ギルガメッシュ」

「我を招いたのは時臣だし、この身の現界を保っているのも時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼を取っている。まぁ、応えてやらんわけにもいくまい・・・・・だが正直、あそこまで退屈な男とは思わなんだ。全くもって面白味の欠片もない」

「・・・とてもサーヴァントのものとは思えん言い種だな？」

あまりの言い種に綺礼は呆れ果てながら、アーチャーが散らかしていたワインを片付けだす。

「そんなにも退屈か？時臣師の差配は」

「ああ全く退屈だ。万能な願望機を以てして《根源の渦》に至る、だと？つくづくつまらん企てが在ったものだな」

「《根源》への渇望は魔術師だけに固有のものだ。あれは、部外者がとやかく言えるものではない」

「まぁ、確かに・・・・我は我の支配の及ばぬ領域に興味はない・・・・しかし、綺礼よ？ならば何故お前はこの争いに参加している？聞くところによれば、本来は貴様は魔術師どもと対立する立場にある者。聖杯に何か望みがあるのか？」

「ッ！？・・・・わ、私にも分からない」

「ほう」

綺礼の答えにアーチャーは僅かに興味を持ったように、妖しく瞳を輝かせた。
その瞳に綺礼は一瞬自身の心の内を見抜かれたような不安を感じるが、それを押し隠してアーチャーを見つめ返す。
「私自身、何故聖杯に選ばれたのか解らない。成就すべき理想も、遂げるべき悲願もない私が、何故この戦いに選ばれたのか」
「理想もなく、悲願もない。ならば愉悦を望めばいいだけではないか」
「馬鹿な!!」
我知らずに綺礼は声を荒げ、アーチャーを険しげに睨む。
「愉悦だと?そんな罪深い堕落に手を染めろと言うのか?」
「罪深い?堕落だと?これはまた飛躍だな、綺礼。何故愉悦と罪が結びつく?」
「それは・・・・・」
底意地の悪そうな笑みと共に返された質問に、綺礼は返答に詰まった。
彼自身、何故アーチャーの言葉に触発されて狼狽を露わにしてしまったのか、見当がついていない。
しかし、愉悦と言う言葉が明らかに自身の何かに触れたことだけは理解し、途方に暮れてしまう。
アーチャーはその綺礼の様子をからかうように見つめながら、し

たり顔で先を続ける。
「なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれん。だが人は善行によっても喜びを得る。悦そのものが悪であるなどと断じるのは、いったいどういう理屈だ？」
「・・・・・・・・愉悦もまた、私の内にはない。求めているが見つからない」
アーチャーの問いに綺礼が返せた答えは、それだけだった。
何時綺礼にある自信の裏打ちは感じられず、どことなく空虚さを感じさせる返答。
しかし、返答を聞いたアーチャーはおぞましくも禍々しい笑みで口元を歪める。
「言峰綺礼・・・俄然、貴様に興味が湧いてきた」
「・・・どういう意味だ？」
「言葉通りの意味だ。まあ聞け。愉悦と言うのはな、言うなれば魂の容だ。“有る”か“無い”かではなく、“識る”か“識れない”かを問うべきものだ」
「サーヴァント風情が、私に説法する気か？」
「粋がるなよ雑種。この世の贅と快楽とを貪り尽くした王の言葉だ。まぁ黙って聞いておけ・・・・・・ともかく綺礼、お前は、まずは娯楽と言うものを知るべきだ」
「娯楽だと？」

アーチャーの言葉に綺礼は眉を僅かに顰めるが、アーチャーは構わずに先を進める。

「そうだ。手始めに我の娯楽に付き合え。何時臣に課された役務の片手間に出来ることだ。他の連中の意図や戦力だけではなく、その動機も調べ上げよ」

「何故だ？」

アーチャーが告げた娯楽の内容に綺礼は質問した。

確かにアーチャーの告げた指示は、綺礼に与えられた任務からは逸脱しない。監視対象の周囲の者と交わす会話に終始耳を傾けるようにアサシンに指示を出し、後は綺礼が推察すればいいのだから。

何故そのような事をするのかと、綺礼は純粋な疑問を以てアーチャーを見つめると、アーチャーはグラスをテーブルに置く。

「我はヒトの業を愛でる。条理をねじ曲げ、奇跡に縋ろうとする度し難い願望の持ち主が五人も雁首を揃えておるのだ。きっと中には面白味のある奴が一人か二人は混じっているさ。少なくとも、時臣に比べればいか程かマシであろうしな」

「・・・・・・いいだろうアーチャー。請け負った。しかし、時間は掛かると思え。未だに本拠地も解らぬサーヴァントもいるのだからな」

「構わぬ。気長に待つとする」

綺礼の言葉にアーチャーは頷くと、ソファーから立ち上がり、部屋の出口の方に歩き出す。

部屋からでる直前にアーチャーは綺礼へと振り返る。

「今後も酒の面倒を見に来るぞ。ここの酒は、別段に天上の美酒とまでは言わんが、僧侶ごときの倉で腐らせておくには惜しいものばかりだからな」

最後までアーチャーは傲慢な言葉を告げるが、綺礼は肯定も否定もしなかった。

しかし、アーチャーはそれを許諾と受け取ったのか、満悦そうに笑いながら部屋を出て行く。

残された綺礼はアーチャーとの会話を思い出しながら、散らばっている残りのワインを片付けにかかった。

間桐雁夜は漆黒の夢の中にいた。

何も見えず、何も聞こえない。

漆黒の闇だけが支配する空間の圧迫的な圧力だけしか、雁夜には感じられなかった。

そして雁夜の前で漆黒の闇が唸り始め、闇の中から吼えるように、呪詛の声が響く。

“我はーー
疎まれし者ーー
嘲られし者ーー
蔑まれし者ーー”

闇の中から現れたのは、漆黒の甲冑と兜に身を包んだ騎士。

雁夜が現代に招いた狂戦士。バーサーカー。

バーサーカーは僅かに兜のソリットから確認出来る双眸を爛々と光らせ、呪詛の言葉を紡ぐ。

“我が名は賛歌に値せずーー
我が名は羨望に値せずーー
我は英霊の輝きが生んだ影ーー
眩き伝説の陰に生じた闇ーー”

バーサーカーは地の底から這い上がる亡者のように、怨々と嘆きの声を雁夜に放つ。

あまりのおぞましさに、雁夜はバーサーカーから目を逸らそうとするが、バーサーカーは冷たい籠手を伸ばして雁夜の襟首を掴み上げる。

それによって痩せ衰えた雁夜の体躯はそのまま宙へと吊り上げられ、バーサーカーの狂気に渦巻いている眼光を直視する。

“故にーー
我は憎悪するーー
我は怨嗟するーー”
闇に沈みし者の嘆きを糧にして、光り輝くあの者達を呪うーー”

「ッ！！」

怨嗟の宣言と共に容赦なく喉を締め上げられた雁夜は、苦悶するが、フッと視界に白銀の鎧に身を包み、蒼いドレスを着た少女が写り込む。

その少女に雁夜は見覚えが在った。

港場でランサーと戦い、バーサーカーが暴走する切欠になった少女。アインツベルンの操るセイバーのサーヴァント。

“あの貴影こそ我が恥辱ーー
その誉れが不朽であるが故、我は永久に貶められるーー”

ーーーバン！！

言葉と共にバーサーカーが被っていた兜が割れた。
闇の中故に面貌は確認出来ないが、熾火のように燃える双眸の下で、ガチガチと餓え震える乱杭歯だけは、はっきりと見える。

“貴様は、贄だーー
貴様の生命を、貴様の血肉をーー
我が憎しみを駆動させるために、寄越せ！！ーー”

バーサーカーは冷酷に宣言すると同時に、友無を言わさずに雁夜の首に禍々しい牙を突き立てようとする。
雁夜は迫る牙に絶叫を上げようとするが、その直前にバーサーカーが支配していたはずの闇から幾重もの鎖が出現し、バーサーカーの四肢を拘束する。

ーーーガチィィィィン！！

「■■■■■■■！？」

四肢を突然に拘束されたバーサーカーは戒めを解こう暴れ狂うが、バーサーカーを拘束している鎖はビクともしなかった。
突然の事態に雁夜は訳が分からずに、尻餅をつきながら目の前で暴れ狂うバーサーカーを呆然と見つめる。
その雁夜の背後からゆっくりと金属が床を踏み鳴らす音が響いて来る。

ーーーガシャ！カシャ！カシャ！

「ハッ！？」

聞こえて来た足音に雁夜は背後を振り向くが、深い闇しか雁夜には見えなかった。

いや、一つだけ。闇の中で、はっきりとバーサーカーとは違う、強い意思が籠もった瞳が雁夜を見つめていた。

雁夜が呆然とその瞳を見つめていると、バーサーカーとは違う別の意思が宿った声が闇の中で響く。

“悠久の時の果て、我は待っていたーー
資格ある者。目覚めし時、母に伝えよーー
時は来た。我を纏い、我を駆る者ーー
己が矛盾を悟り、されども立ち上がるならば、我は汝の牙となるーー”

「・・牙？・・・何を言って？」

“汝はまだ、資格ある者でしかないーー
矛盾を乗り越えよ。さすれば、我は汝の牙となるーー”

その宣言と共に闇だけが支配していた空間に光が差し込み始める。

目覚める時が来たのだと、漠然と雁夜は悟り、最後に自身に話しかけて来た者がいる方を見てみる。

そこにいたのは、闇よりも暗く、禍々しい漆黒の鎧で全身を覆い、背中に黒きマントを羽織り、黒い長剣を携えた、狼を模したような兜で頭部を全て覆い隠すように被った騎士だった。

目が覚めた時に最初に見たのは光だった。
先ほどまでの闇だけが支配していた夢とは違い、暖かな光が雁夜の身体を包んでいた。
自身が何故このような場所にいるのか、雁夜には全く分からず、意識を失う前のことを思い出そうとする。

（確か俺は・・・そうだ。港場で他のサーヴァント達の戦いを見ていて、その後に時臣のサーヴァントにバーサーカーを放った・・・それでバーサーカーは暴走して・・俺はバーサーカーへの魔力供給で重傷を負った）

間桐雁夜は他のサーヴァントのマスター達とは違って、即製の魔術師だった。
とある理由で雁夜は一年と言う魔術師が育つには短すぎる時間の中で、己の全て犠牲にして魔術師になった。
しかし、その代償は重かった。
彼は聖杯戦争に参加するために間桐の魔術訓練を耐え抜いたが、その結果、雁夜の身体はボロボロと言う言葉では足りないほどに悲惨な状態になってしまった。
左半分の顔は死相じみた状態で硬直し、左目は壊死。肌は土気色で、頭髪は白髪に変わり、黒い罅が走っているように静脈が浮きでていた。
更にはバーサーカーを維持しているだけで身体の中で魔力を作り上げている刻印虫が暴れ、動悸や眩暈に苦しむ。その上、戦闘になれば絶え間なく刻印虫が暴れ続け、生きながらに貪り食われると言う激痛を味あわされる。
自身が今身体が残っていることが奇跡だと考えながら、雁夜は起き上がろうとするが、フッと違和感が感じる。

「視界が広い？」

右目しかまともに機能していないはずなのに、雁夜の視界は左側の方もはっきりと見える。

何故と疑問に思いながら、左手を動かしてみると、更に疑問が増える。

自身の左半身は過酷な魔術の訓練によって、一時期麻痺し、今でも感覚が鈍かったはず。しかし、今左手は何の苦もなく動いた。更に驚くことに土気色だったはずの肌の色は健康的な色に戻っていた。

「ど、どういうことだ？一体どうなって！？」

「私が治したんですよ、バーサーカーのマスターさん」

「誰だ！？」

自身以外に部屋の中にいないと思っていた雁夜は、慌てながら声の聞こえて来た方に目を向けた。

そこには両手を組みながら、部屋の入り口の扉に身体を預けているフリートがいた。

「お、お前はキャスター！？」

港場を監視している時に目撃した、自身のサーヴァントであるバーサーカー以外のサーヴァントの姿に雁夜は慌てて立ち上がる。

一体何故フリートが居るのかは分からないが、聖杯を求めている敵同士の関係。バーサーカーを呼び出して戦わせようと、雁夜は右手を構えるが、フリートは両手を上げて戦闘の意志がないことを示す。

「ストップ。私には今のところ戦闘の意志はないですよ。それにバーサーカーを呼んでも来ませんからね」

「何？ど、どういうことだ？」

雁夜は困惑したようにフリートに質問し、フリートは両手を上げたまま自身の右側を視線で示す。

その動きに雁夜がフリートの右側に目を向けると同時にモニターが展開され、両手の籠手以外鎖らしき物で雁字搦めに拘束されているバーサーカーの姿が映し出される。

「バッ、バーサーカー！？」

「貴方の治療を行っている時に邪魔をしようとしたので、私が所有している鎖型の拘束宝具で動きを封じました。全く、幾ら理性が無くても自身のマスターの状態ぐらいは察して欲しいですね」

そうフリートはバーサーカーに対する愚痴をこぼすが、雁夜はそれどころではなかった。

即製魔術師の雁夜の最大戦力はバーサーカー。そのバーサーカーが使用不可能となれば、雁夜はサーヴァントに対抗する術がない。

どうしたら良いのかと、雁夜は混乱するが、フリートは構わずに雁夜に声を掛ける。

「まぁ、落ち着いて下さい。少なくとも今は何もしませんよ。それよりも聞きたいことがあります」

「な、何だ！？何が聞きたい！？」

「聞きたいことは一つです。貴方の生家に居る少女は何時から虐待を受けているんですか？また、貴方はその虐待に関わっているのか？全部話して貰いますよ、間桐雁夜さん」

フリートはそう何時になく険しげな顔をしながら間桐雁夜に詰め寄るのだった。

間桐雁夜。フリート・アルハザード。

この二人の出会ったことによって、後に魔術協会及び魔術に関わる全ての者が恐れる存在。

《魔導喰いの黒炎騎士》が生まれるのだった。

第七話　装着

冬木市内に拠点を構えているマスターが、古くから住んでいる遠坂やホテルを拠点にしていたケイネス以外にもう一人いた。
ライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットである。
彼は師で在ったケイネスと違って目立つ場所には拠点を作らずに、冬木市内に住んでいた老夫婦に暗示をかけて、首尾よく偽の身分と快適な住居を手に入れた。
この時点でウェイバーの慎重さは、ケイネス以上であることは明らかだった。
ホテルなどと言う目立って狙い易い場所よりも、現在のウェイバーが潜んでいる住居の方が遥かに発見され難い。
ウェイバーの判断は間違ってはいない。
しかし、世の中とは時に彼の想像を軽く飛び越えてしまう出来事が起きる。
例えば、早朝にウェイバーが拠点としているマッケンジー邸に荷物を届けに訪れた配達員の応対をしている相手が、レニズム時代の甲冑を着たまま応対するなど彼には予想も出来なかったに違いない。

「・・・・・あの、こちらはマッケンジー様のお宅で宜しいのでしょうか？」

「うむ。それはここの家主に相違ない」

「・・・・・えぇと、征服王イスカンダル、様って・・・・・いらっしゃいますか？」

「余のことだが」

「・・・・・ああ、はい。そうでしたか。アハハ・・・あ、ここに受け取りのサイン、お願いします」

「署名か、宜しい・・・・・・では、受け取ったぞ」

「毎度ありがとうございました・・・し、失礼します！」

荷物を渡すと共に証明書を受け取った配達員は、振り返ることなくマッケンジー邸を後にした。

彼は後に今回の経験のおかげで、どんな人物にも動じずに宅配を終えられる配達員に成長することになるのだった。

《ロード・エルメロイ？世！バンザーイ！！バンザーイ！！》

（遂に僕は成し遂げた！聖杯戦争に勝利し、正当な評価を得られる！！）

多数の魔術師達から賞賛の言葉を浴びせられるウェイバーは、冬木で手に入れた聖杯を持ちながら、時計塔の入り口を目指して凱旋していた。

自身を認めなかった筈の魔術師達からは、悔しさを感じさせるような視線を向けられ、ウェイバーが聖杯を持ち帰ったことに感心している者もいる。

これこそが自身の望んでいたことだと思いながら、ウェイバーが時計塔内部に足を踏み入れようとした瞬間、一人の魔術師がウェイバーに駆け寄って来る。

「た、大変です！ロード・エルメロイ？世！」

「いったい何事かね？」

「あ、貴方の召喚したサーヴァントが！ア、アメリカを落としました！」

「・・・・・・ハァ？」

告げられた事実に、ウェイバーは呆けたように口を開けた。
同時に文明の利器を嫌っているはずの魔術師が小型テレビを取り出す。
呆然としながらウェイバーがテレビに目を向けてみると、どこかで見た巨漢が報道関係者と思われる人物達にインタビューを行っていた。

《イスカンダル陛下！何故アメリカを落としたのですか！？》

《うむ。余を現世に復活させた者が高き栄光を手に入れた。ならば、王たる余も負けぬ戦果を上げねばならぬ。此度の戦いは始まりでしかない》

《で、では、これから更に征服をなさるのですか！？》

《当然であろう。まずは余のマスターが居る場所まで真っ直ぐに目指し、世界を征服！そして次は宇宙の海を征服する！待って居れ！坊主！必ずや貴様の栄光に負けぬ戦果を上げて貴様の下に辿り着くぞ！！》

「やめろぉぉぉぉーーーー！！！！！！」

ウェイバーは絶望に満ちた叫びを上げると同時に、被っていた布団を跳ね飛ばしながら目覚めた。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・なんて悪夢だ」

自身が今まで体験していたことは、全て夢だったと悟り、ウェイバーは心の底から安堵の息を吐いた。

何が悲しくて聖杯戦争後もあの破天荒なサーヴァントの行動に振り回されなければいけないのかと、ウェイバーは先ほどまで見ていた悪夢の内容に頭を悩ませる。

もしも聖杯戦争に勝利して、尚且つ令呪が残っていたら先ほどの悪夢だけは逃れるように令呪で命じようと、ウェイバーは心に誓う。

そこでフッと疑問が浮かび上がり、部屋の中を見回す。

間違いなくここはウェイバーがアジトとして使っている、マッケンジー家の一室。それに関しては問題ない。問題は。

「・・・・何時僕は気絶したんだ？」

昨日の出来事は覚えている。

聖杯戦争の二戦目であるセイバーとランサーの戦いに介入し、自身のサーヴァントの破天荒過ぎる行動のせいで、他のサーヴァント全員が集まってしまった。

その後に現れたキャスターとバーサーカーの戦いも目撃した。しかし、何故自身が気絶してしまったのかと言う経緯が全くウェイバーには思い出せなかった。

何かとんでもないことが起きた気がするのだが、それ以上のことは全く思い出せない。

人は時に自身の精神を守る為に嫌な記憶を忘れる事で精神の安定を保つ時がある。今のウェイバーがそうだった。

幾ら悩んでも何も思い出せず、ライダーに聞こうと部屋の中を見

回した瞬間、再び気がつく。
何時も横で鼾をかきながら眠っている、巨漢の姿がないことに。
「・・・どこに行ったんだ？」
何故か漠然と感じる嫌な予感に、顔色を蒼白にウェイバーが染めていると、階下からずしんずしんと踏み鳴らす音が聞こえてくる。
その音が意味することに、ウェイバーがますます顔色を蒼白に染めていると、ライダーが小包を持ちながら部屋に入ってくる。
「おぅ、起きたか坊主」
「・・な・・・何でお前下から・・・いや、それよりも、その格好で下に降りたのか？」
「案ずるな。家主の夫妻で在れば、今朝は早くから外出中だ。だが二人が留守の間に荷物が届いたのでな。余が受け取りに出た」
ライダーは持っている伝票が張られている小包を示しながら、ウェイバーに事情を説明した。
その事実にウェイバーの顔色は蒼白を通り越して、土気色に変わりだす。
今ライダーが着ているのは重厚な胴鎧。見慣れたウェイバーはともかく、一般人が見たら異常としか思えないだろう。配達員が誰かに喋るような人物でないことを祈るしか、ウェイバーにはもはや出来なかった。
「・・・あのな、別にお前宛ての荷物じゃないだから、お前が出る必要はないだろう？」

「いや。受け取ってみたら余の荷物であった」

「・・・・・なに？」

告げられた事実にウェイバーは疑問を覚えて、ライダーが持っている荷物の伝票を確かめる。

そこには確かに、《冬木市深山町中越、二ー二ー八マッケンジー宅・征服王イスカンダル様宛》と冗談にしか思えない内容が大真面目に書かれていた。

凄まじい頭痛にウェイバーは頭を抱えながら、ライダーに説明を要求する。

「・・・説明してくれライダー？」

「通信販売というヤツを試したのだ。広告欄の中にそそられる商品があったのでな」

「つ、通販？・・・・・お前、一体どこでそんな知識を手に入れた？」

何故過去の英霊で在る筈のライダーが、現代の買い物の仕方を知っているのだとウェイバーは悩む。

まさか、聖杯から送られる知識の中に、カタログショッピングのやり方まで在るのかとさえ一瞬考えてしまう。

しかし、幸福なことにそれはウェイバーの考え過ぎだった。

「ん？その程度のこと、本やビデオの巻末にいつも載っているではないか。端々まで検めれば歴然であろう。後、代金は代引きで申し込んだから問題ない」

見ているだけで殴りたくなるような朗らかな笑顔と共に、ライダーはウェイバーの財布を投げ渡す。
即座にウェイバーは財布の中身を確認する。凄まじく非常識としか言えない男が、一体幾ら使ったのかと思いながら、確認してみると、幸福なことに数枚の千円札で済んでいた。
ウェイバーはその事実に安堵するが、原因である男は気にせずに荷物の中身を上機嫌で掲げる。

「おおっ！よしよし、気に入った！実物は写真で見るよりも一段と素晴らしいな！」

「・・・・・Ｔシャツ？」

ライダーの掲げているＸＬサイズの胸に世界地図をからめたタイトルロゴで、《アドミラブル大戦略？》のＴシャツに、ウェイバーは首を思わず傾げた。
どう見て安っぽい半袖のプリントシャツ。
一体何に使う気なのかと、疑問をウェイバーが覚える。
その様子に気がついたライダーは上機嫌のままウェイバーに説明する。

「昨夜のセイバーを見てな、余もひらめいたばかりだったのだ。当代風の衣装を着れば、余も実体化したまま出歩いても文句はあるまい？」

遂に実体化したまま外を出歩く算段まで言い出したライダーのサーヴァント。
余計な着想を与えてくれたセイバーとそのマスターを、ウェイバーは無性に呪い殺したくなった。
そもそもサーヴァントの実体化だけで、少なからぬ負担がある。

《単独行動》のスキルを持っているアーチャーならいざ知らず、ライダーの実体化にはウェイバーにも多少の負担があるのだ。
しかし、ライダーは全く構わずに、さっそく新たな衣装に袖を通し、一人でさも楽しげにポージングなど決めている。
「フハハ！この胸板に世界の地図を載せるとは、ウム！実に小気味良い！これぞ！正に覇者の装束に相応しい！」
「・・・ああ、そう」
《アドミラブル大戦略？》のTシャツを着ながら世界征服を行う征服王イスカンダル。
実にシュールだ。しかし、当人は本気で気に入っているのか、楽しげに部屋を出て行こうとする。
「・・・って！おいライダー！待て！外に出るなら、ズボンを穿け！」
「ん？ああ脚絆か？そう言えばこの国では皆が穿いておったっけな」
ついうっかり失念していたと言いたげに、ライダーは拳をぐりぐりと額に押し当てる。
「あれは、必須か？」
「必要不可欠だ！」
Tシャツ一枚着ただけで、本気で外に出ようとしていたライダーにウェイバーは頭を再び抱える。
因みにライダーが今着ているのは、本当にTシャツだけ。下には

何も穿いていない。
　このまま外に出た日には、確実に警察に逮捕されるだろう。
　脳裏に警察署にライダーを迎えに行く自身の姿が、ウェイバーは浮かぶが、そんなのは絶対にごめんだった。
「先に断っとくが、僕はお前の為に街まで出向いて特大のズボンを買ってくるなんてことは絶対にしないからな！」
「なんだとぅ！？坊主！貴様は余の覇道に異を唱えると申すか！？」
「覇道とお前のズボンとは、一切合切！金輪際！全く持って関係ない！外を遊び歩く算段なんぞする前に、敵のサーヴァントの一人なりとも討ち取ってみろ！」
「むぅ」
　何時にないウェイバーの剣幕に、ライダーは獰猛に唸って沈黙して考えだす。
　そして何かを思いついたのか、一人だけ頷くと、ウェイバーに真剣な瞳を向ける。
「では、こう言うのはどうだ？昨夜の出来事で余が気がついた、他のサーヴァントに関する情報が有益だったら、余にズボンを穿かせると言うのは？首級を挙げたくても、今は朝方だからな」
「・・・・・良いだろう。本当にそれが僕らの今後に有益な情報だったら、ズボンを買って来てやる」
「よし。では、余が気がついたことを話すぞ。バーサーカーの真名に関する情報だ」

「ッ！？お前！あの得体の知れないバーサーカーの真名が解ったのか！？」

ライダーの告げた事実に、ウェイバーは驚愕した。

昨夜現れたバーサーカーは、ステータスも何もかも判別出来なかった得体の知れないサーヴァント。

ウェイバー自身、未だにバーサーカーの正体に全く覚えがなかった。

しかし、ライダーはフリートが告げた情報とあの場にいたセイバーのおかげでバーサーカーの正体に検討がついていた。

「ウム・・・実を言えば余はバーサーカーの正体に戸惑っておる。あの英霊が狂乱（バーサーカー）のクラスで召喚されるなど信じられん」

「ど、どんな英霊なんだ？」

「あの場には、ブリテンの王たるセイバーがおった。坊主？お前も英霊に詳しいならば、覚えがあるだろう？セイバーの配下の中にキャスターが告げた情報と一致し、港場でバーサーカーが使用しておった宝具と一致する逸話を持った英雄に？」

「・・・・・ま、まさか、バーサーカーの正体は」

脳裏に浮かんだ一人の英霊に、ウェイバーは我知らずに声が震えた。

当然である。もしもバーサーカーの正体がウェイバーが考えている英霊だとすれば、セイバー以上にセイバーとしての適性を持ち、尚且つ凄まじい実力を誇る英霊。

その英霊がステータスのアップを行えるバーサーカーとして召喚

されたばかりか、狂化しても尚、絶技に衰えがない。
今ならはっきりとウェイバーも言える。
港場でのケイネスの行動は完全な間違いだった。あの時に何が何でもバーサーカーに《必滅(ゲイ・ボウ)の黄薔薇》を叩き込んでいなければならなかったのだ。
“バーサーカーが真の宝具を使用する前に“

「・・何れ余は同じ王として、セイバーの王道を問わねばならん。死後に自らの臣下を狂わせるセイバーの王道とはいかなるものなのか・・・同じ王として気になるからな」

そう告げるライダーの顔は、先ほどまでの能天気な顔付きではなく、臣下を率いる一人の王としての決意に溢れていた。

「・・・・・・・なるほど・・・・・・事情はよく分かりました」

自身の本拠地の一室でテーブルを挟むように雁夜と対面しながら、フリートは雁夜が聖杯戦争に参加している事情を聞き終えていた。
自身が間桐家を出た為に、大切な人の娘が間桐家に養子に出されたこと。
その少女は一年近く虐待と言う言葉が生ぬるい地獄の日々を過ごしていること。
少女を助ける為に間桐家に戻って、一年の間、死に物狂いで魔術訓練を行い、自身の身体がボロボロになってしまったことの全てを雁夜は語った。
バーサーカーと言う最大の戦力が使用出来ない自身が、フリートから助かるには要求を叶えるしなかない。
自身の命を全て賭けて助けなければならない少女の為にも、此処

で死ぬわけにはいかないと思いながら雁夜はジッとフリートの言葉を待つ。

（彼が少女を助けられる可能性はゼロでしょうね）

雁夜の事情を聞き終えたフリートは、自身が治療した時の雁夜の状態と、集めていた他のサーヴァントとマスター達の実力を考えて雁夜が聖杯戦争の勝利者に成れる可能性はゼロだと断定した。

もし雁夜が勝利者になれる方法があるとしたら、他のサーヴァントとマスター達を同士討ちさせて、尚且つ自身とバーサーカーは余力を充分に残して置かなければならない。

しかもバーサーカーの最終宝具を使用しないと言う条件もつけなければならない。更に雁夜の願いの中にある、“遠坂時臣を殺す”という条件も追加すれば、もはや聖杯戦争に雁夜が勝利するなど不可能。

よしんば奇跡のバーゲンセールが雁夜に舞い降りて、聖杯戦争に勝利しても、その後には破滅しかない。

雁夜の事情を聞いている間に、フリートは雁夜の願いには決定的な矛盾が存在することに気がついていた。

（多分、心の奥底では自分でも気がついているんでしょうね。しかし、精神崩壊を免れる為に意識が向かないように本能が働いているんでしょうね）

間桐雁夜の精神はかなりギリギリのところで保っている。

それこそちょっとしたことで何時精神崩壊を起きても可笑しくないぐらいの瀬戸際に立っている。

「・・・・・話は分かりました。間桐家の地下に居る少女は私が救います」

「ッ！？さ、桜ちゃんを助けてくれるのか！？」

「ああいう子供を傷つける連中は嫌いですからね。あの子の実の父親にもそれ相当の報いは与えますから、貴方はここで大人しくしていて下さい」

「待て！時臣は俺が・・・」

「死にますよ。確実に貴方」

「ッ！？」

まるで明日が晴れだと気軽に告げるように、非情な現実をアッサリとフリートは雁夜に告げた。

しかし、それは変えようのない現実だった。間桐雁夜では、命を賭けても遠坂時臣には勝てない。

「いいですか？相手は人生の殆どを魔術に注いで来た人間です。一年間地獄を生き抜いた貴方には感服しますけど、それでも勝てる可能性は残念ながらゼロです。バーサーカーに魔力供給を行いながらも考えれば、途中で確実に死にますね。私と手を組んでも無理でしょう」

これが雁夜がバーサーカーを召喚した時点ならば、フリートは雁夜に魔導師としての手ほどきを行えられたが、既に聖杯戦争は開始している。

もはや雁夜を魔導師にしていられる時間は皆無なのだ。

だが、雁夜はフリートが提案に納得出来なかった。確かに自身が時臣に勝てない可能性は充分に理解出来る。しかし、それでは何の

為に一年間地獄の日々を生き抜いたのか解らない。
何とかしてフリートは考えを変えられないかと考えていると、夢の中で出会ったバーサーカーとは違う黒い騎士を思い出す。
“目覚めし時、母に伝えよ”
「ッ！？・・・・・・黒い騎士だ」
「はい？・・・・・・バーサーカーのことです？」
「違う。夢の中で俺は狼を模した兜を被った黒い騎士と出会った」
「ッ！？な、何ですって！？あ、貴方！あの子に選ばれたんですか！？」
雁夜が告げた騎士にフリートは心当たりがある。
何せそれはフリートが所持している宝具の中にある物。生前に自身が持つ技術の総意を結晶して完成させた“最高傑作になる筈だった”宝具なのだから。
冷静さを失って狼狽しているフリートが様子に、雁夜は騎士が告げた母とはフリートだと確信する。
「そいつは俺のことを、“資格ある者”だと言っていた。教えてくれ。あの騎士は一体何者なんだ？」
「・・・・・貴方が出会った騎士は、生前に私が作り上げた最高傑作になる筈だった宝具に宿る自我です。その子に資格ある者と告げられた貴方は、その宝具の所持者に成れる資格があると言う事です」
「・・・・・俺が宝具の所持者に」

告げられた事実に、雁夜は呆然とする。
宝具とは英霊が持つ最大の武器にして、神秘の結晶。それを所持しているだけで大抵の魔術師では歯が立たなくなる。
どんな宝具なのかは解らないが、バーサーカーと言う強力なサーヴァントとフリートが告げた宝具を手にすることが出来れば時臣を倒せるかもしれない。
いや、それだけではなく間桐邸の地下で苦しんでいる桜も自身の手で救出出来る可能性もある。

「頼む！その宝具を見せてくれ！」

叫ぶと共に雁夜はフリートに土下座を行った。
どれだけ願っても不可能だと思っていた自身の手による桜の間桐からの救出。あの間桐家に代々から君臨している老獪から、桜を自らの手で救い出せるのならば、フリートの手下になるのも構わない。
間桐雁夜が何よりも優先するのは、間桐桜の救出なのだから。幸いにも既にフリートの治療のおかげで、白髪以外の大部分は一年前に間桐に戻る前に近いぐらいに回復している。
身体の中にいる《刻印虫》も、どうやら間桐の老獪からフリートに支配権が移っている。ならば、今こそが積年の怨みを晴らす千載一遇のチャンス。
故に間桐雁夜はフリートが望むならば、此処で躊躇いもなくバーサーカーを使役できる術である令呪も捧げる覚悟だった。
その雁夜の覚悟が届いたのか、フリートは溜め息を吐くと、どこからともなく柄の部分が黒い剣を取り出し、自身の頭上に掲げて円を描くように振るう。

「来なさい！《黒炎騎士の鎧》！！」

ーーーブン！

フリートが握っていた剣を振り下ろすと同時に、円に切り裂かれた空間に陣が描かれ、光が降り注ぐ。

雁夜が呆然とその光を見つめていると、前触れもなく雁夜の目の前に夢の中で出会った黒い騎士の鎧が、鎖で身を封じられた状態で現れる。

ーーードン！！

「・・・・・こ、コイツだ。俺が会った騎士は」

雁夜は目の前に立つ騎士の鎧こそが、自身が夢の中で出会った騎士だと確信した。

夢の中では少ししか見られなかったが、改めて鎧を眺めて最初に感じるは禍々しいまでの邪気。バーサーカーの纏っている負の波動とは根本的に違う。鎧自体がまるで邪悪の根源だと告げているかのように、邪気が鎧の周りを漂っている。

明るい場所にありながらも、漆黒の色合いは陰りを見せず。逆に明るさが漆黒を際立ったせている。

良く見れば所々に金の装飾が施されいるが、それさえも漆黒の色合いを際立ったせる材料に過ぎない。封じられているかのように巻かれている鎖など、今すぐに引き千切って勝手に動きだしてしまうようにさえ思える。

例え英霊でさえも触れるのを拒むとしか考えられないほどの禍々しい邪悪な鎧。

だが、雁夜は直感した。目の前に在る鎧は自身の為に在る鎧なのだと。

我知らずに雁夜の手は動き、沈黙を保っている鎧に触れようとする。

しかし、雁夜の手が鎧に触れる直前、フリートが雁夜の手を掴む。

ーーーガシッ！！

「ッ！？」

「不用意に触れたら危険です。この子はまだ、貴方を主とは認めていません。試練を乗り越えない限り、貴方は資格ある者でしかないんです」

「・・・どういう事だ？」

「《黒炎騎士の鎧》・・・ありとあらゆる魔導を喰い尽くし、絶大な力を得られる鎧。しかし、その力故に使用者は手に入れた力に飲み込まれない精神力を必要とします。そう、この子は強い精神力を持たない人間以外に纏えない」

《黒炎騎士の鎧》。生前にフリートが作り上げた最高傑作になる筈だった宝具。

しかし、際限なく魔力を吸収し、限界など感じさせずに増大していく力は容易く人の心を闇に飲み込む。

故にフリートは鎧の所持者に成れるかどうかを確かめる為に、最初に鎧を纏った時に精神力を試す試練を課すように《黒炎騎士の鎧》に設定を組み込んだ。だが、その試練こそが《黒炎騎士の鎧》を、最高傑作の地位から落下させてしまう原因の一部となってしまった。

そして更にフリート自身予測出来なかった事態が、《黒炎騎士の鎧》に起きた。

《黒炎騎士の鎧》に完全な自我が生まれてしまったのだ。

原因を調べたところ、際限なく強く成るために埋め込んだ、とある竜人の因子と元々あった管制システムが融合。結果、《黒炎騎士

の鎧》は自ら資格者を選定し、その者にあった試練を夢の中で実行する存在へと変貌してしまったのだ。更にその試練もフリートが設定していた試練の内容よりも遥かに危険度が高い。失敗すれば、装着者の精神は試練のせいで崩壊してしまう。

これだけならばまだ問題は少なかったのだが、更なる問題点があった。それは。

「この子を資格者が纏っていられるのは、特殊な条件下を除いて《九十九秒間》だけ。それ以上纏っていたら、鎧に宿る因子が暴走して、暴走から一分以内に資格者の精神は崩壊。暴走が治まった後には《黒炎騎士の鎧》に宿っている自我が資格者の肉体を操るんです」

それはフリートの物を作る信念に於いて、絶対に見過ごせない欠陥中の欠陥。

故に《黒炎騎士の鎧》は、生身の人間がサーヴァント以上の力を得られる可能性を秘めている鎧で在りながら、同時に信じられないほどの使用者に対する危険性を秘めた“闇の鎧”。

生前に於いてフリートは《黒炎騎士の鎧》だけは、強力な封印を掛けて決して自身以外の誰にも触れさせなかった。例え生前の弟子だった者達でさえも《黒炎騎士の鎧》を制御出来ないと理解していたからだ。

何せ《黒炎騎士の鎧》を制御仕切れば、その者は究極の力を得られる。魔力を吸収し続ければ、《黒炎騎士の鎧》は無限に等しく力を増大させるのだから。

しかも現在は膨大な魔力を宿している英霊と優秀な魔術師が集まっている聖杯戦争の真っ最中。フリートの予測では、二体のサーヴァントの魔力を《黒炎騎士の鎧》が吸収すれば、それだけで並みのサーヴァントに匹敵する力が得られる。

全てのサーヴァントの魔力と魔術師達が持っている魔術刻印を吸収してしまえば、《黒炎騎士の鎧》はこの世界でも有数の力を獲得

するだろう。

「・・・・・確かにこの子の資格者と成れば、遠坂時臣と言う男に勝てるだけではなく、貴方自身の手であの女の子を救えるでしょう。ですが、この子が課す試練は危険過ぎます」

「肉体的なことなら堪えられる。確かにリスクは大きいが、この鎧の力さえ有れば・・・」

「精神的な方はどうなんですか？」

「えっ？」

一瞬、雁夜はフリートの質問の意味が解らず、呆けたような声を上げた。

その様子を確認しながら、フリートは《黒炎騎士の鎧》に険しい視線を向け続ける。

「この子が課す試練は、肉体的なものではなく、精神的な方です。それこそ失敗すれば精神は崩壊するでしょう。この子を制御する為には、この子の力に飲み込まれないほどの意志力が必要です。肉体的なものには堪えられても、精神的なものに堪えられる自信が在るんですか？」

「・・・・・・」

フリートの質問に雁夜は自信が持てなかった。

苦痛などの肉体的な試練ならば堪えられる自信は雁夜には在る。だが、精神的な試練に堪えきる自信はない。しかもフリートの言葉が真実ならば、精神が崩壊してしまうかもしれないほどに危険な試

練。
雁夜の中で一瞬だけ躊躇いが浮かぶが、すぐにそれは消え去る。
どの道、今の自身では時臣に勝つことは愚か、間桐邸から桜を救出することなど不可能。今までも命を賭けて行動して来た。
ならば今一度命を賭けよう。何よりも雁夜は約束を思い出した。
桜との絶対に果たさなければならない誓い。再び母で在る葵と姉で在る凛と会わせると言う約束と言う名の誓いを。

「・・・・キャスター・・・どうやれば鎧の試練を受けられる？」

「・・・・・後悔はありませんか？」

「・・・無い。ただ頼みがある。もし俺が試練を乗り越えられなかったら・・・・・その時は桜ちゃんを頼む。試練を乗り越えられたら、お前の配下になっても構わない。だから・・・・教えてくれ」

「・・・・・・鎧の胸に手を当てるんです。そうすれば、《黒炎騎士の鎧》に掛けてある封印は解けます」

「・・・・・ありがとう」

雁夜はフリートに礼を告げると、ゆっくりと右手を《黒炎騎士の鎧》の胸の部分に伸ばし、躊躇いなく鎧に触れる。
次の瞬間、《黒炎騎士の鎧》を封じていた鎖は粉々に砕け散り、同時に次々と鎧は雁夜の身体に勝手に装着していく。

ーーーバキィィィィィン！！！

ーーーガシャ！ガシャ！ガシャ！ガシャァァァァァン！！！！！

「ウッ！！ウオオォォォォォォォォーーー！！！！！！！」

《黒炎騎士の鎧》が雁夜の身体に装着し終えると同時に雁夜は凄まじい力の奔流が全身を駆け巡るのを感じ、我知らずに叫んだ。

そしてある程度叫び続けていると、突如として雁夜の身体から力が抜け、顔を俯かせながら床に膝を着く。

ーーーガシャ！

「・・・・果たして彼は試練を・・・・《黒炎騎士の鎧》。《キバ》が課す試練を乗り越えられるのでしょうか？」

そうフリートは、自身が造り上げた《黒炎騎士の鎧》。

その鎧に宿る自我の名前で在る《キバ》の名を呟きながら、《黒炎騎士の鎧》を纏いながら床に膝を着いて動かなくなった雁夜を静かに見つめるのだった。

第七話　装着（後書き）

今回使用宝具

名称：《黒炎騎士の鎧》
ランク：ＥＸ
分類：対人宝具
詳細：生前にフリートが造り上げた最高傑作になる筈だった対人宝具。
全身を覆い尽くす漆黒の甲冑。頭部は狼を模したようなフルフェイスの兜で覆い、背中には漆黒のマントが備わっている。
甲冑の金属は生体金属であり、ダイヤモンドよりも遥かに硬い《クロンデジゾイド》に、魔力を分断するディバイダーの理論を重ね合わせた究極の金属。魔導と言う魔導を分断し吸収。魔力を吸収し自らの力を無限に高める究極の闇の鎧。
サーヴァントや使い魔の魔力さえも吸収し、自らの力に変えるばかりか、魔力を伴った物品や魔術刻印までも吸収してしまう。魔力変換機能《黒炎》を宿し、その炎自体にまで魔力を分断する力が備わっている。
自らが資格者と認めた者に最初に試練を課し、乗り越えた者だけが鎧を纏える。
しかし、絶大な力を宿しながらも、装着者は《九十九秒間》しか鎧を纏えない。
制限時間を超えても鎧を纏い続ければ、鎧の内部に宿っている因子が暴走。暴走から一分以内に鎧を外さなければ、鎧に宿っている自我が装着者の精神を破壊して身体を乗っ取ってしまう。
これは鎧の内部に宿っているとある竜人の因子が原因であり、特殊な環境下以外は制限時間を超えて鎧は纏っていられない。また、鎧装着時は鎧の自我が装着者をサポートするので、戦闘の素人とでも

それなりには戦えられるようになる。（元ネタ、牙狼の暗黒騎士キバ）

名称：《異界剣》
ランク：C
分類：対人宝具
詳細：《黒炎騎士の鎧》を呼び出す専用の剣。自身の頭上で円を描くように振るうと、光と共に転送用の陣が発生。いかなる場所でも《黒炎騎士の鎧》を召喚出来る。また、使用者の魔力を斬撃にして飛ばせるが、威力は弱い。

第八話　試練

気がつけば雁夜は不可思議な空間の中に立っていた。
一面は真っ白な空間で構成され、黒い文字のようなものが床から立ち昇っている不可思議な世界。
いや、足が着いているから床だと分かるが、よく見れば黒い文字のようなものは、床の下からも昇って来ている。もしも足が着いていなければ床だと分からなかっただろう。
何処までも広がるような真っ白な世界に雁夜は困惑し、辺りを見回していると、背後から夢の中で聞いた足音が響いて来る。

ーーーガシャ！ガシャ！ガシャ！

「ッ！？」

“待っていたぞ。資格ある者。間桐雁夜よ”

「《黒炎騎士の鎧》ッ！？」

背後を雁夜が振り向いて見ると、現実世界で自身が纏っている筈の《黒炎騎士の鎧》が右手に刀身の部分に赤い紋様が刻まれている黒い長剣を握りながら立っていた。
《黒炎騎士の鎧》は雁夜の声に静かに頷くと、自身の名を名乗りだす。

“我が名は《キバ》。《黒炎騎士の鎧》に宿りし、自我なり”

「《キバ》・・・・・・此処は一体、何処だ？」

“此処は我が作り上げし、幻想の世界の入り口。これより汝は我を得る為の試練を受ける”

《黒炎騎士の鎧》、キバは雁夜にそう告げると共に右手に握っていた黒い長剣の柄を雁夜に差し出す。

雁夜は恐る恐る差し出された長剣の柄を握り、同時に雁夜の背後に黒いドアのようなものが出現する。

ーーーブン！！

「ッ！？・・・・・こ、この扉は？」

“その扉の先に、汝が受ける試練が待っている。引き返すならば剣を置き、我の背後に進め。さすれば現実に戻れる。しかし、二度試練は受けられんがな”

「・・・・・戻る気はない」

“ほぉ・・・・もはや覚悟は決まっているようだな。ますます気に入った。ならば、試練を告げる。その先には汝の絶望と矛盾が待っている。それを知り、されども違わずに斬り裂くべきモノを斬りし時。汝は我の担い手になる”

「この剣でか？」

“そうだ。我が剣。《黒炎剣》。その剣で斬るべきモノを斬り裂くのだ”

雁夜はキバの言葉を聞きながら、両手で握っている黒い長剣ー《黒炎剣》ーを眺める。

重さは現実世界では無いせいなのか、余り感じないが、《黒炎騎士の鎧》同様に禍々しい魔力を放っている。
キバの言葉が真実ならば《黒炎剣》もまた、《黒炎騎士の鎧》の一部。不正を見過ごさない為の処置なのだろうと理解し、雁夜は納得したように頷く。

「解った。なら、すぐに試練を受けさせて貰う」

“待て。告げておくがまだ在る。《黒炎剣》が振るえるのは二度だけ、そしてこの世界のモノは《黒炎剣》でしか斬り裂けん”

「チャンスは二度ってことか。分かった・・・・必ずお前の力を手に入れてみせる」

雁夜はキバにそう告げると、もはや振り返ることなく《黒炎剣》を携えながら黒いドアの向こうに歩いていく。
キバは雁夜は姿が完全に扉の向こう側に消え去るのを確認すると、ゆっくりと背後を振り返る。

“・・・・・・・介入したければするがいい。汝と間桐雁夜の絶望は似ているのだからな。我はあの者が気に入った。是が非でも担い手になって貰いたい”

キバは雁夜を心の底から気に入っていた。
フリートの生前に於いて雁夜以上に才気が溢れている者は確かにいた。しかし、キバが自らの担い手になって貰いたいと思う者は一人も居なかった。自身の担い手に相応しい存在は居ないのだと諦めていた。
だが、死後でキバは漸く見つけたのだ。
己の大切なモノの為ならば、自身の全てを賭けて挑む者。間桐雁

夜を。
無論雁夜の行動の全てが純粋な気持ちではないことにキバは気がついている。しかし、それでも尚雁夜の覚悟はキバに取って心地よかった。
“試練自体は変えられんが、それでも多少の力添えは認めよう。最も近しい絶望を味わった貴様のみだけだが”
そう告げるキバの視線の先には、雁夜が消え去った黒い扉を狂気とは違う感情を宿した瞳で見つめているバーサーカーが立っていた。

雁夜が入った扉の向こう側に広がっていたのは、長い長い通路だった。
ただ真っ直ぐに伸びている通路だか、出口らしいモノは全く見えない。視界の先に広がっているのは闇だけに彩られた通路。
だが、雁夜は迷うことなく《黒炎剣》を握りながら前へと進む。
先ほどのキバへの宣言通り覚悟は決まっている。
自身の決断が遅かった為に、幼くして残酷と言う言葉では足りないほどの運命を背負わせてしまった間桐桜。あの少女を必ず救わねばならない。
そして桜を地獄に送り込んだ奴らをこの手で全て断罪する。
(待っていろ！臓硯！時臣！この手で必ずお前達、殺してやる！桜ちゃんを地獄に送り！凛ちゃんから妹を奪い！そして葵さんを悲しませたお前達を俺は絶対に赦さない！)
間桐雁夜は魔術を嫌悪している。
いや、もはや一年間魔術によって地獄を味わい、変わり果ててい

く桜を見続けていたことで嫌悪は憎しみに変わっていた。
フリートの話が事実ならば《黒炎騎士の鎧》は、魔導を喰らって力を上げていく魔術に関わる全てにとって天敵の宝具。
あの憎んでも憎み足りないほどの臓硯と時臣が大切にしている魔導を失えば、絶望ではすまない。生きていること事態が苦痛の日々を味わう。
魔術を大切にしている者にとって、これ以上に無いほどの地獄。その地獄は必ず怨敵を叩き落とす。
そう雁夜は考えながら前を歩いていると、突然に目の前の風景が変わる。

ーーーシュウン！

「ッ！？こ、これは！？」

突然変わった風景に雁夜は驚愕することしか出来なかった。
雁夜の目の前に広がった光景の中で、一人の美しい女性が泣いていた。
遠坂葵に恋慕の感情を抱いている雁夜から見ても、その女性は美しいと思える。しかし、その女性の顔は悲嘆に窶れ、自ら責め、恥じるように声を押し殺して泣き続けていた。

「・・・・・誰なんだ？この女性は？」

雁夜には目の前の女性に全く見覚えがなかった。
自身の試練に関係しているのかと、疑問に思いながら首を傾げる。
そこでまた風景は変わる。今度は何処かの処刑所のような場所だった。
再び変わった風景に雁夜が辺りを見回してみると、先ほどの女性が処刑台らしき場所に向かって複数の騎士達に囲まれながら歩かさ

れていた。
何故このような不可思議な光景ばかりが続くのかと、雁夜は疑問を覚えながら処刑台に連れて行かれる女性を見つめ、次の瞬間目を見開いた。
女性を助けるように、一人の騎士が現れたのだ。
機能美と豪奢さを紙一重のバランスで両立させた完璧な鎧を纏い、人ならざる者が鍛えたことを示す刻印が刻まれた剣を振るって騎士は女性を救い出した。
その騎士の正体を知る雁夜は、先ほどから広がる不可思議な光景を作り出している者の正体を悟る。

「どういうつもりだ!?バーサーカー!!」

女性を救い出した騎士は、間違いなく生前のバーサーカー。
先ほどから続く見たことも無い光景を作り上げているのは、キバではなくバーサーカーと言うことだ。
一体何のつもりで、自身の試練の介入して来たのかと思いながら目の前の続いている光景を睨み。

「邪魔をする気なのか?・・・・・いや、違う」

自身の邪魔をする気で介入して来たには、不自然だと雁夜は思った。
そもそも今自身が居る世界は、キバが作り上げた幻想世界。更に言えばバーサーカーは今、フリートの拘束宝具で完全に動きが封じられている筈。幾らレイラインでバーサーカーと繋がっていたとしても、キバが作り上げた幻想世界への介入は難しいはずなのだ。
何よりも試練を行っているキバがバーサーカーの介入を赦さないはずだ。
だが、現にバーサーカーは試練に介入をして来ている。そこから

考えられることは一つだけ。

「・・・・・キバはバーサーカーの介入を認めているのか？」

どういう意図でバーサーカーの介入を許しているのかは解らないが、目の前に広がる光景をキバは認めている。

ならば、目の前に広がっているバーサーカーの過去の光景は、何か自身の試練に関するモノなのだろうと雁夜は考え、視線を前に戻す。

バーサーカーは女性を救い出し、そのまま安全な場所まで逃げ延びた。

しかし、その結果、バーサーカーが仕えていた国は二つに別れ、戦争が起きた。

バーサーカーは愛する者を救った代わりに、歴史に雪ぎようもない汚名を刻んでしまった。

“裏切りの騎士”。それがバーサーカーの生前に於ける最後の通称となってしまった。

そしてそれだけの代償を支払いながらも、バーサーカーが救い出した女性が得られたのは永遠の慟哭。愛した男に道を踏み誤らせた己を責めて泣き続けている。

雁夜は漠然とコレを教えるためにバーサーカーは介入して来たのだ悟った。

「・・・・・コレを俺に見せて何が言いたい？・・・・・俺もこの結末に向かって歩んでいると言いたいのか！？」

目の前に広がる光景に向かって雁夜は、苛立ちに満ちたように叫んだ。

自身はバーサーカーとは違う。葵の下に娘を返し、桜を地獄に送った連中を断罪する。それだけの筈。何処に葵が悲しむ要素が在る

のかと虚空を雁夜は睨むが、フッとキバが告げた言葉を思い出す。
《己が矛盾を悟り、されども立ち上がるならば》
「・・・俺の矛盾？・・・・・何なんだ？・・・何が矛盾しているんだ？」
漠然と己の矛盾を悟ってはいけないと雁夜は思う。それを知れば、自身の何かが砕けてしまう。
言い知れない恐怖から逃れようと、雁夜が前に足を踏み出すと同時に再び黒い扉が出現する。
ーーーブン！！
「ッ！？・・・・・・この扉の先に試練が」
再び現れた黒い扉に雁夜が抱いたのは、恐怖心だった。
扉の向こう側には、自身の矛盾が待っている。それを乗り越えなければ、《黒炎騎士の鎧》の担い手には成れない。今更ながらに雁夜は悟った。
フリートが告げた精神崩壊を引き起こすほどの試練とは、“自らの最も醜い部分を直視する事”なのだと言うことに。
「・・・・・・・確かにコレは壊れるかもな・・・・・・だけど、戻る訳には行かない！」
ーーーガチャ！
雁夜は意を決すると共に扉を開けた。
自身には助けなければはいけない少女がいる。確かにフリートが

助けてくれるだろう。
だが、桜に悲劇をもたらせたのは自身の行動も関わっている。
何としても自身の手で桜を救い出したい。それが間桐雁夜が抱く偽りない想い。
その想いを胸に扉の向こう側に雁夜は足を踏み入れ、一人の男性と相対する。
その男を雁夜が見間違える筈がなかった。
高慢な冷笑を浮かべ、雁夜が望んでいた全てを手に入れてながらも、それを捨て去った男。

「遠坂ッ！・・・・時臣！」

例えキバが作り上げた幻覚なのだと、心の中で理解していても雁夜には身の内から溢れてくる憎悪を押さえられなかった。
無意識に近い動きで握っている《黒炎剣》を、目の前に立っている時臣に向かって構える。

ーーースチャ！

「時臣！？」

《魔導に背を向けた恥が》

「黙れ！幻覚だとしても！お前だけは、やはり赦せない！オオオオオオオオーーーーー！！！！」

ーーーブザン！！

「・・・・・・・・・・・えっ？」

呆気ないほどに雁夜が振るった《黒炎剣》の刃は、時臣の身体を切り裂いた。
防御も回避も時臣は行わず、寧ろ雁夜が振るった《黒炎剣》の刃を自らが受けた印象さえ感じられる。
だが、それ以上に雁夜が衝撃を受けたのは、自身の心の方だった。
例え幻覚だとしても仇敵である遠坂時臣を倒したのだから、何かしらの気持ちが湧き上がってくるはず。しかし、雁夜の胸の内には何の感情も湧かず、ただ空虚さしかなかった。
ここに至り雁夜は自身の原動力がいつの間にか、桜の救出よりも時臣と臓硯に対する憎しみの方が強大になっていた事実を悟った。
これを知ることが試練なのかと《黒炎剣》を握りながら、呆然と倒れ伏している時臣の幻覚を雁夜は見つめるが、試練はまだ終わってなかった。
いや、寧ろこれからが雁夜の本当の試練だった。

「・・・・・・・雁夜、くん？」

「あ・・・・・葵、さん」

背後から聞こえて来た声に、茫然自失しながら雁夜が振り向いて見ると、雁夜の大切な人である遠坂葵が立ち尽くしていた。
本来の雁夜ならば目の前に居る葵も、キバが作り上げた幻覚だと悟れる。しかし、時臣の幻覚を切り裂いた時に感じた空虚さのせいで茫然自失してしまっている雁夜では、其処まで思考が回らなかった。
そして幻覚の葵はゆっくりと床に倒れ伏している時臣の骸を悲しみの涙を流しながら見つめる。
雁夜はその涙を見たくなかった。自身は誰よりも愛しかった女性を二度と泣かせるまいとして、命を捨ててまで地獄を乗り越えて来たはず。

しかし、今目の前に居る葵は時臣の骸を抱えながら悲しみの涙を流している。
先ほど見たバーサーカーの想い人が泣き続けていた光景同様に、葵もまた悲しみの涙を流し続けていた。
見たくなく、そして理解したくもない光景に、雁夜はただ一言も発することが出来ずにいると、時臣の骸を抱えていた葵がようやく雁夜に向かって顔を上げる。

「・・・・・これが貴方の望み光景なの？間桐は私から桜を奪っただけじゃ物足りなかったの？よりにもよって、この人を・・・私の愛する人を目の前で殺すだなんて・・・・・どうして？そんなに私たちが憎いの？貴方を地獄に送った私が？」

「ち、違う！・・・・お、俺は・・・・・」

聞き慣れた声でありながら、聞いたこともない葵の声色に雁夜は狼狽するしかなかった。
葵の声色に混じっているのは紛れもなく憎悪。何故自身が葵に憎悪を向けられなければならないのか、雁夜には理解出来ない。
だが、葵の周りを囲むように存在している闇が無慈悲に雁夜に真実を声無き意思の念で告げる。

“当然の帰結。愛する者を殺されたのだ。殺した相手を憎むのは当然の帰結に過ぎない”

「返してよ。私の愛する人を返して！」

「や、止め・・・・・ろ・・・・・止めてくれ！？」

“汝を怨むのは、この者だけでない”

「・・・・・・お、お父様？」

「ハッ！？」

背後から聞こえて来た震えるような声に、雁夜が背後を振り向いてみると、時臣の骸を見つめている幼き少女ー遠坂凛ーの姿が存在していた。

凛もまた先ほどの葵同様に悲しみに満ちた顔をしながら、時臣の骸を見ていた。

“夫を奪われ、父を奪われた者達が悲しみと憎しみを抱かずに居られる訳が無い。これが汝が真に望んでいた結末”

「違う！俺は、俺はこんな結末は望んでいない！・・・俺は・・俺はただ・・・・」

力の無い声と共に雁夜は膝を床に着いた。

しかし、周りの光景は変わることなく葵は雁夜に憎しみを。凛は時臣の骸に悲しみの視線を向け続けている。

この光景が自身の望んでいた全てが叶った後に訪れる結果。そもそも自身が最初に何を望んでいたのかも、雁夜には解らなくなっていた。ただこの場所にこれ以上居たくないと言う想いが心の内から溢れてくる。

右手に握ったままの《黒炎剣》を呆然と雁夜が目を向けると、葵が再び雁夜に話し掛けてくる。

「憎いのでしょう？私を斬れば解放されるわ。全てから」

ーーーカチャ！

雁夜はゆっくりと立ち上がり、《黒炎剣》の刃を葵に向かって構える。
目の前に居る葵は、自身の全てを否定した相手。ごちゃごちゃになった心が救いを求めるように雁夜の身体を動かし、《黒炎剣》を頭上に掲げる。
全てからの解放を願って雁夜は《黒炎剣》を振り下ろす。

「ウワァァァァァーーーーーーーー！！！！！！！！」

“・・・・・カリヤ・・・・・・・おじさん”

「ッ！？」

ーーーブザン！！

「・・・・・・・・・・・何故、外したの？」

雁夜が振り下ろした《黒炎剣》は、葵に当たることはなく、その横の空間を切り裂いていた。
葵は全く動いていない。雁夜が葵に《黒炎剣》の刃が届く直前に軌道を逸らしたのだ。
何故絶望を与えた自身を斬らなかったのかと葵は疑問に思いながら雁夜を見つめると、雁夜は涙を流しながら喋り出す。

「・・・・約束したんだ・・・・・桜ちゃんと・・・葵さんと凛ちゃんと、必ず会わせるって約束を・・・・そうだ。俺は結局時臣への嫉妬と憎しみで動いていた・・・・だけど、それでも俺は葵さん・・凛ちゃん・・・そして桜ちゃんの悲しむ姿を見たくなかった」

「そう・・・・・・・・正解よ。間桐雁夜」

ーーービキビキ！ビキィィィィィン！！」

「こ、これは！？」

葵の言葉と共に、雁夜が《黒炎剣》で切り裂いた空間の部分が甲高い音をたてながらひび割れ、光溢れる出口が出現した。

呆然と雁夜がその出口を見つめると、葵が話し掛けてくる。

「その出口の先でキバは貴方を待っているわ。矛盾を知って絶望に堕ちても、私を斬らなかった貴方は信念の片鱗を得た」

「信念？」

「そう・・・・・・・絶大な力は容易く人の心を闇に飲み込んでしまう。特にキバに宿る因子が齎す力は想像を絶するほどの力。制御を間違えたら、世界は崩壊してしまう。そして力に呑み込まれた貴方は守りたかった者も忘れて力だけを求める存在になり果ててしまう」

「ッ！？・・・・・・・こ、コレはその結末の一つなのか？」

雁夜は先ほど見た悲劇に、全身が震える。

確かに先ほどの悲劇はキバが作り上げた幻覚に過ぎない。だが、もしも現実で同じ状況が起きた時に、葵に手をかけない自信は雁夜にはなかった。

いや、間違いなく葵に手を掛けていただろう。

事前にバーサーカーの過去を見て、そして弱々しい小さな声の主のこと思い出せていなければ、《黒炎剣》を雁夜は目の前の葵に振

り下ろしていた。
その後に確実に自身は崩壊していただろうと、雁夜は全身に悪寒が走る。
「そう。これは結末の一つ。でも、まだそうなると決まっている訳じゃない・・・・・さぁ、キバが貴方を待っているわ」
葵がそう雁夜に告げると同時に葵の身体が光の粒に変わり出す。
ーーーシュウッ
「ッ！あ、葵さん！？」
「私は貴方の記憶から作られた仮想の遠坂葵。役目が終わった今、貴方の中に帰るだけよ・・・・・・でも、現実の私に私が会ったら、きっと頬を叩いているわね・・・・・・こんな一途に想ってくれている貴方に気がつかないんですもの」
「い、いや・・・・・その・・・・・」
葵の言葉に雁夜は恥ずかしそうに顔を赤らめた。
例え仮想の存在とは言え、想い人で在る葵の言葉には恥ずかしさを隠しきれなかった。
その様子を葵は微笑ましげに見つめ、消えかけている左手で出口を示す。
「さぁ、キバが貴方を待っているわ」
そう再び葵が告げると、雁夜は覚悟を決めたように頷き、出口へと歩い行く。

そして葵の横を通り過ぎるが、葵は振り向かなかった。心の何処かで雁夜は僅かに寂しさを感じるが、もはや背後に居る葵には振り返らず、出口の向こう側に消え去る前に言葉を葵に残す。

「・・・・必ず桜ちゃんは救い出します」

その言葉を残して、雁夜はキバの下に向かう。

残された葵は消えゆく自身の姿を見ながら、寂しげに呟く。

「・・やっぱり、叩きたいわね。現実世界の私を」

キバが作った仮想の存在とは言え、葵の思考は本物の葵に限り無く近い。

雁夜の記憶に存在する遠坂葵から生まれたがだから。唯一違う点が在るとすれば、それは現実世界の葵と違って、仮想の葵は雁夜の想いを理解している点だ。

遠坂葵の言葉は間桐雁夜を縛る鎖になってしまう。例え仮想の存在でも、少なからず雁夜に影響を及ぼすだろう。そんなことを葵はしたくなかった。

「・・・・・・・・私には言う資格なんてないけど・・・・・幸せになってね・・・・・雁夜君」

その言葉を最後に仮想の葵の姿は光へと変わり、自身がいた場所へと戻って行った。

「・・・・・・・・キバ」

“待っていたぞ。己が矛盾を知り、信念の片鱗を見いだせたようだな”

最初にいた空間で再び雁夜とキバは向き合っていた。

「・・・・・俺は・・・・・・葵さんと凛ちゃんを悲しませてしまい掛けていたんだな」

“そうだ。汝の心はいつの間にか、憎悪に支配されていた。だが、汝が彼の者達の悲しみを止めたいと願ったのもまた真実。間桐雁夜よ。我が力を得て、遠坂時臣を討つか？”

「いや、討たない。先ずは奴の真意を聞き出す。その後に全てを教える。間桐の真実と桜ちゃんに何があったのか。全てを」

雁夜は時臣に対する行動を決めていた。

時臣の真意を聞き出し、桜に何があったのかの全てを告げる。それでもなお魔術師としての感性で動くのならば、時臣の人生の全てを奪い取る。

雁夜が真に望むのは、葵、凛、桜の幸せなのだから。

その雁夜の強い意思を感じたキバは歓喜に溢れていた。

目の前に居る男こそ、自身が永き時の果てに待ち望んでいた担い手。まだ、完全に信念と呼べる意思は持っていないが、それでも目の前の相手ならば力に呑み込まれる可能性は低い。

“アァ・・・・・永かった。本当に・・・・・我が力の全てを汝に捧げよう。だが、忘れるな。汝が力に呑み込まれし時。それは汝の破滅の時なり”

「わかっている・・・・・・キバ。その力を俺の大切な人達の為に貸してくれ」

ーーーガシャ！ガシャ！ガシャァァァァァン！！！

雁夜がキバに手を差し出すと共に、キバの身体は分解し、次々と雁夜の身体に装着していく。

同時に雁夜は荒々しい力の奔流が全身を駆け巡るのを再び感じるが、不思議とその力に恐怖は感じなかった。

そして雁夜の身体に《黒炎騎士の鎧》が装着される。

ーーーガシィィィィィィン！！！

此処に《魔導喰いの黒炎騎士キバ》は誕生した。

自身の調子を確かめるように雁夜が身体を動かしていると、背後に強大な気配を感じる。

振り返らずとも雁夜には気配の主の正体が分かっていた。この空間にキバ以外に干渉して来た存在。

「・・バーサーカー」

無言でバーサーカーが《黒炎騎士の鎧》を纏った雁夜を見つめていた。

相変わらず全身から放つ殺意に満ちた魔力は変わらないが、夢の中で雁夜を食おうとしていた気配は消えていた。寧ろ何かを訴えかけるような目でバーサーカーは雁夜をジッと見ていた。

その視線の意味を雁夜は間違わずに悟り、バーサーカーに向かって頷く。

「俺は絶対にあの悲劇を繰り返さない」

ーーーガシャ！

雁夜の言葉にバーサーカーは片膝を着いて、右手を胸に当てた。
それは臣下の礼。互いに利用しあうだけの関係だったバーサーカーと雁夜の間に主従が生まれたのだ。狂化してもなお残っていた僅かなバーサーカーの理性が雁夜を主として認めた。
その礼に雁夜は頷き、バーサーカーとそして《黒炎騎士の鎧》に宿っているキバと共に現実世界に意識を戻す。

「・・・・・鎧を装着してから三時間が経過。そろそろ結果が出ますね」

現実世界で《黒炎騎士の鎧》を纏ったまま床に膝を着いて動かない雁夜を見つめながら、フリートは険しい声で呟いた。
予想ではそろそろキバの試練の結果が出るはず。
失敗したのか、成功したのかは解らないが、フリートはこの三時間どちらの結果が出ても動ける策の準備をしていた。
今夜中にやらなければ成らないことは沢山在る。桜の救出は第一に優先するが、色々とやらなければならない。
特に《黒炎騎士の鎧》に雁夜が担い手になった場合は、かなり忙しくなる。

「・・・彼の使い魔達の強化も終わりましたし、後は試練の結果次第なんですけど」

ーーーカタッ！

「ん？」

僅かに響いた音にフリートが雁夜に目を向けると、《黒炎騎士の鎧》の瞳に意思の光が宿る。

ーーーギン！

「お、お・・・・オオオオォォォォォーーーーーー！！！！！」

ーーーガシャ！ガシャ！ガシャ！

「さ、最適化！？ま、まさか！？」

叫びながら雁夜が立ち上がると共に、《黒炎騎士の鎧》が雁夜の身体の大きさに一致していく。

その現象の意味を理解しているフリートは、雁夜が《黒炎騎士の鎧》の担い手になったことを悟り、驚愕と歓喜に染まった声で叫ぶ。

「つ、遂に！？遂に生まれたのですね！《黒炎騎士キバ》！！！」

「ウオォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

フリートとバーサーカーを除いた聖杯戦争に参加している誰もが知らなかった。

魔導に関わる全ての天敵。異世界に於いて最凶と呼ばれた存在の因子を宿す鎧が、遂に担い手を得えて産声を上げたことを。

まだ、フリートとバーサーカー以外の聖杯戦争に参加しているサーヴァントと魔術師達は知らなかった。

第八話　試練（後書き）

今回使用宝具

名称：《黒炎剣》
分類：対人宝具
ランク：Ｂ＋
詳細：《黒炎騎士の鎧》専用の黒い長剣。
魔力の分断及び吸収能力を備え、吸収した魔力を《黒炎騎士の鎧》に送る。また、《黒炎》の発生も可能であり、斬撃として相手に放ってる。サーヴァントのなどの魔力で構成された存在には天敵であり、傷が致命傷に近いほどに魔力を多く吸収する。

第九話　強襲

冬木市市街から、直線距離にして西に三十キロほど離れた場所に、鬱蒼と生い茂る森林地帯が存在している。

その森の奥深くにはお伽話に出てくるような壮麗な古城が存在していると言う都市伝説がある。

それは都市伝説などではなく、紛れもない真実だった。

六十年に一度開催される聖杯戦争の時にだけ主を迎え入れる城。重層の幻覚と魔術結界によって城は守られているため、決して外部に露見することはない異空間。

その正体を知る者達は、深い森林をこう呼ぶ。《アインツベルンの森》と。

そして今、六十年の一度の聖杯戦争は開始され、城のサロンの中でアインツベルンの陣営達が集まり会議を行っていた。

「地脈の中心となるのは二カ所。ひとつはセカンドマスターである遠坂の邸宅。もう一つは言わずと知れた円蔵山だ。この辺りの霊脈は全てこの山に集まることになる。詳細はアハト翁から聞いての通りなわけだが」

冬木市の地図をテーブルに広げながら、切嗣は対面に座っているアイリスフィールとその背後に控えているダークスーツに身を包んだセイバーに説明する。

「円蔵山には頂上の柳洞寺を基点として強力な結界が張られている。そのせいでサーヴァントのような自然霊以外の存在は参道からしか進入できない。セイバーを使う上では留意してくれ」

「霊脈が集まっているなら、あのキャスターが拠点にしてそうね」

切嗣の情報からアイリスフィールは自身が考えた意見を述べる。
《陣地作製》のスキルを持っているキャスターのサーヴァンは、こと防衛戦に於いては七サーヴァントの中で最強のアドバンテージを得ている。
しかも今回召喚されているキャスターは、竜を使役するほどに優れたサーヴァント。その相手が霊脈の中心である柳洞寺を拠点にしていれば、柳洞寺は難攻不落の拠点に変貌している可能性が高い。
その上、アイリスフィール達、聖杯戦争を構築した御三家は円蔵山で大規模な破壊を行えない。円蔵山の崩壊は聖杯戦争の崩壊に繋がるからだ。
故にアイリスフィールはフリートが円蔵山に居ないことを心の中で願う。
その心配を晴らすように、切嗣は昼間の内に調べた情報を話す。

「昼間の内に僕と舞弥で円蔵山付近を調べたが、キャスターらしい存在は確認出来なかった。もしかしたら隠れている可能性も高いが、柳洞寺に舞弥の使い魔が潜入出来た」

「ということは、キャスターは円蔵山には居ない可能性が高いわね」

「必ずとは言い切れないがね。それにその二カ所には劣るが、他にも地脈が集中する要地があと二つ新都にある」

再び切嗣はテーブルの上に置かれている地図を指で示す。

「南の丘の上に存在する冬木教会。都市区間の東にある新興住宅地。よって、聖杯の降霊を行えるだけの霊格を備えたポイントは、冬木市内に都合四カ所ある」

「戦いの後半、サーヴァントの数が絞り込まれてきたら、このいずれかを拠点として制圧して於かなくてはいけないわけね？」

「そう言うことだ。地勢についてはこんなところだが、何か質問は？」

「セイバー、何か不明な点はある？」

「これといって特には。充分な説明でした」

アイリスフィールの質問にセイバーは小さく微笑みながら答えるが、アイリスフィールは内心で溜め息を吐く。

セイバー本人は気がついていないが、傍から見ればじつに皮肉の利いた返答だった。その原因は切嗣とセイバーの関係にあった。

本来ならばセイバーは真のマスターである切嗣と行動するはず。だが、切嗣はセイバーの監督をアイリスフィールに委ねている。

これは二人の相性が凄まじく合わないのが原因。片や勝利する為ならば、どんな方法でも実行する戦争屋。片や騎士道を重んじて正々堂々に相手を打倒する騎士。

どう考えても相性が合うわけが無い。

故にセイバーと切嗣の間には会話なども存在しない。現に今の説明でも切嗣はセイバーに、ただの一瞥すら与えていない。

二人の関係にアイリスフィールは溜め息を吐きながら、話を先に進める。

「それで、今後の方針は？」

「まずはランサーを討つ。僕が策を実行してから十八時間経つが、相変わらずセイバーの左手は治癒しないまま。このことから考えられるのはロード・エルメロイが生存しているか、或いはランサーが

誰かと再契約したかのどちらかだ」

その切嗣の言葉にアイリスフィールは横目でセイバーの左手を確認する。

セイバーの左手はランサーの槍の呪いで癒えない傷を負わされている。これを治癒させる為にはランサーが消滅するか、呪いを負わせた《必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇》を破壊するかのどちらかしかない。

《単独行動》のスキルを持っていないランサーでは、十八時間もマスター無しで現界するのは不可能。

ランサーのマスターであるケイネス・アーチボルトが生存している可能性は高い。

死亡の確認が出来なかったのは痛いと内心で思いながら切嗣は話を進める。

「そしてセイバーの左手が完治しだい・・・・・キャスターを抹殺する」

『ツ！？』

意見は赦さないというような力強い切嗣の宣言にアイリスフィールとセイバーは目を見開くが、切嗣は何があっても意見を変える気はなかった。

寧ろセイバーの左手が完治していたら、令呪を使用してでもフリートを工房ごと消滅させるつもりだった。

「港場で奴を見た時、確信した。奴は放置したら不味い。早急に排除しなければ取り返しのつかない何かを引き起こす。奴は危険すぎる」

（切嗣がセイバーと同じ意見を！？）

切嗣の意見にアイリスフィールは目を見開いて、セイバーと切嗣の顔を交互に見回す。
セイバーも港場から城に戻って来るまでの間、フリートは危険だとアイリスフィールに告げていたのだ。
凡そ意見が一致するとは思えなかった切嗣とセイバーの意見が一致するほどに危険な存在であるフリート。
一体何が二人に不安を与えているのかと、アイリスフィールは考えながら切嗣に視線を向けるが、切嗣は自身の背後に控えていた舞弥に顔を向けていた。

「舞弥。君は街に先に戻って情報収集に当たってくれ。特にキャスターの工房らしい場所を見つけたらすぐに報告を」

「分かりました」

舞弥は淀みない返事で頷き、サロンから出て行く。
その二人の息のあった動きにアイリスフィールは先ほどとは違う不安を感じるが、切嗣は構わずにテーブルを広げていた地図や資料を片付けてサロンから出て行く。
結局最後まで切嗣はセイバーに目線を向けず、セイバーは僅かに苛立ちを込めた視線を絨毯に向け続ける。
その様子にアイリスフィールは今後の行動に確実に支障を来すと考え、切嗣の後を追いかける。
切嗣はすぐに見つかった。城の前庭を望むテラスに出て、手すりに寄りかかったまま夜の森を眺めていた。
アイリスフィールとしては嬉しいことに舞弥の姿はなく、切嗣一人だった。

「・・・・切嗣」

「・・・・・・・アイリ」

「えっ？」

振り向いた切嗣の顔を見たアイリスフィールは僅かに驚いた。
先ほどまでの会議の時は無表情だった筈の切嗣の顔は、まるで傷つき、怯えきった子供のように、今にも泣き出しそうなほどに追いつめらていた。

「切嗣、あなたは？」

「もし、もし僕がいまここで、何もかも放り投げて逃げ出すと決めたら・・・・・アイリ、君は一緒に来てくれるか？」

凡そ考える限り、衛宮切嗣という男が絶対に口にするはずがない問いだった。
アイリスフィールは驚きの余りに言葉を失うが、それでも何とか聞き返す。

「イリヤは・・・・・アインツベルンの城に残して来たあの子は？」

「戻って、連れ出す。邪魔する奴は殺す」

切嗣は短く断固した。
それほどまでに切羽詰まった声。明らかに本気なのだとアイリスフィールは理解する。
そして同時に理解した。今、切嗣は瀬戸際に追いつめられている。
アインツベルンに訪れてから九年間の間に得たモノのせいで、衛宮切嗣は冷徹だった過去に戻りきれない。しかし、戻らなければな

らない。でなければ勝ち残れないと切嗣は確信していた。
フリート以外にも危険な奴が存在している。だからこそ九年前の自分に戻らなければならないのに、切嗣の魂が軋みを上げていた。
ここに至ってアイリスフィールは切嗣の苦悩を感じるが、救済を与えられなかった。自身の存在もまた切嗣を苦しませているのだから。

「逃げられるの？私たち」

「逃げられる。今ならば、まだ」

「・・・・・・嘘。それは嘘よ。衛宮切嗣、あなたは決して逃げられない」

優しく、しかし残酷にアイリスフィールは指摘した。
その指摘に切嗣は肩を震わせ、アイリスフィールは背中から切嗣を抱きしめる。

「聖杯を捨てた自分を、世界を救えなかった自分を、あなたは決して赦せない。きっとあなた自身が最初で最後の断罪者として、衛宮切嗣を殺してしまう」

「・・・・・怖いんだ。奴が・・・・言峰綺礼が、僕を狙っている。舞弥に聞いた。奴は僕を釣る餌としてケイネスを張っていた。行動を読まれていた。僕は、負けるかもしれない。君を犠牲にして戦うのに、イリヤを残したままなのに、僕は・・・・・一番危険な奴が僕に狙いを定めている。決して逢いたくなかったアイツが！！」

「切嗣」

「・・・・・それだけじゃない・・・・・僕は感じたんだ。港場でキャスターを見た時・・・・・・アイツは、きっと僕を壊す。何故だか解らないが予感がするんだ。キャスターが僕の全てを破壊する予感が」

切嗣がフリートの抹殺を優先する真の理由がそれだった。
本当の意味でフリートと対面した時。衛宮切嗣の全てが破壊される。それこそ何もかも。
だからこそ切嗣は早急にフリートを抹殺したかった。戦う理由の何もかもを崩壊される前に。
アイリスフィールはその底知れない恐怖を感じている切嗣を安心させようと、力を込めて抱きしめる。

「あなた一人には戦わせない。私が守る。セイバーが守る。それに・・・・舞弥さんもいる」

アイリスフィールは切嗣の正妻として認めるしかなかった。
今の切嗣に必要なのは、嘗ての切嗣を知る久宇舞弥なのだと。自身ではどうあっても嘗ての切嗣を取り戻すことは出来ない。
自身が出来るのは気休めにしかならない抱擁だけ。そのことを僅かに悔しく思いながらも、アイリスフィールは切嗣を抱きしめる。
しかし、アイリスフィールも切嗣も知らなかった。
光学迷彩で姿を隠し、アイリスフィールと切嗣の会話を余すことなく主に伝えている機械。《小バッタ一号機》がすぐ傍に潜んでいることを。
そしてこの会話のせいで切嗣とアイリスフィールが一時の別れを強いられてしまうことも知らずに、二人は抱擁を続ける。
次の瞬間、アイリスフィールは自身の胸の内で突然に動悸を感じる。
それは《アインツベルンの森》に張られている結界が侵入者を感

知したという知らせ。アイリスフィールは白熱する自身の魔術回路を感じて胸を押さえる。

「・・・・・侵入者かい？」

「えぇ」

切嗣の固い声にも動じずにアイリスフィールは頷き、切嗣は無表情ながら冷徹な顔して振り返る。

「舞弥が発つ前で良かった。今なら総出で迎撃が出来る・・・・・アイリ、《遠見の水晶球》を用意してくれ」

「わかったわ」

アイリスフィールは切嗣の指示に従って、急いで城の中に戻って行く。

そして再びサロンにはアインツベルンの陣営が全員集まり、アイリスフィールが用意した水晶球を見ていた。

結界が捉えた侵入者の映像を映し出す《遠見の水晶球》。

そこに投影されたのは、周囲の木々が三十メートル近く斬り倒され、その中心で佇んでいる右手に何かを握った漆黒の鎧と闇を纏った騎士。

見間違える筈など無い。紛れもなく、港場でセイバーに襲いかかり、フリートに重傷を負わされたはずの狂戦士。

「バーサーカー」

港場で凄まじい技量を誇ったバーサーカーが、アインツベルン城

の在る方角に燃えるような双眸を向けながら佇んでいた。
その立ち姿からは港場での負傷など全く感じさせない。それが意味することは、バーサーカーが負った怪我は既に完治しているということに他ならない。

「アレだけの怪我が、一晩で治るなんて」

「サーヴァントの回復力は普通ではない。ましてやバーサーカーが負った怪我は、セイバーとは違って癒えない訳じゃない。治癒魔術を用いて回復させたんだろう。アイリ、バーサーカーのマスターは近くに居るかい？」

「待って・・・・・・・結界には反応は無いわ」

「ということは、港場での時同様に身を隠すことを優先しているというか」

切嗣は僅かに眉を顰めながら、水晶球に映っているバーサーカーを見つめる。
なまじ優秀な魔術師よりも、切嗣にとってはこういう増長のない相手の方がむしろ難敵。隠れていられては、切嗣の基本戦略である《マスター殺し》が行えないからだ。
しかも、森の結界に反応がないということは、バーサーカーのマスターはバーサーカー単独で《アインツベルンの森》に来させた可能性が高い。

「・・・・アイリ、バーサーカーの位置は？」

「城から北東に二キロぐらいね。その位置だとエリア・エフェクトは発動出来ないわ」

「そうか・・・・・しばらくは待機だ。せめてバーサーカーがエリア・エフェクトが発動出来る地点に来るまでは待機するしかない。左手の使えないセイバーが、バーサーカーが居る場所に向かうのは危険だ」

握った物を全て自身の宝具にしてしまうバーサーカーの力。
そのバーサーカーからすれば、森の中は宝具の山に等しい。何せただの木まで宝具にしてしまうのがバーサーカーだ。
倒れた木々だろうが、生えている木だろうがバーサーカーからすれば宝具の山。
例え《アインツベルンの森》だろうが、今バーサーカーが居る地点はバーサーカーに有利過ぎる。
セイバーも悔しいが切嗣の意見は認めざるえなく、しばらくは城の中で待機する意見を認めようとした瞬間、城が凄まじい衝撃で揺れる。

ーーードゴオオオオオオオオオン！！！！！！

「キャアッ！！」

「クッ！！何だ！？今のは衝撃は！？」

「切嗣！水晶球を見てください！」

舞弥の叫びに全員が水晶球を見てみると、バーサーカーの魔力に染まった漆黒の弓と矢をアインツベルン城に向けて構えているバーサーカーがいた。
バーサーカーはまるでバーサーカー自身の凶悪な魔力が具現化したような矢を構え、アインツベルン城に向けて撃つ。

ーーードゴオオオオオオオン！！

「ッ！！不味いは切嗣！今ので城を覆っていた結界が破損！！次の一撃は防げない！」

「クッ！！籠城をさせる気は無いって言うことか！？」

切嗣は僅かに苛立ちを込めた視線で水晶球に映っているバーサーカーを睨む。

バーサーカーは弓兵ではないが、アインツベルン城はかなりの大きさを持っている城。下手な弾も数撃てば当たるように、バーサーカーはアインツベルン城に向かって自身の魔力に染まった矢を放っているのだ。

しかもどういう訳か、その矢の威力は並みではない。下手したら弱い宝具の真名解放ぐらいの威力が在る。いうなれば、今のバーサーカーは港場に現れたアーチャーと同じ攻撃を行っている。

このままではアインツベルン城が崩壊してしまうとアイリスフィールは焦り、セイバーに指示を出す。

「セイバー！行って！」

「了解です！」

アイリスフィールの指示にセイバーは即座に武装化を行い、鋼色の疾風と化してバーサーカーの下に急ぐ。

《作戦通りにセイバーが城を出ました》

「了解だ。後はバーサーカーと俺達がやる」

バーサーカーが事前になぎ倒していた木々の間に隠れて、通信機から届いたフリートの報告に黒いフードで全身を隠した雁夜が答えた。

何故桜救出を第一にしている彼らが《アインツベルンの森》に居るのかと言うと、セイバーの魔力を《黒炎騎士の鎧》に吸収させる為だった。

桜救出の際には確実に数百年生きた妖怪のような老人が立ち塞がる。しかも相手は聖杯戦争を構築した御三家の頭首。

フリートとバーサーカー、そして《黒炎騎士の鎧》の担い手になった雁夜ならば倒せるだろうが、逃げられる可能性が存在している。確実にこの世から抹消しなければ、桜の安全は保証出来ない。故にフリートは《黒炎騎士の鎧》にセイバーの魔力を吸収させて戦力の増強を図ることにした。

これにはバーサーカーの魔力問題もあった。バーサーカーは膨大な魔力を消費する。フリートは既に魔力問題を解決しているが、バーサーカーの全力戦闘には不安が在る。

これぱかりは一度試して見ない限り保証はできないので、その試運転も兼ねて一番魔力を奪い易いセイバーを強襲したのだ。

雁夜としても、実戦での《黒炎騎士の鎧》の調子は確かめて於いて損は無いと思い、フリートの指示に従った。

因みにこの作戦が決定した後、《アインツベルンの森》に強襲を掛ける一時間ぐらい前まで、雁夜はフリートに寄る模擬戦を行っていた。

（待っていてくれ、桜ちゃん。必ずこの件が終わったら、君を救いに行く！待っていてくれ！）

《・・・・・焦るな、雁夜。先ずは目の前のことに集中しろ》

「あぁ、分かっている、キバ」

自身の左手の中指に、填めてある狼を模したような指輪から聞こえて来た声に雁夜は頷いた。

その指輪は《黒炎騎士の鎧》の担い手になったことを示す指輪。キバの意思を伝える道具であり、また担い手の感覚を強化する力も宿っている。もっとも感覚を強化しても、担い手が即座に動けるかは完全が別なので鍛錬は必要なのだが。

そして雁夜が纏っている黒いフードにも幾つかの機能が存在し、アイリスフィールが雁夜を感知出来なかったのも、黒いフードのせいである。

キバの言葉で雁夜は心を落ちつけると、再びフリートから通信が届く。

《それじゃ、私は“聖杯の器”の回収に向かいますから、そちらの方は頼みます。くれぐれも油断してはいけませんからね》

「分かっている。それじゃセイバーが来るから通信を切るぞ」

そう雁夜は通信機のスイッチを切り、バーサーカーが視線を向けている方に木々の間から顔を覗かせる。

来る相手はバーサーカーにとって生前から因縁がある相手。港場での時のように再びバーサーカーが暴走する可能性も考えられる。

それだと作戦の遂行に不安が出ると雁夜は思うが、その不安を晴らすようにキバが声を掛ける。

《案ずるな。今の奴は港場での時のように暴走する可能性は低い。それよりも来るぞ》

その言葉に雁夜がバーサーカーの前方を見てみると、白銀の鎧を纏い、蒼いドレスを着たセイバーが森の木々の間から姿を現した。

（・・・・・・違う。港場での時のバーサーカーではない）

バーサーカーと相対するように立つセイバーは、今のバーサーカーは港場での時とは何か違うと直感で悟った。

荒々しい魔力と殺意の波動は変わっていないが、何かが決定的に違う。

てっきり、港場での時同様に襲いかかって来ると思っていたセイバーは、違和感を感じながらバーサーカーを見つめていると、バーサーカーは左手を下に提げ出す。

その動きにセイバーはバーサーカーが下に落ちている木を拾い上げるつもりだと思い、即座に飛び出す。

既にこの場は事前にバーサーカーがなぎ倒した木々の山で埋もれている。ならば、先んじて攻撃するしかない。

そうセイバーは考えてバーサーカーに向かって飛びかかる。

足下にある武器をバーサーカーは拾い上げる。それは間違っていなかった。だが、バーサーカーは木など拾う気はなかった。拾うのは木の下に事前に隠していた武器。

バーサーカーは瞬時にソレを拾い上げて、ソレをセイバーに向かって構える。

ソレを目にしたセイバーは目を見開き、《遠見の水晶球》で戦いを見ていた切嗣達も目を見開く。

バーサーカーが取り出した武器。凡そ過去の英霊が使うような武器ではない。

現代に於いて敵を大勢殺傷する為に作られた武器。重工な威圧感を感じさせ、装飾など一切ない漆黒の武器。

《ガトリング砲》と呼ばれる殺戮兵器ををバーサーカーは左手に

構えて、そして。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

バーサーカーの怒号と共に《ガトリング砲》は、灼熱の絶叫を放ちながらマズルフラッシュし、セイバーに向かって超音速の弾丸を発射したのだった。

第九話　強襲（後書き）

今回使用宝具

名称：《魔導輪》
分類：対人宝具
ランク：C
詳細：《黒炎騎士の鎧》の担い手になった証として現れる狼を模したような指輪。
所有者の五感を強化し、サーヴァントの戦いも見えるようになる。
また、魔力を感知する機能も備わり、キバの意思が宿っている。

名称：《改造（レヴァンテイン）されし烈火の剣》
分類：対人宝具
ランク：C
詳細：生前に於いてフリートが改造したとある騎士の剣。
片刃の長剣、蛇腹剣、弓の三形態に変形し、また、魔力を貯蔵出来る薬莢が内部に存在している。本来ならば炎を発生させられるのだが、それは本来の担い手でなければ不可能。

名称：《一蒼き狼の武装を模す銃器（メタルストーム）》
分類：対軍宝具
ランク：B
詳細：生前に居た機械の狼が使用していたガトリング砲を模して作れた対軍宝具。
凄まじい火力を誇り、使用者の魔力で銃弾を精製。また、此方にも内部に魔力を貯蔵出来る薬莢が大量に内部に備わっている。外部から薬莢を連結することも可能。

第十話　鮮血（前書き）

大変遅れて申し訳ありません。

仕事が忙しくて書けませんでした。

後作中で唯一文字がない《アロンダイト》は、パソコンが使用出来るようになり次第に修正します。

第十話　鮮血

冬木市市外に存在する《アインツベルンの森》は、文字通り戦場に変わり果てていた。

夜の静寂に包まれていた筈の広大な森の一角で、凄まじい銃器を乱射する音が鳴り響き続けているのだ。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッ！！」

ーーーガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

「クッ！」

バーサーカーの怒号に負けないほどのガトリング砲ー《メタルストーム》ーの乱射にセイバーは防戦一方に追い込まれていた。

いや、防戦一方どころか、セイバーは自身の持つ《魔力放出》のスキルを常に発動させ、バーサーカーの凶悪としか言えない銃撃を避けることしか出来なかった。

しかし、それでもなおセイバーの白銀の鎧には銃弾による傷が幾重にも存在し、蒼いドレスはボロボロに変わり果てている。

今、セイバーが致命傷を負っていないのは、セイバークラスの影響で強化された未来予知に近い《直感》のおかげでしかない。もしも《直感》と《魔力放出》のスキルがセイバーになかったら、とうの昔にセイバーは蜂の巣になって消滅していただろう。

それほどまでにバーサーカーが扱っている《メタルストーム》は凶悪だった。

聖杯から与えられた知識でバーサーカーが扱っている武器が、現代の武装だということをセイバーは理解している。

しかし、その殺傷だけに特化した現代の武装が自身に向けられる

とは夢にも思ってなかった。
現代の武装は強力な殺傷のみを追求した兵器。
だが、サーヴァントのような神秘の結晶を傷つけるには、神秘が宿った武器でなければならない。しかもかなりの強力な神秘が。
故に神秘が全く宿っていない現代の武装は、どれだけ威力があっても神秘が宿っていなければサーヴァントには通じない。
しかし、今回の聖杯戦争にはサーヴァントの絶対不変の真理を平然と崩壊させる力を持ったサーヴァントが二体召喚されていた。
一人は言うまでもなくフリート。彼女はこの世界の英霊ではなく、別世界で魔法の領域に科学でたどり着いた英霊。
更には生前に平行世界で暴れまわったので、本来ならば知名度が全く無い異世界でも弱体化は僅かで収まっている。
神秘の結晶である英霊となった影響で彼女の持っている宝具には全て神秘が宿っている。
そしてもう一人はバーサーカー。
握る、正確に言えば掴んだ物、全てに宝具の付加するバーサーカーの宝具《騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せず》。
相手の宝具の支配権を奪うだけではなく、ただの鉄屑でさえもセイバーの宝剣と互角に打ち合えるほどに強化する恐るべき宝具。
港場でフリートはバーサーカーの宝具を目撃した時に、バーサーカーの真の脅威をあの場にいた誰よりも理解していた。だからこそ、バーサーカーを奪う為に動いたのだ。
そして今そのバーサーカーの宝具の真の脅威をセイバーと城に居るアイリスフィール達も味わっていた。
本来ならばサーヴァントに通じないはずの武装を自在に操ってセイバーを追い込むバーサーカー。
しかも左手が使用出来ない状態のせいで、セイバーは最大にして最高の威力を誇る真名解放という遠距離攻撃が使用出来ない。
もう一つだけセイバーには遠距離攻撃から行える攻撃が確かにあるのだが、宝具化している銃弾に、しかも数百発の銃弾に効果が在

るとは考えられない。
“剣”と“銃”という武装の落差は、確実にセイバーを不利に追い込んでいた。
背後の森に身を隠そうにも、既にセイバーの背後にあった森の木々は流れ弾によって粉砕されている。
しかも逃げれば再び矢を放つと言うように、バーサーカーは右手に握っている黒い弓をセイバーに見えるようにしている。
狂った狂戦士とは思えないバーサーカーの動きに、セイバーは追い込まれていく。
《魔力放出》は短期決戦のスキル。爆発的に力を上げると言えば聞こえはいいが、今の局面ではかなり不味い。いずれは魔力は尽きる。
切嗣からの供給が追いつかなくなれば、その瞬間にセイバーは蜂の巣に変わり果てる。
しかし、一つだけセイバーには光明が見えていた。

（コレだけ乱射を続ければ、いずれは弾が尽きる筈。その瞬間を見逃さずにバーサーカーを切り裂く！）

聖杯からの知識で現代の銃撃は弾が無くなれば、ただ重いだけの鈍器になり果てることをセイバーは知っている。
幾らバーサーカーの力で近代兵器が凶悪無比な魔術兵装と化しているとは言え、銃弾が無限に在る訳ではない。
弾が尽きた瞬間を狙ってセイバーはバーサーカーに攻撃するつまりだった。故にセイバーは、好機が巡って来るのを超音速の弾丸の雨をかいくぐりながら待ち続ける。
そんな好機が存在していないとも知らずに。

（フフフ、作戦通りですね。聖杯からの知識がセイバーの動きを縛ってくれていますよ）

雁夜と同じように気配を遮断するフードを被りながら、バーサーカーとセイバーが戦っている東側とは逆の西側からアインツベルン城に向かっていたフリートは、サーチャーから送られて来るバーサーカーとセイバーの戦闘の様子に微笑んでいた。

聖杯から送られる現代に関する知識の中に銃器に関する情報が在ることは、同じ聖杯によって召喚されたフリートも知っている。

その知識のせいでセイバーはバーサーカーが使用している《メタルストーム》に弾切れが在ると思い込んでいる。

しかし、《メタルストーム》には銃器類の弱点で在る弾切れは無い。フリートが魔力によって実弾を精製する機能を《メタルストーム》に組み込んだからだ。

魔力が在る限り《メタルストーム》は事実上無限に弾丸を内部で精製し続ける。

持久戦を用いたセイバーの戦術は完全に間違っていた。更にセイバーの《魔力放出》のスキルによって雁夜とバーサーカーが居る地点には、かなりの魔力が漂っている。

その状況で《黒炎騎士の鎧》が召喚されれば、即座に空気中に漂っている魔力は《黒炎騎士の鎧》に吸収される。

（フフフ、精々必死に魔力を放出して避けて下さいね、アーサー王さん。キバの早急な成長に、貴女の魔力は最良ですからね）

アーサー王で在るセイバーには、その身に竜の因子を宿している。

そして《黒炎騎士の鎧》に宿る因子も、元は竜人の因子。何も宝具が使用出来ない理由だけでフリート達はセイバーを狙った訳ではない。

現在存在しているサーヴァントの中で、セイバーの魔力が最も《

黒炎騎士の鎧》を急激に成長させるのに適していたからだ。

（竜の因子同士が共鳴するのは間違いないでしょうけど・・・・ブラックとあのセイバーの相性は最悪でしょうね。確実にブラックならあのセイバーをボコボコにして、その上で絶望させるような予感がしますね。まぁ、もうサーヴァントの座は全て埋まっていますから、ブラックは現れないでしょうし、関係ない話でしょうけどね）

フリートは知らない。現在居る世界の平行世界の一つにブラックが現れ、予感が的中していること。

（さて、セイバーのマスターが港場で銃器類を持っていたことから考えて、間違いなく城に留まるのは危険と判断する筈。そして退避するとしたら、西側の此方からに間違いない。フフフ、必ず《聖杯の器》は手に入れますからね）

そうフリートは内心で呟きながら、深く生い茂る森の奥に在るアインツベルン城を目指して歩くのだった。

アインツベルン城内部で《遠見の水晶球》を使ってセイバーとバーサーカーの戦いを見ていたアイリスフィールは、一方的な戦いに息を呑んでいた。

バーサーカーの技量が高いことは港場での出来事でわかっていたが、それでも白兵戦、しかも距離が離れているとは言え、《アインツベルンの森》の中でこうも一方的な展開が繰り広げられるとは、アイリスフィールは夢にも思ってなかった。

アイリスフィールは知らないことだか、《ガトリング砲》と呼ばれている銃器は殺傷能力が優れているだけではなく、制圧に優れて

いる。《ガトリング砲》が使用されるだけで、戦況が一変した時代も在るほど。
そのとてつもない兵器に神秘が宿れば、流石の白兵戦最強のセイバーでも追い込まれるのは必然だった。

（まさか、僕以外にも近代兵器を使用するマスターが居るとは思ってなかった）

魔術師は総じて科学技術を軽視している。
切嗣は例外として近代兵器を使用するが、大抵の魔術師は自身の魔術の技量を疑わず、科学技術を馬鹿にしている者までいる。
それ故に切嗣も自身以外には科学技術を使用した戦術を行って来る者はいないと考えていたが、今はその判断をした自身を呪いたくなった。

（クッ！港場でバーサーカーの宝具を見た時に気づくべきだった！バーサーカーが近代兵器と言う武装を手に入れた時の脅威を！）

ただの鉄屑でさえもセイバーの宝剣と互角に戦えるようにするバーサーカーの宝具。
もしもその力が近代兵器に宿れば、その脅威は計り知れない。

（此処に留まるのは不味い。《ガトリング砲》を日本に持ち込んだ相手だ。短距離の小型ミサイルまであったら、この城は一瞬で終わりだ）

近代兵器の中には簡単にアインツベルン城を崩壊させる兵器も在る。
その兵器がバーサーカー側に在るかは分からないが、最悪の事態を免れる為には、城から退避するしかないと切嗣は即座に判断した。

「舞弥、先にアイリを連れて城から逃げてくれ。セイバー達とは逆方向に」

「此処に居ては、駄目なの？」

切嗣の指示に舞弥は躊躇なく頷いたが、アイリスフィールは動揺を隠せずに質問した。

「バーサーカーが遠距離の兵器を使用して来たら、この城は一瞬で瓦礫の山だ。内部に留まるのは危険過ぎる。それとセイバーとバーサーカーが戦っている場所全体を見回せるように、《遠見の水晶球》を操作してくれ」

「どういうこと？」

「バーサーカーの動きが理性的過ぎる。近くにバーサーカーのマスターが潜んでいる可能性が高い。だとすれば、バーサーカーはその場所の近くには銃撃はしないはずだ」

「・・・・・・わかったわ」

苦手意識がある舞弥と行動するのには不安が在るが、私情で切嗣の方針に異を唱える気はアイリスフィールには無い。

悄然と頷きながらアイリスフィールは、《遠見の水晶球》を切嗣の指示通りに操作して舞弥と共に部屋を出て行く。

切嗣はそれを確認すると、右手の甲に描かれている令呪に一瞬だけ目を向け、すぐさま《遠見の水晶球》が映し出す戦場を注意深く見つめるのだった。

「■■■■■■■■■■ッ！！！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガガッ！！！！

「クゥ！！一体どれだけの弾丸が入っているのだ！？」

鳴り止むことのない銃声と放たれ続ける超音速の弾丸に、セイバーは悪態を吐いた。

既に数えるのも馬鹿らしいほどの弾丸を放っているのにも関わらず、一向に《メタルストーム》から放たれる弾丸が止まる様子が無い。

このままでは切嗣から供給される魔力が追いつかなくなる。

そうなればバーサーカーが操る《メタルストーム》によって、自身は敗北してしまうとセイバーは直感していた。

しかし、状況を好転させる術がない。更に言えば、バーサーカーの銃撃はセイバーの動きに対して的確に対応している。まるで次にセイバーがどう動くのか熟知しているかのように、バーサーカーの動きはセイバーに対して完璧に対応している。

そのことをセイバーは疑問に思いながら迫る銃撃を回避していると、レイラインを通して切嗣から連絡が届く。

（セイバー。バーサーカーが居る地点から、右斜めの位置に移動して、遠距離から攻撃を放って）

（？・・・・・どういうことですか？）

（その位置にバーサーカーは銃撃を放ってない。バーサーカーのマ

スターが、その位置に倒れている巨木の下に隠れている）

「ッ！？」

切嗣の報告にセイバーは慌てて横目で切嗣が告げた地点を見た。
確かにその位置だけ、他の場所の木々よりも《メタルストーム》による破壊の痕跡が少ない。加えて言えば、人が隠れていられる木々が残っている。
マスターが居ないと思わせ、その実は近くに潜んでバーサーカーに指示を出していたのだとセイバーも切嗣の報告から悟る。

（攻撃を放ったら即座に離脱だ。既にアイリ達は城から退避している）

（・・・・・・分かりました）

このままこの場でバーサーカーと戦い続けても、自身が勝てる可能性は低いとセイバーも悟り、切嗣の指示通りに動く為に右手に握っている不可視の剣を構え直す。
同時にバーサーカーはそろそろ勝負をつけると言うように右手に握っていた弓形態の《レヴァンティン》を投げ捨て、両手で《メタルストーム》を持ち直し、銃撃を再開する。

「■■■■■■■■■ッ！！！！！」

ーーーズガガガガガガガッ！！！！

「（今だ！）ハアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

ーーードォン！！

バーサーカーが銃撃を再開すると同時に、セイバーは足の裏から魔力を放出させ、バーサーカーの右斜めの方向に飛び出した。
即座にバーサーカーは《メタルストーム》の砲身をセイバーに向けようとするが、自身とセイバーの間に倒れている巨木が視界に入ると、銃撃を中断した。
それを確認したセイバーは切嗣の読み通りだと悟り、剣を振り上げて自身の宝剣を覆っている宝具《風王結界（インヴィジブル・エア）》を解放する。

「《風王鉄槌（ストライク・エア）》ッ！」

ーーードグオオオオオオンッ！！！！

セイバーが剣を振り下ろすと同時に、聖なる剣を守っていた超高気圧の束が解放され、さながら猛る龍神の怒号の如く、轟然とバーサーカーとその間に在る巨木に向かって迸る。
《風王鉄槌（ストライク・エア）》の破壊力は凄まじく、巨木に向かうまでの間に在る木々の瓦礫は粉砕し、さながら見えざる巨人の手で薙ぎ払われているかのように一直線に道が生まれて行く。
これだけの一撃ならば、如何なる魔術防御でも防ぎ切れない。
防ぐ為にはバーサーカーを動かすしかない。バーサーカーが主を守りに動いた隙に退却する。
それがセイバーと切嗣の思惑だった。だか、その思惑は突如として巨木の下から出て来た剣ー《異界剣》ーが空中に円を描くと同時に崩れさる。

ーーーブン！

ーーードクン！

「なっ！？」

目の前に広がった光景にセイバーは驚愕を隠せず、狼狽しながら《風王鉄槌（ストライク・エア）》が作り上げた道の先を見つめた。

《風王鉄槌（ストライク・エア）》はバーサーカーの居る場所まで届いていなかった。

それどころか《風王鉄槌（ストライク・エア）》の影響は、巨木が在った地点から先に進んでいなかった。

その理由は巨木の下から現れた者が原因だった。

禍々しい邪気を全身から放ち、まるで闇が具現化したような漆黒の全身甲冑（フルプレート）。頭部は狼を模したフルフェイスの兜で覆い隠され、その正体を知ることは出来ない。

しかし、セイバーは《直感》で悟った。アレは自身の天敵。絶対の捕食者なのだと。

その《直感》が正しいと言うように、セイバーが放った《風王鉄槌（ストライク・エア）》は目の前に立つ漆黒の騎士に触れると同時に魔力に分解され、更に漆黒の騎士に吸収されていく。

「ば、馬鹿な・・・・・アレは《宝具》」

セイバーは自身の放った《風王鉄槌（ストライク・エア）》が吸収されていく様子に、漆黒の騎士の鎧の正体を悟り、呆然とした声で呟いた。

だが、余りの禍々しい邪気にセイバーは漆黒の騎士の鎧を宝具だと認めたくなかった。

魔剣、魔槍、魔斧。邪悪な魔力を放つ宝具は数多く在れど、目の前の漆黒の騎士が放つ禍々しい魔力はレベルが明らかに違う。

まるで闇そのものが具現化したような邪悪さに満ちた魔力。英霊でさえも、その魔力には本能から恐怖を感じる。

更にセイバーは気がつく。バーサーカーと戦っている時に放出していた自身の魔力が唸りを上げながら漆黒の騎士を中心に集まり、その身に吸収されて行くことに。

ーーーゴオオオオォッ！！！

「ォォォォ・・・・・・」

ーーーガシャ！

「クゥ！」

低い声を出すと共に前に足を踏み出した漆黒の騎士の姿に、セイバーは後方に飛び退いてこの場から離脱しようとする。

宝具化した近代兵器を持ったバーサーカーだけではなく、魔力を吸収する宝具の鎧を纏った漆黒の騎士まで現れた。

もはやこの場では自身に勝ち目など無いと悟り、セイバーは全力でこの場から逃げようとする。

しかし、その逃走は右手を構える漆黒の騎士の言葉によって潰されてしまう。

「令呪に於いて命じる。セイバーの逃走を真の宝具を用いて止めよ、ランスロット」

「・・・・・・・・・・・・えっ？」

聞こえて来た誰かの真名にセイバーの足は止まり、セイバーの動きは完全に停止する。

ランスロットと言う名を彼女が聞き間違える筈がない。だが、その名が何故この場で呼ばれるのか理解出来なかった。いや、理解したくなかった。

これから広がる現実を見たくないと言うように、セイバーは前を向き、纏っていた黒い霧が晴れたバーサーカーの真の姿を目にする。

華美に走らず、武骨に堕ちず、機能美と豪奢さを紙一重のバランスで両立させた完璧な鎧。その鎧を纏っていた騎士をセイバーは知っている。

かつてキャメロットの円卓で誰よりも眩く輝いた無双の騎士。誰よりも完成された騎士だった忠勇の武人。

見間違えるはずなど無いのに、セイバーはバーサーカーの真の姿を見間違いだと思いたかった。だが、既に漆黒の騎士がバーサーカーの真名を告げ、セイバーの希望を裏切る命令を令呪を使ってバーサーカーに命じてしまっている。

令呪の力でバーサーカーはセイバーの前に回り込み、持っていた《メタルストーム》を地面に投げ捨て、自由になった右手でバーサーカーは腰に携えていた鞘から秘していた自身の真の宝具を抜き去る。

セイバーが握る黄金の宝剣に相通ずる意匠。人ならざる者によって鍛えられた精霊文字の刻印。怜悧なる刃の照り返しは月下に輝く湖水の如し。いかなる打撃に晒されようと決して毀れることのない無窮の剣。

星が鍛えた神造武装の一振りである《無毀なる湖光(アロンダイト)》をバーサーカー、いやランスロットは鞘から抜き出し、セイバーに向かって振り抜く。

その斬撃にセイバーの身体は危機感から勝手に動き、ランスロットの斬撃を自身の剣で防ぐ。

ーーーガキィィィィィン!!

ーーーバシッ!

「・・・・・・アッ」

呆然自失の状態で、更に右手だけしか使えないセイバーが真の宝

具を発動させて、ステータスが1ランク上がったランスロットの渾身の一撃を防げたのは奇跡だった。
しかし、その代償にセイバーの右手から《無毀なる湖光（アロンダイト）》の姉妹剣である《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》が弾き飛ばされた。
だが、セイバーは自身の愛剣が弾き飛ばされても呆然と目の前に立つランスロットを見つめ続け、背後から迫って来る漆黒の騎士ー《黒炎騎士キバ》ーに気がつかない。
同時にランスロットは右足を振り抜き、セイバーの身体を蹴りつけてセイバーの身体の正面をキバの方に向かせる。
それは狂化していても僅かに残るランスロットの理性が、セイバーを背後から切り裂かれたくないと判断した行為だった。
そして背後に無理やり振り向かされたセイバーは目撃する。
何時の間にか自身の目の前に迫り、右手に《黒炎剣》を握っているキバの姿を。
そしてキバは躊躇うことなく、セイバーに向かって《黒炎剣》を振り抜き、

ーーープシャァァァァァァァァーーー！！！！！

夜のアインツベルンの森の奥で、鮮血の花が舞い散った。

第十一話　絶望

《アインツベルンの森》には再び静けさが戻っていた。
しかし、二体のサーヴァントが戦っていた場所は深い森だったとは思えないほど破壊し尽くされ、木々の残骸だけしかない荒れ地と化していた。
そしてその場所で漆黒の主従ーバーサーカーと黒炎騎士キバーが、紅い血の花が広がる地面に倒れ伏しているセイバーを見下ろしていた。
左肩から右腰に深い裂傷が刻まれ、無残に切り裂かれたドレスに隠されていた美しい素肌は、傷口から流れる紅い血に染まり、身体の正面は殆ど血で覆い尽くされていた。
どう見ても重傷としか言えない負傷を負ったセイバー。
しかし、ギリギリのところで致命傷だけは免れていた。
キバがセイバーに向かって《黒炎剣》を振り抜くのを目にした瞬間、呆然自失しながらもセイバーは致命傷だけは避けようと身体を僅かに動かし、致命傷だけは何とか免れた。
だが、《黒炎剣》で切り裂かれた時点でセイバーの敗北は決定していた。
《黒炎剣》がサーヴァントなどの魔力で形作られた存在に対して絶大な威力を宿しているのは、その身に宿す魔力の吸収能力。
致命傷に近ければ近いほどに吸収される魔力は大きく。致命傷に限りなく近い負傷を《黒炎剣》で負わされたセイバーは、その身に宿していた魔力の大部分をキバに吸収されてしまった。
そのせいでセイバーは保有していた大部分の魔力を失い。現界して居られるのが精一杯の状態にまで追い込まれ、自己再生能力に回せる魔力もセイバーの身にはもはや無かった。
キバは血を大量に地面に流し続けて居るセイバーが完全に意識を失っているのを確認し、《黒炎騎士の鎧》を送還する。

ーーーブン！

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・やったぞ。セイバーの魔力を吸収出来た」

《うむ・・・・バーサーカーの協力と母の策が在ったからこその成果だが、我らの初戦は勝利だ・・・・・だが、本命は次だ》

「わかっている、キバ」

ーーーギュウ！

右手に填めている《魔導輪》から告げられたキバの言葉に、雁夜は右手に握っている《異界剣》に力を込める。

雁夜達からすれば、セイバーとの戦いは本命の前の前哨戦。これから向かう場所こそが雁夜の本命。

今はまだ初めて人を斬った感触に震える訳にはいかない。

セイバーを斬った感触はひとまず思考から外し、バーサーカーの方に雁夜は目を向ける。

バーサーカーは真の宝具で在る《無毀なる湖光（アロンダイト）》を鞘に納め、再び自身の姿を覆い隠すように黒い霧を発生させ、迷うことなくセイバーの手から離れて少し離れた場所の地面に突き刺さっていた《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》の下に歩いていた。

そしてバーサーカーは主の手から離れても輝き続ける《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》を狂戦士とは思えないほどに静かに眺めると、迷わずに地面から《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》を引き抜いく。

ーーートス！

バーサーカーが《約束された勝利の剣(エクスカリバー)》を握ると同時に、《約束された勝利の剣(エクスカリバー)》をバーサーカーの漆黒の魔力が覆い、黄金に輝いていた刀身を漆黒で塗り潰す。

その後バーサーカーは右手に支配権を奪った《約束された勝利の剣(エクスカリバー)》を持ちながら、気絶しているセイバーに紅き双眸を向ける。

今この場で怨敵で在るセイバーを更にバーサーは打ちのめしたい。だが、港場の時のバーサーカーならばともかく、今のバーサーカーには出来なかった。

僅かに取り戻した理性がバーサーカーの暴走を封じていた。

このままセイバーを打ちのめしても自身の無念は晴れない。バーサーカーはそれを理解し、この場ではセイバーの愛剣を奪うだけで止めた。

愛剣を奪われたセイバーは、聖杯戦争を続ける気ならば愛剣を取り戻す為に自身の下に必ず現れる。

その時こそが積年の想いを全てセイバーに叩きつける時。今は今生の主で在る雁夜の為に力を振るう。

バーサーカーはそう僅かに残る理性で判断しながらセイバーを見つめていると、セイバーが突然に雁夜達の視界から消え去る。

ーーーシュウン!

「・・・・セイバーのマスターは生きているようだな」

《そのようだ。最も魔力が枯渇寸前のセイバーに魔力を供給して、自身も不味い状態だろうがな》

雁夜とキバは目の前からセイバーが消失した現象の正体を悟っていた。

先ほど雁夜が令呪を使用してバーサーカーに真の宝具を使用しセイバーの退路を断ってと命じたように、セイバーのマスターで在る

切嗣も令呪を使用してセイバーを自身の下に空間転移で帰還させたのだ。
令呪は使い方次第で不可能さえも可能にする魔力の結晶。
それを用いて切嗣はセイバーを自身の下に帰還させたのだが、雁夜とキバは既に切嗣も戦闘不能に近い状態に陥っているとわかっていた。
セイバーは既に現界を維持しているのが精一杯。それを支えるのはマスターで在る切嗣の魔力。今頃はセイバーへの魔力の供給量が追いつかなくなり苦しんでいるだろう。
最も切嗣は運が良かった。《黒炎剣》の影響が切嗣にまで及んでいたら、切嗣は魔力が枯渇して死んでいたのだから。
改めて自身が得た力が魔導に関わる全ての脅威となると知らしめられた雁夜は、僅かに恐怖心を抱く。
これから自身はキバの力と共に生きていかなければならない。逃げることは不可能。魔力を供給すれば力を増していくキバの力に呑み込まれてしまうかも知れない。
その果ての一つの結末を思いだして雁夜は知らず知らずの内に身体が震えていると、キバが声を掛けて来る。

《その恐怖心を忘れるな。汝が得た信念の片鱗。それが芯なる信念へと変ずれば、汝は力に呑み込まれることはない》

「・・・・・そうか」

《・・・・・・・ムッ！》

「どうした！？」

突然に警戒するような声を上げたキバの様子に慌てて雁夜は質問した。

しかし、キバが雁夜の質問に答える前に瞬時にバーサーカーが雁夜を護るように雁夜の前に立ち、空を切り裂くように閃いた紅と黄の稲妻を右手に握った《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》と、左手に握った《メタルストーム》でそれぞれ迎撃する。

「■■■■■■■■■■ッ！！」

ーーーガァン！ガァン！

紅の稲妻を《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》で、黄の稲妻を《メタルストーム》でそれぞれバーサーカーは弾き、二つの弾かれた稲妻を空中で掴み取り地面に着地した若草色の戦支度に身を固めた長身の男性を睨む。

バーサーカーに護られた雁夜は、バーサーカーの背後から自分達を攻撃して来た相手に僅かに眉を顰める。

「ランサーか！？」

「貴様等・・・・・左手が使えんセイバーを」

現れたランサーは、地面を紅く染めている大量に血液を横目で睨みながら雁夜とバーサーカーに向かって彼独特の双槍を構える。

その動きにバーサーカーも両手に持つ武器をそれぞれランサーに向かって構え、ランサーはバーサーカーが右手に握る剣に険しい視線を向ける。

バーサーカーの魔力に覆われて漆黒に染まっているが、港場で輝く宝剣を目撃しているランサーがバーサーカーの持つ宝剣を見間違える筈がなかった。

「狂犬・・・・貴様。その宝剣は騎士王で在るセイバーこそに相応

しい剣ッ！断じて貴様のような禍々しき狂戦士が握っていい剣ではないッ！！」

今回の聖杯戦争ではランサーのサーヴァントとして現界したディルムッド・オディナだが、彼もまた剣を扱う剣士。

更に彼はセイバーとは尋常に雌雄を決したいと言う想いも持っていた。故に自身を差し置いて左手しか使えないセイバーを襲い。多くの騎士達の理想（ユメ）の具現化だった至高の宝剣を漆黒に染め上げたバーサーカーの行為は許し難い所行。

「貴様らはこの場で俺が討ち取ってくれるッ！！」

「■■■■■■■■■■ッ！！！！！」

ーーーズガガガガガガガガガガガガッ！！！！

「なっ！？」

ランサーの宣告に対してバーサーカーが返したのは、セイバーを追いつめた《メタルストーム》による銃撃だった。

自身に迫る無数の超音速の弾丸にランサーは思わず声を上げた。バーサーカーが使用する武装が現代の銃器であり、本来ならばランサーに対して脅威にならない筈の武装。

しかし、バーサーカーの魔力に染め上げられ、凶悪無比にまで威力が上がった弾丸は脅威だとランサーは即座に判断し、その場から飛び退いて弾丸を回避する。

そのバーサーカーが作ってくれた隙を逃さずに、雁夜は右手に握っていた《異界剣》を自身の頭上で円を描くように振るい、転送用の陣を発生させる。

「フッ！」

ーーーブオン！

「ッ！？アレは！？」

突然に雁夜の頭上に出現した陣を目にしたランサーは驚愕し、雁夜とその頭上で輝く陣を見つめる。

そして一際陣が強く光り輝いた瞬間、雁夜の姿が僅かにブレて《黒炎騎士の鎧》が装着され、雁夜は黒炎騎士キバへと変わる。

ーーーシュウン！！！

「ば、馬鹿な！？宝具だと！？」

雁夜が黒炎騎士キバへと変身した瞬間を目にしたランサーは、雁夜が纏う鎧の正体を悟り驚愕した。

禍々しき魔力を発する漆黒の鎧。それは紛れもなくランサーが持つ双槍と同種の宝具。しかし、その発せられる禍々しき魔力はどういう出自なのか。まるで闇が具現化したような鎧。

そしてそれを操るのは英霊ではなく人間。

その事実にランサーが動揺している隙に、キバは右手に自身の専用の剣で在る《黒炎剣》を出現させ、左手の籠手に《黒炎剣》を滑らせ《黒炎剣》に黒き炎を発生させる。

ーーーボォッ！！

「フッ！」

黒炎を発生させると共にキバはランサーに向かって黒炎を纏った

《黒炎剣》をクロス字にするように振るい、空中に黒炎で出来たクロスを作り上げた。
そしてキバは左手を素早く黒い炎が作り上げるクロスの中心に当て、ランサーに向かって放つ。

「黒炎障壁ッ！！」

ーーードオン！！！

「クッ！！」

超音速で迫る《黒炎障壁》にランサーは、右手に握る《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》を構える。
回避すればその隙を狙い、バーサーカーが《メタルストーム》を乱射して来る。ならば、迫って来る《黒炎障壁》を自身の《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》で霧散させ、その先に居るキバを討つ。
そうランサーは考え、迫って来る《黒炎障壁》に《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》を突き出そうとするが、《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）》が《黒炎障壁》に届く距離に到達した瞬間、二つの黒い炎の刃はまるで意志を持っているかのように別れ、空高く舞い上がる。

ーーードオン！！！

「こ、これはッ！？」

舞い上がった二つの黒い炎の刃は丁度ランサーとキバ、バーサーカーを分断するように地面に直撃し、広範囲に広がる黒い炎の壁を作り上げた。
最初から逃げる隙を作り上げるつもりだったのかとランサーはキバの目的を悟るが、目の前に広がる《黒炎障壁》を《破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）

》で打ち消す訳には行かなかった。
目の前の黒い炎の壁を打ち消せば、自身の位置を教えることになる。そうなれば、次の瞬間にバーサーカーが持つ《メタルストーム》の銃弾の洗礼の受けることになる。
戦場で鍛え上げられた《心眼》がそう告げ、ランサーは目の前の炎を壁を悔しげに睨むしかなかった。
そして案の定黒い炎の壁が消えた後には、キバとバーサーカーの姿は何処にもなかった。
既にキバ達が《アインツベルンの森》で行う目的は全て終わっている。ランサーの魔力も吸収すれば《黒炎騎士の鎧》は更に強化されるが、この場でこれ以上欲張っても仕方がない。故にキバ達はランサーの前から逃げ去った。
ランサーはその事実に苛立ちを募らせるが、近くに居る筈の自身の主からこれ以上離れる訳には行かない。
相手側には宝具を所持するマスターだけではなく、セイバーの剣を手に入れ、近代兵器を宝具として扱ってバーサーカーまで居る。
深追いは自身の敗北を招くと理解し、ランサーはこの場に背を向けて主の下に急ぐ。
後に残されたのは、現代の紛争を思わせるほどに破壊し尽くされた跡地だけだった。

時は少し戻り、アインツベルン城に切嗣だけを残して退避していた舞弥とアイリスフィールは結界の森の中を黙々と歩いていた。
二人の間には会話はない。愛人と正妻と言う立場なのだから当然だが、今は共に聖杯戦争を勝ち抜く為の仲間。
少しでも会話をしようとアイリスフィールは考えているだが、心の中にある不安のせいで躊躇ってしまう。
俯いて深い溜め息を吐くことしか、アイリスフィールが出来ない

でいると、ふいに脳裏に警報が閃く。

「ッ！！！！」

「どうかしましたか、マダム？」

「・・・・・新手の侵入者よ。ちょうど私達が進む先にいる。このままだと鉢合わせするわ」

「それでは迂回しましょう。ここから北側に回り込めば安全です」

「・・・・・・・・・・やって来るのは、言峰綺礼よ」

「ッ！？」

アイリスフィールが知らせた侵入者の正体に、舞弥は初めて感情を露わにした。

その様子にアイリスフィールは僅かに驚くが、心の何処で納得していた。

言峰綺礼。今回の聖杯戦争で切嗣が最も警戒し、危険と評した人物。

そして言峰綺礼は切嗣を狙っている。目的は一つしか考えられない。

しかし、アイリスフィールは不安を感じると共に久宇舞弥の内面を悟った。

「舞弥さん、貴女が切嗣から受けた命令は、私の安全を確保することよね？」

「はい。でも・・・・・・」

「あの男だけは絶対に切嗣の所へ行かせるわけにはいかない、と思うわけ？」

「マダム、貴女は・・・・・」

「偶然ね。全くもって同意見なのよ。私も」

底意地悪く微笑みながら、アイリスフィールは舞弥の意見に同感だった。

言峰綺礼。おそらくは切嗣にとって最悪の脅威になるであろう男。

舞弥とアイリスフィールはそのことを“女の直感”で悟っていた。

「綺礼はここで、私達二人で食い止める。良いわね？舞弥さん」

「・・・・申し訳ありません。が、お覚悟をお願いします」

「良いわよ。私の心配をしなくても良い。あなたはあなたの務めを果たして。切嗣からの命令ではなく、あなた自身が必要と思っていることを」

「はい」

アイリスフィールの言葉に舞弥は頷き、二人は並んで自分達の大切な相手の最大の脅威を倒すために歩き出す。

そして二人は歩きながら策を決めると現れるであろう敵を木々の影に隠れながら待ち構える。

数分後。僧服を来た長身の男性が木々の間から現れる。その相手を舞弥が見間違える筈がない。

ビルの時に自身を襲い、切嗣の所在を尋ねた男。言峰綺礼が辺りを警戒しながら歩いてきた。
舞弥は自身が居ることを気づかれないようにする為に息を殺し、持っていた短機関銃をフルオート射撃で放つ。

ーーーガガガガガガガガガガガッ！！！！

「フッ！」

舞弥が放った射撃を身を屈めることで綺礼は避け、二本の《黒鍵》を取り出し、殺気の感じられる方角に《黒鍵》を投げる。

ーーートスッ！トスッ！

「ムッ？」

返って来た刃が樹木に突き立つ硬い音に、僅かに綺礼は眉をしかめた。
その様子を見た舞弥は綺礼がアイリスフィールの幻惑術に捕らわれていることを確信した。
《アインツベルンの森》は敵を察知するだけではなく、様々な罠が仕込まれている。
残念ながらバーサーカーが居る地点では、察知までしか出来なかったが、深部にかなり近い地点に入り込んだ綺礼は惑わせる。
そして幾つもの気配に翻弄されている綺礼の背後に舞弥は忍び寄り、自身の殺気を封殺しながら綺礼の背に銃弾の雨を撃ち込む。

ーーーガガガガガガガガガガガッ！！！！

ーーードサッ！

銃弾の雨を背に受けた綺礼は悲鳴を上げることなく、仰向けに地面に倒れた。
狙い通りに脊髄を撃ち抜いて即死したのかと思いながら、舞弥は慎重に綺礼に歩み寄る。

《舞弥さん、駄目ッ！！》

ーーードスッ！！

「グゥッ！？」

アイリスフィールの警告の念話が届くと同時に、舞弥の右足のふくらはぎに深々と《黒鍵》が突き刺さった。
更に次の瞬間舞弥は目を見開く。自身を囲むように次々と辺りの木々に突き刺さっていた《黒鍵》が、まるで意志を宿しているかのように木々から離れ、舞弥の手足に深々と突き刺さる。

ーーードスッ！ドスッ！ドスッ！ドスッ！

「カァッ」

ーーードサッ

「ほう。それだけの重傷を負って悲鳴を上げないとは。中々に訓練されている。まぁ、それも此処で終わりだが」
そう綺礼は呟きながら、ゆっくりと四肢に《黒鍵》が深々と突き刺さっている舞弥に歩み寄る。
自身に止めを刺す気なのかと舞弥は思うが、綺礼の歩みは突如と

して止まり前を見つめる。
何故と思いながら舞弥も目を向けて見ると、アイリスフィールが木陰から飄然と姿を現して言峰綺礼と対峙していた。

「マダム！いけない！」

「・・・・・女よ。意外に思うかもしれんが、私はお前を倒す目的でここにいる訳ではない」

「解っていますとも。言峰綺礼。あなたの目的は知っている。だが叶わぬ相談です。あなたが衛宮切嗣にまでたどり着くことはない・・・・・私達が阻みます！」

「・・・・・・そうか。だが、相手は君一人だ」

ーーードスッ！

「グゥッ！」

「舞弥さん！？」

突然に聞こえて来た舞弥の呻きにアイリスフィールが目を向けて見ると、舞弥の腹部に深々と《黒鍵》が突き刺さっていた。
同時に舞弥の意識は遠退き、深い闇の中に沈んでいった。

「その刃には特殊な薬が塗り込まれている。例え薬物の耐性が在っても意識は戻らない。さて、これで私の相手は君一人となったが？」

「クッ！！」

綺礼の言葉にアイリスフィールは険しい声を上げた。
相手は全く自身に対して油断していない。アインツベルンの魔術がどのような特性なのかも理解しても、一切油断なく自身を倒しに来る。
正直勝算は全くない。だが、それでも目の前の相手を切嗣と会わせる訳には行かない。
アイリスフィールはそう思いながら、コートの袖に潜ませていた細く柔軟な針金の束を取り出す。
行かせる訳には行かない。自身の愛する夫。“生きる”という意味を教えてくれた彼の為に。

「Ｓｈａｐｅ　ｉｓｔ　ｌｅｂｅｎ（形骸よ、生命を宿せ）！」

アイリスフィールが二小節の詠唱で、魔術を一気に紡ぎ上げる。
変化は即座に起きた。銀の針金が輪を描き、複雑な輪郭を形成する。互いに絡まり、結束し、さながら編み細工のように複雑な立体物となって出現したのは、猛々しい翼と嘴、そして鋭利な鉤爪を持った巨大な鷹だった。

「Ｋｙｅｅｅｅｅ！！」

生命が無い筈の鷹が、アイリスフィールの手に乗りながら綺礼に向かって金属が刃を軋るかのような甲高い嘶きを上げた。
これこそがアイリスフィールの武器。本来ならば戦闘には向かないアインツベルンの魔術を応用して、即製のホムンクルスと言う武器を作り上げたのだ。

「行って！」

「Ｋｙｅｅｅｅｅ！！！」

アイリスフィールの指示に針金の鷹は嘶きを上げながら、弾丸もかくやという勢いの飛翔で綺礼に迫る。
しかし、綺礼は冷静に飛翔の勢いを読み取り、僅かに右横に身体を動かすことで鷹の鋭い嘴を避ける。
鷹は第一撃が空振りすると、即座に綺礼の頭上で旋転し、今度は両脚の鉤爪で掴み掛かる。
その動きに対して綺礼は力任せに裏拳を叩き込む。

ーーーグニャリ！

「ぬっ！？」

綺礼が裏拳を鷹に叩き込むと同時に鷹の身体がグニャリと不定形の針金に戻った。
同時に針金の一部が蔦のように綺礼の右拳に絡みつき、鷹から逃げられないようにする。
アイリスフィールは即座に鷹を操って、鋭い嘴を綺礼に突き刺そうとするが、その直前に綺礼の口から詰まらなそう声が響く。

「・・・・何だ。ただの針金遊びですか」

「えっ？」

ーーードゴオォン！！！

アイリスフィールが聞こえて来た声に疑問の声を出した瞬間、綺礼の腕の傍にいた鷹は一瞬にして消滅した。
自身の魔術が敗れたことにアイリスフィールは気がつかず、呆然と綺礼を見つめる。

先ほどの呟きは男性の声ではなく、女性の声。それが意味することが何なのかアイリスフィールが理解した瞬間、アイリスフィールの身体に光の輪が出現し、アイリスフィールを背後に在った樹木に拘束する。

ーーーガシィィィィィィン！！

「ッ！？こ、コレは！？」

「バインド。初級の術の一つで相手を拘束するモノですよ」

「・・・・・だ、誰なのアナタ？」

此処に至り、アイリスフィールは目の前にいる相手が自身と舞弥が切嗣の下に行かせないようにしていた言峰綺礼では無いと理解した。

その質問に目の前の人物は笑みを浮かべながら、右手首に嵌めていたリングを外し、光りと共に自身の真の姿を晒す。

ーーーシュウン！

「ッ！？キャ、キャスター！？」

「ピンポーン！大正解でーす！！貴女達が戦っていたのは、言峰綺礼ではなく、私、キャスターですよ！！」

明るく話し掛けてくるフリートに、アイリスフィールは呆然とする。

明らかに港場で会ったフリートと今のフリートは性格が違い過ぎる。アイリスフィールは知らないことだが、今のフリートが本来の

フリートだった。

「フフン！いや～やっぱりあの男に化けたのは正解でしたね。この結界が張られた森の中から探すのはちょっと面倒でしたから、其方から来て貰いました」

「・・・・・・何が目的なの？」

「《聖杯の器》。つまり、貴女の内臓全部ですよ」

「ッ！？」

アッサリと告げられたフリートの目的に、アイリスフィールは驚愕で言葉を失った。

自身の内に在る内臓が《聖杯の器》だと言う事実を知っているのは、今の所切嗣だけの筈。何故その事実を知っているのかと、アイリスフィールは狼狽しながらフリートを見つめるが、フリートは構わずにアイリスフィールに近づき、楽しげにアイリスフィールの腹を撫でる。

「クスクス。貴女が人工的の存在なのは気がついていました。そして集めた情報から、《聖杯の器》は貴女の背後に在る家系が作り上げることも。人工的な存在。そして城でセイバーの本当のマスターが言っていた、貴女を犠牲にすると言う言葉。ここまでの情報から導きだされる答えは一つだけですからね」

「・・・・・何であの場にいなかった貴女が、私と切嗣の会話を知っているの？」

「簡単ですよ。あのセイバーのマスターには私が放った監視が付い

ているんですよ。人なんて粉々にしてしまう爆弾を備えた監視がね」

「ッ！？」

告げられた事実にアイリスフィールは言葉を失った。

既に切嗣の命はフリートが握っている。フリートがその気になれば何時でも切嗣を殺せるのだ。最もフリートは今のところは切嗣を殺す気はない。ケイネスの工房を破壊する時に一般人を一人でも死なせていたら、即座に殺していたが、今の所は切嗣を殺すつもりはフリートには無かった。

しかし、そのことを知らないアイリスフィールはフリートが何時でも切嗣を殺せる事実に恐怖を感じていた。

監視の目など一切感じられなかった。サーヴァントで在るセイバーさえも気がつけない監視。嘘は有り得ない。

既にフリートはアイリスフィールと切嗣しか知らない会話を話し、更に切嗣が言峰綺礼を警戒していることまで知られている。

出なければ、言峰綺礼の前にアイリスフィールと舞弥が立ちはだかることまでフリートが解る筈がない。自分達の行動の全てはフリートの手の平の上だったのだと悟り、アイリスフィールは目の前に居るフリートに恐怖する。

「・・ぜ、全部貴女の策略・・・・バーサーカーも既に貴女の配下・・・・何者？・・・・貴女のような化け物を召喚したマスターは？」

「マスター？・・アァ。私を召喚した屑のことですか。いや～呼び出されて早々に子供を殺せとか言って来ましてね・・・・・地獄の苦痛を味あわせて、魔力炉にしてやりましたよ」

「ッ！？・・・・嘘。それじゃ、貴女にはマスターは・・・・」

「港場の私が言っていたでしょう？この身を屈伏させられるのは生前の者達だけですよ。さて、無駄話は終わりにしましょうか」

「クッ！！」

自身の顔に手を近づけて来るフリートに、アイリスフィールは気丈に睨みつける。

少しでも時間が稼げれば、撤退して来るセイバーがやって来る筈。或いはアイリスフィールと舞弥が見当たらないことに気がついた切嗣が来る可能性も在る。

しかし、アイリスフィールが考えた希望は既に存在していなかった。

「残念ですけど、セイバーは来ませんよ。もうバーサーカーとそのマスターに魔力を根こそぎ奪われて戦闘不能どころか、現界維持が精一杯。マスターの方は急激な魔力の供給に動くのも辛いでしょうね」

「そんな！？」

フリートが告げた事実にアイリスフィールは驚愕と困惑に満ちた叫びを上げた。

白兵戦最強のセイバーが倒されたばかりか、自身の大切な人物まで危機に瀕している。その事実にアイリスフィールは顔を青ざめさせるが、フリートは更に残酷な事実を笑みを浮かべながらアイリスフィールに告げる。

「もう一つ教えて上げますね。どうして貴女達が私を言峰綺礼だと完全に勘違いしていたのか。その理由は先ほど私が外したリングに在るんですよ。アレは誰かの身体の一部を取り込むことで、雰囲気

も気配も完全にその身体の一部の持ち主になりすませる道具」

「・・・・ま・・・・さ・・・・・か」

「偶然出会いましてね。とても貴女の旦那さんとの邂逅を望んでいたので、優しい私は気配を遮断する道具と貴女達の相手を引き受ける代わりに髪の毛を一本貰ったんですよ。”言峰綺礼さん”から」

アッサリと告げられた絶望の事実に、アイリスフィールはもはや顔色を土気色に変えてフリートを見つめた。

自身の胸に宿る気持ちをアイリスフィールは理解出来なかった。何もかもが解らなくなり、何も考えたくない状態。それを人は絶望と呼ぶ。

自身が今まで感じたことの無い感情にアイリスフィールが包まれていると、フリートはアイリスフィールの顔を掴む。

ーーーガシッ！

「お休みなさい。次に貴女が目覚める時は、全部忘れているでしょうね。自分が何者なのかも。そして愛する者のことも全て忘れて学んでくださいね」

ーーーバチッ！

（・・・・・・切・・・・・嗣・・・・・・イ・・・・リ・・・ヤ・・・・・ゴメン・・・ナサイ）

気絶する直前にアイリスフィールが抱いた想いは、自身の夫と娘への謝罪の念だった。

第十一話　絶望（後書き）

今回使用宝具及び技

名称：《変化の腕輪》
ランク：D
詳細：形状は腕輪に黒い宝玉がはまっている。そのままでも他者になりすませるが、黒い宝玉の部分に他者の身体の一部を入れれば雰囲気や気配までも偽装出来る。

名称：《黒鍵・偽》
ランク：－
詳細：フリートが映像で言峰綺礼が使用していた《黒鍵》を真似て作り上げた偽物。しかし、機能は本物の《黒鍵》に劣らないばかりか、思念制御で自在に操れる。

名称：《黒炎障壁》
詳細：黒炎騎士キバと成った雁夜が覚えた防御技の一つ。《黒炎剣》に《黒炎》を纏わせて自身の周りに《黒炎》で出来た壁を作り上げる。
作中では炎の刃を放ってから地面に当たって障壁を作り上げているが、《黒炎》を纏った《黒炎剣》を地面に突き刺すだけでも障壁は発生させられる。

第十二話　邂逅（前書き）

あけましておめでとうございます！！

本年も宜しくお願いします！！

ここで一つ質問なのですが、活動報告の規制が強まったことで、活動報告の作品を此方に移そうか悩んでいます。
アンチ要素が強すぎる作品なので、活動報告だけにしていたのですが・・・できればご意見をお願いします。

また、パソコンでの復帰に漕ぎ着けたので、他の特別編の作品の移転も開始します。

第十二話　邂逅

《アインツベルンの森》の外に在る国道線。
その場所の道路上でフリートは気絶させたアイリスフィールを背中に背負いながら、セイバーの相手をバーサーカーと共にしていた雁夜の帰還を待っていた。
そしてフリートが見つめる先の森の木々の間から黒いフードを被った雁夜が現れ、フリートは笑みを浮かべる。

「其方も大丈夫だったようですね」

「あぁ・・・・セイバーの魔力は吸収した。それとバーサーカーがセイバーの宝剣を支配して手に入れたぞ」

「おぉッ！伝説の騎士王の剣ッ！《約束(エクスカリバー)された勝利の剣》をッ！・・・・・・フフフ、これは嬉しい話ですね。まさか、《聖杯の器》だけではなく、至高の宝剣まで手に入るとは。研究しがいがありますッ！」

「・・・・・・それよりもその背負っている女が、本当に《聖杯の器》なのか？」

マッドな笑みを浮かべながら笑うフリートを見ないようにしながら、雁夜はフリートの背で眠っているアイリスフィールに目を向けた。
その質問にフリートは頷き、自身の背にアイリスフィールを横目で眺める。

「間違いありません。正確に言えば彼女の“中身”が《聖杯の器》。

彼女はそれを護る一種の防護装置ですね。私が居た場所でも人造の生命体は居ましたが、彼女はそのどれとも違う存在。《聖杯の器》摘出ついでに色々と調べませんとね」

「・・・・・・・殺すのか？」

フリートの言葉に僅かに雁夜は声を険しくして質問した。
アイリスフィールの身体から《聖杯の器》を摘出すると言うことは、アイリスフィールの死を意味する。その為に生み出された存在だと言うことは雁夜も理解しているが、何処か納得が行かなかった。
フリートはその雁夜の内心を察知し、安心させるようにアイリスフィールを背負い直す。

「殺しませんよ。余程の外道だったらともかく、どうやら彼女は世間とかも知らない子供に近い存在ですから。《聖杯の器》を摘出した後に治療。その後は記憶を封印して、少し世の中を歩いて貰いますよ」

「そうか・・・・・・・そう言えば、セイバー達はどうするんだ？ランサー達が現れたぞ？」

「あぁ、それも予定内ですよ。運が良ければ逃げられるでしょう。一応、セイバーのマスターにご執心な方が向かっていますからね・・・・・まぁ、此処でセイバーが脱落はバーサーカーが認められないでしょうから、《吸刃虫》を十匹ほど放って於いて下さい」

「《吸刃虫》を？・・・・・・・なるほど、確かに放って於いて損は無いか」

フリートの指示に雁夜は少し考えるような素振りをするが、すぐ

に納得したように頷き、《アインツベルンの森》の方に視線を向ける。
同時に幾つかの木々から羽音が鳴り響き、森の奥の方へと去って行った。
《吸刃虫》とは雁夜が臓硯から与えられていた蟲の使い魔である
《翅刃虫(しじんちゅう)》をフリートが回収し、改造して作り上げた雁夜が《黒炎騎士の鎧》を装着していない時に《異界剣》以外の武器として使用出来る蟲の使い魔。その力は《翅刃虫(しじんちゅう)》だった頃の力を遥かに超えている。
短時間で間桐の魔術で作り上げた蟲まで改造したフリートには、もはや雁夜は驚愕を通り越して呆れの極致に至っていた。

(生前にキャスターと居た連中も、こんな風に呆れていたんだろうな・・・・だが、これだけの技術を持っているなら桜ちゃんの治療は大丈夫だ)

フリートに指摘されて気がついた事だが、現在間桐邸に居る桜は間桐の道具になる為に体を改造されている。
一度始まった改造を途中で放り出せば、何かしらの悪影響が必ず発生する。特に人体ならばその悪影響は命さえも脅かす。それを治療出来るのは今の所、桜を改造している張本人である間桐臓硯か、卓越した生命技術を持っているフリートだけ。
マッドでは在るが少なくとも、フリートは臓硯や他の魔術師達よりは遥かに雁夜からすれば信用出来る。
そう思いながら雁夜はアイリスフィールを先にアジトの治療用カプセルに転送させているフリートの背を見つめていると、転送を終えたフリートが無表情のまま雁夜に振り返る。

「さぁて・・・・そろそろ“行きますよ”」

その言葉が指し示す事を雁夜は違えずに読み取り、頷くと共に冬木市が在る方向に顔を向ける。
既に雁夜の頭の中には桜救出以外の余計な考えは一切無い。桜を間桐から救出する為にフリートの配下になり、《キバ》が課した試練も乗り越えた。今だけは遠坂時臣に対する感情も一切廃する。
必要な意志は“桜を間桐から救出すると言う”一念のみ。自身の横で霊体化しているバーサーカーも、主である雁夜の意志を感じているのか、セイバーと相対していた時と劣らない気迫を放っている。
そして彼らは無言で夜の道を歩き出す。間桐家をこの世から消滅させる為に。

黒いフードを被りながら言峰綺礼はアインツベルンの城を目指して走っていた。
昼間、アサシンからの報告で久宇舞弥が《アインツベルンの森》に向かったと言う情報を得ていた。
そして昨夜の戦闘の後でセイバーとアイリスフィールが《アインツベルンの森》に帰還した事も、アサシンからの報告で綺礼は知っている。残念ながら目的の人物で在る衛宮切嗣の姿は捉えられなかったが、《アインツベルンの森》に居る可能性は高いと綺礼は予測し、森の西側の方で網を張っていた。
そして斥候を任せていたアサシンからの報告でバーサーカーが現れた報告が届いた時、我知らずに綺礼は歓喜に震えた。
この状況ならばセイバーが離れたアイリスフィールを護るために、切嗣はアイリスフィールの護衛として動く。今度こそ追いつめるチャンスだと思って綺礼は森の中を移動していたのだが、其処で自身の同じようにアインツベルンの城を目指していたフリートに出会ってしまった。
一応アサシンを一体護衛としてつけていたが、卓越した実力を持

つフリートでは勝てないと綺礼は思い、苦虫を噛み潰したような気持ちで退避しようとした。だが、その直前にフリートが提案を綺礼に持ち掛けて来た。

要約すれば自身が綺礼の邪魔をする者を排除するだけではなく、気配を遮断する道具まで提供すると言う、綺礼にとって破格の好条件だった。余りの好条件に罠ではないのかと勘繰ったのだが、セイバーが欲しいと言う話で綺礼は多少はフリートに対して僅かに警戒心を下げた。

世の中には同性愛と言うモノが在る。その類で見え麗しいセイバーを手に入れたいのだと、恍惚した顔をしていたフリートを見て綺礼は一応納得した。

今の段階では綺礼はアイリスフィールこそがセイバーのマスターだと認識していたので、セイバーを使役する為に必要な令呪をフリートは手に入れようとしているのだと思ったのだ。

実際のところはセイバーではなく、《聖杯の器》であるアイリスフィールの体を弄れる未来を想像してフリートは喜んでいたのだが、流石に其処までは綺礼を以ってしてもフリートの内心を悟れなかった。

卓越した魔術師のサーヴァントであるフリートに、白兵戦最強のセイバーが渡るのは時臣にとって不利になる事態だが、綺礼にとっては切嗣との邂逅の方が重要。

しかし、幸運が舞い降り過ぎたのか、斥候を任していたアサシンからセイバーが重傷を負った情報だけではなく、ランサーの陣営が参戦し、バーサーカーの陣営が撤退したと言う情報が届いて来た。

それは綺礼にとってはかなり不味い情報。セイバーは恐らく危機を感じたアイリスフィールが撤退させるだろうが、切嗣は一人でランサーとそのマスターであるケイネスを相手にしなければならない可能性が出て来てしまった。切嗣がケイネス達の手に掛かって命を落としてしまえば、綺礼の目的が果たせなくなる。

焦りを覚えながら綺礼は《アインツベルンの森》の中を駆け抜け

る。自身の目的である切嗣との邂逅の為に。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・クッ！！・・・・まさか・・・・・“伝承保菌者(ゴッズホルダー)”が参戦・・・・していたのか」

アインツベルンの城内部のサロンで荒い息を吐きながら、セイバーの止血を包帯で行っていた切嗣は、先ほど《遠見の水晶球》で捉えた黒炎騎士キバの正体を推察していた。

“伝承保菌者(ゴッズホルダー)”。一般的な魔術師と違う特殊な魔術師達。遥か昔に神々に使えていた末裔と言われ、極めて稀に現存する宝具を所持していると言われる。

先ほど見た黒炎騎士キバの鎧もその類なのだろうと切嗣は推察するが、一つの矛盾に辿り着いていた。現存している宝具を扱う“伝承保菌者(ゴッズホルダー)”が、現代の殺戮兵器である《ガトリング砲》をバーサーカーに使わせていた。一般的な魔術師よりも遥かに秘匿を重要視する“伝承保菌者(ゴッズホルダー)”が、サーヴァントに使わせる武器とは切嗣には思えない。

だが、今はそれを深く推察している場合ではない。宝具の現存よりも問題は、その宝具の力の方が切嗣にとっては脅威だった。

目の前で気絶しているセイバーの身からは、城から飛び出す前に溢れていたはずの魔力が一切無く、今は切嗣が過剰に魔力を供給しなければ消滅してしまうほどに危機的状況に陥っていた。これが意味する事は、黒炎騎士キバが纏っていた鎧と剣には魔力を吸収する能力が備わっていると言う意味に他ならない。

「グゥッ！！・・・・不味い・・・・現代兵器と言う凶悪無比の力を手に入れたバーサーカーに・・・魔力を吸収する力を宿した宝具を持つマスター・・・・言峰綺礼以上の強敵だ・・・・一先ず城か

ら撤退しなければ」

自分達の状態は確実にバーサーカー側に知れ渡っている。

セイバーを令呪を使用して退避させたとは言え、それで戦いが終わる訳ではない。後少し早く令呪を使用してセイバーを退避させて於けばと後悔しながら、切嗣は動かすのも億劫な体を立ち上がらせる。

だが、次の瞬間に更なる危機がやって来た事を知らせるように、テーブルの上に置いてあった監視装置から警報が鳴り響く。

ーーーピピピッ！！

「・・・・・・よりにもよって・・・・こんな時にか」

監視装置が映し出した映像に切嗣は焦りを含んだ声で呟いた。

水銀の塊のような球状態の物を横に従えたケイネス・アーチボルトが、アイツンベルンの場内ホールに足を踏み入れる姿が監視装置に映し出されていた。

ケイネス・アーチボルトがフリート達が襲い掛かっていた《アインツベルンの森》にやって来たのは、切嗣の自業自得だった。

先のホテル爆破の件で拠点とイギリスから持ち込んだ魔導器の数々を失ったケイネス達は、早急に新たな拠点を得なければならない。ただ街中を彷徨っていれば、他の魔術師達の格好の獲物になるからだ。

とは言え、イギリスから持ち込んだ魔導器の数々を失ったケイネスでは、冬木ハイアット・ホテルで作り上げたような工房を再び作り上げるのは不可能。そうなれば自ずと答えは決まっている。

他の参加者達が作り上げた拠点を奪い取り、新たな自分達の拠点とする。しかし、狙える場所は限られていた。
アーチャーと言う未だに正体が不明なだけではなく強力なサーヴァントを従えている、この地のセカンド・オーナーである遠坂時臣の拠点を狙うのはリスクが大き過ぎる。
嘗ては弟子であり、今は敵対している三流魔術師のウェイバーの拠点は論外。
恐らくは参加しているであろう間桐の拠点は、霊脈から離れた地点に家が在る為に手に入れても満足な拠点として機能する可能性は低い。
キャスターであるフリートに到っては、未だに拠点さえも発見出来ていない。
必然的にケイネス達が狙うとすれば郊外の森では在り、遠坂邸には劣るが、かなり優秀な霊地である《アインツベルンの森》しかなかった。敵の陣地に入り込むのには躊躇したが、現状ではセイバー陣営以外に狙える陣営が無い。
それに何も悲観する事実だけが在る訳ではない。先の戦いでセイバーはランサーによって左手に不治の傷を負わされている。万全ではないセイバーをランサーと戦わせ、自身は無事だった最強の礼装でセイバーのマスターを討つ。リスクは大きいが、現状ではそれ以外にケイネス達に出来る策は無い。
一刻も早く万全な防備を手に入れようとケイネスとランサーは《アインツベルンの森》に訪れたのだが、其処でケイネスに幸運が舞い降りた。
ケイネス達が到着した時には既にバーサーカーとセイバーの戦いが始まっていたのだ。戦闘音からかなりの激闘で在ることは把握し、ケイネスは視覚共有を利用して戦場に向かわせたランサーの視覚から情報を集めていた。
そしてセイバーが既に戦闘不能な状態に陥ったことを把握したケイネスは即座にランサーとの視覚共有を打ち切り、すぐさまアイン

ツベルンの城を目指した。
最強の手札であるセイバーを失ったアインツベルンの陣営の戦力は大きく低下している。視覚共有で目撃したバーサーカーの《メタルストーム》には多少の苛立ちを覚えたが、それを補えるほどの幸福を齎してくれたことで忘れようと、寛大な気持ちをケイネスは持っていた。最もバーサーカーとそのマスターの背後に、不倶戴天の怨敵であるフリートの存在が在り、ケイネス達の行動さえもフリートの手の内でしかないと解っていたら、そんな気持ちにはならなかっただろう。
そんな事を知らないケイネスは晴れ晴れとした気持ちを持ちながら、アインツベルンの城を目指す。
そして目的の地であるアインツベルンの城を前にすると、ゆっくりと小脇に抱えていた小瓶を地面に下ろし、詠唱を開始する。

「Ｆｅｒｖｏｒ，ｍｅｉ　ｓｅｎｇｕｉｓ（沸き立て、我が血潮）」

ケイネスの詠唱と共に小瓶の中からドロリと音を立てながら、鏡のように金属光沢を放つ液体が湧き出て来た。
その液体の正体は大量の水銀。量にすれば十リットル程も在るソレが、まるで自律した現生動物か何かのように瓶の外に流れ出て、ブルブルと震えながら球状を模る。
これこそがロード・エルメロイの誇る《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》。ケイネスが持つ数多の礼装の中でも最強の一品。他の礼装や魔導器は残念ながらホテル爆破で失われてしまったが、最強の礼装である《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》だけは手元に残った。
ケイネスは自身が発動させた礼装に問題が無いことを把握すると、更に詠唱を追加して機能を完全にし、目の前に在る大扉に厳しい眼差しを向けて一喝する。

「Ｓｃａｌｐ（斬）！！」

ーーーブザン！！

ケイネスの一喝に《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》は即座に反応し、水銀球の一部を鞭のように唸りを上げながら分厚い大扉をバターのように切り裂いた。

不定形な水銀はいかなる形にも変形する。魔術師として稀有な二重属性で『風』と『水』の複合属性を持つケイネスは、二つの属性の共通である“流体操作”を利用して、魔力を充填した水銀を自在に操るという戦闘魔術を編み出した。

先のホテル爆破の難を逃れられたのも、《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》を防御として使用したおかげである。

そして魔力を充填した《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》は、一度武器として使用すれば超高圧力水流カッターと同じ原理でチタン鋼やダイヤモンドさえも切り裂く強靭な武器となる。

その力に晒された大扉は閂もろとも簡単に両断され、重々しい響きと共に内側へと倒れこんで行った。

ケイネスはそれを確認すると、自身の新たな拠点となるかもしれない場所を品定めするように見回しながら城内に足を踏み入れる。

シャンデリアは燦然と輝き、磨き上げられた大理石の床には曇り一つない。空気にも淀みが全く感じられない。表から見た荘厳な佇まいと一緒で、ケイネスから見ても納得出来る場所だった。

（やはり悪くない。この場所ならばソウラも気に入るだろう。この場所こそが私達の新たな拠点に相応しい）

現在、最初の拠点を失ったケイネス達は郊外の廃工場を仮の隠れ家として使用している。

しかし、名門の家の出であるケイネスにお嬢様であるソラウからすれば劣悪としか言えない環境の為に機嫌は非常に悪い。これ以上

あの劣悪な環境化で過ごさない為にも拠点を得なければと言う思いもあって、《アインツベルンの森》にケイネスとランサーは訪れた。
そして十分に自分達の拠点として相応しいと納得したケイネスは、威風堂々と胸を張りながら、無人のホール中に響き渡るように大音量で声を響き渡らせる。

「アーチボルト家九代目当主、ケイネス・エルメロイがここに推参仕る！アインツベルンの魔術師よ！求める聖杯に命と誇りを賭して、いざ尋常に立ち合うがいい！！」

そのケイネスの挑発に応じる者は誰も居なかった。
しかし、ケイネスはその反応に僅かに口元を笑みに歪める。ランサーの視覚から把握した情報では、既にセイバーは戦闘が不可能なほどの重傷を負っているはず。その治療の方で忙しいのか、或いはアインツベルンのマスター側にも何か不測の事態が起きている可能性が高い。
今宵の戦いは楽に終わりそうだとケイネスは余裕を持つ。問題が在るとすれば自身のサーヴァントであるランサーの騎士道精神だった。重傷を負ったセイバーを討ち取りたくないとランサーが言って来るのは目に見えている。
ランサーの速度ならば遠からず此処に訪れるのは間違い無い。そうなる前にセイバーのマスターを討ち取ろうとケイネスが考えながらホールを進んでいると、突如として広いホールの四隅に置かれていた花瓶が轟音と共に破裂し、夥しい数の金属の礫がケイネスに向かって浴びせかけられる。

ーーードゴオォン！！

ーーードドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！

クレイモア対人地雷と呼ばれる残忍な設置式爆弾が在る。炸薬の破裂によって直径1．2ミリの鋼鉄球を七百個扇状に撒き散らす兵器。

切嗣が花瓶に仕込んでいたのがそれだった。魔術的な罠ではなく機械的な罠で発動したクレイモア対人地雷は、合計すれば二千八百発の鋼鉄球をケイネスに放った。しかし、ケイネスに鋼鉄球が届く直前に、足元にあった水銀の塊が形状を変えてケイネスを護る為の銀色のドームへと変じ、全ての鉄球を弾き返した。事前に設定しておいた《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》の《自動防御》が発動したのである。

その影響でホール内の内装がズタズタになるが、ケイネスは構わずに自身を護った《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》が元の球状に戻るのを確認すると、今の悪辣さに苛立ちを覚える。

軍用兵器などに疎いケイネスでは在るが、今自身を襲った攻撃が魔術を用いた攻撃ではなく、ただの通常兵器に寄る攻撃だと言うことは分かる。

「・・・・そこまで堕ちたか、アインツベルン」

呟きには怒りよりも嘆きが勝っていた。

通常兵器を宝具として使用していたバーサーカーと言い、更には名門であるはずながら現代兵器を使用して来たアインツベルン。バーサーカーの方は自身を有利にしてくれたことで寛大にも見逃したが、此方は完全に別である。

そして先ほどのクレイモア対人地雷のおかげで昨夜に、自分達の拠点を崩壊させた陣営がケイネスには分かった。

「・・・宜しい。ならばこれは決闘ではなく誅伐だ」

自身の拠点を卑怯なやり方で潰した最有力候補に辿り着いた事で、殺意を新たにしたケイネスは敵陣の奥へと踏み込んで行った。

一方、ケイネスに怨敵として認識された切嗣は、気絶したまま動かないセイバーを背中に背負いながら一心不乱に城の中に備わっている隠し通路が在る場所にふらつきながら向かっていた。
万全な状態ならばともかく、セイバーへの過剰な魔力供給でコンディションは最悪にまで落ち、魔術の発動は愚か、普通に動くのも今の切嗣には苦難でしかない。そのような状態で時計塔の神童と呼ばれるケイネスに挑むなど愚の骨頂でしかない。
更に言えば今の切嗣にはセイバーと言う足手纏いが在る。セイバーはとある事情で霊体化が出来ない。
最強の手札が一瞬にして最大の足手纏いになった事実に切嗣は歯噛みしながら、一瞬にして自分達を不利に追い込んだ敵の存在に戦慄していた。

（・・・誰だ・・・・誰かが僕達の動きを把握して策を練っている・・・ッ!!まさか、キャスター!?）

切嗣の脳裏にフリートの姿が過ぎった。
思えば港場でフリートはバーサーカーを討ち取る最大の好機を得ながらも、バーサーカーを重傷で終わらせた。もしもアレがバーサーカーを自身の僕として手に入れる為の算段だったとしたら、既にバーサーカーのマスターは敗退している可能性が高い。
キャスターのサーヴァントは権謀術数に長けている。更に港場でのフリートの実力を鑑みれば、生前はどれだけ優れた魔術師だったのか計ることは出来ない。だが、ただ一つの疑問だけが残る。何故神代時代の英霊であるはずのフリートが、現代兵器に精通しているのかと言う疑問が。

（何かが間違っている・・・・僕だけじゃない・・・・もしも・・・・全ての参加者達がキャスターの術中に嵌まっているとすれば・・・・・ハッ！？）

一瞬視界を過ぎった水銀の雫に切嗣は気がつき、即座に体を横に動かした瞬間、横側の壁から銀色の閃光が閃き、直前まで切嗣が居た空間を貫く。

ーーーザン！！

「・・見つけたぞ、ネズミめが」

「クッ！！」

ーーーガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！

壁の向こう側から球体状の《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》の従えたケイネスを目撃した切嗣は、即座に腰のホルスターからキャレコの短機関銃を抜き去り、ケイネスに向かって発砲した。

しかし、発砲された銃弾に即座に《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》は反応し、再びケイネスを護る銀色の膜へと変じ、全ての銃弾を防ぐ。

その事実に切嗣は歯噛みしながらケイネスを睨むが、ケイネスは余裕綽々に切嗣を見つめ、背中に背負われている気絶したセイバーを発見する。

「フム・・・・・なるほど、既に現界維持が関の山のような状態か。だが、聖杯戦争を汚した貴様を見逃す気は無い！セイバーと共に死ぬが良い！！Ｓｃａｌｐ（斬）！！」

「クッ！！（こんなところで！！）」

ケイネスの指示と共に左右を囲むように、鞭状に形状を変えた《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》を目撃した切嗣は悔しげに顔を歪める。
しかし、《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》の銀の鞭が切嗣に届く直前、横合いの窓が割れ、十匹ほどの巨大な蜻蛉を思わせるような蟲が切嗣とセイバーを護るように飛び込んで来る。

ーーーバリィィィィーーン！！

『キキキキィッ！！！』

「何ッ！？」

「こいつらは！？」

飛び込んで来た蟲の姿にケイネスと切嗣は揃って驚愕した。
大きさは一匹辺り人の赤ん坊のほどの大きさ。昆虫としては蜻蛉に近いが、蜻蛉では在り得ないほどの大きさを持ち、背から生えている翅は鋭利な刃を思わせるほどに鋭く光っている。更に一番の特徴は尻尾の部分がまるで何かを吸い取る為に尖っている事だろう。
凡そ地球上の生物には在り得ない昆虫。しかし、ケイネスと切嗣には目の前に居る蟲を操っている者の正体が分かっていた。

「これは・・間桐の蟲か！？」

『キキキィッ！！』

ケイネスが蟲の正体に辿り着いた瞬間、《吸刃虫》達は顎を鳴らしながらケイネスに向かって飛び掛かる。
即座にケイネスは《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》を操作し、《吸刃虫》達を切り裂

こうとするが、《吸刃虫》達はケイネスではなく《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》に襲い掛かり、鋭く尖った尻尾を《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》に突き刺す。

『キィッ！！』

ーーードスドスドスッ！！

「グゥッ！！こ、これは！？」

《吸刃虫》達の針が《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》に突き刺さると同時に、ケイネスは自身の魔術回路に鋭い痛みが走るのを感じ、胸を押さえた。

そして自身の体から《吸刃虫》達が《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》を通して魔力を吸い上げていることに気がつき、《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》に指示を出す。

「振り落とせ！！」

ーーーブン！！ブン！！

ケイネスの指示に《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》はくっ付いている《吸刃虫》を振り払うように動き、通路をズタズタにして行く。

それをチャンスだと思った切嗣は、即座に反転し、セイバーを背負いながら通路を駆ける。

ケイネスはそれを目撃し、苛立ちを募らせながら切嗣の背に攻撃するように《月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)》に指示を出そうとするが、その直前にケイネスの視界を白い闇が覆い尽くす。

ーーーボフン！！

「クッ！！次から次へと！！」

「キキィッ！！」

「ハッ！？」

背後から聞こえて来た威嚇音にケイネスが振り向いてみると、《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》の刃を掻い潜って来た《吸刃虫》が迫っていた。

もはや迎撃は間に合わない。《月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）》の自動防御も、他の《吸刃虫》達に魔力を吸われてしまった為に満足に起動していない。

ケイネスは自身に迫る《吸刃虫》の鋭い羽に目を見開く。

だが、次の瞬間、ケイネスを護るように紅と黄の閃光が閃き、《吸刃虫》をズタズタに切り裂く。

ーーーブザン！！

「ケイネス様！ご無事ですか！？」

「ランサーか！？よくやった！早く残りの蟲ども潰せ！」

「ハッ！」

自身を護るように現れたランサーにケイネスは即座に指示を出し、ランサーは頷くと共に白い闇の中に隠れている《吸刃虫》達に向かって二槍を振り抜く。

ーーーザン！！ザン！！ザン！！

『ギィッ！！』

ランサーの二槍が閃く度に《吸刃虫》達は次々と切り裂かれ、白い闇が晴れた後には全ての《吸刃虫》が床で断末魔の痙攣をしてい

た。
　ケイネスはその様子に満足し、切嗣とセイバーを追いかけるように指示を出そうとするが、その耳にまるで時限爆弾が音を鳴らすような音が届いて来る。

ーーーカチカチカチカチッ！

「こ、これは！？ケイネス様！ご無礼を！！」

ーーーガシッ！！

ーーードゴオオォン！！

　逸早く危機に気がついたランサーがケイネスの腰を掴んで、その場から離れると同時に床で断末魔の痙攣をしていた《吸刃虫》達が全て爆発した。
　何とかランサーのおかげで爆発の影響から免れたケイネスは安堵の息を吐き、先ほどの《吸刃虫》に対して考察する。

「恐るべき蟲だ・・・・魔力を吸収するだけではなく、その魔力を自身が死ぬと共に爆発させるとは・・・間桐の蟲とはこれほどか・・・・ランサー、私を良くぞ護った」

「ハッ！！・・ありがたきお言葉です・・・・して、ケイネス様？セイバーとそのマスターは？」

「フン！！・・・・業腹だが逃げられた・・・・・・まぁ、良い。今日のところは新たな拠点を得た事で見逃すとしよう。ランサー！！この場所を新たな拠点とする準備を私はこれから行う！！お前は周囲を警戒していろ！！拠点にした後にソラウを迎えに行くぞ！」

「了解しました、我が主」

ケイネスの言葉にランサーは膝を着きながら頷き、すぐさま辺りを警戒するために動き出す。

最後にランサーは先ほどまで居た空間に僅かに視線を向けるが、すぐさま視線を逸らして城の中を歩き出すのだった。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・よし・・此処までくれば大丈夫だろう」

ケイネスから逃げ出した後、即座に隠し通路の中に飛び込んで退避した切嗣は、セイバーを背負いながら隠し通路の出口を目指していた。

何故間桐の蟲と思われる《吸刃虫》が自身を護ったのかは理解出来ないが、後からの煙幕は先に脱出させた舞弥の物だろうと考えていた。何時まで経っても来ない自身を心配して戻って来たのだろうと考えながら、切嗣は隠し通路の出口に手を掛けて扉を開ける。その先で待っていたのは。

「待っていたぞ、衛宮切嗣」

「・・・・・言峰・・・・綺礼・・・」

万年仏頂面をしていた男とは思えないほどに恍惚とした表情をしながら両手を広げている言峰綺礼の姿に、切嗣は呆然としながら言峰綺礼を見つめるのだった。

深い深すぎる闇の中で一人の少女が“犯されていた”。
精神を、肉体を、その全てを少女は犯され続けていた。犯され続ける間、少女には絶え間なく地獄の苦痛を味あわされ続ける。しかし、少女には既に泣き叫ぶと言う意思は無かった。
もう一年も続けられている地獄。少女は六歳にして絶望で心を覆い尽くし、絶望と諦観に染まった空虚な眼差しし続けていた。
何かの激突音や破砕音が近くで鳴り響き続けているが、それさえも少女は認識していない。
ただ思うのは今日の“教育”が早く終わってくれないかと言う想いだけ。もはや少女には自身の救いは無いのだと理解してしまっていた。誰も助けてくれず、望んでも救いは訪れない。
この一年の間、少女はそれを嫌と言うほどに思い知った。だからこそ、何も望まずに今日の“教育”が終わるのをジッと耐える。
だが、突如としてその身を犯していた蟲達全てが霧散するように消滅し、誰かが自身を抱き締めるのを感じて少女は自身を抱き締めている人物に目を向ける。

「・・・・・・カリヤ・・・・・・おじさん？」

「助けに来たよ・・・桜。もう、大丈夫だ」

頭部を覆っていた兜を外し、漆黒の鎧に身を包みながら両目から涙を流し続けている雁夜は少女ー間桐桜ーを安心させるように抱き締めるのだった。

第十二話　邂逅（後書き）

今回使用道具。

名称：《吸刃虫》

ランク：一

詳細：雁夜が元々持っていた間桐の蟲である《翅刃虫》をフリートが改造した蟲の使い魔。

姿は蜻蛉を思わせるが、赤ん坊ほどの大きさを持ち、ダイヤンモンドさえも切り裂く鋭利な翅を備え、翅を震わせて高周波を相手に向かって放てる。最大の武器は尻尾の部分に備わっている鋭い針で、対象に突き刺して魔力を吸収する力を持っている。また、倒された場合は証拠隠滅の為に吸収した魔力と元々備わっていた魔力を使って自爆する。

本来の役目は黒炎騎士キバに吸収した魔力を提供することだが、単体でもかなりの戦力を持っている（元ネタはメガニューラ）

第十三話　救出

間桐家。聖杯戦争を構築した《始まりの御三家》の一つ。
しかし、脈々と次の世代に血を繋いで来た同じ御三家の遠坂とは違い、間桐の家系はただ一人の人物の傀儡だった。その人物の名はマキリ・ゾォルケン。現在の名は間桐臓硯。
延命に延命を重ね、秘術によってその身を蟲へと置き換え、五百年も生きながらえている老魔術師。
聖杯戦争の令呪に関するシステムを考案した人物。だが、その性格は一言で言えば外道以外の何ものでもなかった。臓硯は狡猾にして残忍。他者の苦しみを娯楽にしている。
雁夜の願いのためにマスターになれるだけの魔術師にしたのも、全ては自身の娯楽の為でしかない。
バーサーカーと言う維持するだけ膨大な魔力を消費するサーヴァントの為に、本来ならば雁夜は身の内にいる刻印虫にその身を削られながら地獄の苦痛を味わって魔力を生み出さなければならない。
その悪辣な計算の果てに雁夜が苦しみ抜いて無様な末路を晒すのを見物するのが、雁夜を参加させた臓硯の本当の目的だった。
この老人の蟲の体を維持するために、今まで何人の人間が闇に消えて行ったのかは分からない。
間桐の家系にしても臓硯の為に在る。歴代の当主とされる間桐の当主は、全て陰の当主である臓硯の傀儡でしかない。
そして現在の間桐の表の当主である雁夜の実の兄。間桐鶴野（まとうびやくの）も臓硯の傀儡でしかなかった。
その本人は今、間桐家のリビングで暢気にアルコールを摂取していた。自身の実の弟で、聖杯戦争に参加している雁夜を嘲笑いながら。
昨夜出て行った雁夜は間桐家に戻って来なかった。臓硯でさえもその所在は全く掴めていない。

それが意味する事は雁夜が死んだと言うことに他ならないと鶴野は考えていた。
当然の結末だと鶴野は思っている。雁夜が召喚したバーサーカーと同じ存在が六体も参加している聖杯戦争。そんな戦争に即製魔術師でしかない雁夜が勝ち残れる筈が無い。
本来ならば鶴野も、国外に遊学している一人息子の慎二と共に今の冬木市から離れたかった。だが、それは出来ない。遠坂から譲り受けた娘を地下の蟲蔵で調教し、間桐の次期頭首として相応しい器に仕立て上げるように臓硯から命じられているからだ。
結果、それが絶望を呼んでしまった。しかも最悪にして最凶の一角を担っていた絶望を。

ーーーバッシャン！！

「ッ！！」

突然にテーブルの上に置いてあったワインクーラーに溜めてあった氷水を浴びせられた鶴野は、冷たさに悶絶する。
それによって酔いが剥ぎ取られた瞬間、今度は頭の後ろから衝撃が走り、目の前のテーブルに顔を叩きつけられる。

ーーードゴォン！！

「ゲベッ！！」

「どうもこんばんわ。間桐鶴野って言う蟲さん。キャスターのサーヴァントですよ」

鶴野の後頭部を右足で踏みつけながらフリートは挨拶をするが、鶴野はそれどころでは無かった。

フリートの右足とテーブルに頭を挟まれている鶴野は、頭部を襲って来る激痛から逃れようと暴れる。だが、例え鶴野が決死の思いで暴れても逃げ出すことは出来ない。フリートが逃がすはずがないのだから。

無様に自身の右足の下で暴れている鶴野をフリートは無表情で見下ろしながら、背後にいる雁夜に先に行けと言うように右手を動かし、雁夜は頷くと共に地下室の入り口が在る方に歩いて行く。

それを確認したフリートはゆっくりと右足を上げ、漸く激痛から解放されて安堵した鶴野に再び右足で振り下ろす。

ーーードゴォン！！

「ガアッ！！」

フリートが右足を振り下ろすと共に鶴野を押さえつけていたテーブルが砕け散り、鶴野は苦痛に息を吐き出した。

その様子をやはり無表情で見ていたフリートはゆっくりと鶴野の襟首を掴み上げると、そのまま壁に向かって投げ捨て、鶴野は背中から壁に激突する。

ーーードォン！！

「グハッ！！・・・・・ヒィッ！！ま、待って！待ってくれ！？」

壁にぶつかった鶴野は痛みにのたうち回ろうとしたが、無表情に自身を見つめているフリートを目撃した瞬間、全身が恐怖で震え、痛みも忘れてフリートに命乞いをする。

「待ってくれ！！お、俺はマスターじゃない！！魔術師だが、サーヴァントを維持する魔力も無い！！ほら、令呪だって無いぞ！！」

鶴野は自身の両腕の服を捲くり、自身には聖杯戦争の参加者の証で在る令呪が無いことをフリートに示した。
だが、フリートの無表情は一切変わらずに、ゆっくりと、まるで鶴野に恐怖を与えるかのように歩きだす。実際、フリートは鶴野に恐怖を与えるように動いていた。
鶴野は雁夜が召喚したバーサーカーをその目にしている。サーヴァントと言う存在がどれだけ規格外なのかは充分に理解していた。その内の一体が自身に攻撃を加えて来ているのだから、もはや鶴野の胸の内には恐怖しか存在していない。
何とかその恐怖心から逃れようと鶴野は口を開けようとするが、その前にフリートが無表情のまま鶴野の希望を断ち切る。

「間桐。嘗ての名はマキリ。聖杯戦争を構築した御三家の一角。サーヴァントを御すために必要な令呪に関するシステムを構築した家系。ならば、当然サーヴァントと言う存在に関してだけは他の御三家である遠坂、アインツベルンよりも詳しい筈ですよね？だったら、何かしらの裏技を使って魔力が足りなくてもサーヴァントを従えることが出来る術が在るかも知れません。それって・・・・・非常に困りますよね？」

「ヒィッ！！」

感情が感じられない声で質問された鶴野は理解してしまった。
目の前に居る相手は鶴野を人として認識していない。臓硯同様に、いや、臓硯よりも遥かに鶴野にとっては致命的だった。
“どんな理由や言い訳を述べようと、既に自身の死は相手の中で確定した事項に過ぎない”

その事実を悟ってしまった鶴野は目から涙を流し、恐怖に震える。
だが、フリートは鶴野の考えどおり既に鶴野は何が在っても地獄に落とすと決めていた。
事前の情報で鶴野にはアイリスフィール同様に子供が居る事は分かっている。しかし、アイリスフィールと鶴野では全く違う。何よりも自身の都合で、何も知らない子供を地獄に落として苦しめたと言う時点でフリートからすれば赦し難き所業。
ゆっくりとフリートは鶴野の服の襟首を掴み上げて、鶴野の体を床から浮かせると、白衣の中から赤い血が入った試験管を取り出し、鶴野の顔の前で揺らす。

「この中に入っている血。実はコレ、アーサー王であるセイバーの血液と私が契約している竜の血をブレンドして作り上げた特別製の“魔力増強液”なんですよ」

今回の聖杯戦争でセイバーとして召喚されたアルトリア・ペンドラゴン。
その身には最強の幻想種である竜の因子が含まれており、それにより体の内部に強力な魔力炉心である《竜の心臓》が宿っている。生前での彼女は強力な《竜の心臓》と言う魔力炉心によって、息をするだけで膨大な魔力を発生させることができ、強力な戦闘能力を得ていた。
サーヴァントとなった彼女には残念ながら《竜の心臓》が失われてしまっているが、その身には確かに竜の因子が宿っている。それを利用して《黒炎騎士の鎧》の急激な成長もフリート達は実行した。
更にフリートは自らのスキルと契約している竜の血液を利用して、恐るべきモノを作り上げていた。それは。

「この血をですね。魔術師に投与すると、その魔術師は膨大な魔力を得られるんですよ。最も、その投与された魔術師は確実に再起不

可能になってしまう激痛に襲われ、竜の因子によって魂までも犯され、死んだ方がマシな魔力炉と言う物質に変貌してしまうんですよね。と～っても使えない失敗作の薬品なんですよ。コレは」

「ヒィィィィッ！！！や、やめてくれ！！！な、ななななんでもする！？だから、やめてくれ！！助けてくれ！！」

フリートが自身に行おうとしていることを理解した鶴野は、半狂乱になって暴れるが、必死の抵抗もフリートの前では無意味だった。

「助けてくれ？・・・・・笑えますね。貴方は、そんな風に泣いていた子に手を差し伸べましたか？自分の時だけ嫌だって言うのは、我が侭ですよ・・・・・でも、そうですね。貴方も確かに不幸でしたから」

ーーーードサッ！

掴んでいた襟首からフリートは手を離し、鶴野は床に落ちた。即座に鶴野はフリートの傍から離れて、背中を壁に押しつけながら恐怖に震える。

その様子を無表情のままフリートは見下ろし、ゆっくりと鶴野の前に指を二本立てながら話し出す。

「今から二時間。それまでに“私が貴方を認識出来る範囲”から一般人に誰一人として迷惑を掛けずに逃げられたら、特別に見逃して上げますよ。あぁ、安心して下さい。貴方をこの家に縛っているもう一匹の“蟲”は処断しますから。これはチャンスですよ。二時間以内に逃げられたら、貴方は無罪放免で自由。逃げられなかったら、地獄を味わって魔力炉心ですからね・・・・あぁ、それと、もし貴方が死んでもお子さんのことは安心して下さい。間桐の一般的な財

産は全部お子さんが受け取れるようにしますし、良心的な孤児院に送って、成人までの安全は保障して上げますからね。さぁ、後一時間と五十九分。早く、逃げたらどうです？時間は有限ですよ？」

「ア、ア、アァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

鶴野は絶叫を上げると共に部屋から飛び出し、間桐家から飛び出して行った。

その身に宿るのにはフリートから逃れたいと言う一心だけ。その想いだけを胸に、鶴野は夜の冬木市を走り続ける。

フリートは鶴野が間桐邸から遠ざかるのを確認すると、戦闘音が聞こえて来る地下室の入り口が在る場所へと向かい出す。間桐の闇そのものを絶望のどん底に落とす為に。

ーーーコツ、コツ、コツ

フリートと離れてから、雁夜は腐臭に満ちた闇の中に続く階段を降りていた。

目の前の闇に先には、時臣と違って見過ごす事が出来ない怨敵と救いたい少女が待っている。馴染み深い闇の中を降りながら雁夜が戦意を高めていると、左手の中指に嵌まっている《魔導輪》からキバが話しかけてくる。

《・・・・・酷く澱んだ魔力だ。怨念、無念、多くの者達の嘆きに満ちた意思が漂っている・・・・よく、こんな場所に娘を養子に差し出せたものだ・・・遠坂時臣は》

「・・・・時臣は結局知らないんだ。間桐の魔術のおぞましさを・・・・自分の家に伝わっている魔術が輝いているからな」

《宝石魔術と蟲魔術・・・・・フッ、確かにそうだな・・・・雁夜よ。我が担い手になったお前ならば分かるであろう？此処に満ちている無念の想いが？》

「・・・・・あぁ・・・確かに感じる」

キバの質問に雁夜は迷い無く答えられた。

《魔導輪》と《黒炎騎士の鎧》の担い手になった影響か、雁夜には地下室から漂って来る無念の想いを感じていた。それは紛れも無く臓硯が生きる為に食われて来た罪無き一般人の無念。

その無念の嘆きや悲しみが雁夜の周りを漂い、思わず雁夜は足を止めそうになるが、すぐに前へと足を踏み出す。嘆きや悲しみに呑まれる訳には行かない。自分には必ず救わねばならない少女が居るのだから。

そして雁夜は重く分厚い扉に手をおき、そのまま扉を開けて地下室の中に足を踏み入れる。

最初に雁夜の視界に入ったのは緑色の闇だった。内部は間桐の属性である《水》の影響で湿り、広大なフロアの壁面のそこかしこに四角い穴のようなものが規則正しく穿たれ、黒い闇を封入している。

その中心に一人の老人が立っていた。

「臓硯ッ！！」

「おぉ、雁夜。生きておったか？てっきりキャスターに殺されたと思うっとたが・・・・ほう、あの状態のお前を一晩で治療するとのぉ・・・此度のキャスターは当たりのようじゃなぁ」

「あぁ、おかげでお前との繋がりも切れた。もう俺はお前の操り人形じゃない。お前を殺すことも出来るぞ。糞爺」

「カカカカカカカカカッ！！ワシを殺すじゃと？随分な口が聞けるようになったでは無いか？出来損ないの分際で」

「何とでも言え・・・・それよりもキャスターから伝言が在るぞ。『この聖杯戦争、何時から狂った』？」

その雁夜の質問に臓硯の萎びた瞳が一瞬見開き、すぐさま感心したように頷いて僅かに口元を笑みで歪める。

「ほぅ・・・・なるほのぅ・・・本当に此度のキャスターは当たりじゃな。まさか、聖杯戦争の異常に短期間で気づきおるとわ」

「やはりキャスターの言っていたことは事実か」

臓硯の答えに雁夜は苦々しげな声を出しながら、臓硯を射殺さんばかりに睨みつける。

最初、雁夜はフリートから“聖杯の異常”に関する情報を聞いた時にまさかと思ったのだが、フリートが作り上げた本拠地の内部に在る“聖杯戦争の根幹”を担うモノから得た情報と臓硯が今回の聖杯戦争の参加は見送ると言っていたことを思い出した。

参加出来る者が居ないから見送るつもりだったのだろうと雁夜は考えていたが、そもそも臓硯には雁夜に短期間でサーヴァントを召喚させるほどの魔術師に変える秘術が在る。雁夜が戻らなければ、その秘術を使って鶴野にサーヴァントを召喚させることが出来たはず。

腐り落ちる魂の苦痛から逃れるために、臓硯は一刻も早く聖杯の力で不老不死になりたいはずなのに、せっかく巡って来た聖杯を手

に入れられる戦いを見送ると臓硯は言っていた。

「最初の話を聞いた時に気づくべきだった。最初から貴様は俺が聖杯を持ち帰る事なんて期待していなかった。爺！お前の本当の目的は、俺が苦痛に苦しむ様を見ることと“聖杯にどんな異常が起きているのか”を確かめることだろう！？」

「カカカカカカカッ！！！中々に頭が回るようになったのぅ、雁夜・・・・その通りじゃ。ワシにとって此度の聖杯戦争は余興でしかない。お前さんが苦しむ様を眺めながら、聖杯に起きている異常を見極めるのが本当の目的じゃ。前回の顛末を覚えとるなら、聖杯に異常が起きていると気づかん方が可笑しい。遠坂の小倅やアインツベルンの連中こそが馬鹿の極みよ”あんなモノ”が召喚された以上、間違いなく聖杯戦争のシステムには狂いが生じるのは間違いないと言うのにのう」

「そうか」

臓硯の話に雁夜は怒りを忘れて逆に冷静になっていた。

雁夜には分かっている。目の前に居る相手は聖杯にどのような異常が起きていようと、最終的に己の願いである『不老不死』が叶えば良いのだと言うことを。それがどんな形で叶おうと、臓硯は自身が『不老不死』にさえなれれば問題無い。異常を見極めると言っても、最終的に願いが叶うことが理解出来れば聖杯戦争は継続させるだろう。

その結果、必ず犠牲になるのは間違いなく雁夜が救いたいと願っている少女。それだけ理解出来れば雁夜には充分だった。

ゆっくりと雁夜は《異界剣》を鞘から引き抜き、臓硯に向かって刃を構える。

ーーースチャッ！

「臓硯。もうお前の犠牲になる者は充分だ・・・・間桐は・・・今日此処で、俺が潰す！！」

「潰すじゃと？・・・・・出来損ないの小童が・・・・身の程を知るがいいわ！！」

臓硯がそう目を見開きながら叫ぶと同時に、臓硯の背後から、そして雁夜の頭上から滝の如く漆黒の雨が降り注ぐ。

その漆黒の雨の正体は蟲。潜んでいた蟲が一斉に雁夜に向かって飛び掛り、その身を骨さえも残さず食い尽くそうと迫る。しかし、雁夜は慌てることなく自身の頭上に向かって《異界剣》を円の字のように振るい、漆黒の雨にその身は飲み込まれる。

「カカカカッ！なんじゃ？結局何にも出来ずに終わりではないか・・・・フン。桜の前で無様に死ねば、それだけ桜を間桐に縛り付けられたと言うのにのぅ・・・・所詮は出来損ないと言うこと・・・」

“喰い尽くしてくれる”

「ッ！！」

突然に感じた凄まじいまでの威圧感に満ちた意思の念に、臓硯が慌てて雁夜が居た場所に目を向けると、その場所に居た大量の蟲が次々と死に絶え、床に大量の死骸が転がっていた。

それはその身を維持する為に必要だった魔力が全て喰い尽くされた結果。

間桐の蟲は魔力によって生きている。その魔力が全て無くなれば、その先には死しか待っていない。

臓硯はその現象に呆然としながら、それを成した者に目を向ける。
漆黒の鎧で身を包み、禍々しいまでのオーラは臓硯よりも尚邪悪さを放っている。だが、不思議とその者が立つ場所は間桐の工房を浄化しているように陰鬱さを消去していた。
ゆっくりとソレは前へと鎧で覆われた足を蟲の死骸に踏み出し、次の瞬間、蟲の死骸は全て黒い炎に包まれて焼滅する。

ーーーゴオォォッ！！

「か、雁夜なのか？」

「あぁ、そうだ。最もこの鎧を纏っている時は間桐雁夜を名乗る気は無い」

《黒炎騎士の鎧》を纏っている時は、雁夜は自身の本名を名乗るつもりは無かった。
それはこの世界の在り方とフリートから忠告を受けたからだ。《宝具》。しかも無限に等しい力を得られる《黒炎騎士の鎧》の魅力に取りつかれて、《黒炎騎士の鎧》を求める者は必ず現れる。そうなった時に必ず狙われるのは担い手で在る雁夜。そしてその周囲に居る者達。
聖杯戦争後も《黒炎騎士の鎧》の所有権は雁夜のまま。そうなれば必然的に雁夜のことを調べられれば、桜や凛、そして葵と親しかったことが知られて三人が狙われる可能性が出て来る。だからこそ、雁夜は自身が《黒炎騎士の鎧》の担い手で在ることを秘匿するつもりだった。少なくと魔術師達にその脅威が知れ渡るまでは。
故に雁夜は自らの名を今後は徹底的に秘匿する。大切な者達の安息の為に。
そして《黒炎騎士の鎧》を纏っている時に名乗る名前は一つしかない。

「キバ。黒炎騎士キバ！それが今俺が名乗る名前だ！臓硯！貴様の腐り果てた魔導！俺が喰い尽くす！」

キバのその咆哮に臓硯は感じたことが恐怖を感じる。

その恐怖は今まで臓硯が犠牲にして来た人々が味わっていた恐怖。“捕食される側の恐怖”。

数え切れないほどの人々に味合わせてきた恐怖が、今、遂に臓硯自身に降りかかって来た。

恐怖と驚愕に動きが止まってしまっている臓硯に対して、キバは素早く右手に《黒炎剣》を具現化させ、臓硯に向かって走り出す。

「オオォォォォォォーーーーーー！！！！！」

「クゥッ！！たわけが！！此処はワシの工房じゃ！！」

ーーーカツン！！ドボォォォッ！！

恐怖に怯えながらも臓硯が持っていた杖で床を突くと同時に、キバの正面と背後から再び滝の如く蟲の雨が襲い掛かる。

しかし、正面から迫る蟲達に《黒炎剣》をキバは構えるが、背後から迫る蟲の雨に振り向かない。自身には背中を預けられるもう一人の漆黒の騎士が居るのだから。

「■■■■■■■■ッ！！！」

「バ、バーサーカーじゃと！？」

突然にキバの背後を護るように実体化して現れたバーサーカーの姿に、臓硯は声を荒げた。

現れたバーサーカーは右手に握る《約束された勝利の剣（エクスカリバー）》と《レヴァンティン》を巧みに振るい、次々と蟲を切り裂き、一匹たりともキバに蟲を近づけさせない。
それは狂化して理性を失っているとは思えない動き。臓硯はそれが意味する意味を理解し、信じられないと言うように蟲を切り裂く、或いは魔力を吸い上げて死骸に変えながら自身に迫るキバを見つめる。

「ありえぬ！？で、出来損ないの、しかも貴様のようなクズが！？《宝具》の所有者になっただけではなく、バーサーカーを制御しとるだと！？一日！経ったの一日で貴様に何が在った！？」

「絶望を見たんだ」

ーーーブザン！！

次々と正面から迫って来る蟲を自身が纏っている鎧に宿るパートナーの補助を受けながら《黒炎剣》で切り裂きながら、キバは低い声で臓硯の質問に答えた。
同時に自身が《黒炎騎士の鎧》を、安全に纏っていられるタイムリミットが近づいていることを感じる。

「（残り二十五秒。なら、大技で少しでも蟲ども消し去る！）ムンッ！！」

ーーーボゥッ！！

キバは足を止めると共に《黒炎剣》を素早く左手の篭手に滑らし、《黒炎》を発生させた。
その禍々しき《黒炎》の脅威を感じた臓硯は更に蟲を放ち、キバ

の動きを止めようとする。だが、それこそがキバの狙いだった。
絶大な力を持つ《黒炎騎士の鎧》だが、タイムリミットと言う弱点だけは、例えどれだけ魔力を吸収しても直ることは無い。とある特殊な空間ならばタイムリミットと言う弱点は無くなるのだが、その空間を維持するだけで膨大な魔力消費するので効率が非常に悪い。
だからこそ、キバは最初に鎧を装着した時点で出来るだけ臓硯が操る蟲を駆逐しなければならない。
その為にキバは自身の力を見せ付けるように動いていた。そして目論見どおりに臓硯は更に蟲を放った。
自分達の思惑通りに動いている臓硯と蟲の群れに向かって、キバは素早く《黒炎》を纏った《黒炎剣》をクロス状に振るい、空中に《黒炎》で出来たクロス字を描く。そのまま尚も《黒炎》を纏ったままの《黒炎剣》をクロス字の中心に突き出す。

「『業火炎竜』ッ！！」

ーーードゴオオオオオオオオオオオオォォォン！！

キバが《黒炎剣》を突き出すと同時にクロス字は、さながら怒り狂う竜が顕現したかのように黒き炎の竜へと変貌し、目の前に迫っていた蟲の群れを全て焼き尽くす。
臓硯は一瞬で自身の操る蟲達が焼滅した事実に完全に言葉を失った。間桐の魔術属性は《水》。
当然ながら《黒炎》をキバが放った時点で、臓硯はより水気が強い蟲をキバに放ち、その身を倒そうとした。だが、その水気が強い蟲までも《黒炎》の前に焼き尽くされてしまった。
臓硯は知らないことだが《黒炎》はただの炎ではない。その黒き炎自体にまでフリートが魔力を分解する性質を持たせた特殊な炎。魔力で作られたモノならば、例え相性の悪さがあっても《黒炎》は全てを焼き尽くす。

その事を知らない臓硯は、《黒炎騎士の鎧》を一時送還し、両手に剣を握って辺りの蟲を牽制しているバーサーカーと並びながら立っている雁夜を震えながら見つめる。

「・・・あ、ありえぬ・・・あってはならぬ！！雁夜よぉ！！例えお主がどれだけの力を得ようと！ワシは殺せぬ！貴様と音信不通になった後に何の準備もせんかった訳ではない！既に予備の身体になる蟲たちをこの屋敷の隅々まで配置ずみじゃ！それを全部跡形もなく消すなど不可能じゃ！！よしんば出来るにしても、そこまで派手なことをすれば他のマスター共が気づき、特に遠坂が知ればどうなるかのう？」

間桐は聖杯戦争の一角を担っている魔術師の家系。
当然ながら他の参加者達が監視している可能性は高く、そして同じ御三家である時臣は間桐の重要性を一番に理解している。御三家の一角がどれか一つでも途絶えれば、聖杯戦争の存続が危ぶまれる。
間桐の消滅の危機となれば、即座に時臣は動くだろう。その可能性を示唆して臓硯は逃げの算段を考えたが、その考えは地下室の扉から現れたフリートによって砕け散る。

「残念ですけど、遠坂は動けませんよ。既にこっちには御三家に攻撃出来る大義名分が在りますからね」

「キャ、キャスターーー！！た、大儀名文じゃと！？」

「そうですよ。だって、既に御三家の一角で在る遠坂は中立である教会と裏で手を結ぶという重大なルール違反を行っています。さぁ～て、質問ですけど？貴方。自分が聖杯戦争に本格的に聖杯戦争に参加する時にルール違反をしないって言い切れます？」

「ウッ！！」

「御三家だからって、自分達で決めたルールは護らないといけませんよね。反則なんて事されて聖杯に異常が起きたら大変ですから。最も、既に遅いんですけどね。クスクス」

フリートの説明に臓硯は完全に言葉を失うが、内心で確かにその通りだと同意していた。

御三家が聖杯戦争を構築した事実は周知の事実として知れ渡っている。当然、間桐が令呪に関するシステムを構築したことも。

せっかく最終的に聖杯戦争に勝利したのに、横から令呪を構築した間桐が横槍を行って聖杯を奪うかもしれないと言う大義名分を話せば、時臣でさえも苦々しい想いを持つだろうが頷くしか無い。特にそれが歴代に名を残す者が召喚される魔術師のキャスターのクラスの言葉ならば。

「いや～、本当に残念でしたね。遠坂がルール違反していなければ、この可能性に私は行き着かなかったかもしれないのに・・・本当に貴方は運が悪い」

「クゥッ！！じゃ、じゃが！蟲は全て殺せまい！！幾ら貴様が名を馳せた魔術師でも！この屋敷に居る全ての蟲を把握出来るはずが…」

「出来ますけど。と言うか、冬木市から隣の市までの範囲なら、もう貴方の捕捉は充分に可能ですね。例え蟲でも」

「・・・・・・・なんじゃと？」

まるで明日が晴れると言うような声で気軽に異常なことを告げたフリートに、臓硯は現状も忘れて呆然とフリートを見つめる。

「当然でしょう。だって・・・・貴方達、聖杯戦争の参加者達が戦っている場所は、“私の陣地”なんですからね」

「・・・・・ありえぬ・・・・そんな異常な範囲で陣地を構築出来るはずが」

「それが出来ちゃうのが私なんですよね。だから、こんなことも出来ちゃうんですよ。スティングシューター」

ーーードドドドドドドドドドドドドドドゴオオォン！！

フリートが低い声で詠唱を告げると、地下室が揺れて、地上から爆発音のような音が連続して鳴り響いた。

その現象と共に臓硯は感じた。“地上の家の中に隠れていた予備の体の蟲が一斉に消滅してしまったことを”。

「貴方の腐りかけの魔力は簡単に判別出来ますからね。対魔力持ちでなければ、私には一斉に全てを破壊出来る魔術が大量に在るんですよね。さて、残る予備の蟲は後幾つですか？」

「し・・・死なぬ！ワシは決して死なぬぞ！必ずや不老不死なって」

「“何がしたいんです”？」

「ッ！！」

フリートの質問に臓硯の痩身は恐怖とは違う衝撃を感じた。

その様子をフリートはじっくりと眺めながら、更に臓硯の心を揺さぶる言葉を投げかける。

「不老不死。なるほど、確かに聖杯じゃないと、この世界では難しい願いですね。でも、それって手段ですよね？不老不死になる目的って一体なんですか？」

その質問に臓硯は答えられない。

いや、自身でも一体何を目的として不老不死になろうと考えていたのか分からなくなっていた。

何か大切な事を成し遂げる為に聖杯に不老不死を叶えさそうとしていた。臓硯は震えながら自身の両手を見つめ、何かを思い出したのか痩身を震わせる。

「そうじゃ・・・・そうであった・・・・ワシは、ワシは！あの理想を叶えるために不老不死の望んでおった！！『この世全ての悪の廃絶』を！！そのためにワシは不老不死を！！」

「よかったですね、思い出せて・・・・でも、もっと思い出さないといけませんよ」

ーーーポン！！

フリートは自身の理想を思い出して喜びに打ち震えている臓硯の頭上に薬が入ったビンを投げる。

その動きに対して雁夜は即座に《異界剣》を自身の頭上で振るい、再びキバへと変わると、臓硯の頭上に在るビンに向かって《黒炎剣》を投げつける。

「爺。お前が思い出すことはまだ足りないぞ！！」

ーーーバリィィィィーーン！！！

「ッ！！！ギャアァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！」

《黒炎剣》がビンを破壊すると同時に、そのビンの中に入っていた薬品が臓硯に降りかかった。

同時に臓硯は床でのた打ち回り、肉体を構成していた蟲達が次々と臓硯の体から離れていくが、臓硯はそれどころでは無かった。薬品を浴びた瞬間、臓硯は自身がして来た事の全てを無理やりに思い出させられた。

ビンの中に入っていたのは、フリートが対臓硯専用に用意した《記憶回想薬》。自身がして来た事の全てを思い出してしまう薬品。

記憶とは何も良いことばかりではない。寧ろ思い出したくない記憶も存在している。だが、《記憶回想薬》は、そんな辛い記憶まで全て回想させてしまう秘薬。本来は尋問用や記憶喪失になってしまった相手に対する秘薬なのだが、自身の理想を思い出した臓硯に対しては下手な猛毒以上の劇薬だった。

自身が雁夜や桜、歴代の間桐の頭首、そして一般人に行って来た行為は、紛れも無く自身がこの世から根絶したかった悪そのもの。それを一瞬で突きつけられた事で、もはや臓硯は肉体の構成も満足に行えず、自身の本体である矮小な蟲の姿で床をのたうつ。

「ワシは・・・・・ワシは・・・・・」

「じゃあな。爺」

ーーーグシャッ！！

キバは迷うことなくうわごとを呟き続ける臓硯の本体を踏み潰した。

五百年生きた老魔術師の最後は、臓硯が虫けらのよう犠牲にして来た人々と同じく、虫けらのように潰される事だった。
潰れた臓硯の亡骸から足を退かしながら、キバは臓硯の本当の目的のことを思い出す。

（『この世全ての悪の廃絶』か・・・・・・確かに尊い理想とやらかもしれないが・・・何も知らない桜ちゃんを犠牲にして良い願いなんてこの世には無い！・・・・臓硯。俺はお前に同情も憐憫も抱かない。ただ、お前の末路だけは忘れない。もしかしたら、俺も同じところに堕ちるかもしれないからな）

結局、間桐臓硯は聖杯と言う絶大な力に魅せられてしまった者の一人だった。
だが、キバは決して臓硯を赦す気は無い。しかし、その末路だけは忘れてはならない。
自身もまた絶大な力を得た。その力に呑み込まれた果ての結末の一つには、臓硯と同じ末路が待っているのだから。
最後にキバは臓硯の亡骸に一瞥を送ると、もはや迷うことなく蟲蔵の最奥へと走り出す。
その先には自身が何をもっても救いたいと願った少女が待っている。次々と蟲蔵の中に居る蟲を駆逐しながら、キバは少女を探す。
そして見つけた。裸身を晒し、手枷と足枷を嵌められて、蟲にその身を犯され、蝕まれている小さな少女。即座にキバは蟲を全て駆逐し、少女に蟲を一切近寄らせない。
それと共に頭部を覆っていた兜だけを送還し、ゆっくりと少女を抱き締める。

ーーーガシッ！！

「・・・・カリヤ・・・おじさん？」

少女ー桜ーの宙を彷徨っていた絶望と諦観に染まった虚ろな眼差しが、両目から涙を流す雁夜を捉えた。
その事実に雁夜は自身でも気がつかないほどの大量の涙を流しながら、優しくずっと告げたかった言葉を桜を抱き締めながら伝える。

「助けに来たよ・・・桜。もう、大丈夫だ」

「えっ？」

「もう君を苦しませる者はいない。君に絶望を与える奴らがいたら、おじさんがこの命を賭けて何としても駆逐する。だから、だから！君の願いを教えてくれ！」

その雁夜の叫びと同時に《黒炎騎士の鎧》は雁夜から離れ、先に送還していた兜を再び顕現させて雁夜の背後に立つ。
その、まるで自分達を周りにある闇から護るように立つ《黒炎騎士の鎧》と、自身が感じる雁夜の暖かさに桜の絶望と諦観に染まった瞳が揺らぐ。言葉にすれば絶望しかない。それを桜はこの一年で充分に理解した。
だが、雁夜から感じる熱い想いと本来ならば何も感じられない筈の鎧が放つ優しげなオーラに、桜の心を覆っていた鎧が少しずつ、少しずつ剥がれて行く。

「・・・・・カリヤ・・・おじさん・・・・・いいの？」

「あぁ」

「本当に？」

「良いんだ。君の本当の気持ちを話して・・・おじさん、約束したよね？お母さんとお姉ちゃんに必ず会わせて上げるって？」

「・・・・ぅ・・ぁ・・・うぅぅ・・・・たいよぉ・・・・・出たいよぉ！！此処から出たい！！わ、わたし！！・・・お姉ちゃんと！お母さんと！！お父さんと一緒に居たいよぉ！！ウワァァァァァァァ！！ワァァァァァァァーーーーー！！！！」

それは今まで桜が封じ込めて来た想いの全てに満ちた悲痛な慟哭。別離の時にさえ訴えられず、姉との別離の時に託されたリボンだけが桜にとっての心の支えだった。

その少女の想いを聞いた雁夜はジッとこの一年間地獄を耐え抜いた少女の想いを受け取り続ける。

必ず自身の胸の中で慟哭をあげる少女の願いは全て叶える。そして桜にここまで悲痛な慟哭を与える一端を担った時臣を後悔させると誓いながら、雁夜は桜が泣き止むまで優しげに抱き締めるのだった。

十数分後。遂に桜は泣き疲れたのか、雁夜の腕の中で間桐に来てから初めて安らいだ表情で眠っていた。

雁夜はその様子を優しげに眺めていると、二人の邪魔をしないように離れていたフリートが近寄って来る。

「さて・・・そろそろこんな陰鬱な場所から出ましょう。最も出る前に一つ遠坂時臣を苦しませる事を行ってからですけどね」

「何？」

「フッフッフッフッ・・・こんな幼い少女に、あそこまで悲痛な慟哭を上げさせるなんて・・・ただじゃすましませんよ。この子の願

いの為に殺したり、死なせたりしませんけど・・・・徹底的に絶望と後悔のどん底に落としてやりますよ」

そのフリートの説明に雁夜は言い知れない予感を感じ、思わず桜を強く抱き締めるのだった。

その日の深夜。聖杯戦争を構築した御三家の一角である間桐の屋敷が炎に包まれた。

しかし、その炎は赤い炎ではなく黒々と燃える、まるで地獄の業火を思わせる黒き炎。炎に包まれた間桐邸は、数百年の妄執を消し去るかのように次々と焼け落ちて行く。

そんな中、黒き炎に包まれる間桐邸の中から黒いローブで身を隠し、顔も何も判別出来ない状態の人物が毛布に包まれている少女を抱えながら出て来て、まるで魍魎が地を這いずり回っている様な低い声を出す。

「キャスター」

「ハッ！お傍に居ります、我がマスター」

黒いローブ姿の男の呼びかけに応じるように、蒼銀の鎧に身を包んだフリートが実体化して現れた。

それを男は確認すると、腕の中に抱えていた少女をフリートに渡し、少女の頬を優しげに撫でる。

「この娘は・・・・非常に稀有な才能を持っている・・・・よきに計らうのだ」

「ハッ！マスターのお望み・・・必ず果たしましょう」

「フフフフッ」

邪悪な笑い声と共に黒いローブ姿の男は、燃え落ちる間桐邸に背を向け、フリートと共に夜の暗がりの中へと消えて行く。

その一部始終を間桐邸を監視していたアサシンは、自身の主に報告すると共にフリート達の後を尾行するのだった。

一方、間桐邸から一足早く逃げ出した間桐鶴野は、自身の車を使って隣の市と冬木市を繋ぐ国道を走っていたのだが、途中で車はエンストを起こしてしまい、今は夜の国道を全速力で走っていた。

酒ばかり飲んで不衛生なその体は軋みを上げ、息が荒いが、鶴野はフリートに対する恐怖心で限界を超えて走り続ける。夜の国道は暗く、人の気配など全く感じさせない。

それがなお、鶴野の恐怖心を煽り、逃げなければいけないと駆られて国道の道をひた走る。

だが、そろそろ本当に辛くなって来たのか、意識が朦朧として行くと、背後から一台のタクシーが走って来る。

ーーーープププッ！！

「ッ！！止まってくれ！！」

ーーーキキィッ！！

鶴野の魂の叫びが聞こえたのか、タクシーは止まり、五十代ぐらいの男性運転手が車の後部座席のドアを開けて鶴野を招く。

ーーーガチャッ！！

「どちらまでですか？お客さん？」

「とにかく遠くだ！真っ直ぐに向かってくれ！！」

「はい、了解しました」

運転手は鶴野の指示に営業スマイルで答え、車を前に走らせる。
その動きに鶴野は多少苛立ちを覚えるが、そんなことは気にしていられないと運転手に時間を尋ねる。

「おい、今は何時だ？」

「今ですか？・・・え～と・・午前二時四十分ですね」

「午後二時四十分か・・・・（あのサーヴァントが条件を出した時間は二時間・・俺が車に乗ってから確かめた時間は午前零時四十五分・・数分のずれが出てもそろそろの筈だ）」

目を見開いて鶴野はタクシーに備わっている時計を見つめる。
そして時間は刻々と過ぎて、遂に時計は四十六分を示す。即座に鶴野は辺りを見回してフリートが居ないかどうかを確かめるが、男性運転手以外に誰も存在せず、また近寄って来る者も居なかった。

「・・・やった・・・やったぞ！！俺は自由だ！！ハハハハハハハッ！！あの忌まわしい家から解放された！！」

「お客さん、嬉しそうですね？」

「あぁ、こんなに晴れ晴れとした気持ちは初めてだ」

運転手の質問に鶴野は心の底から嬉しげな笑みを浮かべながら答えた。

今頃は臓硯は生きていないだろうと鶴野は確信していた。鶴野はフリートを目にした瞬間に、誰よりも悟ってしまった。アレに本格的に狙われたら最後、例え地の果てまで逃げても絶望しかない。

条件を出されてそれを実行した自身は何とか逃げられた。だが、臓硯は絶対に逃げられない。それが意味する事は、自身があの呪わしき家の呪縛から解放されたと言うことだ。

「運転手。隣の市に着いたら、どこかの飲み屋に止めてくれ。こんな良い気分の時に酒を飲んでみたいんだ」

「あぁ、分かりますよ・・・・・だけど、残念ですね。貴方の行き先はもう決まっているんですよ」

「何？・・・おい、一体どう言うこと」

「ゲームオーバーですよ。間桐鶴野さん」

「ッ！！」

聞こえて来た声に鶴野は目を見開き、全身が恐怖で凝り固まった。同時に気がつく。先ほどまで短髪で白髪交じりだった男性の髪の毛が、蒼いポニーテルに変わり、体型も男性から女性に変わっていることに。

蒼い髪で女性。それに類推する人物は一人しか考えられない。その事実に行き着いてしまった鶴野が、生まれたての小鹿のように座

席の上で震えていると、ゆっくりとその人物は鶴野に振り返る。

「絶望へようこそ。間桐鶴野さん」

「ヒギャァァァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

狭い車内に鶴野の絶望と恐怖に満ち溢れた断末魔の叫びが鳴り響いた。

第十三話　救出（後書き）

今回使用道具及び魔法と技

名称：《記憶回想薬》
ランク：E
分類：対人宝具
詳細：対象に薬品が降りかかるか飲むかした場合。その人物が記憶している全てが一瞬で思い出される。精神力が強くない場合、下手をすれば発狂する。作中では間桐の蟲を解析したフリートが改良を加えたので、臓硯に対して下手の猛毒以上の劇薬となった。

名称：《スティングシューター》
分類：射撃魔法
詳細：対象を事前に選択し、まるで針のように細い魔力弾。視認するのは難しいにも関わらず、威力はかなり高い。作中では、事前に臓硯の予備蟲を補足していたフリートが罠として仕掛けて合図と共に一斉に放った。

名称：《業火炎竜》
詳細：セイバーの竜の因子が宿った魔力を吸収したことで、新たに使用に可能になった技。《黒炎》を空中でクロス字で描き、その中心に《黒炎剣》を突き出すと、炎が黒き竜の形を模り、対象に向かって突き進む放出系。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2904y/

漆黒、恐怖、電子、特別編

2012年1月9日01時50分発行